

博士論文

近代〈軽井沢〉の成立に関する歴史地理学的研究
—別荘地の拡大による「季節的な都市」の誕生—

(A Historical Geography of “Karuizawa” in the
Modernization Period of Japan: The Growth of “Seasonal
City” with Expansion of Second Home Area)

2022年3月

立命館大学大学院文学研究科

行動文化情報学専攻博士課程後期課程

前田 一馬

立命館大学審査博士論文

近代〈軽井沢〉の成立に関する歴史地理学的研究
—別荘地の拡大による「季節的な都市」の誕生—

(A Historical Geography of “Karuizawa” in the
Modernization Period of Japan: The Growth of “Seasonal
City” with Expansion of Second Home Area)

2022年3月

March 2022

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程
Doctoral Program: Major in Informatics of Behavior and Cultures
Graduate School of Letters, Ritsumeikan University

前田 一馬

MAEDA Kazuma

研究指導教員：加藤 政洋 教授

Supervisor : Professor KATO Masahiro

目次

第1章 研究史の整理と本研究の位置づけ	1
第1節 避暑地と別荘地に関する研究の成果と課題	1
第2節 避暑地と都市の関係	9
第3節 軽井沢研究の成果と課題	12
第4節 本研究の視座と目的	14
第2章 宿場町の衰退と近代化期の軽井沢	19
第1節 近世軽井沢の場所認識	19
第2節 近代化期の諸変化	21
(1) 交通網の整備と宿場町の衰退	21
(2) 避暑生活の内実と別荘の集積	24
第3章 陸軍脚気転地療養の展開と療養地の成立	31
第1節 陸軍転地療養と新たな療養地	31
(1) 軍隊と脚気	31
(2) 江戸時代の転地療養	33
(3) 温泉転地療養の特徴	35
(4) ミアズマ説の影響と気候転地療養地の選定	37
第2節 軽井沢の脚気転地療養と治療効果の言説	43
(1) 東京鎮台高崎第三連隊による転地療養	44
(2) 脚気転地療養地の評価と伝染病予防の場所	47
(3) 日清・日露戦争時の脚気転地療養	51
第3節 脚気以外の療養の展開	54
第4節 療養地としての軽井沢	56
第4章 避暑をめぐる環境認識と場所経験	58
第1節 軽井沢に対する外国人のまなざし	59
(1) 英文日本旅行案内書の叙述	59
(2) カーギル・ノットによる気候観測	62
第2節 外国人の軽井沢観	66
(1) 軽井沢と場所の経験	66
(2) 避暑生活の特色	70
第3節 日本人富裕層の滞在と避暑の受容	73
第4節 避暑地の成立	77
第5章 都市型資本の計画的な別荘地開発の展開	82
第1節 「軽井澤遊園地」構想	82
第2節 野沢源次郎の別荘地開発	86

(1) 野沢の登場と別荘地開発をめぐる戦略.....	86
(2) 野沢別荘地の概要.....	95
(3) 雑誌『住宅』にみる別荘地開発の特徴.....	96
(4) 土地の提供と施設の拡充.....	98
(5) 土地・別荘所有者.....	100
第3節 堤康次郎による計画的な千ヶ瀬遊園地開発.....	102
(1) 土地買収の経緯.....	102
(2) 開発の理念.....	104
(3) 別荘地の形態と設備・施設.....	108
(4) 別荘地の拡大と土地・別荘所有者.....	113
第4節 日本人の台頭と欧米人の離脱.....	117
第6章 別荘地の地理的再編と近代〈軽井沢〉の成立.....	123
第1節 軽井沢の時空間的な変化.....	123
(1) 療養地と避暑地の成立.....	123
(2) 別荘地の拡大による避暑地の空間的拡張.....	126
第2節 中心-周辺構造からみる近代〈軽井沢〉.....	129
(1) 都市形成における中心-周辺構造.....	129
(2) 周辺部の「高級化」.....	132
(3) 「銀座化」する中心部.....	135
(4) 周辺部における「郊外化」の進展.....	139
第3節 空間再編の位相.....	143
第7章 「季節的な都市」の誕生.....	146
第1節 季節的な都市.....	146
第2節 総括と展望.....	149
注.....	153
図表編	

第1章 研究史の整理と本研究の位置づけ

第1節 避暑地と別荘地に関する研究の成果と課題

日本の近代化期にはさまざまな知識・技術・価値観、そして文化が欧米諸国からもたらされ、それらは近代日本という文脈のなかで強い影響力を發揮していく。近代化期とは、人文社会科学において一般的に用いられる時代区分であり、おもに明治期から昭和戦前期までを示す。日本の近代化期において、都市は政治・行政・経済の中心地として発展するだけではなく、近代的な知識や技術、そして文化を育んだ。とりわけ、一国の首都たる戦前期の帝都・東京にはヒト・モノ・カネ・情報が集中し、さまざま流行や文化的なスタイルを生み出す場でもあった¹⁾。

産業化（工業化や商業化）と人口の集中は都市化をうながし、都市空間の拡張と都市機能の分化を進展させていく。一般的に都市機能とは、居住・生産・保養・交通に大別することができる²⁾。しかしながら、これらの機能が都市内部だけで完結することはない。文化的な観点から「保養」機能に着目すると、都市住民の日常生活に慰安をあたえるのは都市の内部の緑地や近郊に位置する名勝・旧跡だけでなく、より遠方の海浜や山岳などでもあり、彼らの行動の範囲は空間的に拡大していった。近代史の文脈においてしばしば言及されるように、鉄道の敷設による移動時間の短縮、休暇制度の導入、新聞や雑誌メディアの普及を背景として、都市住民の旅行やスポーツといったレクリエーション活動に適した場所の「発見」は、まさに近代化期において劇的に進んだのである³⁾。

地理学と隣接諸分野においても、日本の近代化期の新たな活動の展開に着目した研究が

行なわれてきた。歴史地理学の小口千明は、明治期になるまでほとんど行なわれることのなかった海水浴の受容について検討した。1880年代に医療行為として欧米から導入された海水浴は、人々の環境認識と行動に変化をもたらし、同時に海浜を療養の場へ、そして娯楽の場へと変容させたのである⁴⁾。この研究では、同一の場所でありながら時間軸を移動することによって特定の環境認識像も変化することが示されたといえよう。

さらに、荒山正彦は山頂からの「眺め」という風景の見方が日本山岳会といった組織的な活動を通じて受容されるとともに登山という行動が喚起されたと指摘している⁵⁾。先述した小口の研究では不特定多数の「大衆」が念頭に置かれたのに対して、佐藤大祐は、「受容基盤」という行為主体を措定し、レジャー活動としてのヨットが外国人から日本人富裕層に伝播する過程を解明した⁶⁾。

また、疾病に関する文化史においては、疾病の社会的な認識やそれらと結びつけられた場所が考察の対象となっている。たとえば、福田真人は近代化期に流行した結核に付与された「死」と「美しさ」というアンビヴァレントなイメージの変遷を文学作品からあとづけるだけではなく、結核療養地にふさわしい場所が温暖な海浜から冷涼な高原へと変化することを考究している⁷⁾。

このように近代化期には、日本人を取り巻く自然・地形・気候に対する認識が変化すると同時に、海水浴・登山・ヨットといった欧米由来の活動を契機として、海浜や山岳、そして高原などが「再発見」されたといえる。荒山正彦が述べるように、特定の価値はある場所に本質的に存在しているわけではなく、地理歴史的・社会的コンテクストのなかでつくり出されるのである。その帰結として、日本各地ではこれまでにほとんど無価値であ

った場所や景観が意味づけられ、行動空間として構築されていく⁸⁾。

上記の事例に連なる近代的な所産のひとつとして、外国人の影響を受けて日本で展開し、新たな環境認識をつくりだした「避暑」がある。戦前期を通じて避暑の目的地である避暑地は各地で成立し、そこに夏季の滞在拠点となる別荘が集積することで別荘地として発展することもあった。避暑地と別荘地は、しばしば都市における日常生活の逃げ場として語られ、豊かな自然環境の享受を可能とする理想的な保養空間と目されたのである。これらに関する研究の成果を以下で整理し、課題を指摘したい。

観光史の^{そしろだ}十代田朗によれば、避暑という行為は外国人によって近代化期に日本へもたらされた。当時、日本に滞在した外国人にとって高温多湿の夏季の気候は耐え難いものであり、彼らが夏季休暇に標高の高い場所を訪れるようになると、そのことが新聞記事などで「避暑」と称されることで、避暑の展開につながったと説明される⁹⁾。地理学の斎藤功も同様の観点から、夏季の高温多湿を回避する手段として外国人には避暑地が必要であったと述べている¹⁰⁾。さらに斎藤は、冷涼な気候のもとで西洋人の心身の保養やアイデンティティを維持することを目的として東南アジアの植民地に形成されたヒルステーション（Hill station：高原保養都市）が日本へと伝播したことを避暑地の成立と位置づけた¹¹⁾。

十代田によれば、元来日本人にとって避暑とは、納涼や夕涼みが一般的であり、居住地の近傍の河川などで行なわれていた。その一方で、外国人は既述した理由から、常住地と気候の異なる場所で夏季休暇を過ごしたのである。その結果、高原避暑地として箱根・日光・軽井沢・御殿場、海浜避暑地として^{おきつ}興津・沼津・鎌倉・大磯・逗子・稲毛・北条などが発展していった。

さらに彼は、1893年7月の『讀賣新聞』に掲載された「避暑地案内」の内訳が山岳8ヶ所、温泉12ヶ所、海浜6ヶ所であることから、日本人にとって、古来より親しまれた温泉地に行くことが「避暑」であったと指摘している。明治後期以降、海水浴場は日本各地に分布し、海浜は最も大衆的な避暑地として人気を獲得していく。このときには海浜に赴くことも避暑として認識されていたことから、避暑はたんに暑気を避けるというよりは、夏季のレクリエーションや保養を含むひろい行動ととらえてもよからう。

以上のような避暑地については、軽井沢の「高級イメージ」の定着について考究した内田順文の論考がある¹²⁾。また、斎藤は、軽井沢よりも先に発展した箱根と日光を研究している¹³⁾。そこでは、宮ノ下と旧箱根宿に滞在した外国人の日記などから風景や気候の特徴、避暑の実態を明らかにしたほか、宮ノ下の富士屋ホテルに残された宿帳の分析から、顧客圏の分析を試みている。日光を事例とした論考では、外国人による避暑の実態、西洋式ホテルの開業、中禅寺湖畔の避暑倶楽部の活動などが明らかにされた。

このように、外国人による避暑の実態があとづけられているものの、外国人にとって避暑はどのような意味をもち、いかなる環境認識と関係しているのか、あるいはどのように日本人へと受容され、避暑地が目指されるようになったかという点については未解明の部分がある。また斎藤は、避暑地の発展を東京とのアクセシビリティの問題に帰しており、「高原保養都市」としての「都市」の部分の検討はほとんどなされていない。他方で、興味深いのは、東南アジアの植民地のマラリア患者が療養のために箱根や日光に転地させられていたというイギリスの熱帯医学者の報告を紹介している点である。ここから避暑と療養との関連性が注目されよう。

この点について、観光史の安島博幸と十代田朗は、避暑と療養に関わる行動が別荘地の成立する背景となったと指摘した¹⁴⁾。たとえば、箱根で行なわれた脚気療養、鎌倉における結核療養など、西洋医学的な観点から温泉浴や海水浴の効用を説く思潮が、避暑地に別荘を構える日本人有閑・富裕層を後押ししたと推察している。この指摘は大変興味深いのが、彼らの著書『日本別荘史ノート』で事例として取り上げられた別荘地では、上述したような避暑と療養が別荘地の発展にどのように関わったのかはあまり言及されていない¹⁵⁾。ただし、人々の価値観の変化によって特定の場所が新たに価値づけられることを示しており、場所の意味の変化に注意を払ってきた地理学から別荘地研究を行なうためにふまえるべき重要な点が提示されたといえる。

ところで、近代化期の避暑地と別荘地を概観してみると、別荘地研究の対象地域となった湘南地方・房総地方・軽井沢・箱根・日光・御殿場・六甲山・野尻湖などは、そのほとんどが避暑地と対応しており、両者はきわめて親和性が高いことがうかがわれる¹⁶⁾。避暑地とは、避暑という行為の目的地を指す一方、別荘地は避暑地に滞在拠点として別荘が建設されたことによる物質的・空間的側面を示しているにとらえることができよう¹⁷⁾。つまり、まず夏季の旅行先として、避暑にふさわしいとみなされた高原や海浜が避暑地となり、そこに心身の保養やスポーツを行なう拠点・滞在場所として別荘が設けられた結果、別荘地という側面があらわれると考えられるのである。

なお、避暑地に対して避寒地とよばれる場所もある。十代田によれば、熱海や湘南地方は夏季だけでなく、冬季の滞り手もいたとされているが、冬季の気候は東京と大差がなかったことから、避寒はあまり一般化しなかったとみられている¹⁸⁾。

別荘地研究ではどのような論点が提示されてきたのだろうか。ここでは近代化期の別荘地を立地場所や形態から3期に区分した安島と十代田に沿って先行研究を整理する。第Ⅰ期（～1887（明治20）年頃）として区分された時期の別荘は、外国人のもたらした避暑・避寒を目的したものではなく、茶の湯・詩歌などを行なう趣味・接待を目的として東京の大名下屋敷跡に、あるいは農場経営を目的として那須に建てられた。これらの場所では個々の別荘は集積するにはいたっておらず、別荘地としての空間的な広がりをもっていない。

第Ⅱ期（1887年頃～1915年頃〔第一次大戦期〕）には、常住地とは気候や環境の異なる海浜や高原に多くの外国人が別荘を構え、そこに日本人有閑・富裕層もくわわったことで、空間的に広がりをもつ別荘地があらわれた。このような背景として、全国的な鉄道の敷設、1899年の外国人による内地雑居の許可、近代的な休暇制度の導入などが挙げられている。

第Ⅲ期（第一次大戦戦期～1945年〔昭和戦前期〕）は、軽井沢・富士見・妙高などの高原、弁天島・片瀬などの海浜でも都市型の資本による別荘地開発が進展し、同時に別荘所有者層も拡大したことが特徴とされる¹⁹⁾。

別荘地に関する研究は、安島と十代田らの属した研究グループのなした一連の研究がその端緒であるが²⁰⁾、本格的な別荘地は第Ⅱ期において形成されはじめたためか、当該期に焦点をあてた分析が中心である。そこで明らかにされたのは、別荘地開発の経緯、外国人と日本人の選好する自然環境の差異、別荘の建築様式、避暑における活動の内実、さらに欧米由来の文化的な営みの実践を志向する日本人有閑・富裕層の社交場としての側面である²¹⁾。これらの研究の成果をもとにして編まれた『日本別荘史ノート』では、別荘地の地形、別荘の分布、建築様式、Ⅰ～Ⅲ期別の別荘所有者、別荘地のコミュニティの特徴など

が類型化された（第 1-1 表）。別荘の特色を区分ごとに明らかにしたことに意義が見いださせる。しかし、提示された社会背景と個別の別荘地との関係の議論は深められず、形態的な類型化にとどまっている。

第Ⅱ期に形成された別荘地の特色を指摘するならば、地元の土地所有者やすでに土地を取得した個人が、欧米人や有閑・富裕層を中心とした希望者に土地を販売し、結果的に別荘の集積した場所であったといえる²²⁾。これに対して、第Ⅲ期に焦点をあてた研究では、おもに郊外住宅地研究から行なわれ、これまでとは異なる観点から別荘地をとらえた（第 1-2 表）。すなわち、第Ⅲ期の別荘地が土地会社など都市型資本の計画的な開発によってつくりだされたことを、開発の理念や計画を実証的に検討して明らかにしたのである²³⁾。

たとえば都市計画史の越沢明は、郊外住宅地でみられる矩形状・放射状の街区が、別荘地・箱根温泉荘に取り入れられていることを指摘した²⁴⁾。また、箱根強羅別荘地や富士山麓の観光地化を企図する富士北麓構想の一環でつくられた山中湖旭ヶ丘別荘地について論じた建築史の藤谷陽悦による研究がある²⁵⁾。この旭ヶ丘別荘地については、すでに地理学の山村順次が開発過程と別荘地や設備の空間的分布を詳細に明らかにしているものの、計画にもとづく別荘地開発が、同時代のいかなる社会文化的文脈と関係するかは提示されていなかった²⁶⁾。一方、藤谷は旭ヶ丘別荘地が富士山麓の宿泊空間を担う理念・計画のもとで開発されたこと、街区や建築形態の設計には郊外住宅地開発の手法が取り入れられていること、別荘所有者の職業構成について明らかにしている。さらに彼は、一定のプランニングにもとづき快適な居住空間を創出するという意味で、別荘地も都市から逃れ、豊かな自然のなかに住まう理想を掲げた郊外住宅地開発と関連性を有すると主張し、計画にもと

づく別荘地の開発を社会文化的な文脈に位置づけたのであった²⁷⁾。

このほかにも、1932年から開発された浜名湖弁天島別荘地の特徴と歴史的な変遷を明らかにした土屋和男²⁸⁾、東京の不在地主や土地相続者による熱海の別荘地分譲を明らかにした赤澤加奈子²⁹⁾、昭和初期に開発された鎌倉山別荘地が住宅地としても販売される戦略を分析した赤松加寿江ほかの研究がある³⁰⁾。

計画にもとづく別荘地開発は開発資本の利潤追求の目的でなされる以上、何らかの理念・方針のもとで別荘所有希望者を惹きつけるように実施されるだろう。そこで開発者と別荘所有者双方の特徴を明らかにすることが不可欠である。藤谷は第Ⅲ期の別荘地研究の基本的な視点を示したが、上述した先行研究とともに課題も残されている。すなわち、掲げられた開発理念や計画はどの程度実現されたのか、どのような過程で別荘地は拡大したのかが明らかにされていないことである。さらに開発理念、別荘地の形態や建築、設備などの検討をふまえて、既存の別荘地に対していかなる点が特徴なのかが示されていないことも課題として挙げられる。

このように第Ⅲ期の別荘地研究に取り組む新しい視点が提示されつつあるが、日本における別荘地研究は第Ⅱ期に集中しており、別荘地を取り巻く変化を十分にとらえることができなかった。別荘地を内包する地域の変化や社会背景をふまえて、常に変化する意味を明らかにする視点が必要である。その際には、避暑や療養との関わり方、あるいは日本人と外国人それぞれの環境認識を明らかにすることも必要であろう。

第2節 避暑地と都市の関係

とくに重要な視点として本研究で取り入れたいのは、避暑地や別荘地と都市との関係性を問うことである。一般的な傾向として避暑地や別荘地は、人口の集中する都市に依存することで発展してきた。地理学の関戸明子や神田孝治が指摘するように、大正期に明確になるのが、夏季の都市の暑気や塵埃じんあいを不健康の象徴とみなす言説であり、高原や海浜の避暑地は心身の健康を回復する場所として理想視され、大衆化していく³¹⁾。

これまで日本の避暑地や別荘地の発展をあとづける際には、都市との関係性はほとんど意識されてこなかった。郊外住宅地研究の視点を取り入れられたことで、別荘地開発と郊外住宅地開発の理念・手法的な側面の類似を立脚点として、都市的なものを創造する「知」と無関係でないことが明らかとなってきたものの、避暑地の成立や別荘地の発展における都市との関係性についてはあまり議論が進んでいないのが現状である。

欧米において、別荘を拠点とするレクリエーション活動に着目する研究は、セカンドホーム研究 (Second home study) として1960年以降学際的に展開されている³²⁾。なかでも地理学のクラウト (Clout, H. D.) は、欧米の別荘地の分布を概観し、デンマーク・フランス・アメリカなどの別荘地は大都市を取り巻くように立地すると指摘した³³⁾。別荘のひろく普及している北欧では常住地から65km 圏内にその多くが立地し、週末などにも利用される。一方、アメリカなどで特徴的に観察できるように、100km 以上の距離にある別荘は、夏季休暇などに1、2回ほど季節的に利用される傾向にあるという。またクラウトは、別荘の立地する農村部は都市住民の保養に関わる都市的な機能地域に内包されていると述べ、都市的生活空間がきわめて特殊に拡大したものと解釈している³⁴⁾。限定的であるとはいえ、夏

季の間に継続して住まわれる空間が成立するとき、都市居住者がそこに集うことによる影響はどのようなものであり、それらの秩序はいかなる様態で現前するのだろうか。

こうした避暑地や別荘地としての側面を都市との関係性でとらえる場合、やはり想起されるのは、先に触れたようにヒルステーション（高原保養都市）の形成である。建築史の太田省一は、イギリス領セイロンを分析したブーライン（Bührlein, M.）とインドを取り上げたケネディ（Kennedy, D.）の提示したヒルステーションの発展段階説を整理している³⁵⁾。それによれば、①サニタリウム（療養地）から、②ハイレフェージュ（High refuge：高地避難・避暑地）のような「シーズナルな保養地」を経て、③定住都市になるという。このようにヒルステーションは、暫時避難―季節的な滞在―定住という段階を経て最終的に地方都市になると説明される。

①では、軍の傷病兵や病人を収容するのに適した環境の発見が契機となる。②はこれまでも述べたように、熱帯特有の暑熱や多湿、あるいは伝染病から逃れるために冷涼な高地の利用がうながされる段階であり、風景の審美性も西洋人の心をとらえ、結果として疑似的な西洋的空間が避暑地に展開される³⁶⁾。③の段階にいたる事例は少数であるものの、インドのシムラ、ベトナムのダラット、フィリピンのバギオなどにおいて確認されている。そこは、夏季に政治・行政機能が移転し、「サマーキャピタル」（夏季首都）とよばれる都市的な空間の成立を受けて、年間を通じた定住化が進展したのである。この定住化は、ポストコロニアルな文脈でも観察され、当該国の富裕層の避暑地となっていることもある³⁷⁾。

以上の点に関連して、観光学の稲垣勉や地理学の由井義通の述べるように³⁸⁾、ヒルステーションはもともと母体となる平地の都市から避難する性格をもっていたため、母都市と

のつながりのなかで都市機能がくわえられ、余暇に特色づけられる一種の消費空間として発展したのである。こうした指摘からも、都市的な様態がいかにならわれるのかという視点も日本の近代化期に成立した避暑地や別荘地を研究するうえで有意な視点と考えられる。

近代化期の日本における避暑地の成立と別荘地の発展の如何を問題とする際、軽井沢は注目に値する（第 1-1 図）。なぜなら軽井沢は、先行して避暑地となった箱根や日光と比較すると、滞在客数や別荘の規模をはるかに凌駕し、さらには理想的な別荘地のモデルと目されたからである。たとえば戦前期には旭ヶ丘・妙高・富士見・那須、戦後期には「中京の軽井沢」とよばれる岐阜県のひるがの野高原、「西の軽井沢」と称される岡山県のひるぜん蒜山高原などがあり、場所イメージなども戦略的に用いられている³⁹。つまり、軽井沢を対象地域として取り上げ、避暑地の成立と別荘地開発の特徴を明らかにすることは、日本の別荘地開発史や「リゾート空間」の成立の社会的なコンテクストを理解するうえで重要な意義を有していると考えられる。

詳細は第 2 章に譲るが、近世の宿場町であった軽井沢は近代化期に衰退するものの、避暑地として発見され、別荘が集積するにいたる。標高 950m の高地に位置する地方の寒村が、今日年間 700 万人もの来訪者を擁する避暑地、別荘地、そして観光地という多様な貌をもつこととなったのは、日本の近代化期の影響としかいえない価値観や行動の多様化、メディア表象によると考えられる。社会学者のアンソニー・ギデンズは、近代化の特徴を伝統的社会では想像すらできなかった形態でローカルとグローバルとが結びつけられるものと述べている⁴⁰。ここでのローカルとは軽井沢を、グローバルとは避暑客の母都市としての帝都・東京と措定されるだろう。本稿では、軽井沢がいかなる社会的な文脈のなかで

避暑地として成立し、別荘地として発展したのかを戦前期にさかのぼってあとづけていく。

第3節 軽井沢研究の成果と課題

避暑地と別荘地としての軽井沢に関する研究は、地理学・都市史・建築史の分野で蓄積されてきた。それらを大別すると、おもに4つに分類することができる。すなわち、①避暑地と別荘地の実態や景観の変化、②外国人避暑者の特徴や活動の内実、③文学作品やメディアの表象、④地誌的・通史的な研究である。

①では、建築史の内田青蔵ほか、別荘地としての発展を道路網の拡充や洋風別荘の建設という観点から検討している。また地理学の佐藤大祐と斎藤功は、軽井沢への避暑をヒルステーションの伝播と位置づけたうえで、地籍図を用いて最初期の別荘が集積する旧軽井沢の土地所有状況の変化を跡づけている。他方で、建築史の梅干野成央ほかは、今日の軽井沢の別荘地景観を特色づけるカラマツ林は、ほとんどが近代化期以降の植林によって拡大したことを明らかにしている⁴¹⁾。

②の視点では、都市計画史の花里俊廣が、昭和戦前期の外国人別荘所有者の特徴として、外国人別荘所有者のうち約8割はキリスト教宣教師であることを指摘した。さらに英字新聞『*Japan time*』を分析し、外国人避暑者の来訪日と軽井沢での活動内容の季節性を明らかにしている⁴²⁾。そこでは、多くの外国人避暑客は夏季休暇のはじまる7月中旬に軽井沢を訪れ、7月末までは各キリスト教会派の会議が実施されたこと、テニストーナメントや音楽会などのイベント開催は8月になると増加すること、避暑客は夏季休暇のおわる9月までに常住地へもどることが解明された。

③では、地理学の内田順文は文学作品などの分析をつうじて、軽井沢の「高級」というイメージの定着を明らかにした。一方で文化史の福田眞人は、軽井沢の「結核療養地」としてのイメージを文学作品の記述から析出しており、高級イメージにとらわれない軽井沢の地理歴史を浮き彫りにした点で注目される⁴³⁾。

④郷土史の小林^{おきむ}収は、戦前期から戦後期の避暑の内実や開発史を自身の聞き取り調査をもとに通観している。建築史の宍戸^{まこと}實も軽井沢に長期滞在しながら、地元住民の聞き取り調査にもとづいて開発史をまとめ、さらに軽井沢に特有な別荘家屋の建築様式について詳述した。ノンフィクション作家の宮原安春は『信濃毎日新聞』をベースに、軽井沢の発展を社会史に位置づけた点で特筆される。なかでも戦前期の軽井沢を経験した外国人・日本人別荘所有者、あるいは地元住民、開発関係者の聞き取り調査から得られた証言を盛り込むことで、軽井沢の生きられた経験を描き出した⁴⁴⁾。近年では、郷土史の江川良武は宣教師ショウだけでなく、英国国教会主教ビカステス (Bickersteth, E.) と軽井沢との関わりを考察しているほか、1880年代の軍馬育成牧場構想、市制を敷いた地域以外で初めて撮影された「軽井沢町航空測量写真図」など、避暑地や別荘地以外について議論している⁴⁵⁾。

このように、物的な別荘地の形成、象徴的な自然景観の形成、スポーツなどの避暑生活、文学作品や場所イメージの表象が明らかにされるなど、軽井沢研究は一定程度の蓄積がなされていることがわかる。それぞれの研究は深淺こそあれ、現在は知りえない興味深い証言や出来事に言及しており、軽井沢研究に取り組むうえで重要な知見が提示された。しかしながら、それぞれが個別の事例研究にとどまっており、知見が断片化されている。その原因としては、取り上げる対象や事象を検討する際、同時代の社会的コンテキストや軽井

沢における諸変化との関係性があまり意識されていないことが挙げられる。

さらに、上記の研究では、「旧軽井沢」の記述が多い傾向にある。これは旧軽井沢を中心地として軽井沢が発展したことによると思われるが、時代を経るなかで、「軽井沢」自体が空間的に拡大していくことにも注意を払う必要がある。

また、「避暑地」「リゾート」という語が軽井沢を語るうえで前提とされてきたこと、「高級イメージ」などのやや一面的な視点で解釈されてきたことも問題点として挙げられる。

1990年以降の歴史地理学において、場所は同時代のいかなる諸現象と結びつけられたかを社会・文化的なコンテクストのなかで検討していくことが求められている⁴⁶⁾。所与の見方を批判的にとらえ、軽井沢を分析する新たな視点が必要となる。

第4節 本研究の視座と目的

上記の問題点を乗り越えるため、本章第1節で指摘した避暑地と別荘地に関する研究の課題をあらためて整理し、軽井沢研究の課題と節合して、本研究の視座を提示する。

①まず、避暑地の発見の契機は、これまで風景の審美性や外国人の郷愁などが強調されてきた。本研究では十代田らの指摘を取り入れて避暑と療養との関係を念頭に置き、軽井沢のもつどのような要素が評価されることで避暑地として社会的に構築されるのかを問う⁴⁷⁾。すなわち、外国人にとって避暑はどのような意味をもち、いかなる環境認識と関係しているのか、避暑が日本人へといかに受容されたのかを場所経験と小口千明の示した環境認識から明らかにする。この視点は「避暑地」「リゾート」という語が軽井沢を語るうえで前提とされてきたことを問い直すことにつながるだろう。

②別荘地としての側面について、先行研究の関心は第Ⅱ期に集中しており、別荘地を取り巻く変化を十分にとらえることができなかった。別荘地とは物理的・空間的な側面をもつため、同一地域の別荘地でも開発時期・理念・主体などにもおのずと差異があらわれるはずである。軽井沢を通時的かつ空間的にとらえることで、いかなる別荘地開発が行なわれたのかをあとづけ、その特色を明らかにする。

③避暑地と別荘地のどちらであったとしても、都市居住者が来訪しない限り発展はしない。ある種の都市居住者の「理想」が投影されるような場所と考えられる。郊外住宅地研究、欧米のセカンドホーム研究、ヒルステーション研究の整理で明らかにしたように、避暑地や別荘地としての価値を高めるさまざまな開発は、都市を創造する思想や技術などの「知」と無関係ではないはずである。東京居住者の避暑地であり別荘地としての軽井沢には、いかなる都市的な影響があるのだろうか。そのことを地理的な構造として把握することを目指す。以上の視座より、近代（軽井沢）成立の地理・歴史をとらえなおすことができよう。

歴史地理学は過去の時間軸において、空間的事象がどのように展開してきたのか、その歴史的な変遷をたどる立場である⁴⁸⁾。過去の痕跡は現在においても場所、景観、人々の記憶や価値観に刻み込まれている。地理学のモリッシーほか⁴⁹⁾が述べるように、過去-現在のつながりや断絶についての理解を豊かにするために、歴史的な出来事を具体的な場所との関係のなかで考えることは重要である⁴⁹⁾。

ところで、軽井沢研究を社会・文化的な視点で概観すると、近代化期にあらわれるのは、「療養地」「避暑地」「別荘地」という特徴である。本研究ではこれらを局面としてとらえ、

いかにして「軽井沢」という場所に結びついたのかに着目したい。これらの局面は重層的に軽井沢をつくりだしていると考えられる。さらに本研究では地理学において、1980年代後半から1990年に議論された「文化論的転回」以降のキーワードである場所・意味・表象という概念を解釈の枠組みとして利用したい⁵⁰⁾。上記の局面とこれらの概念を整理したものが、第1-2図である。

1970年代以降の地理学において、「場所」に関するさまざまな議論が行なわれてきた。たとえば、①名詞としての場所、②立地としての場所、③意味に満ちた社会構築物としての場所、④関係性としての場所など多くの見方がある⁵¹⁾。本研究では、場所の本質主義的な理解を避け、地理学において一般的な③の立場をとる。遠城明雄の定義にしたがうのならば、場所は多様な意味が付与されうる社会的構築物であり、人々の社会生活における諸活動を可能にするものである⁵²⁾。

場所に対する意味づけを検討する際、分析の対象となるのが言語的に構築された言説や視覚的に特定の認識を構築する一連の表象である。表象とは原口剛がダンカン (Duncan, J.) の議論を参照して述べているように、たんなる現実の反映ではなくそれらをつうじて社会的現実を構成する媒体である⁵³⁾。したがって、軽井沢をめぐるさまざまな表象を同時代のなかに文脈づけることで、近代化期において軽井沢という場所にあらわれた局面を分析することが可能となる。

以上をふまえると、本研究の目的は「療養地」「避暑地」「別荘地」という近代以降の軽井沢にあらわれる局面に着目しつつ、避暑や療養をめぐる諸関係、時代ごとに異なる来訪者の軽井沢の経験、別荘地開発の拡大による変化を検討することを通じて、近代〈軽井沢〉

の成立をあとづけることである。そして、帝都・東京という母都市との関係性を地理的な空間再編として把握し、その構造のダイナミズムの理解を目指す。これにより近代的な所産としての避暑地や別荘地の成立に関して、ひとつのモデルケースを提示することができるだろう。

本研究では、1980年代後半以降の歴史地理的アプローチにおいて盛んに用いられることになった多様なメディア、すなわち行政文書・新聞記事・雑誌・旅行案内書・日記・随筆・文学作品・医学書、そして視覚資料として地形図・絵地図・絵はがきなどを資料として用いる⁵⁴⁾。上述したように、これらの資料群が生み出す言説は、現実を（再）構築するのである。さまざまなメディアに書かれた記述を基本資料とし、複数の記述のほか視覚資料をも組み合わせることを通じて、近代〈軽井沢〉という場所と結び結ばれる環境観や疾病観のもつ意味やその変化、外国人や日本人の避暑、あるいは別荘地開発主体の企図にどのような意味があるのを読み解いていく。

本研究の構成は以下の通りである。第2章では江戸時代の軽井沢の特色を確認したうえで、近代化期における諸変化として、交通環境の変容による宿場町の衰退を跡づける。さらに先行研究の知見にもとづいて、軽井沢の発展の礎となる外国人の避暑の実態、彼らの建設した別荘の建築と分布の特徴について概観し、第3章以降の論述の前提となる地理・歴史的事象を提示する。

第3章は「療養地」に関する分析を行なう。ここでは外国人の来訪に先駆けて軽井沢が陸軍の脚気転地療養地として見いだされた過程を、脚気の治療をめぐる医学言説の検討から明らかにし、明治期の軽井沢＝療養地の成立について考究したい。

つづく第4章では、避暑地という側面に視点を転じる。実のところ、療養地と避暑地としての側面は、それらをつくりだす契機となった行為主体がまったく異なっていたものの、同時代の軽井沢に併存していた。本章では欧米人が軽井沢に対していかなる関心を示したのかを、英文旅行案内の記述や外国人の語りなどの検討を通じて、避暑地の発見について環境認識や場所の経験という視点から考察する。さらに外国人について軽井沢を訪れた日本人富裕層が、どのように軽井沢で避暑を受容したのを語りから明らかにする。

第5章では、避暑の滞在拠点としての別荘に着目する。大正・昭和戦前期になると、都市型資本による計画的な別荘地開発が展開される。これらの特色を明らかにするために、実業家の野沢源次郎や堤康次郎などによる別荘地開発を事例として検討する。

第6章では、ここまで論じてきた近代化期の軽井沢の諸変化をあらためて位置づけなおし、近代〈軽井沢〉の地理的再編過程を構造的に整理し、その特徴を考察する。以上の考察をふまえ、第7章では結論として近代〈軽井沢〉＝「季節的な都市」という解釈を提示し、残された課題と今後の展望を述べる。

第2章 宿場町の衰退と近代化期の軽井沢

……どことなく古駅の名残をとどめてゐるが、人と物を見ては、日本の何処に於ても見出し難い光景に奇の異眼を瞑るのである。街路を歩むもの、店頭あきなに販ふもの、多くは外人避暑客をこれに売る物品であつて、さながら海外の植民地にあるが如き感を抱く⁵⁵⁾。

(佐藤孝一 (1987[1912]) 『かるみざわ』⁵⁶⁾

第1節 近世軽井沢の場所認識

軽井沢宿は中山道の宿場町であった。ここに沓掛宿と追分宿をくわえた3宿は、浅間山の南麓に位置したことから、「浅間根腰あきまねごしの三宿」と称された(第2-1図)。このうち追分宿は中山道と脇往還の北国街道、沓掛宿は草津街道との交通上の分岐点に位置した。他方、軽井沢宿は峠越えを控えた宿場町という性格を有する。信濃国側の軽井沢宿と上野国側の坂本宿間の約8.7km(2里8町うすい)には、碓氷峠うすいがあり古来より難所として知られていた⁵⁷⁾。

中山道を参勤交代のために通行する諸大名は、彦根藩井伊家や加賀藩前田家など30家を数えた。その他にも、日光東照宮へ下向する日光例幣使れいへいし、公家姫君の将軍家への輿入れの際にも中山道が利用され、とくに臨時の通行は大規模であったといわれている⁵⁸⁾。これらにくわえて、善行寺を目指す多くの庶民も通行した。このように旅人の通行による活気のある宿場町の様子は「大小名、奉行、例幣使をはじめ、役人、一般庶民の通行甚ださかん」であり、「殆んど人馬織るが如く、駅路の鈴鳴絶ゆる時なく」⁵⁹⁾と記されている。し

かしながら同時代の書き物において、軽井沢は高地にある寒冷の鄙びた宿場町としても表象されたのであった。

軽井沢は標高約950mに位置するため、寒冷な気候条件が影響し、とりわけ稲作には適していなかった。このような軽井沢の自然環境は『木曾路名所図会』（1802年）において、「就中軽井沢・沓掛・追分の三宿は浅間獄の腰にて地形いよ／＼高し〔。〕此三駅の間南北半里ばかり東西式三里が程たいらかなる廣野也〔。〕寒き事甚くて五穀生せず〔。〕只稗蕎麦のみ多し〔。〕又菓の樹もなし〔。〕民家にも植木なし」⁶⁰⁾と記されている。この記述は、儒学者の貝原益軒の著した道中記『木曾路之記』（1721年）の文章をほとんどそのまま引用したものであるが⁶¹⁾、標高の高い寒冷地の平坦で痩せた景観が書きとめられている。

第2-2図は、歌川広重と溪斎英泉が中山道（木曾街道）の各宿場町の風景を描いた『木曾海道六拾九次』（1836年頃）に収録されている沓掛宿と軽井沢宿周辺の浮世絵である。前者では、宿場の街並みは一部のみが描かれているにすぎず、むしろ目を引くのは背景にひろがる荒地か畑か判別のつかない土地景観である。後者では、宿場町の景観ですらなく、日が落ちた時間帯に休憩する馬子が描かれており、構図は全体的な暗く、もの寂しい雰囲気を与えている。このような景観の根底にあると考えられるのは、寒冷な気候だけでなく浅間山の噴火であろう。噴火にともなう降灰は樹木の生育を阻み、農産物の凶作や宿場の火災を招いたのであった⁶²⁾。

ところで、軽井沢宿の旅籠には全国の宿場町と同様、食事の給仕や雑務をこなすとともに、売春を担う「飯盛女」が幕府公認として置かれていた⁶³⁾。近世史の佐藤要人と花咲一男によれば、軽井沢の遊女を詠った川柳は200句以上も確認されている。さらに彼らは、地

方遊里を素材とするある種の枕詞として「軽井沢」の地名が用いられていたと考察した⁶⁴⁾。

1855（安政2）年に詠まれたとされる「風呂敷を着てやうなかるいさわ（風呂敷のような粗末な着物を着ている軽井沢の飯盛女郎である）」⁶⁵⁾という川柳をみると、「かるいさわ」の地名が、野暮で貧相な遊女の身なりとともに詠まれている。

以上から、近世の軽井沢宿は活気を呈する宿場町である一方で、「寒村」を惹起するような場所としても表象されていたのである。さらに宿場町の遊興的側面に注目するならば、軽井沢は地方遊里のもつ「野暮ったさ」の代表的なイメージが投影される場所といえるかもしれない。

第2節 近代化期の諸変化

(1) 交通網の整備と宿場町の衰退

明治期になると、宿場町を取り巻く社会的状況は変化した。とくに参勤交代制の廃止によって、宿場町が担った公用人馬立継の任務は解かれ、諸大名や幕府役人などの定期的な通行と休泊による収益はなくなった。交通の要路として人馬の通行はあったものの、障子の張替えを行なう余裕のある者がほとんどいなかったという地元住民の回顧は、宿場町としての凋落ぶりをうかがわせる⁶⁶⁾。

軽井沢宿の衰退を決定的づけたのは、「長野県七道開鑿事業」の第一号道路として着手された碓氷新道が1884（明治17）年5月に開通したことである。碓氷新道は旧中山道より南側の中尾山（熊の平）経由で峠を越え、矢ヶ崎に出るという経路である（第2-3図の黄緑のライン）。新道はカーブが多いものの、ひろい幅員であったため車馬などの通行は容易となっ

た⁶⁷⁾。碓氷新道の開通は、宿場町時代において茶屋や旅籠の営業、荷物の運搬によって生計を立てていた地域住民に大きな経済的な打撃をあたえたのである。

「横浜写真」とよばれる土産用の風景写真で人気を博した日下部金兵衛は、「Asamayama (Fire Mountain) from Karuisawa, at Nakasendo」と題するものを撮影している（第2-4図）。この写真は、升本喜就^{よしなり}によると、軽井沢駅東部の碓氷新道が山地部から平野部へ差し掛かる場所から撮影された。また、升本は日下部の旅行行程を検討し、1886（明治19）年7月頃に撮影されたと推察している⁶⁸⁾。用途は不明であるものの、道路沿いに建物が密集している場所も見受けられ、開発の進展する様子が写し出されている。

第2-3図において、「かるみさは」と表記された軽井沢駅の開業は、直江津線（軽井沢-直江津間）が開通した1888（明治21）年12月であった。明治政府は1870年代より、旧中山道と同様のルートの「中山道鉄道」を実現するため、調査を続けていた。しかし、1886年に行なわれた調査の結果、碓氷峠の急斜面に鉄道を走らせる技術的な困難さと膨大な建設費の要することが明らかとなった。そのため東海道線の工事が優先され、中山道鉄道は実現しなかった⁶⁹⁾。他方で、碓氷峠の東側においては、高崎-横川間の延伸が1885（明治18）年10月に完了し、上野から横川まで鉄道が開通していた。鉄道の通じていない碓氷峠の区間は、馬車鉄道の運行によって埋め合わされたのである。

軽井沢駅の設置された周辺は、直江津線の始点・終点として貨客の中継点となり、大いに賑わうことになった。この新開地が「新軽井沢」とよばれるのに対して、宿場町であった軽井沢は「旧軽井沢」とよばれはじめる。新軽井沢には、旧軽井沢宿だけでなく、旧沓掛宿や旧追分宿からも旅館の移転が相次ぎ、新たに料理屋・運送業・雑貨業をはじめめる者

もいたという⁷⁰⁾。

そして1893（明治26）年4月になると、アプト式レールの採用や26ヶ所のトンネルと18本ものレンガ造りの橋梁の完成により、最大勾配66.7%の碓氷峠に鉄道が開通した⁷¹⁾。上野-軽井沢間の開通（信越線）は、東京からのアクセシビリティを向上させ、その後の軽井沢の発展をうながす決定的な要因となっていく。軽井沢は道路整備や鉄道の敷設という近代的な変化に翻弄され、衰退しつつも新たな発展の方途を孕んでいたのである。

以上のような動向と並行して、軽井沢周辺では広範囲に渡って官有地の払い下げと農場経営が行なわれていた⁷²⁾。第2-1表は、1890年代までに牧場や農場経営の行なった人物をまとめたものである。まず軽井沢周辺の土地に着目したのは、元小諸藩士の北佐久郡長鳥居義処^{よしずみ}であった。彼は離山の東部を1870年代初頭から取得して牧場経営に着手した。ついで1883（明治16）年には、「鉄道王」の異名をもつ実業家の雨宮敬次郎が離山南方の平野部を取得し、移住者を募って農業開発を行ない、耕地に適さない場所にはカラマツを植えた⁷³⁾。雨宮の回顧によれば、かつてアメリカを訪れた際、荒れ果てた原野が開墾され発展していく光景を目の当たりにした。この経験から開墾事業を着想し、「中山道鉄道」計画の決定を受けて軽井沢の土地購入に踏み切ったという⁷⁴⁾。洋行帰りの雨宮によって軽井沢周辺に広がる原野は、土地を開墾し、牧場や大農場の経営を奮起させるような場所として映ったのであろう。鳥居や雨宮の他にも牧場や農場経営に取り組もうとした人々がいたものの、それらは寒冷な気候が影響してか、必ずしもすべての企図が成功したとはいえない⁷⁵⁾。このときに軽井沢周辺で取得された土地は後年、東京の開発資本に売却され、計画的な別荘地やゴルフ場に姿を変えることとなる。

(2) 避暑生活の内実と別荘の集積

道路や鉄道の敷設による交通環境の変化、官有地払い下げによる牧場や農場経営が企図された時期には、東京周辺部に居住する外国人が軽井沢を訪れるようになっていた。彼らの多くは、いわゆる「お雇い外国人」であり、中央官庁の技師や大学教員として雇われているか、宣教師として活動していたことが明らかにされている⁷⁶⁾。外国人の国内移動は「旅行規定」によって制限されていたものの、調査研究や療養を目的にすると比較的容易に旅行にでかけることができた⁷⁷⁾。

1886（明治19）年に軽井沢を訪れ、避暑地として「発見」したのがイギリス大使館付のキリスト教宣教師ショウ（Shaw, A. C.）と大学教師ディクソン（Dixon, J. M.）であったことは、軽井沢研究のなかで強調されてきた⁷⁸⁾。1880年代には、ショウとディクソンの他にも外交官のアーネスト・サトウ（Satow, E. M.）をはじめ、すでに十数名の外国人が軽井沢に滞在していたといわれているものの⁷⁹⁾、本格的に避暑地となる素地をつくりあげたのはこの二人の功績であることは間違いない。

軽井沢を訪れた外国人たちが目にしていた風景は、前出の第2-4図に写し出されたようなものであっただろう。写真の中央後方に聳え、噴煙をあげるのが浅間山、その手前が離山である。樹木は丘陵部の裾野や社寺周辺を除き、平野部にはほとんど生育していなかった。こうした風景は近代の日本人旅行者には「坦々砥のごとき〔平坦の意〕一本道、左右はただ漠々たる曠原」と、無味な風景として映ったようである⁸⁰⁾。しかしながら、このような茫漠たる土地が、外国人たちによって避暑地としてみいだされ、後に別荘地がひろがる空間へと変貌を遂げることとなる軽井沢の一部であった。日本人にとって浅間山麓の冷涼な

気候下の山野は土地開発を阻むものであったが、外国人は夏季の避暑地としての価値を見いだしたのである。

以下では、軽井沢における最初の郷土史である佐藤孝一『かるみざわ』（1912）や軽井沢研究の知見にもとづきながら、適宜新聞記事などで情報を補完し、外国人による避暑の内実と別荘の特徴について概観する。とりわけ軽井沢の発展の礎となる「旧軽井沢」における避暑の実態、別荘の建築や立地の特徴を、第3章以降の議論の前提条件として提示したい。なお、軽井沢の略史は第2-2表に年表としてまとめた。

軽井沢で夏季の避暑生活をはじめた外国人たちは、冷涼な気候の自然環境のなかで活動した。軽井沢の自然環境がどのように評価されていくのかについては第4章で検討するが、外国人と自然との関わり方を、佐藤孝一は以下のように記している。「『娯楽を人に求めずして自然にもとめよ』と是が軽井沢の至る所に於て叫ぶるゝ言葉であつて、唯一の主張また方針である……今日に至るも猶芸娼を許さずまた此の種の婦人を容れずして、飽くまでも善良な風俗を保つに腐心するは、これ他の避暑地に誇るべき所以の第一である。……滞在中はすべての人種と階級の埒を打破つて、自由に平等に自然に親しみ人生を楽しまねばならぬ、これ他の避暑地に誇るべき所以の第二である。要するに軽井沢の自然は創世のまゝであつて、毫も人工を加へたあとがない、真に軽井沢其ものは、この生まれたまゝの自然の美を愛し親しむのであらねばならぬ」⁸¹⁾。

佐藤の述べる「娯楽を人に求めずして自然にもとめよ」という方針は外国人、ことに宣教師が多数を占める雰囲気の中で醸成されたものと考えられる。宮原安春は、この方針をいわゆる「飲む・打つ・買う」の否定と解釈し、「不文律」として根づいたことが軽井沢

の発展に寄与したとみている。外国人を中心とする「健全」な社会環境のなかで展開された避暑活動は、テニス・ゴルフ・野球・散策・演劇などであり、おもに野外で行なわれたのであった。一方、屋内でも音楽会やダンスパーティなどが催されている⁸²⁾。

ところで、『信濃毎日新聞』には、1888（明治21）年から1890（明治23）年の夏季に滞在した外国人の内訳が掲載されている（第2-3表）。それによれば、イギリス人とアメリカ人を筆頭に多様な国籍の外国人が軽井沢を訪れたことがわかる。滞在日数別にみると、1日のみの割合が高いものの、15日以上長期にわたる滞在がすでにはじまっており、夏季に「住まう」という行為の萌芽ともみなせよう。軽井沢で滞在拠点となる別荘は、ショウをきっかけとして増加し、以後多くの外国人が別荘を所有した。日本人においては海軍大佐の八田裕二郎が嚆矢とされており、有閑・富裕層も1890年代から徐々に別荘を建て始めるが、1901（明治33）年の時点では、まだ10軒ほどにすぎない⁸³⁾。

建築史の宍戸實によれば、外国人別荘の特徴は宿場町の衰退により住まわれなくなった住宅や廃業した旅舎の家屋を解体し、それをバンガロー風に再構成した簡素なものであった。第2-5図はおもに明治期から大正期に建てられた別荘を写した写真と絵葉書である。このうち、「愛宕山下の三軒別荘」は最初期の別荘といわれている。周囲の風景を見渡せるように、開かれたベランダが備え付けられ、家屋の奥には椅子に座ってくつろぐ外国人女性の姿がみえる。このような外国人別荘の様態と暮らしぶりについて地理学者の田中啓爾は、「外人別荘は殆んどすべて、ベランダを有し、而もドア無しでオープンエアという感じを味わへるものである。素朴な手すりがあるだけで、そこで談笑し、読書し、喫茶し、食事さえとることもある。ルーフ無しの庭に椅子を横たへ、森の陰、紫外線の強い直射光線下で

自然生活をしている」と記した⁸⁴⁾。つまり別荘は、開放的で自然と一体となるような構造を有し、たんに寝泊りするだけでなく社交空間であったと考えられよう。

個々の別荘は、どのように分布していたのであろうか。明治末期における別荘の立地を地図化したのが第2-6図である。同図をみると、外国人別荘はかつての軽井沢宿を取り囲むように立地していることがわかる。その様子は「別荘は山麓にチラホラす〔。〕樹木茂れる旧軽井沢一帯の地が別荘になつて居るは云うまでもないがいまは次第に東西遠く林間の緑濃やかなる辺りを選んで洋層を新築するやうだ」と報じされている⁸⁵⁾。明治末期における別荘軒数は約170軒を数え、このうち日本人の別荘は1901年に比べると増加傾向にあるものの30軒程度にすぎず、依然として外国人別荘が多い⁸⁶⁾。外国人別荘は、愛宕山斜面の眺望のよい高台か、樹木の比較的多い東部に集積する傾向にある。対して日本人の別荘は、外国人のそれより周辺部に建てられた。

明治・大正期の旧軽井沢・愛宕山の別荘所有者について分析した佐藤大祐と斎藤功によれば、多くの別荘は外国人宣教師によって所有されており、シヨウを筆頭に複数の人物がひろい土地を所有していた⁸⁷⁾。日本人別荘が増加するのは第一次世界大戦期以降であり、海外留学経験のある実業家などが土地と建物を外国人から買い取ったことで所有者の転換が進展したという。さらに建築史の花里俊廣は、旧軽井沢周辺の外国人と日本人の別荘所有比は、1919年時点で7対3であったのに対し、1930年になると日本人別荘が急増した結果、別荘所有比は真逆になったと指摘した⁸⁸⁾。

第2-6図をみると、別荘地の周囲にはテニスコート・野球場（運動場）・教会などが立地し、旧軽井沢を取り巻くように活動空間を形成している⁸⁹⁾。テニスは1880年後半に横浜居

留地のイギリス人女性の娯楽として日本に伝播したのであった⁹⁰⁾。軽井沢で避暑する外国人は、男性に比べて女性の多いことが特色であり、女性が楽しめるテニスがクラブ活動として成立したと思われる⁹¹⁾。他方で、野球はアメリカ人男性を中心とするスポーツであり、北アメリカ出身の外国人が増加するなかで行われるようになったものと考えられる。以上のように外国人の活動には、イギリスやアメリカの文化が反映されているといえよう。

このほかにもホテルや旅館などの宿泊施設も立地している。これらは別荘をもたない外国人などの滞在先として重要な役割を担っていた（第2-4表）。たとえば、別荘を所有しなかったディクソンは、宿場町時代よりつづく亀屋や鶴屋に滞在し、旅館の主人には外国人に対するサービスのあり方を伝えたという⁹²⁾。夏季の外国人避暑客の増加に対応した結果、まず亀屋が1895（明治28）年に万平ホテルへと装いを変え、さらに1902（明治35）年、本格的な洋風ホテルとして移転開業した。軽井沢宿の本陣は1899年に軽井沢ホテルとなった。さらに1906年になると、実業家の山本直良が三笠ホテルを開業した。これらホテルの建築様式が西洋式であることは、外国人の滞在を念頭に置いた証左であろう（第2-7図）。

ところで、夏季のみとはいえ軽井沢の別荘で生活するためには、生活用品の調達が不可欠となってくる。夏季の滞在者に向けた各種商品を扱う店舗は、宿場町を形成した両側町に集積しており、この目抜き通りは「旧軽井沢本通り」や「メインストリート」と称された。第2-5表は、『かるみざわ』の巻末に掲載された商店の名称と業種をまとめたものである。この表をみると、生活雑貨や生鮮食品を取り扱う店舗が比較的多い。とくに肉・牛乳・パンを扱う食料品店のほか、洋服・靴・クリーニングを扱う店舗の存在は、外国人の生活文化への対応を反映しているといえる。

佐藤孝一は、このような旧宿場町（旧軽井沢）の変容を「……かく軒を連ねた二十四軒の旅籠は其跡形もなく、海外の植民地のやうな町並と変わつて、其昔△△講、〇〇社などの招碑を懸けた旅籠屋は、今は△△Hotel また〇〇Co. の看板を掲げるに至つた」と記している⁹³。さらに、「唯一筋の十町にも足らぬ「通り」^{ストリート}ではあるが、中央の二三町は実に賑やかであつて郵便局、旅館、ホテルなどの間々には、京浜あるいは京阪より出張した商店が軒を並べて、互にその珍しき商品を新しき陳列とに客を引附けて」おり、この目抜き通りを「軽井沢の心臓とも云ふべき「大通り」^{メインストリート}」と位置づけている⁹⁴。

各店舗はおもに地元住民による経営であるが、東京・横浜・神戸に本店を置く店舗が「夏季出張店」として出店していることも新聞報道などから判明する⁹⁵。戦前期の軽井沢で避暑を経験したカニングハム（Cunningham, E.）は、宮原安春のインタビューに対して以下のように回答した。「商店は外国人向きの店ばかりで、うっているものは、高級シルク製品とか。うっとりするようなレース、外国人婦人はここで一年分のドレスやアクセサリーを買ったのです」⁹⁶と、当時の状況を語る。第 2-8 図は旧軽井沢のメインストリートを写した絵葉書である。かつての宿場町は、日傘をさしたドレス姿の外国人女性が行き交い、英字看板を掲げて外国人を相手にする商店が店舗の軒を連ねる景観に変貌したのである⁹⁷。佐藤孝一が述べるように、さまざまな国籍の人々が集う「コスモポリタン」⁹⁸と表現される街の様相を垣間見ることができよう。

外国人避暑地としての発展にともなつて通信基盤なども整いはじめた。明治末期には欧米電信・郵便振替・外国為替などの業務が県内の他の市町村に先駆けて始まっていたのである⁹⁹。また、夏季人口の増加するなかで治安の悪化が懸念されると、1902年から毎年7月

から8月までは臨時派出所とさまざまなトラブルなどに対応するために語学の堪能な巡査も置かれた。このように旧軽井沢という局所的な地域の治安を守るような警察基盤までも整いはじめたのである。

第3章 陸軍脚気転地療養の展開と療養地の成立

信州軽井沢ハ地位高く幽僻にて脚気病者が療養するにハ適當の地ゆえ高
崎鎮台の兵卒にて脚気を煩ふ者が有れば同地へ移して療養させられる事
に成ツたといふ¹⁰⁰⁾。

(『讀賣新聞』1881年10月20日)

1880年代という短期間であったものの、軽井沢はショウラによる避暑地の発見にやや先んじて陸軍脚気転地療養地となった。少なくとも1905年までは、陸軍によって脚気転地療養地として利用され、転地療養は避暑と同時代的に併存して行なわれていたのである。しかしながら、外国人による避暑の様態や増加する別荘の特徴を解明することに関心が向けられたこと、資料的な制約があったことなどの理由から、これまで脚気転地療養についてほとんど明らかにされてこなかった。本章では、日本において標高の高い山間地域が療養地として評価されたことをあとづけたそのうえで、軽井沢をクローズアップし、陸軍による脚気転地療養の展開を明らかにする。

第1節 陸軍転地療養と新たな療養地

(1) 軍隊と脚気

まず、戦前期に流行した脚気について概観したうえで、脚気と軍隊の関係性について確認していく。脚気という疾病は、ビタミンB₁の欠乏によって起こる栄養障害性末梢神経炎

である。この栄養障害説がビタミンの臨床的試験結果とともに日本の医学界で受け入れられたのは、大正末期のことであった¹⁰¹⁾。それまではミアズマ説・伝染病説・中毒説・栄養障害説などの原因説が主張されていた¹⁰²⁾。脚気は日本のほか、西南・東南アジアや南米においてもみられる疾病であり、英語ではインドの病名を由来としてベリベリ (*beriberi*) とよばれる¹⁰³⁾。一般的に脚気は肢体の麻痺や浮腫にはじまり、神経系の炎症や筋肉の萎縮から運動機能に影響が出る。悪化した場合、嘔吐や心悸亢進などがみられ、急性心不全(脚気衝心)によって死にいたることもある¹⁰⁴⁾。日本では戦前期の脚気による死亡者数は年間1万人を超える水準で推移し、あたかも国民病の様相を呈していた¹⁰⁵⁾。

明治期以降、脚気は一般社会のみならず、陸軍と海軍の兵士のあいだにおいても増加した。脚気の増加の背景には、白米食という食習慣の変化があった。さらに精米技術の向上は、ビタミンB₁の含まれた糠や胚芽を落とした味のよい白米の普及につながり、とくに軍隊では白米偏重と栄養バランスを欠いた食事が脚気を増加させたのである¹⁰⁶⁾。

明治政府は、天皇が脚気にかかったことにより脚気対策に乗り出す。内務省は1877(明治10)年12月、脚気の実態調査を各府県に布達し、翌年から1882年まで東京府に脚気病院が開設され、西洋医と漢方医による脚気の臨床研究がなされた¹⁰⁷⁾。日本の未知の風土病とされた脚気は、外国人医師らの関心を引き付け、脚気の病理の究明が日本医学界全体の課題となったものの、その原因は特定されず、治療法も確立されなかった。

明治期以降の脚気の発生と原因の確定に至る歴史を便宜的に4期に区分するならば¹⁰⁸⁾、①軍隊における脚気患者の増加と対策の模索期(1870年代)、②陸軍の伝染病説と海軍の栄養障害説の対立など、原因説をめぐる論争期(1880年代)、③日清・日露戦争で大量の脚気

患者を出した陸軍が臨時脚気調査会を設置し、包括的な研究を開始する時期（1890～1900年代）、④ビタミンの発見と臨床実験を経て、脚気のビタミンB₁欠乏説が確立される時期（1910～1920年代）となろう。ここではおもに①と②、および③の時期に注目する。その理由は、陸軍の脚気患者がピークに達するなかで（第3-1表）、「^{ひと}特り転地療養奇驗ヲ奏スルト云テ可ナラン」¹⁰⁹⁾といわれるように、脚気に対して転地療養が最も治療効果の期待できる療法として確立されていく時期にあたるからである。

同じ軍隊といえども、陸軍と海軍とでは脚気対策の方向性を異にしていた。前者ではミアズマ説・伝染病説から衛生環境の改善などの外的要因に、後者では栄養障害説から兵食の改善などの内的要因にそれぞれ重点が置かれていた¹¹⁰⁾。もっとも1885（明治18）年12月以降、大阪鎮台軍医堀内利国の建議により、陸軍においても米麦混合飯が普及しはじめ、1890年代前半には平時の脚気患者は減少し¹¹¹⁾、この時期以降、平時における陸軍の転地療養の対象は脚気から外傷や胃腸器病・呼吸器病などの慢性疾患へ移った¹¹²⁾。

(2) 江戸時代の転地療養

脚気は、江戸時代後期以降になると「江戸^{わづらい}煩」などの名称で、江戸・京都・大坂といった都会特有の風土病として知られていた。医学史の山下政三によれば、江戸時代のおもな脚気の原因説は第3-2表のように整理することができる¹¹³⁾。1～4は外因説、5・6は内因説に分類され、ことに後者が有力視されていた。治療法としては、諸種の漢方薬（下剤・利尿剤）や灸のほか、経験的に麦飯や赤小豆を推奨した食餌療法がひろく知られていた¹¹⁴⁾。

その一方で、明治期以降に軍隊で療法として採られることになる「転地療養」「転地療法」

は、江戸時代においても確認することができる。たとえば、医師香月牛山^{かづきぎゅうざん}は「江戸煩」に言及しており、箱根を越えると自然と治りはじめる奇妙な病で、症状が治癒しない者は直ちに故郷に帰るべきであると述べている¹¹⁵⁾。これは江戸に滞在する人々の間で流行する脚気の特徴を受けて、そこを離れることが脚気の治癒につながるという認識の存在を示している。

さらに、戦前期の医学史家の富士川游は、江戸時代で最も具体的に「転地」に言及した医書として江戸時代後期の医師橘南谿^{なんけい}の『雑病記聞』を挙げている¹¹⁶⁾。橘は、『雑病記聞』(1804年)において脚気の原因説と治療法を以下のように記している¹¹⁷⁾。すなわち、「土中にシユミ付キタル大小二便」、「厠下ノ汚濁」、「泥溝」、「塵捨場」などの「腐穢汚濁ノ気」が夏季に「地中ノ湿気」とともに地上に出て、足の経絡〔気や血液の流れる通路〕に入り脚気を発病させると主張した。とくに人口過密の都会は汚れた気が多く、脚気が発生しやすいと説明している。そのうえで、脚気の流行「地ヲ避」け、周囲が開けていて風通しのよく、湿気の少ない場所へ転じることで、脚気の初期の症状に著しい効果があると述べている。橘は脚気患者の入浴を禁じていたものの、温泉地などを挙げて転地療養を推奨したのであった。脚気の湯治は一般的にどの程度普及していたかは定かでないものの、「脚気川度^{かき} 黴毒鳴子^き」¹¹⁸⁾、という伝承が確認できるほか、草津温泉の「脚気の湯」、熱海・芦之湯・湯岐など、脚気に対する効能を掲げた温泉もみられることから¹¹⁹⁾、一般的には、治癒を期待した湯治が行なわれていたと推察することができる。

(3) 温泉転地療養の特徴

先に述べたように、明治期になると陸軍では多くの脚気患者を出していた。陸軍軍医石黒忠^{ただのり}恵の回顧によれば、「明治七八年頃には脚気病が非常に多く夏期になると殆ど五分の一は脚気といふ有様」であったというから¹²⁰⁾、創設されてまもない陸軍でも相当数の脚気患者が出ていたと思われる。陸軍における脚気転地療養の起源について、陸軍で麦飯給与を実施した大阪鎮台軍医堀内利国は回顧録のなかで次のように述べている。

明治二〔1869〕年ノ秋、兵部省ヲ大阪ニ置カレ諸藩士ヲ徴集シテ数隊ヲ編成シ是ヲ生徒隊ト呼ブ。……又軍事病院ヲ大坂ニ設ケ軍人ノ疾病ヲ治療スル所トナス。……此年〔1870年〕概ネ軍人ノ脚気ニ罹ルモノ数多之アリ。明治四年ノ夏軍人ノ脚気病ニ罹ル^{こといよいよ}愈々多シ。当時緒方惟準君ハ宮中典医ヲ以テ軍事病院ヲ統督セラレ、教師ブッケマ氏等ト相謀テ脚気患者数十名ヲ有馬山ノ温泉場ニ転地セシメシニ頗ル其効驗アリシ。此ヲ我陸軍ニ於テ脚気患者ヲ転地療養^{せんりょう}セシムル始メトス。……脚気病ノ病理治法及其予防ノ事ニ至テハ絶テ發明スル所ナキヲ以テ唯对症療法ト転地療法^{せんりょう}ヲ施スニ過キサリシ¹²¹⁾。

すなわち、軍医緒方惟準とオランダ人医師ブッケマ（Beukema, T.W.）が、脚気になった生徒隊の兵士を有馬温泉へ転地療養させたことが陸軍における脚気転地療養の嚆矢で、それはきわめて有効であったということである。また、脚気の原因の特定や治療法の確立にいたっておらず、对症療法と転地療法に頼らざるを得ない状況であったことがうかがわれ

る。有馬温泉への転地療養を契機として、陸軍では温泉入浴という形態で転地療養が行なわれるようになったのである。

1871（明治4）年～1891（明治21）年までの脚気転地療養地を、『陸軍省年報』『陸軍省日誌』などから可能な限り抽出して地図化したのが第3-1図であり、年次別に鎮台・兵営ごとの転地療養地を示したのが第3-3表である（転地療養地としての温泉地を「○：橙色」、それ以外を「△：黄色」で図示した）。これらの資料によれば、1870年代の半ばまでは鎌先温泉（仙台鎮台）、宮ノ下温泉（東京鎮台）、伊香保温泉（高崎兵営）、道後温泉（広島鎮台）など、転地療養地は全国的に温泉地であったことがわかる¹²²。「脚気ハ暑候ニ発シテ冷候ニ熄ムヲ以テ常トス」¹²³ことが通例であったので、脚気転地療養は、毎年7～12月の夏から冬の期間に実施されていることが特徴的である。転地療養地への移動手段としては、患者の容態により徒歩・車駕・手押し車・汽車などが用いられた¹²⁴。

温泉転地療養について『陸軍省日誌』や各鎮台による陸軍省への「伺い」をみると（第3-4表）、たとえば、1874（明治7）年7月25日の通達には、「東京府下屯在ノ諸兵下士以下脚気病重症ニ罹リ温泉浴療法ヲ要シ候者懸管下箱根宮ノ下へ僻養生所ヲ設ケ療養為致候條此旨為心得相達候事」とあり、重症者を入浴させる旨が明示されている。このことから温泉への入浴療養を特徴としていたことがわかる。また、仙台鎮台の報告には、脚気患者を鎌先温泉で入浴させた結果、症状の悪化する患者は減少したと記されており¹²⁵、入浴による治療効果が信じられていたといえよう。

転地療養に関する記述を追うと、脚気に対する薬剤・食餌療法の有効性は不確定であったのに対して、転地療養によって脚気による死亡を抑制できることが報告された。たとえ

ば、「奇験ヲ奏スル」、「奏効殊ニ明カ」といった強い断定をともなって陸軍において高い評価を獲得している¹²⁶⁾。ただし、陸軍で行なわれた脚気の温泉転地療養に対して、医学的・病理学的な見解は明確に示されておらず、1870年代半ばに行なわれていた初期の転地療養は、西洋医学の影響を受けていたというよりも、むしろ歴史的に療養地であった温泉地に対する認識の強度が影響しているように思われる。

(4) ミアズマ説の影響と気候転地療養地の選定

1870年代後半になると、脚気の原因や治療法に関する情報の共有が進展し、脚気転地療養を取り巻く状況の変容にともない、転地療養地もまた変化していく。1878（明治11）年の「脚気予防及ヒ療法ノ臨時会議」では、転地療養の効果が正式に追認され、脚気に対する積極的な意見の提出が要請されるようになる。とくに影響が大きかったのは、外国人医師らが西洋医学の衛生観や疾病観にもとづいて主張したミアズマ説であった¹²⁷⁾。

たとえば幕末長崎で医学校を開き、日本の近代医学教育の父と顕彰されるポンペ (Pompe, M.) は、脚気を「殊ニ泥湿ノ地」から生じる疾病とする¹²⁸⁾。治療として滋養物の摂取、利尿剤や鉄剤などの処方、瀉血（血液を排出する治療）を挙げ、「清涼ノ乾キタル空気殊ニ山気、温湿ヲ避ク殊ニ泥潭ノ住居ヲ禁ス」と、低湿地を避け山間の冷涼で乾燥した空気の享受を推奨している。同様に、大阪医学校教師のエルメレンス (Ermerins, C. J.) は、「凡ソ脚気ノ諸原因ハ確定ス可キ者無シト雖トモ、泥沼毒ニ由テ発スルノ説ハ極テ的説ナルニ似タリ」と述べる¹²⁹⁾。海軍軍医寮教師アンダーソン (Anderson, W.) は「此病ハ保健法ノ完全ナラサルニ由リテ醸成セラレタル泥沼気ニ起因シタル血毒ヨリ発生シタルニ似タリ」とし

130)、排水設備の未整備による汚水の滞留や通気の悪い家屋での集団生活などを誘因に挙げている¹³¹⁾。

こうした見解が提示されるなかで、陸軍においても「脚氣流行ノ原因ヲ察ルスニ霖雨後ノ洪水漲溢シテ營郭ヲ回繞シ營中ノ湿氣ト風候ノ変換トニ因リ病根醸成スルカ如シ」¹³²⁾とミアズマ説的な視点から、水の滞留、気温・湿度の上昇などの気候の変化が注目された。さらに、「脚氣病ノ流行以前ニ於テ之ヲ未発ニ防クカ為メ摂生法ヲ嚴ニシ常ニ營ノ營外ヲ清潔ニセシメ空氣ノ流通汚水ノ滞留セサシメルニ注意」するなど、衛生環境の整備も脚氣対策の一環であったことがうかがわれる。このように陸軍の脚氣対策は、外国人医師らが主張したミアズマ説にもとづいて行なわれていた。

ミアズマ説は西洋医学における主要な衛生観であり、陸軍においても脚氣の原因説のベースとして影響を与えつづけたのであるが、西洋医学のミアズマ説と漢方医学の瘴氣説・風毒説との類似性を指摘することができる。瘴氣説・風毒説は、江戸時代では原因説の一つに過ぎなかったが、ミアズマ説へと取り込まれたことでいわば近代化したといえよう。

ポンペをはじめとする外国人医師たちは、湿地や不衛生な環境から冷涼で乾燥した場所へ移動することを推奨していた。ポンペの後任をつとめ、大阪軍事病院の教師でもあったボードイン (Bauduin,A.F.) は、「此ノ病ニ罹ル者ハ先ス居処ヲ転スルヲ第一療法トス」と述べる¹³³⁾。さらにアンダーソンは、患者を健康的な場所に移動させることが脚氣流行地で発症したすべての脚氣の治療に不可欠であり、このことは日本人や外国人を問わず知られていると述べた¹³⁴⁾。このことは、脚氣に対して有効な治療法が確立していないことを示すともいえるが、むしろ転地療養が疾病の処方として認識された証左となる。

とりわけ、近代化期の医学界に大きな影響力をもった東京帝国大学医学部教師バルツ (Bälz, E.) は、脚気の病原は未確認としつつもそれを「ミアズマ性伝染病」とであると主張した¹³⁵⁾。彼は「土地ニ発する有生毒物ヲ摂取シテ発シタル疾患ナルヲ以テ……「ミアズマ性」としている¹³⁶⁾。本来「悪い空気」を疾病の原因とするミアズマ説と菌や寄生虫などを原因とする伝染病説は相反するものであるが、バルツの見解は細菌説の提唱された時期に登場した折衷説と考えられる¹³⁷⁾。

ここで重要な点は、当時ミアズマ説とミアズマ性伝染病説のいずれでも湿気や暑気と有機物の腐敗が脚気に関係するとみなされていた点である。当時の最新の見解を掲載した『脚気病院報告』では、「此病ハ必ス固有ノ一異毒アリテ其発萌ノ際人身ヲ侵襲スル」¹³⁸⁾、そして「脚気ノ流行ハ夏炎ニ始マリ秋冷ニ終ルヲ以テ之ヲ推スニ必ス温暖ニ由テ病毒ヲ醸生スル」、あるいは「有機物空気ノ竄入ト湿温ニ由テ腐敗シ病毒ヲ醸生スル」¹³⁹⁾と記されている。このように、脚気の病理として悪性貧血説、米毒説、栄養障害説などが主張されていた。そのなかで、陸軍や東京帝国大学医学部といった西洋医学を实践するフロンティア集団では、夏季の暑気や湿気、有機物の腐敗など、不衛生な環境から生じる不潔な空気や病毒を脚気の原因とする見解が通説となったのである。1870年代後半から少なくとも1880年代前半には有力な説として支配的になったのである。

1884 (明治17) 年2月に陸軍軍医本部長松本順は、脚気転地療養を以下のように評している。「該病タル未タ正確ノ病原病理ヲ発見セスト雖トモ多年ノ実験ニ徴スルニ病初ニ当テ転地セシムルハ軽キ者ハ薬セスシテ全癒シ重症ノ者モ亦死ヲ免ルコト多シ但之ヲ転地セシムルヤ要スル所病初ニ在リ若シ期ヲ後ルレハ其効著シカラス」¹⁴⁰⁾。つまり、脚気発症の

初期に転地療養することができれば効果が期待でき、時期が遅れると効果は期待できないと主張するのである。さらに松本は、脚気に対して、「實際ニ施シ適切ニシテ施行致シ易キハ善良空気ヲ饒給スルノ一事ニ有」りと述べている¹⁴¹⁾。ここから、転地療養は良質の空気が必要という観点から行なわれていたとみることができる。

1870年代後半以降の転地療養地について、再び第3-1図および第3-3表をみると、たとえば、長崎兵営では海水浴が実施され、広島鎮台では巖島、大阪鎮台では海浜の舞子浜、海浜に近い平野部の八部郡坂本村（現神戸市北区坂本）のほか、山間地域の高野山が選定されている。大津兵営は坂本村（現大津市坂本）へ、東京鎮台では箱根や軽井沢、また東京陸軍教導団では鹿野山が転地療養地として選定された。さらに、宇都宮兵営では近傍の多気山に転地したものの、病状の悪化を招き、「全ク地形ノ適當セサルモノニ相違無」¹⁴²⁾と、例年通り日光へ転地することになった。高崎兵営においても伊香保温泉だけでなく、榛名山村の宿坊や軽井沢への転地療養が実施されている。

1889（明治22）年3月、陸軍医務局長橋本綱常が陸軍大臣へ提出した上申書によれば、転地療養の規定には「単ニ温泉入浴ノ取扱ヲ示サレタルモノニシテ気候療養、海水浴療養ノ事項」がなく¹⁴³⁾、制度運用の実態と乖離していた。そのため、橋本は気候療養と海水浴療養を規定に追加することを求めた。その結果、同月の「陸軍入院患者転地療養規則」（陸達第四十六号）では、気候療養・鉱泉浴療養・海水浴療養の3種が定められた。このことは、少なくとも陸軍において温泉入浴療養にくわえ、海水浴療養と気候療養もが制度化される水準にまで評価されていたことを示すと考えられる。実際、1879（明治12）年に箱根（旧箱根宿）に転地して行なわれた療養は入浴療養ではなく、「専ラ単純ノ気候療養」と記録さ

れている¹⁴⁴⁾。箱根を通時的にみると、温泉療養地から気候療養地へと変化したことになる。つまり、温泉入浴だけではなく、気候にも治療の効果を期待する見解を読み取ることができるといえる。

気候療養をいち早く紹介したのが、ベルツの『日本鉱泉論』(1880年)であった¹⁴⁵⁾。ベルツは、「空気乾燥ノ地ニ滞在シテ殊ニ益アルハ難症ノ痼疾」であり、「浴療」と「飲療」よりも、空気が著しい治療効果をあげる疾病として「脚気」と「胸膜炎」を挙げている¹⁴⁶⁾。ベルツの主張は、1886年に内務省衛生局が発行した『日本鉱泉誌』にも影響を与え、それは「気候療法又風土療法ト云フ」という項目に反映されている¹⁴⁷⁾。そこで指摘されている適応症は、「此気候療法ヲ要スル所ノ主ナル疾病ハ結核病勞ノ類、腺病、梅毒、癩麻質私斯、貧血萎黄病、泥沼毒間歇熱ノ類、或ル風土病脚気ノ類、呼吸器病、月経不調……」などであった。

この気候療法は、1880年代半ばになると、欧米の医書をもとに医師神内由己や三宅秀が紹介している¹⁴⁸⁾。このうち三宅は、「此療法ハ本邦及漢土ニ在リテハ未タ曾テ之ヲ称セサル所ナリト雖彼ノ温泉浴中ニハ自之療法ヲ含メル者アラン」と述べており¹⁴⁹⁾、気候療法は、次第に認識された治療法であったことがうかがわれる。

福田真人によれば、1880年代以降、鎌倉や須磨などには海浜院と称される結核療養所が開設され、治療方針は新鮮な大気の享受を目的とする気候療法であった¹⁵⁰⁾。この時期は、海水浴が注目されていたこともあり、医学的に気候や空気の性質も重要視されていた。この潮流をふまえて、1891(明治24)年の『陸軍軍医学会雑誌』に掲載された脚気転地療養についての論文をみてもみる。

肺勞ニ転地ノ功アル所以大ニ積然タル如シ脚氣ノ転地ニ於ケルモ亦然リ。夫レ病毒ナキノ地ニ転シ既ニ体中ニ現存スル黴菌ヲシテ新陳代謝ノ機能ニ抛テ排除セシメ更ニ新入ノ黴菌ナクンハ自然ニ之ヲ放置スルモ乃チ治スヘキノ理ナル者ナリ。故ニ本病ノ素因アル者ヲシテ夏時脚氣地方ヲ避ケシムルハ予防ノ卓効極メテ確實ナリ¹⁵¹⁾。

この論文では、結核治療の転地療養が念頭に置かれ、脚氣の原因とされる病毒のない場所へ転地し、新陳代謝によって病毒を体外へ出すことで治癒を図ろうというものであった。上述したように、脚氣の病毒の発生は、暑気や湿気、有機物の腐敗と密接な関係を有すると考えられていたゆえ、脚氣転地療養は温泉の入浴療養だけではなく、良質な空気を求める気候療法の効果が認識されるにいたったと考えられる。そして、良質な空気を得るために選定されたのが多気山・鹿野山・箱根・榛名山・軽井沢などの標高の高い山間地域なのであったと解釈することができる。

これまでの近代化期の転地療養地に関する研究では、1880年代に海浜、1920年代に高原が療養地としてふさわしい場所となったことが明らかにされてきた¹⁵²⁾。これに対して、以上の検討より明らかとなったのは、温泉の有無にかかわらず、標高の高い山間地域が、海浜と同時期、さらに高原に先駆けて、療養地として見いだされたことである。このことは、江戸時代において温泉地との間に成立していた従来の健康と場所の結びつきを拡大させたといえよう。海浜や平野、とりわけ山間地域が新たな脚氣転地療養地として見いだされ、陸軍によって組織的かつ継続的に利用された結果、場所に対する健康の新たな意味づけが生み出されたと解することができる。

第2節 軽井沢の脚気転地療養と治療効果の言説

まず、軽井沢で実施された脚気転地療養について言及した2つの記述を確認しておきたい。一つ目は、佐藤孝一『かるみざわ』（1912年）に記された内容である。

……明治一四年（四月）陸軍々軍医総監林紀が笠原軍医正を随へ、実地視察のために来軽して、親しくその状況を調査した結果、高崎營所（現今歩兵第一五連隊）より脚気患者を転地（五十名づゝ交代に二百名収容せしが悉く全快）せしめて好結果を収め得たるに始まつて、以後二十七八、北清、三十七八此の三戦役の際も多大の傷病兵を収容し、これまた非常なる好結果を収めて、茲に世人に転地療養地として重視せらるゝに至つた……¹⁵³⁾。

二つ目は、『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』（1988年）の記述である。

軍医総監林紀の実地踏査により、軽井沢が最良の保健地と認められ、高崎營所の脚気患者が転地療養したのは、明治一四〔1881〕年であった。佐藤万平宅を収容所に、五〇名ずつ交代で約二〇〇名を治療したが、費用不足で三年で閉鎖となった。しかし、以後日清・日露・北清など戦争の傷病兵療養所も開設されるなど、転地療養の適地として軍の利用は繰り返され、今日の保健休養地のきっかけとなった¹⁵⁴⁾。

『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』の記述は、『かるみざわ』をもとに書かれたと推察さ

れるものの、傍線部で示した内容は追加された情報である。ただし、どのような資料にもとづくのかは明記されていない。もっとも、『かるみざわ』の著者である佐藤孝一は、1889年生であることから、陸軍の脚気転地療養を直接経験しているわけでない。ここでは陸軍関係文書・新聞・雑誌などの分析を通じて、軽井沢が脚気転地療養地としてどのように評価されていたのかを明らかにする。そのうえで、「療養地」としての軽井沢のもった意味についても考察することとしたい。

(1) 東京鎮台高崎第三連隊による転地療養

明治政府は、日本の「近代化」を目指し、学制・殖産興業・富国強兵の3本柱を打ち出す。このうち富国強兵を実現するためには軍制の整備、すなわち陸軍と海軍という近代的な軍隊の組織化が不可欠であった。まず主務官庁として1869（明治2）年に兵部省が設置され、ついで兵部省は陸軍の駐屯地として、主要都市の城址を管轄とした。ここで取り上げる高崎兵營の駐屯地となる高崎城址は、1872（明治5）年2月に兵部省の管轄となり、同年兵部省が廃止され陸軍と海軍とが独立すると、陸軍に引き継がれた。

1873年、新潟に駐屯していた歩兵第八大隊を中心とする兵隊が配置転換され、東京鎮台高崎兵營の歴史がはじまる。その後、目まぐるしく兵制編成や改組が進み、翌年2月になると、歩兵第3連隊第1大隊、同年4月には連隊本部が高崎に置かれた¹⁵⁵⁾。軽井沢へ最初に転地療養したのが、この歩兵第3連隊第1大隊である。

第3-5表には、東京鎮台および軍医本部から陸軍省に提出された軽井沢へ転地療養に関する伺いを示した。資料 A は、軽井沢へ転地療養を求めた最初の伺いである。この伺いでは、

すでに脚気患者が200人程に達しており、蔓延すると予想されるため、「長野縣下信州国北佐久郡軽井沢駅ノ儀ハ〔、〕地位幽僻且清涼ニシテ〔、〕最モ適當ノ旨医官ヨリ申立モ有之候」と、軽井沢へ転地療養する許可を上申した。脚気は気温の上昇する夏季に増加することが知られており、人口密集地における湿度の上昇、有機物の腐敗などの不衛生な環境から生じる不潔な空気やウイルスを原因とする見解が通説となっていた。したがって、兵士の集住する高崎兵営を離れ、標高が高く冷涼な環境である軽井沢が転地療養地として選ばれたと考えられる。資料 A に対する陸軍省の許可は8月29日となっているが、高崎陸軍病院に残された業務日誌である「高崎陸軍病院歴史」によれば、上申の翌日8月13日に軽井沢へ向けて出発しており¹⁵⁶⁾、差し迫った状況であったことが推察される。

転地療養がはじめて行なわれた1881（明治14）年当時、軽井沢は参勤交代制の廃止による影響を受け、宿場町としての機能は衰退しつつあった。同年7月に軽井沢村戸長から長野県北佐久郡庁に提出された記録によれば、軽井沢村の戸数は109戸、人口447人（男207人・女240人）、生業は、農業・養蚕15戸、薪炭業71戸、旅館12戸であった¹⁵⁷⁾。薪炭業の多さから判断すれば、宿場町の衰退により、就業の機会がほとんど失われていたと推察される。他方で、旅館は12軒と記録されている。天保期には旅籠は24軒であったことから、この時期には半減したことになる。とはいえ、依然として宿泊機能は残存していたとみることができる。

陸軍における転地療養の制度は、1875年の「患者入浴給与方」、翌年の「病兵温泉入浴規則」にもとづいて規定されており、兵士一人一日22銭までの宿泊料が負担される旅館借上げ方式を採用していた¹⁵⁸⁾。旧軽井沢の残存する宿場機能としての旅籠は、多くの脚気患者

を受け入れることが可能であったと推察される¹⁵⁹⁾。

資料 B は、1882年6月7日に東京鎮台が陸軍省に提出した伺いである。内容は、「転地療養為致候処大ニ効験ヲ奏シ」たことから、今回も宇都宮兵営と高崎兵営の脚気患者をそれぞれ日光と軽井沢に転地させることを願い出たものである。陸軍省は許可に際して、日光と軽井沢で行なわれた転地療養の「効果」を軍医本部に照会しており、それに対する回答が資料 C である。回答によると、転地療養地としての日光と軽井沢は、転地しなかった脚気患者に比べて、症状の進行が抑制され、死亡者の割合は7分の6に減少した。東京鎮台の伺いは、回答を受けて同月29日に許可された。また、1884年には脚気の流行する夏季になる前にあらかじめ軽井沢への転地療養の許可を求めており、迅速な対応を目指す準備がなされている（資料 D）。このことは、脚気の初期段階において転地療養が効果的と述べた陸軍軍医総監松本順の見解と一致する。

以上のように、1881年から軽井沢は脚気転地療養として利用されたことがわかった。資料的な制約から軽井沢のどの旅館に滞在していたのかは定かではないものの「高崎陸軍病院歴史」には、高崎営所における疾病の発生状況や脚気の治療記録、ならびに軽井沢に転地した患者数などが記載されている¹⁶⁰⁾。

「高崎陸軍病院歴史」と『陸軍省年報』から得られる兵員数などの情報を合わせて作成したのが第3-6表である。1870年代半ばにおいては、伊香保温泉が転地先であったが、1880年には、水質や飲食物の状況から榛名山が選定され、宿舎には宿坊が充てられている。高崎兵営の脚気転地療養地は全国的な動向を反映しており、温泉のない山間地域へと変化していることがわかる。高崎兵営から新しい転地療養地である軽井沢までの距離は、伊香保

と比較して約1.6倍ある（第3-2図）。軽井沢の転地療養は、1881年から1884年まで4年連続で実施された。その後、脚気予防を兼ねた行軍が導入されると、宿营地として千葉県習志野原・榛名山・中之条町が選定・利用されたものの、重病者の療養地は軽井沢であった。1887年と翌年には、再び軽井沢が転地療養地となっている¹⁶¹⁾。

軽井沢に転地した患者数をみてみると、100名を超える年次が目立つ（第3-6表）。1881年には、罹患率は58%と極めて高い値を示している。各年においても高崎営所の患者割合は、全国の鎮台・営所のなかで上位を争う高水準であった。

このように、軽井沢は継続して転地療養地として選定されていたことから、治療の「効果」が認められていったといえる。『高崎市史』（1927年）の「高崎衛戍病院」に関する項目には、「……後年兵食ヲ麦飯トシ又水道ノ完成ニヨリ、該病〔脚気〕ハ全ク根絶スルニ至レリ」とあることから¹⁶²⁾、平時体制化においては米麦混食化が進み、脚気患者が陸軍において減少するまで、脚気転地療養地として利用されていたと考えられる¹⁶³⁾。

(2) 脚気転地療養地の評価と伝染病予防の場所

軽井沢における転地療養の「効果」は、陸軍内部でも広く知れ渡ることとなる。それまで脚気患者を箱根や伊香保温泉に転地させていた東京陸軍本病院（以下、本病院と略）が、1885年に患者を軽井沢へ転地療養させたのである。その前年6月26日付の『讀賣新聞』では、「東京陸軍病院にてハ此ほどより脚気患者増加し二百名ほどにも至りしに付き箱根駅の仮病院だけでは手狭ゆえ今年は碓氷峠の開削が出来て道路も便利になりたれば信州軽井沢へ仮病院を新築し同所で患者を送らるゝ由」¹⁶⁴⁾とある。高崎兵営による脚気転地療養の実績

から、東京陸軍病院も軽井沢への転地を検討しはじめていた様子うかがわれる。このような検討を後押しした要因には、箱根の仮病院が手狭になったこと、そして「碓氷峠の開削」すなわち「碓氷新道」の開通が挙げられている¹⁶⁵⁾。

本病院の転地療養は、1885年7月から11月まで実施されたが、それに先駆けて6月には東京陸軍病院医療課長の中泉正が軽井沢へ現地調査に赴いている。念入りに調査していることがうかがわれ、何らかの基準を満たしていると判断されたといえる¹⁶⁶⁾。転地療養の概要は、『陸軍省第十一年報』に記載されており、軽井沢の特徴は次のように記されている。「浅間ノ山腰碓氷嶺ノ上ニ在リ〔、〕海面ヲ抜クコト約二千九百尺」で、「飲水ハ駅北ノ山腹ヨリ流ルヽ者ニシテ頗ル清冷〔、〕空気モ亦タ清潔ニシテ炭酸ノ量甚タ少ナシ気圧及ヒ温度ハ之ヲ東京ニ比スレハ低ク山露朝暮ニ来リ随テ湿度ハ稍ヤ多シ」¹⁶⁷⁾。

本病院の脚気患者の転地療養の経過をみると、7月から11月まで脚気患者140人（重症17人、中等35人、軽症88人）が軽井沢で療養した。患者の経過は、治療期間10週以内に全癒101名、半癒が49名〔39名の間違いか〕と記されており、7割程度の患者が全治したとみられる。具体的には「病症ノ軽重ニ従ヒ〔、〕多少遅速アリト雖ドモ〔、〕胃部痞滞ノ疎解〔、〕利尿ノ増多〔、〕麻痺ノ消褪等ハ大ニ顕著ナルヲ見ル」と、療養の成果が報告されている。

他方で、この報告には、水質調査と旅舎内の有機物調査の結果が示された（第3-7表）¹⁶⁸⁾。先に引用した軽井沢の特徴に、「空気モ亦タ清潔ニシテ炭酸ノ量甚タ少ナシ」とあることから、科学的な方法で測定された結果、転地療養を実施するうえで支障のない「基準」を満たしていたと思われる。しかしながら、具体的な値や説明はなく結果が掲載されるのみである。このことから、療養の効果は期待できると評価されていたものの、いかなる医学的

な過程で脚気が治癒されるのかについては、判明していなかったと思われる。

このような転地療養の結果は、『讀賣新聞』で次のように記された。すなわち、「陸軍病院にては本年脚気患者の為に仮病院を信州軽井沢へ設立され患者百七十名ほどを入院させられしに地位気候等適當せしと見え残らず全快して此ほど帰營されしとぞ」¹⁶⁹⁾。「全快」というのは誇張であり、170名という数字も前出の資料と齟齬があるものの、軽井沢における脚気転地療養の「効果」を報じている。このような新聞報道は、軽井沢と脚気転地療養とを結びつける役割を果たしたと考えられよう。

以上のように軽井沢は、避暑地・別荘地として発展する以前には、脚気転地療養地となっていた。このことにくわえて脚気転地療養地だけでなく、コレラの予防のための避難先となっていたことを示す興味深い内容の記事がある。

北佐久郡軽井沢村は年々夏氣に至れば〔、〕陸軍轉地病院の設けありて賑ひたるが本年は脚気患者の減じたるにや轉地せしもの一人もなきより同地の人々は嘆息し居たる折から〔、〕幸ひにも外国人其の他在京の脚気患者等が避暑^{かたがた}旁々陸續入り来り續て海軍兵四百人余来るよしにて既に宿割の人も到着せしに計らざりき〔。〕今ど本県も流行地となりたるに付き俄に見合わせとなりたるのみならず〔、〕是まで轉地し居たるものも之れがため追々出發せしゆえ人々は大いに困却し居るとの通知ありし¹⁷⁰⁾。

この記事は、夏季の軽井沢には陸軍のみならず、東京に住まう脚気患者の転地療養地となっていることについて言及し、避暑のために外国人が訪れていることも伝える。ここで

重要なのは、海軍の兵士約400人が来訪予定であったものの、それが中止になったという点である。なぜここで陸軍だけでなく海軍が登場するのか、そして「今ど本県も流行地となり」とは何を示しているのだろうか。

1886年は、全国的にコレラが流行した年にあたる。5月になると、兵庫県・大阪府・京都府においてコレラが流行の兆しをみせはじめた。これを受けて海軍衛生部長の軍医総監高木兼寛は、6月10日に海軍大臣西郷従道へ宛ててコレラ予防の方策を上申し、6月14日に高木の意見が反映された訓令（普二七九五号）が通達された。

京都府大阪府兵庫県等ニ於テ虎列病流行シ〔、〕滋ニ蔓延ノ勢有之候ニ付テハ各廠各艦船ニ在リテハ〔、〕特ニ該病ノ予防法ヲ厳密ニ実行シ〔、〕且該病侵襲ノ恐アルトキハ所當長官ハ地方官ニ協議シテ予防法ヲ実行セシメ〔、〕艦船ハ無病ノ地ニ避泊セシ□□〔、〕又技舎□營及運転スル能ハサル艦船アル地方ニ該病侵入スルトキハ〔、〕一切外出ヲ禁シ若シ蔓延ノ勢アルトキハ該地ノ軍人ヲ無病ノ地ニ轉移セシムヘシ……¹⁷¹⁾。

この通達は、海軍でコレラの蔓延予防策を徹底すること、もし患者が出た場合には周辺地域と連携を取って対処すること、コレラの蔓延する可能性が高いときは軍人を「無病ノ地」に轉移させるべきことを伝えている。

その後、コレラは各地で猛威を振るうことになった。横須賀鎮守府司令官中牟田倉之助は、横須賀においてもコレラの蔓延する恐れが高まったことから、普二七九五号の訓令にしたがい、7月10日付で軍人の移動について海軍大臣に上申した¹⁷²⁾。なかでも、軍艦の乗

務員について、「相州箱根野州日光信州軽井沢近傍其他實際ニ条シ便宜ノ地ヲ選定移転セシメ候様致度此段予テ仰御認可候也」と、箱根か日光、あるいは軽井沢の近傍を選定して軍人を移動させる旨について伺いを立て、13日に許可された。したがって、先に引用した『信濃毎日新聞』において、海軍に関する記述があるのは、コレラの感染予防について以上のような海軍の動向があったためである。

当時コレラは、船舶により国外からもたらされることが多く、港湾部から都市へと伝播していた。中牟田は、軽井沢だけでなく、日光と箱根も退避の候補地に挙げており、第3-1図でみたように、これらの場所はすでに脚気転地療養地であった。つまり、伝染病に罹患するリスクの高い人口の密集する都市部に対して、地方の山間地域は、安全と認識されていたと考えられる。このことは、とくに大正期から昭和戦前期にかけて、都市部と対比的に山間地域・海浜、そして都市郊外が、健康を保障する理想的な場所となる先駆け、あるいはその萌芽とみなしえる。

(3) 日清・日露戦争時の脚気転地療養

陸軍は1894年（明治27）年から翌年の4月まで行なわれた日清戦争において、一日平均員数14万5,036人も兵士を動員した¹⁷³⁾。このときの出征部隊の脚気患者数は、3万7,328人を数え、赤痢患者の3倍に迫るほど猛威をふるっていた¹⁷⁴⁾。戦地から本土へ後送された傷病兵は、まず広島臨時陸軍病院で治療を受けた後、各地の陸軍予備病院や転地療養地で身体の保養につとめた。日清戦争時には、鶴沼・湯河原・箱根・大磯、そして軽井沢の5ヶ所が転地療養所として指定された（第3-8表）。この表の外科的疾患とは銃創や骨折など、内科

的疾患とは消化器系疾病などを指す。そして、脚気患者に特化した転地療養地は、箱根と軽井沢であり、すべての疾病の患者を受け入れたのは大磯となっている。

『東京陸軍予備病院衛生業務報告』によれば¹⁷⁵⁾、軽井沢で行なわれた転地療養の期間は、1895（明治28）年9月25日から11月27日までである。合計489人の患者は、1893年に開通した信越線によって11回に分けられ輸送された。このとき療養先となったのは、詳細は明らかでないものの、30畳以上の家屋20戸と記載されており、旅館をふくめた比較的大規模な場所が選定されていたことがわかる。具体的な治療法は、「専ら気候療養」と記録されているが、血行の促進と筋肉の萎縮を快復させつつ、歩行機能の診断をするために、患者には適度な運動を課していた。運動の時間は午前1時間、午後2時から4時間となっている。『信濃毎日新聞』の記事には、小坂善之助（政治家）の主催した療養兵招待会の写真が掲載されており、小坂家の別荘の前には白色の病衣を着た脚気療養中の兵士が整列している（第3-3図）。

日清戦争の約10年後の1904（明治34）年2月に開戦し、翌年の春まで戦闘が行なわれた日露戦争は、陸軍の脚気対策を大きく転換させるほどに甚大な患者を出した。山下によれば、脚気と急性胃腸カタルは、20万人を超える値を示しており、脚気による犠牲者を3万人とする統計資料もある¹⁷⁶⁾。本土に後送された戦傷者と疾病罹患者とを含む傷病兵は膨大な数に及び、全国に開設された傷病兵転地療養所は、55ヵ所を数えた（第3-9表）。同表をみると、司令部の置かれた地域ごとに複数の転地療養地が指定されている。ただし、後送された傷病兵の病名は定かでない。

多くの転地療養地は温泉地や海浜地域に立地しているものの、「浅間山麓一帯の気候風

土が戦地後送傷病兵士の療養地として最も適当し居ることが追分転地療養所の成績で益々判明し、且つは後送者の増加するに随つて従来の箇所のみでは到底収容しきれぬので、軽井沢へも^{いよいよ}愈々本月五日から転地療養所を設置するゝことになつた」¹⁷⁷⁾。このように、軽井沢とその周辺部の場合、気候や空気が療養に資するものとして評価されたがゆえに、転地療養地として選定されたと考えられる。もともと旧軽井沢宿が、脚気転地療養地として利用されていたのみであったが、旧追分宿と旧沓掛宿を含めた「浅間根越しの三宿」が傷病兵転地療養地としても選定されたのである。まず8月中旬に追分、9月以降になると軽井沢と沓掛とが転地療養地となった。軽井沢はすでに外国人を中心に避暑地化していたため、傷病兵の受け入れは多くの避暑客が常住地に戻る9月以降にずれ込んだと推察される。

9月15日の時点で、追分・沓掛・軽井沢にはそれぞれ、648名・300名・922名の兵士が療養しており、軍医や看護人を含めると全体で2,100名を超える人々が滞在していると報じられた。傷病兵が転地療養している様子は、草津温泉へ調査に向かう途中の9月16日に軽井沢で一泊したベルツによって目撃された。彼は「当地には、回復期の傷病兵が、千名ばかり滞在している」と述べ、兵士たちが礼拝に参加する様子を記している¹⁷⁸⁾。

日露戦争以後、陸軍の転地療養が軽井沢周辺で行なわれた記録、あるいは新聞報道は管見の限り発見できていない。これまで先行研究においては、軽井沢の外国人避暑地としての側面や日本離れした西洋的な雰囲気¹⁷⁹⁾が強調されてきた。しかし、以上みてきたように、明治期には陸軍脚気転地療養地としての評価を獲得し、脚気に特化するだけでなく、日露戦争時には傷病兵の転地療養地にもなっていたことが明らかとなった。以上は、軽井沢における避暑地の局面とも同時代的な現象であるため、軽井沢の歴史的を跡づけるうえで重

要な出来事であると指摘できよう。

第3節 脚気以外の療養の展開

ここまで陸軍による脚気転地療養について検討してきた。軍隊という国家的な組織が転地療養に訪れたことは、軍隊の枠組みをこえて市井の人々にも影響したのである。したがって、軽井沢が一般人の脚気転地療養地となっていた点についても言及しておきたい。

以下の引用は、1895年の『東京茗溪会雑誌』に掲載された小西信八「夏の軽井沢」という滞在記である。これには、旧軽井沢の本通りに面した旅館萬松軒（第3-4図）に多くの脚気患者が滞在している様子が活写されている。

軽裘狐貂を着〔、〕暖炉を擁し尚ほ嚴寒を訴ふる〔。〕人炎暑には帝都を去りて僻地の山村に入り悠々自ら適することを為して慰む者は是れ洋客なり〔。〕陰鬱不快の室に蟄居呻吟して他の壯健を羨望し病苦を叫号するは脚気患者なり。患者の多くは萬松軒に寓し楼の上下殆ど充ち其数五十を超ゆべし、内三十五人は富岡製糸所女工なり〔。〕予の如きは脚気患者に非らず¹⁸⁰。

このように、50人以上の脚気患者が旅館を埋め尽くし、苦しみの声をあげながら療養していたことがわかる。そのうち35人は富岡製糸所の女工であるという。細井和喜蔵の『女工哀史』（1925年）で描かれているように、製糸工場という当時の劣悪な環境における集団就労や寄宿生活によって結核が蔓延したことはよく知られているが、この様子からみれば、

脚気も相当数にのぼっていたと思われる。

軽井沢が脚気転地療養地となっていたことは、「避暑地50周年」を記念して1936(昭和11)年8月に開催された「軽井沢発展座談会」においても言及されている。たとえば、学生時代に軽症の脚気にかかったため、軽井沢で療養したことがあるという東京帝国大学助教授の山崎匡輔きょうすけは、「当時つるやさんなどに居られる方は十人が十人脚気でしたね」と発言し、つるや旅館主人の佐藤不二男は、「さうです。今でも昔からの縁故で高崎、群馬方面からやつてこられる方が多いです」と応じている¹⁸¹⁾。

1900年前後になると、軽井沢は脚気だけではなくその他の疾病の転地療養地となっていたことにも留意したい。たとえば、旧軽井沢に開業していた「軽井沢病院」の新聞広告をみると(第3-5図)¹⁸²⁾、「信州軽井沢ハ土地高燥空気清涼以テ転地療養避暑地トシテ天下無二ノ良地ナリ」とし、脚気のほかにも慢性腸胃病、慢性呼吸器病の臨時入院を許すとある¹⁸³⁾。さらに旅行雑誌『旅』には、「当地は海面を抜く三千余尺にて申上げる迄もなく脚気、神経衰弱症、バセトー氏病には最も適當の療養の土地に御座候、軽井沢病院は養生によろしく候……」¹⁸⁴⁾と記されている。つまり脚気だけでなく、慢性腸胃病・神経衰弱・バセドー氏病などの療養にもふさわしい場所と宣伝されていたのである。

以上のように、軽井沢は陸軍にとどまらず、一般の人々にも脚気転地療養地としても利用されていたことがわかる。それだけでなく、脚気以外の疾病の転地療養地とみなされていたことが明らかとなった。これらのことから、療養地としての価値づけが拡大されていたといえよう。

第4節 療養地としての軽井沢

以上のように、本章では外国人によって避暑地として発見される以前に、まったく異なる主体である陸軍の脚気転地療養地として軽井沢が利用されてきたことを明らかにした。しかし、1886年以降、ショウら外国人が滞在しはじめた後は、脚気患者と避暑客が混在し、実際、避暑中の外国人医師シーモア（Seymour, J. N.）¹⁸⁵⁾が重症の脚気患者の処置することもあった¹⁸⁶⁾。

軽井沢での脚気転地療養の効果は医学的には解明されなかったものの、経験的に効果的であったことが報告されており、繰り返し利用されることを通じて、評価が確立したものと考えられる。また陸軍のみならず、都市部に住む一般の脚気患者が療養していたことから、軽井沢の評価はある程度共有されていたと考えてよい。さらに、重要なのは軽井沢が脚気以外の疾病の転地療養地とみなされていた点である。このことは療養地としての価値づけの多様化をあらわしているといえよう。

現在の軽井沢において、療養と結びつけられる場所イメージは、堀辰雄の『美しい村』や『風立ちぬ』に描かれた結核療養に関するものが大きな位置を占めている。実際、イギリス人医師マンロー（Munro, V. G.）が院長を務めた「軽井沢サナトリウム」は、結核患者を受け入れていた（第3-6図）¹⁸⁷⁾。実のところ、軽井沢が脚気転地療養地として評価されていた事実は、現在まったくといっていいほど残されていない。このことは外国人だけでなく、日本人富裕層の避暑地としても目覚ましく発展し、別荘の増加や諸種の開発の進展によって、景観や場所イメージが大幅に変化したことに起因すると思われる。しかしながら、軽井沢における療養地の価値づけは、脚気転地療養がその端緒であることを解明する

ことができた。文脈的にみるならば、特定の場所に療養的な効果を求める医学的な見解と結びつけられることで、軽井沢はさまざまな疾病の療養地として語られるようになったと考えられる。戦前期において脚気転地療養地として歴史的意味は、後景に退くものの、別荘地開発をめぐる言説のなかで軽井沢の場所イメージを語るうえで折に触れて登場することとなる。

第4章 避暑をめぐる環境認識と場所経験

軽井沢は信州の街道にして昔の宿駅なり戸数百余戸気候冬は厳烈なるも夏は冷氣にして避暑に尤も適當なる場所なり〔。〕海面を去る三千尺空氣清潔にして飲料水佳なり是なり〔。〕是を以て二三年以前大學雇教師ダイクソン氏來遊以來次第に外国人相傳聞して本年の如き実に百五十人余の多きを見るに至れり¹⁸⁸⁾。

(『信濃毎日新聞』1890年8月27日)

前章では日本の風土病であった脚気の治療に対して西洋医学的な見解が陸軍で取り入れられた帰結として、温泉地だけではなく冷涼な気候を有する場所が転地療養地として評価されたことを明らかにした。そのような動向のなかで軽井沢も脚気転地療養地となったのである。実のところ脚気転地療養地の利用が外国人避暑地化にやや先行していた。しかし、ここで重要なのは、脚気転地療養地と外国人避暑地という局面は社会属性を異にする主体に担われたものの、同時期的な現象であったことである。

本章では軽井沢が陸軍脚気転地療養地とみなされてきた一方で、避暑地として発見され、長期にわたって夏季に滞在する場所として確立する明治期に着目する。第1章で述べたように、「避暑地軽井沢」に対する認識はどのように形成されたのかは未解明な部分がある。このような関心から軽井沢が避暑地としてふさわしいことを見いだした外国人たちは、軽井沢の気候や自然環境をどのように価値づけ、いかに場所を経験したのかを明らかにする。

そのうえで、外国人に続いて軽井沢を訪れるようになった日本人富裕層の経験を検討し、避暑という行為の受容についても考察したい。

第1節 軽井沢に対する外国人のまなざし

(1) 英文日本旅行案内書の叙述

第2章では、避暑地軽井沢の礎を築いたとされるショウとディクソンが訪れる以前にもすでに多数の外国人が軽井沢に滞在していたことに言及した。本節で資料として取り上げたいのは、外国人が日本各地を旅行する際に頻繁に利用されたと考えられるアーネスト・サトウとホーズ編『*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*』である¹⁸⁹⁾。本書は初の本格的な英文日本旅行案内書と位置づけられており¹⁹⁰⁾、日本の地理・気候・言語・通貨のほか、旅行の制限、免状、旅装・持ち物、宿泊施設など日本を旅行するための基礎的な情報が示される「**Introductory Information**」と、具体的な旅行案内編「**Root**」の二部に分かれている。『*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*』の初版は、横浜のケリー社から刊行されたが、第2版（1884年）からは世界各地の旅行案内書を手掛けたロンドンのジョン・マレー社が出版を引き受けた。さらに第3版（1891）からは、編者がチェンバレン（Chamberlain, B. H.）とメイソン（Mason, W. B.）に変わり¹⁹¹⁾、書名も『*A Handbook for Travellers in Japan*』（以下、『ハンドブック』と略）へと改題された。それ以降、第9版（1913年）まで改訂されるほど人気を博した。

第4-1表は、第2版（1884年）の軽井沢周辺の記述をまとめたものである。初版（1881年）と記述の差はなく、ルート番号のみが変更された。軽井沢に関連する記述は、ルート20「東

京から中山道」の「碓氷峠から追分：浅間山」に含まれている。ここで記されているのは、旧中山道で碓氷峠を越えるルートである。表中の「新道が建設」あるいは「新道が完成した」というのは、「碓氷新道」のことではなく、1878（明治11）年の明治天皇巡行の際に修繕された道路である。東京から軽井沢までの所要日数は、短縮されたというものの、依然として2日も要したことがわかる。

さらに記述をみていくと、標高4,050フィート（約1,230m）の碓氷峠の山頂から関東平野のほか、筑波山・榛名山・赤城山を見渡することのできる眺めが賞賛されている。碓氷峠から旧軽井沢まではやや標高が下がるものの、3,270フィート（約1,000m）もあることから、「平野部の不健康な暑熱を避ける場所として推奨できる」と紹介されている。管見の限り、軽井沢を避暑地として紹介した最初の記述である。当時日本に居住する多くの外国人は、横浜や神戸など港湾部に近い居留地、あるいは東京のような都市部に居住していた。「平野部」とは、多くの外国人の住まう場所であり、夏季の暑気は避けるべき不健康なものと考えられていたことがうかがわれる。

他方で、軽井沢の「未墾の原野」に群生する野花、愛宕山や離山など散策に適した小規模な山などが紹介されていく。後年の改訂版においても気候からみた軽井沢の特色、愛宕山や離山を紹介する構成は変わらない。しかし、軽井沢が避暑地として発展するにしたがって、その描写は版によって変化する。

『ハンドブック』第3版（1891）では、軽井沢へいたる2つのルートが紹介されている¹⁹²⁾。ひとつは、1884（明治17）年に開通した碓氷新道を経て「新軽井沢」へ出るルート、もう一方は、旧中山道を通り「旧軽井沢」にいたるルートである。この版から「新軽井沢」と

「旧軽井沢」が区別されている。また、第2版との差異は、鉄道敷設後、東京に住まう外国人が不健康な夏の都市から避暑 (retreat) に訪れる場所である、と明確に記述されている点である。さらに、日中の気温はあまり上がらないこと、夜間はとくに冷涼なこと、激しい降雨に見舞われるものの日光やその他の山間避暑地 (mountain resort) と比較すれば好ましいと感じられることなどが述べられている。また、水はけのよい火山性の土壌は公衆衛生の観点から評価されている¹⁹³⁾。他方で、パン・ミルク・肉・魚を入手できると記されており、外国人を対象としたサービスが提供されつつあることもうかがわれる。

『ハンドブック』第4版 (1894年) では、軽井沢駅-横川駅間を結ぶアプト式鉄道の技術が紹介されるほかは、第3版と内容に差はない。つづく第5版 (1899年) 以降の記述において特筆されるのは、日本だけではなく中国で活動している宣教師を中心とする避暑地であることが強調されている点である。このことは、軽井沢が1890年代半ばから「宣教師会議の場」として利用されてことを明らかにした宮原安春の研究と合致する¹⁹⁴⁾。

つぎに関心を払いたいのは、軽井沢の景観を観察した『ハンドブック』第5版 (1899年) の記述である。以下は、軽井沢が避暑地としてふさわしい場所であることを述べた記述の後に挿入された一節の抜粋である。

来訪者はこの場所自体にはさしたる魅力はなく、日本人が大切にしているような温泉や歴史的建造物もないことを理解すべきである。ここは寂れた村で、外国人夏季居住者の安っぽい木造家屋が周囲の平野部に点在している。まるで未開の土地に新しい集落が形成されはじめたかのようだ。しかし、この田舎の周囲では、草で覆われた原野

(grassy moor) や丘陵でも馬を走らせたり、散歩をすることができる。以下で紹介する以外にも、最近外国人によってさまざまな方向にたくさんの小道が整備されており、よい散歩道となっているものの、とくに目的地となるポイントはない¹⁹⁵⁾

すなわち、軽井沢には温泉や歴史的な社寺や史跡はなく、周囲に広がる原野、丘陵（愛宕山や離山を指す）は、散策に適する場所であることを認めるものの、結局それだけしか魅力的な要素がないと断言している。そして、「外国人夏季居住者の安っぽい木造りの家屋」＝別荘が次々に建てられていく光景を未開の土地のひろがりのなかに見いだしているものの、寂れた村にすぎないと記す。『ハンドブック』の第5版から第7版（1903）まで挿入されたこの指摘は、ある意味で軽井沢の「本質」を突いているといえよう。というのも、後年の軽井沢の案内書などの記述と比べると、軽井沢を称揚していないという意味において冷静な観察といえるからである。さらにいえば、まだこの時期には避暑地としての軽井沢の価値は、一部の外国人や日本人富裕層にしか共有されていなかったとみることもできよう。特定の場所において、多くの人々によって経験が積み重ねられていくことで、そこを特色づける気候・風景・自然物は、社会的に価値づけられていくと考えられる。この点については第2節で検討する。

(2) カーギル・ノットによる気候観測

先にみたように、『ハンドブック』では軽井沢の冷涼な気候を避暑地の条件としていた。この特徴を気象観測から明確に示そうとしたのが、お雇い外国人のカーギル・ノット (Knott,

C. G.) であった。彼は1891年に「Notes on the summer climate of Karuizawa」¹⁹⁶⁾と題した論文を日本アジア協会の発行する学術雑誌『*Transaction of the Asiatic Society of Japan*』（『日本アジア協会紀要』）に発表した¹⁹⁷⁾。ショウは軽井沢を「屋根のない病院」と評したといわれているが、ここでは新出資料であるノット論稿を検討し、軽井沢の気候はどのような特徴を有し、いかに評価されたのかを明らかにする。ノットの気象観測は科学的な態度で軽井沢を評価する嚆矢であろう。

ノットは、1872（明治5）年にエジンバラ大学を卒業すると、同大学自然哲学科助手となった。その後1883年来日し、日本地震学会を創設したユーイング（Ewin, J. A.）の後任として、東京帝国大学で電気学や磁気学などを教えた¹⁹⁸⁾。ノットが軽井沢の気象観測を行なった理由は定かではないものの、夫婦で軽井沢を訪れていたという記録が残されている。ノットの妻は、ショウとともに軽井沢を訪れたとされるディクソンの妹メアリー・ディクソンであった。このことから、ノットはディクソンとの関係のなかで、軽井沢を訪れていたと推察される。ノットの論稿には章節や見出しがない。そこで便宜的に見出しをつけるならば、以下の通りとなる。

軽井沢の地域概観

研究の目的と方法

分析と結果

結論

付録

「軽井沢の地域概観」では、軽井沢の歴史が叙述されるとともに、自然地理的な観察も述べられる。軽井沢は「東京に暮らす外国人のための主要な避暑地 **summer resort** のひとつとして認識されている」として、「この歴史は1886年、英国国教会大執事のショウとディクソン教授が特徴的な利点を発見したことに始まる」と記している¹⁹⁹⁾。ついで、江戸時代の軽井沢の歴史が紹介され、自然地理的な叙述へと展開されていく。たとえば、早朝と夕方には霧が発生する日数が多いこと、曇りがちな気候は、軽井沢と周囲の山地部との地理的・気象学的な関係を反映していることが述べられる。

研究の目的は、1889年の7月15日から9月2日における気象観測をもとに、8月における軽井沢の気候的な特徴を、東京と比較して明らかにすることである。観測用の小屋には水銀温度計・乾湿球温度計・山岳気圧計・集雨漏斗が設置され、1日5回（6時、10時、14時、22時）の定時観測が実施された。その結果得られた気圧・気温・蒸気圧・湿度・降水量が検討されたのである。結果の要約は以下の通りである（第4-2表）。

- ① 軽井沢の8月の気温は、東京よりも4.4℃（8°F）低い。この違いが軽井沢を快適な避暑地にしている主要な要素である。このことは夜間の気温の低さに大いに関係がある。すなわち、軽井沢の平均日較差は11.1℃（20.0°F）であるが、東京は7.7℃（14°F）である。一日の最大気温変動は軽井沢で18.1℃（32.6° F）に対して、東京では10.4℃（18.5° F）であった。
- ② 湿度は軽井沢と東京ではほぼ同じである〔平均湿度は、軽井沢86%、東京83%〕。し

かし軽井沢の低い気温によって、湿度は倦怠感をもたらす性質を失う。

- ③ 朝と夕方に霧が発生するため、たいへん高湿度のように思われるけれども、村の前に広がる平野は水はけがよく、排水が完全に行なわれれば行なわれるほど、霧状の雲は周囲の山や尾根に限定される。多孔質火山性の土壌は大雨が降ったあとでさえも水の残留を防ぐ。

以上の観測結果をふまえて、ノットは「比較的涼しい夏の気候、気分をすっきりさせる低温の夜、空気を変化させる降雨、南向きの斜面、日本の最もピクチャレスクな山岳風景〔浅間山〕によって、軽井沢は避暑地として欠点がほとんどないといえる」²⁰⁰⁾と結論づけた。さらに、「日光という最も人気のある避暑地においては何ら体系的調査をしていないが、私の訪れた経験の限り、軽井沢は日光に比べてより涼しく、からっとしている」²⁰¹⁾と自らの感覚を述べる。さらに、それら双方を訪れた人たちの一般的な見解として、あらゆる点で軽井沢は夏季の居住地 (summer residence) にふさわしいと主張した。

当時の日本では主要都市で気象観測が導入されるに過ぎなかったため、地方の避暑地間の気候を比較し得るデータは存在していなかった。その点において、ノットの論稿は、ほかの避暑地との比較は行なわれていないものの、気象観測という科学的な手法で軽井沢の気候的な特徴を示しており、科学的な知見が得られたといえよう。

日本の夏季の気候は、外国人たちにとってやはり過酷であったようだ。たとえば、ノットは「湿度が高い日本の気候はおそらく最も不愉快なもので」²⁰²⁾あり、軽井沢以外の避暑地についても、「日本の山岳リゾートの涼しい夜は、外国人にとって過ごしやすい環境」と

いう見解を示している。つまり、夏季の湿気による不快感を解消するための避暑地がどこなのかを知ることについて、外国人は高い関心を有していたと考えられる。

第2節 外国人の軽井沢観

(1) 軽井沢と場所の経験

以上で検討したように、『ハンドブック』の記述でも軽井沢は避暑地として紹介されはじめており、ノットの調査によって、軽井沢の8月の平均気温は東京より4.4℃低いこと、夏季の居住地として最適であることが解明された。それでは、軽井沢は実際にどのように経験されていたのであろうか。外国人の語りに着目し、軽井沢の自然環境や彼らの避暑活動の実態について検討していく。

1883（明治16）年生まれのショウの三男ロナウド（Shaw, R.D.M.）は、軽井沢を訪れた時のことを次のように述懐している。

私を最も感動させたのは、浅間山や八ヶ岳連峰の壮大な眺めをみることのできる〔碓氷峠の〕頂上において、おいしい空気で胸をいっぱい満たしたことである。私の知る限り軽井沢の空気が私を一番元気づけてくれる²⁰³⁾。

彼は父ショウが滞在先として軽井沢を選択した理由について家族の健康を思っただと推察した²⁰⁴⁾。さらに、空気だけでなく、壮大な風景や鳥のさえずり、原野一面に咲くオニユリ、「黄金」のユリ、カンパニュラ、マツムシソウ、ウメバチソウなどの無数の

野花、あるいはピクニックや散歩のできる場所の存在を軽井沢の魅力として挙げ、「子供の paradisa のような軽井沢を去らねばならないときはいつも悲しかった」と振り返る。

ロナウドが日本聖公会の発行する『*Japan Missions*』誌に寄せた文章によると、「軽井沢の爽やかな空気に魅せられた彼〔父ショウ〕は、育ち盛りの幼い子供たちを、毎年の夏の間東京の蒸し暑さから解放して、軽井沢の新鮮で爽やかな高原の空気を吸わせることができなかと考えていた」²⁰⁵⁾と述べており、やはりロナウドにとって「空気」は強い印象を与えたようだ。ロナウドの文章には「冷涼 cool」、「新鮮で爽快な空気 fresh, invigorating air」あるいは「健康的な空気 salubrious air」という表現が頻繁に登場している。このような軽井沢の新鮮で爽快な空気は、ショウの友人をも惹きつけたという。とくにショウの建てた別荘のひとつは、家族とともに東京に住んでいたショウの友人たちによって、たちまち占領させてしまったと振り返っている²⁰⁶⁾。

軽井沢の冷涼な気候に対する表現は、年少者にも健康的な環境として認識されていることがわかる。家族をもつ外国人にとっても夏の東京の気候は避けるべきものであることもうかがわれる。このことに関連して想起されるのは、東南アジアなどの植民地では、高い気温、湿度、土地や道路の泥濘などに特色づけられた平野部に対して、気温や湿度が高くなりづらい高地は沼地などから発生する瘴気が少ないとみられていたことである²⁰⁷⁾。このようなミアズマ説的見解は、ヒルステーションを成立せしめる理由のひとつであった。日本の居留地に住まう欧米人も夏季において感染症にかかることを懸念しており、下水道の建設などを要求していたことから、植民地と同様に夏季の日本の気候も嫌悪の対象となっていた可能性が高い。

軽井沢は日本の街のなかでも最も高い標高に位置し、東南アジアで最も爽快な (invigorating) 夏の気候であり、世界中の宣教師による年次会合が開催されることで評判になっています。……日本に滞在する外国人はいつも気候に苦しめられており、コレラなどの病気をもたらす夏季の気候によって危険に直面している²⁰⁸⁾。

これは、カナダメソジスト教会の宣教師として1900年来日し、静岡教会を運営したエンバーソン (Emberson, R.) による1904年の報告である。重要なのは、軽井沢が「東南アジアで最も爽快な夏の気候」と位置づけられ、さらに続けて、日本の夏季の気候はコレラなどの感染症と結びつけられていることである。つまり軽井沢は身体を脅かす疾病から逃れうる場所として考えられていたと解釈することができる。

また、ロナルドの兄でありショウの次男であるノーマン (Shaw, N.R.) も軽井沢の経験を振り返っている。

軽井沢という言葉はなんと素晴らしい思い出を呼びさますことだろうか。なんと幸福な時間を私はあの豊かで香しい花々の絨毯に覆われた平原や山腹、甘い香りのする樅の林、あるいは離山の生い茂る草にたわむれたり、留守にしている巨人の所有物である肘掛椅子〔竈岩〕のそばですごしたことであろう²⁰⁹⁾。

彼は、さらに河川の周辺や「豚の背形をした山」〔hog's back : 一の字山〕などでピクニ

ックやキャンプを経験したことを記している。煌々と火を焚き、結局現れなかった熊や狼を寄せ付けまいと見張りをし、いつ噴火するかも知れない浅間山に畏怖を抱きながら登頂したときの思い出などを綴っている。

他方、1890（明治23）年に別荘を建てたイギリス大使ヒュー・フレーザー（Fraser, F.）の夫人メアリー（Fraser, M.）は、軽井沢における避暑について次のように書き留めた。

頭上には、カラマツの枝が快い緑のアーチをつくっています。……そして私が音楽がなくて困らないように、野生のつる草や白いアイジサイの生け垣と生い茂るヤマフジとのあいだをくぐって流れる小川が、かたわらで涼しい歌を歌っていますし、空中に飛ぶ幸せな昆虫たちの羽音は、真夏の—すべての鳥がうごかなくなる暑い東洋の真昼の—高い調べを奏でるのです²¹⁰。

彼女は東京の自宅にいるときには、夏季の気候への嫌悪感を記している。「今の東京はともかくそこから逃れるべき場所というのが偽らざるところです—たとえ手だてがなければ歩いてでも！暑さは終息を奪い、空気を奪い、吸い込む風も生きる糧もうばってしまいます」²¹¹。彼女は軽井沢のほかにも、箱根・日光・江の島などの避暑地にも滞在しているが、自分を取り巻く自然環境を細部まで綴ることは軽井沢以外においてあまりみられない。

以上でみてきた記述は、避暑地として黎明期の軽井沢に滞在した外国人の主観的なものではある。しかしながら、常住地である平野部の蒸し暑く、忌避されるべき夏季の気候から解放されることは、感染症などの罹患を避けることを可能にする。つまり、軽井沢は外

国人の身体の安心が担保される場所であったといえよう。

(2) 避暑生活の特色

軽井沢を訪れる外国人が増加すると、外国人コミュニティの成熟を表わす象徴的な出来事として組織的な活動が盛んになった。後に財団法人軽井沢避暑団 (Karuizawa summer Residents' Association : KSRA) の結成につながる活動の一環として、1908 (明治41) 年には、軽井沢体育協会 (Karuizawa Athletic Association) が結成された。『かるみざわ』によれば²¹²⁾、同協会は「テニスクラブ」「野球クラブ」「少年運動部」「社交部」の4部会から成り、もともとあったテニスクラブを拡張したものである。「運動趣味を奨励経存指導する」という目的が掲げられ、「14〔歳〕以上何人たりとも一円の年会費支払う時は会員たるを得、14歳以下のものには少年運動部を設け (50銭)」としている。このほかにも野外演劇や音楽会などの活動も行なわれた。

ここでは、子どもから大人まで幅広く参加可能と思われる散策について検討し、彼らの行動空間を明らかにする。時代が少し下るが、KSRA 発行『*Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1920*』の「散策・小旅行」の項目に掲載された場所を地図化すると、第4-1図のようになる。さらに、戦前において軽井沢で販売された絵葉書に該当する行き先がある場合は、それらを示した (第4-2図)。これらの絵葉書は、当時の軽井沢の代表的な景観として位置づけられよう。絵葉書には日本語だけでなく、英語のキャプションも印字されており、日本人や外国人を問わず手ごろな土産物であったと考えられる。

散策場所として、まず「1 愛宕山」、「2 離山」、「3 矢ヶ崎山」などの軽井沢周辺の場所

が紹介されており、とくにそれらが身近な散策地であった。なかでも矢ヶ崎山は「Prospect Point」、かまどいわ竈岩と称された大岩は「Pulpit Rock」や「Giant Rock」、一ノ字山は「Hog's Back」といったように英語の名称が付与していることから、これらの場所がとりわけ外国人に親しまれていたと推察される。

散策地は、軽井沢の周囲だけでなく、「17 真楽寺」や「21 あかろきん 閼伽流山」など、長時間の移動を要する場所も挙げられている。このように散策や小旅行に選ばれた場所を地図化することで、当時軽井沢を訪れた外国人の行動空間を明らかにすることができた。彼らの好んだ散策先は、標高が高く、遠方まで見渡せる眺望のよい場所や、山間の滝や河川などの自然美のあふれる景色であった。

外国人によって夏季の避暑がはじめられるようになってから約20年後に刊行された『ハンドブック』第8版（1908年）の巻頭では、軽井沢が日本の避暑地の代表例として取り上げられるにいたった²¹³。軽井沢が、どのように外国人たちの間で認識されていたのかを、慶應義塾や立教大学などで英語教師をつめとめた宣教師ロイド（Lloyd, A.）は、25年に及ぶ日本滞在生活を著した作品で以下のように記している。

……夏が近づくにつれて、東京に住む疲れ切った外国人は、自分たちが非常に過酷な生活を送っていると考え、猛暑の季節をどこで過ごすか思案し始める。箱根や日光はもちろんのこと、大磯や茅ヶ崎、そして鎌倉といった日本人たちにも人気の海浜リゾート（seaside resorts）を思い浮かべるかもしれない。しかし、まとまった休暇を取る余裕があり、妻や家族のことを考えている人はほとんどの場合、元気を取り戻すのに

最適な場所 (the proper place for recuperation) として軽井沢を選び、友人たちに小さな家を借りられないかと相談するだろう。もしここが気に入れば、多くの人がやっているように、山のごく一部を買い求め、サマーキャンプをするに十分な簡素な小屋を建ててもらう。このようにして、極東で最も人気のある避暑地 (summer resort) 軽井沢の居住者となるのだ²¹⁴⁾。

ロイドによれば、猛暑から逃れるための場所として外国人が想起するのは、箱根や日光などの山間や、湘南一帯の海辺の避暑地である一方で、家族のいる場合は軽井沢が選ばれ、と記している。他の避暑地と異なり、軽井沢が人気であったのは、「元気を取り戻す recuperation」 ことができる場所であること、そして小さいながらも容易に「家」が手に入る事が挙げられている。

前者については、これまで述べてきたように、夏季の暑熱や感染症の不安を払拭するような山の冷涼な空気、ピクチャレスクな風景などの自然環境を指していると考えられる。それだけではなく、スポーツ・音楽、あるいは散策を中心とした活動を可能にする社会環境が醸成されていたことも重要であろう。後者の「小さな家」とは、間違いなく「別荘」の事を示しており、滞在場所としての別荘が重要な役割を果たしていたことがうかがわれる。別荘の建設を可能にした立地条件は、軽井沢の周辺の土地に余剰があったこと、地元住民が経済的に困窮していたことが挙げられる。つるや旅館主人の佐藤不二男によれば、「土地が非常に安かった、金をつけても土地を人にやりたい位」²¹⁵⁾で、「明治三十年頃は坪十銭位、高いものでも二十五銭位でした」²¹⁶⁾と当時の状況を振り返っている。実際のと

ころ、ショウが購入した土地（約795坪）は、一坪当たり4銭という金額であった²¹⁷。つまり、土地の価格が安価であったことも別荘の建設を後押ししたのである。

ロイドの語りをみると、『ハンドブック』第5版（1899年）では、見るべきものは何もないと評された場所とは思えないほどに、軽井沢の評判は高くなっていることがわかる。こうした変化は、軽井沢を訪れて滞在する外国人が増加し、場所の経験が蓄積されていったからにはほかならない。夏季の都市の蒸し暑さや不衛生な環境を忘れさせる冷涼な気候と爽快感を感じさせるピクチャレスクな自然景観に富む軽井沢の魅力は、散策先の山や岩に愛称を付与することに結びついたように、彼らのメンタルマップのなかに刻み込まれた。そのような過程を垣間見せるのが、経験を反映した「語り」なのであり、それぞれのポジティブな経験が外国人の間で共有化されることで、軽井沢は「避暑地」として構築されたと解釈することができる。

第3節 日本人富裕層の滞在と避暑の受容

これまでの研究では、日本人は欧米人の模倣から近代的な避暑をはじめ、別荘をもったととらえられてきた。欧米人たちの行動の影響を受けたことは明らかであるが、たんに模倣だけではない要因があると考えられる。ここでは外国人が軽井沢を訪れた後に同地を訪れた日本人の語りに注目して、彼らの抱いた軽井沢観を検討していきたい。

日本人といっても、当時別荘を所有したのは、貴族・政治家・軍人・学者・医者などの「有閑・富裕層」であった²¹⁸。軽井沢に別荘をはじめて建てたのは、八田裕二郎（海軍大佐）といわれており、それは1893（明治26）年のことであった。その後、末松謙澄（政治

家)・三井三郎助(実業家)・佐々木政吉(元東京帝国大学医学部教授、杏雲堂院長)・青山胤通(東京帝国大学医学部教授)などが続いた(第4-3表)²¹⁹⁾。

八田裕二郎が軽井沢を訪れるようになった経緯は、宮原安春が八田の子息・八田裕一に対する聞き取り調査から明らかにしている²²⁰⁾。それによれば、八田は1860年代後半から1880年頃まで、延べ10年間ほどイギリスの海軍学校へ留学しており、帰国後はとくに体調を崩していた。療養のため群馬県の霧積温泉に滞在していた八田は、夕食で牛肉が提供されたことに驚き、旅館の主人に入手先を問うと、外国人避暑地の軽井沢で手に入れたと教えられた。さっそく軽井沢へ赴いたところ、ここに滞在すると病気が治りやすいことを外国人に助言され、このことが別荘を建てる契機となった。

八田本人は、雑誌『住宅』(1917年)に「草分けの別荘持として」と題する文章を寄稿している²²¹⁾。これによれば、「自分は壮年の頃から酷暑になると健康を害する憂があるので毎年避暑地の選択に苦しんだ」と述懐し、軽井沢に来る前年には元箱根、その前年は日光の中禅寺湖に避暑していたが、「交通風俗気候等の点について面白くな」かったと述べる。それに対して、軽井沢は「真に満目荒涼たるものであつたが温度や気圧を計つて見ると日光箱根より遙かに清涼で土地も高く交通の便もよかつた」²²²⁾、くわえて「脳病神経衰弱保養の為め最も適したる」²²³⁾と、身体の療養という観点から軽井沢を高く評している。いつ軽井沢を訪れたのかは定かではないが、「温度や気圧を計つて見る」という記述があることから、1889年のノットの気候調査後の可能性がある。

政治家の尾崎行雄も療養や保養から軽井沢を紹介している。「私は生来頭脳が弱くして少し使いすぎるとすぐ頭痛がして眠られなくなつたりしたが廿四五年以前に激烈なる神経

衰弱に罹つた〔。〕それには高山療法より善いものはないと教へられ毎年夏季は箱根山脈の各地日光の奥地中禅寺軽井沢など東京より程遠からぬ高地に療養を試みた²²⁴⁾と語っている。後年の語りでは、ショウが「日本中にこんな空気のいゝ所はない」と話していたことを紹介し、「吾々は一寸通つた位では空気の善し悪しは判らぬが、西洋人は余程敏感に感じるものとみえる」とも述べている。この点から、少なくとも尾崎自身は、外国人の軽井沢観を通して、軽井沢の「空気」の効能に気づかされたといえよう²²⁵⁾。

八田や尾崎の他にも1900年前後には、日本人医師が立て続けに別荘をもつようになっていく。その一人は佐々木政吉である。「……私は元来汗かきでした、夏の暑さに東京などに居やうものなら身体中へアセモが出来て苦しむのみか其結果夜分眠られなくて困りました」と軽井沢に別荘を構えるにいたった動機を話す²²⁶⁾。佐々木は、他の避暑地と比較したうえで、汗をかかず、よく眠ることができ、清潔な飲料水のある軽井沢を見いだしたという²²⁷⁾。また、6時間程度で東京と行き来できる交通の利便性を挙げている。つまり、東京で結核を専門とする杏雲堂^{きょううんどう}で診療にあたっていた彼の場合、療養というよりは、あくまでも夏季を快適に過ごす場所として軽井沢を位置づけている。

青山胤通の伝記によれば、近親者が軽井沢の自然を推奨したことで、別荘を所有することになった²²⁸⁾。さらに、政治家の原嘉道^{よしみち}の述懐によれば、「先生は余程前から避暑には毎に山へ行かれたが、当時は避暑と云へば海辺に行くのが普通」だったと述べ、青山から「避暑に海に行く者の気が知れぬ」といわれたという²²⁹⁾。原の語りは、先に整理したように（第1章）、温泉地のない山間部に避暑することは、明治期の風潮としてあまり一般的ではなかったことを裏づける証言である。医師が軽井沢に着目していることは、専門知識をもつ人

すらも惹きつけるような医学的な側面から評価できる要因があったのかもしれない²³⁰⁾。

療養地としての軽井沢が語られる際にしばしば言及される人物として、陸軍軍医で日本赤十字病院長を務めた橋本綱常を挙げることができる。ドイツで学位を取得した橋本は、陸軍だけでなく明治期の医学界においても指導的な立場にあった。彼が1878年に著した「脚気新説」では、ミアズマ説にもとづき脚気患者の転地療養を支持していた²³¹⁾。日本鉄道社長を歴任した毛利重輔を父にもつ足立（毛利）鉄之助（成城学校教師）は、ショウと橋本が「夏期の健康地として推賞せしが因をなし」、軽井沢が避暑地として発展したことを指摘する。彼自身、鉄道技術者であった父の影響と、橋本に勧められたことで日清戦争の直前に、はじめて軽井沢を訪れたと記している²³²⁾。

また、新渡戸稲造（元札幌農学校助教授・台湾総督府技師）も、当初は軽井沢を避暑地と考えていなかった一人である。軽井沢が涼しい場所であることは知っていたものの、温泉のないことから伊香保温泉を避暑地にしていたという。ところが、東京外国語学校時代の恩師ホワイト（White, W.）²³³⁾の別荘を訪ねるため、伊香保から軽井沢入りしたときのことを以下のように回顧している。「……伊香保では毎日温泉につかりながら汗を流したものが軽井沢に来て見と空気がいかにもすが／＼しくて少しも汗をかかないので軽井沢といふ所はこんなに清冽な所かと驚いた次第であつた」²³⁴⁾。新渡戸もまた、避暑を温泉と結びつけていたことがわかる。しかし、冷涼な気候の軽井沢に来てみると、温泉がなくとも避暑が可能であることに気づいたと考えられる。新渡戸は、1901（明治34）年に死去したホワイトの別荘を買い取り、1909年には神経衰弱による体調不良で療養していたのであつた²³⁵⁾。

以上でみた語りから、軽井沢の気候は、頭痛や神経衰弱の療養、身体の保養と結びつけられていた。さらに、温泉地に滞在し入浴することが日本人の避暑の典型であったのに対して、冷涼な気候の場所が避暑地として成立し得るという認識の転換をみてとることができる。このことは、同時代的な現象としての脚気転地療養地であった軽井沢が、脚気だけでなく、神経衰弱・脳病・バセドー病などの療養地として宣伝された動きと符合している。たんに「模倣」という語でひとくくりに、避暑の受容をとらえるのではなく、回顧談などの語りから避暑地がどのように認識されていたのかを明らかにすることが重要である。

実のところ、軽井沢を訪れる目的は避暑や療養にとどまらず、日本人と外国人を問わず、乗馬・テニス・ゴルフなどの多様なスポーツが盛んに展開される場所となっていく。また、近代政治史の佐藤信が明らかにしているように、軽井沢は日本を代表する政治家の集まる「政治サロン」化を強めていったという側面もある²³⁶⁾。

第4節 避暑地の成立

以上をふまえて、本節では軽井沢の発展の礎となる明治期における軽井沢の避暑地の成立過程を通観してみたい。サトウとホーズ、そしてチェンバレンとメイソンの編集した『*A Handbook for Travellers in Japan*』（『ハンドブック』シリーズ）の記載内容の変化を経年的に追うと、とく外国人（宣教師）を中心とする避暑地となっていく様子を見てとることができた。ただし、第5版（1899年）では、避暑地に適していると認められてはいるものの、とくに魅力的な旅行先ではないと記されていた。このことは、その時点では軽井沢がまだ避暑地としての「価値」を十分に備えていなかったと解釈することもできる。

ところが、1886年、軽井沢はショウとディクソンによって「発見」されるとともに、1889年のノットの気象観測によって、東京との気象データの比較を通じて、夏季の健康的な避暑地として客観的に価値づけられていたのであった。ショウの息子ロナウドの回顧によれば、軽井沢の冷涼な「空気」は、平野部と明らかに異なり、健康的なものとしてとらえられており、ノットやエンバーソンの語りからも日本に滞在する外国人は、夏季の暑熱を忌避する傾向にあった。その点において軽井沢は避暑にうってつけの場所であったというよう。さらに、たんに蒸し暑さだけでなく、コレラのような伝染性の疾病から逃れることを可能とする場所としても認識されていた。多くの外国人が軽井沢という冷涼な高地を健康的な避暑地とみなし、身体的・精神的を保養する適地と評価した点は、欧米列強諸国の植民地であった東南アジア各地のヒルステーションと通じる部分がある。

次第に多くの外国人が軽井沢を訪れ、滞在するようになるにつれて、社交を重視したコミュニティが醸成され、テニス・野球・音楽会・散策などを行なう組織的な活動がはじまった。なかでも彼らがよく訪れたのは、眺望のよい山であり、英語の愛称がつけられていることもあった。結局、多くの外国人たちが避暑に訪れ、軽井沢の気候や自然環境に身を置くという経験が蓄積されることによって、軽井沢は「人気」の避暑地として社会的に構築されていったと考えられる。簡素で狭小な木造家屋であるものの、滞在場所としての別荘は、軽井沢をたんなる避暑地としてだけではなく、別荘地へと発展するうえで際立った景観的要素である。

他方で、明治期の軽井沢に関する日本人の回顧談を検討すると、彼らの軽井沢での滞在は、まず身体の療養を目的としていたことも明らかとなった。新渡戸稲造が述懐するよう

に、もともと日本で避暑とは温泉地へ赴くことを意味していたため、当初は温泉のない軽井沢はあまり注目されなかった。しかし、実際に軽井沢を訪れてみると、その冷涼な気候と過ごしやすさを実感できたというのである。このような身体感覚は、新たな避暑のあり方の登場として位置づけられる。

また、療養地という側面については第3章で論じたように、軽井沢が脚気転地療養地であったという経緯も同時代性のなかで間接的に作用していると考えられる。実際、1900年頃には脚気だけではなく、神経衰弱や胃腸病などの療養地としてもふさわしいことが語られているのである。これまでの軽井沢研究において、外国人の模倣という言葉で日本人による避暑の受容が説明されてきたが、外国人だけではなく日本人の軽井沢経験においても同時代的な諸事象を考慮することで、避暑地としての軽井沢の成り立ちをよりよく理解することができる。こうして、避暑地黎明期の軽井沢は、「健康」と結びつけられたことで外国人とのみならず、日本人をも惹きつけることとなったのである。

ところで、別荘が数を増やすにともなって、「夏の軽井沢」に関する記事が『信濃毎日新聞』にたびたび掲載されるようになり、軽井沢は夏季に都市住民が定住する場所として社会的に受け止められた。とくに夏季の滞在に特色づけられた「軽井沢の季節性」は、以下のように言及されている。

通例『軽井沢季』と云ふは東京各学校の暑中休暇にて学生雇外国人等の山川に漫遊を試みるは七月十日以後にて此季前に斯く多数外人の来集したるは近年稀らしき現象と云可く本月下旬より八月へかけての繁盛思遣らるゝ也²³⁷⁾。

1905（明治38）年7月13日のこの記事によれば、25軒の別荘とホテルに宿泊している外国人を合計すると142人にのぼるといふ。ここで重要なのは、「軽井沢季」という言葉である。この頃には軽井沢がすでに、四季が巡るなかで夏季だけにぎわう避暑地としての景観を整えはじめていたと解釈することができる。

さらに、1909年8月6日の『信濃毎日新聞』には、別荘に関する興味深いデータが掲載されている²³⁸。この頃には別荘数は、150軒ほどに増加していたが、複数の別荘を所有する者や地元住民によって「貸別荘」として、貸し出される家屋も相当数あったようである。すなわち「別荘はちよつとした家で夏三月（七八九）二百五十円からする」こともある。

「六畳一間四畳半一間に勝手付きと云ふ家でも二十五円から三十円」で、旧軽井沢本通りに面する「六畳一間」の家屋でも3ヶ月で30円の家賃を取ったというのである。

また明治後半の軽井沢は、「外国人中の七八分は宣教師」であり、「此の宣教師の避暑費と云ふ物は毎年一定の予算がある」から「避暑客から金を絞らうなどと云ふ事は神に対しても恐れ多い話である、だから万平ホテルや軽井沢ホテルでバアを造つても駄目、三鞭だのウキスキだのは私然別荘とせんに運ばせて飲む連中が多いと聞く」とある²³⁹。外国人宣教師によってつくり出される「つつましい」暮らし向きのなかでも、毎年軽井沢で消費される金額は20万円にもものぼるとも報じられているとおり、経済的な消費額はかなりにのぼっていることがうかがわれる。

このように別荘地としての発展は、明治期には外国人、とりわけ宣教師を中心とするものであり、日本人富裕層も彼らに交じり避暑を实践していたが、足立鉄之助の回顧によれ

ば、日本人はまだ肩身の狭いと感じる雰囲気もあったという²⁴⁰⁾。その後、日本人避暑客からは、道路の整備、学生用の安価な宿泊施設、日本人向けの娯楽設備が要望されるようになる²⁴¹⁾。このような声に呼応するように、軽井沢で生み出される消費の潜在性に目をつけた都市型資本によって軽井沢の開発が進展し、日本人が台頭することとなるのである。

第5章 都市型資本の計画的な別荘地開発の展開

最近軽井沢を中心としての避暑地が異常な発達を示してきて居る²⁴²⁾。

(奥川夢郎 (1923) 『軽井澤を中心として』)

第3章と第4章では、おもに明治期に着目し、陸軍脚気療養地や外国人避暑地としての軽井沢の価値づけがいかになされたのかを明らかにした。この時にはその後の軽井沢の発展の礎となる集合的な場所イメージや物質的な基盤が成立したのである。

明治末期から昭和戦前期にかけては、世間的にも軽井沢が「外国人避暑地」という特異な性質をもつ場所として認知されていく一方で、都市型の大規模資本による計画的な別荘地の開発がなされ、第一次世界大戦時の軍需景気の後押しを受けて、従来軽井沢ではみられなかった新興日本人富裕層が流入した。これらを反映するように、景観や場所イメージ、避暑客の性質にも変化が生じていく。本章では、こうした動向を象徴する林学博士本多静六の「軽井澤遊園地構想」や、より物質的な軽井沢の変容として貿易商野沢組の野沢源次郎、そして箱根土地会社を率いた堤康次郎による計画別な別荘地開発について明らかにする。

第1節 「軽井澤遊園地」構想

日本人富裕層の流入は『東京朝日新聞』(1913年8月9日)によれば、「現在の滞在客は邦人七百五十、外人六百余にして炎暑強烈なるに従ひますます増加し本月中旬に至らば頗る

多数に上るべく期待され申し候」²⁴³⁾と、すでに日本人避暑客数が外国人数を上回っている。

しかし、まだこの時期の軽井沢は外国人に特色づけられた国際色の豊かな避暑地として耳目を集めていた。

たとえば、『讀賣新聞』の「避暑旅行案内」の記事では、「軽井沢は国際的避暑地である。此所に来ると、日本人よりも外国人の方が却て幅がきくと云ふ風だ」²⁴⁴⁾という印象が記されている。「……内外人の別荘は点々として落葉樹の木陰に見え」、「丁度北米辺りの田舎の様な風景、道には毛唐の子供が英語の歌を口ずさみつつ嬉々として戯れて遊んでいる。彼方よりは主婦らしい洋人が籠を抱えて町へ野菜を買に行く、かと思ふと若い男女の西洋人が喃々〔しゃべり続けるさま〕として手を引きあつてやつてくる、道端には山百合の間もあるのが咲き乱れている。ピアノの音が木がくれに聞こえる、日本とは迂も思へない」と、外国人の行き交う光景やピアノの音など、日本離れした西洋的な雰囲気描写されている。また、「浅間から降つた砂が層をなした荒野も次第に開墾され畑が増えて行くには相違ないが皆洋人向のトマトなぞが植え付けられ其中にも一行中の羊君が蓮池と間違えたキャベツ畑は仲々立派な者、何せい日本一の避暑地と騒がれる軽井沢の隅から隅まで洋人の専有に帰していると云つてもよい位……」と、トマトやキャベツといった外来の野菜が旧軽井沢周辺で栽培されていることも「外国人避暑地」たる景観を特徴づけていた（第5-1 図）²⁴⁵⁾。

こうした外国人とは、マレー社の『ハンドブック』の記述でみたように、宣教師が中心的な存在であった。「当地の避暑客中最も多数なるは外国宣教師にして多くは別荘を控え居り候、されば料理店、芸妓、酌婦等の如き之に伴ふ営業は殆ど無之、町内商家の多数が

日曜日毎に休業して三箇所の教会に集まり常に宗教的修行の会合をなすが如き大いに他所と其趣を異にする所に之有²⁴⁶⁾と、宣教師の影響下にあるためか、「芸妓、酌婦等」を置く「料理店」がほとんどないこと、キリスト教の安息日である日曜日には教会で礼拝が行なわれているため、休業する商店があったことなどが、他の避暑地との違いとして言及されている。

このような「国際的な」様相を呈する旧軽井沢周辺を総合的に整備する機運が高まり、1911年、長野県庁は本多静六に調査を依頼した。

避暑地として名を知られたる長野県軽井沢は年一年に避暑客も次第に多くなつて来る然るに土地は広くて尚幾らでも避暑客を容れることが出来ると云ふので長野県に於ては其の発展を助長せんが為少額ながらも予算を置き本多林学博士に実地調査を頼んだ。本多博士の調査は已に終つた²⁴⁷⁾。

本多は、1890年に帝国大学農科大学を主席で卒業し、ドイツへの留学を経て母校に着任した。彼は「日本の公園の父」とよばれ、多くの公園を設計したほか、森林保全や国立公園の選定などにも影響力をもった人物である。記事から判断すると、現地調査は1911（明治44）年の夏季に行なわれたものと思われる。調査の結果は、同年10月30日に新軽井沢の油屋旅館で明らかにされ、本多による報告を書き留めたものが、『軽井沢遊園地設計方針』という小冊子にまとめられている²⁴⁸⁾。合計26項目に及ぶこの提言の実現には2万8,000円を要するという試算であったため、長野県の財源不足により実現しなかった²⁴⁹⁾。しかし、そ

の後の軽井沢開発のきっかけとなったことは確かである。そこで、本多の提言がどのようなものであったのか、その概略を明らかにしておくこととする（第5-1表）。

本多は、欧米諸国において「風景の良い所には公園林的の設備をなし外客を招くに努めつゝあ」る一方で、「我日本の風景は世界に誇るに足る可きものが非常に多いのに拘わらず殆んど其天然の風景を利用する何等の設備がない」と主張する。そして、「抑も信州は我中央山脈中に存在し宛も彼の欧州に於けるスイスの観がある〔。〕殊に軽井沢の地たる我国中他に比類なき高原的風景に富み夏季の避暑地として無類の特性を有する」ゆえ、「今日更に完全なる設備を為すに於ては其発展の蓋し計る可らざるものあるべし」と位置づけたうえで、開発の目的を「軽井沢の如き広大なる遊園地と云ふものは先づ其土地に存する天然の風景殊に其土地の特徴となす可き風景を發揮して之を完全に利用せしむる様に設備する」（傍点は原文ママ）ことにおくのである²⁵⁰。

第5-1表をみると、道路を敷設することを第一に掲げ（提案1）、ついで親水空間の創出を目指す（2・3）。土地にもともと存在している自然環境は改変せずに保全し（5・6）、樹種を増加させることも本多の構想の中心となっている（4・8・16・17）。また、自然環境の整備だけでなく、大遊技場や休憩所のほか喫食スペースの設置（7・12・14）、案内書の作成などの宣伝面（20）、遊園地の管理組織についても提案している（21~26）。

以上の提案は、できる限り本来の自然を壊さないことを前提としているものの、軽井沢に手をくわえることで、「遊園地」としての価値づけしていく視点は斬新といえよう。それまでも、外国人を中心とする自治組織はテニスコート・グラウンド・講堂（ユニオンチャーチがその役を果たした）を設置していた。それらは大衆に向けた設備ではなく、避暑

客の文化的な活動の支援に力点を置いたものであり、自然環境に手をくわえるような活動はほとんど重視されていなかった。それに対して本多の構想は、より大多数の日本人や外国人の来訪者を誘致するために、「遊園地」の創出を企図していると考えられる。ここでの来訪者とは、都市部に居住し、これらの提案を受け入れることのできる日光や箱根などへ旅行に行くような人々が想定されている。このような本多の設計案が提示された同時期に、旧軽井沢の西側において大規模な土地を手中におさめ、諸種の開発を推し進めたのは、貿易商野沢組の野沢源次郎であった。

第2節 野沢源次郎の別荘地開発

(1) 野沢の登場と別荘地開発をめぐる戦略

近年、野沢の孫にあたる岡村八寿子は、野沢による別荘地開発史をあとづけた²⁵¹⁾。この研究は、野沢組所蔵の「土地売上明細帳」、ならびに野沢組発行の別荘地図、各種軽井沢別荘案内図を資料として用いている。ただし、別荘販売案内やパンフレットといった資料は示されておらず、別荘地開発の全体像を明らかにできていない点が惜しまれる。

この研究によれば、野沢は本多の提案のほかにも、親交のあった後藤新平、別荘建築を請け負ったあめりか屋の橋口信助などの考え方を実現するような開発を行っていた。野沢の購入した開発予定地は、すでに個人の所有地となっていた場所などを除いて未開発の原野であった。この原野を別荘地へと改造するにあたり、道路の敷設を軸として、諸種の景観保全に留意し、さらに防犯対策や、商業施設の営業などを開発計画に盛り込もうとしたのである。つまり、原野に別荘を建てるだけでなく、そこに付加価値が備わった別荘地

空間をつくりあげることが企図し、親交のある人物の理念を参考にしたものと考えられる。具体的な開発の状況を見るまえに、雑誌記事に掲載された野沢源次郎の談話に着目し、軽井沢に注目した理由を探してみたい。

野沢の談話は、「千ヶ瀧遊園地」を開発した堤康次郎が社長をつとめた雑誌『新日本』²⁵²⁾に、「株式熱より土地熱へ―最も確実にして有利なる投資法―」と題して掲載された²⁵³⁾。この記事において、野沢は株式投資より土地購入の有利性を語り、その時に軽井沢を引き合いに出している点がとくに注目される。

まず「最近に於ける株式熱の奔騰は実に著しいもの」と認める一方、「目下の欧州大戦が継続して居る限は、飽くまでも突飛相場が継続し、相変わらず株式熱旺盛の時代あらう」という大勢の見解を紹介しつつ、「吾人の眼から観れば、今日既に一部の健実なる底流は、株式熱より漸く土地熱に変ぜんとしつゝあるの傾向があると思ふ」と、土地へ着目する新たな動向を敏感に察知している。ついで、「株式熱旺盛の後には、必ず土地熱の之に変わつて主要な人気を占める」という法則性を指摘し、「株式熱が最高潮に達する時は、即ち急転直下、人気の中心が土地に移つて、非常なる地価の昇騰を見る」から、土地地価の変動の緩慢な時こそ、そこに着眼する必要があると主張した。

さらに、「如何なる国、如何なる時代に於ても、其土地の上に資本の基礎を据ゑる程健全な態度はない」と前置きしつつ、利回りから土地投資の有利性を説く。株式は、目下の景気のなかで事業が成功したとしても、3、4%程度の利益に過ぎず、一方土地は、日本橋や京橋などの中心地はむしろ利回りが悪いが、「少しく転じて場末へ行けば、少なくとも5分以上にはなる、殊に近来著しい開け方をした渋谷の如きは、其所に中級の借家を建てゝ貸

すことにすれば、優に一割以上の利益がある」述べ、「吾人が投資の最良的として土地を選ばんするのは、即ち此理由である」と論ずる。

最後に、「……さては夫れでは、如何なる地点を購入するのが可いかといふことは、次に起つて来る問題である」と前置きし、「千駄谷とか、渋谷、大塚、目白、目黒、田端、巢鴨」という当時の東京市の行政界より外側の地域を列挙するものの、「これ等は最早既成の土地であつて、其の地価も或る程度まで充分昇つて居る。将来に於て購入するとすれば、斯の如き既に他人の^{じよと}鋤犁が入つて居る所よりも未だ多く他人の顧みない処女地に目をつけることが必要である」と述べる。続けて、「稍市街から遠ざかつた例へば北多摩郡とか、更に離れては鉄道を利用して四五時間で行ける位の地点にまで其の視野を広げる必要があるだろう」と半ば強引に対象となる範囲の拡張を図る。すなわち、「近頃盛に起つて来た田園都市熱の如き、偶ま吾人の所説と並行せるものとして観るべき」とうそぶいているが、こうした動向を積極的に利用していることは明らかである。

野沢のいう「田園都市」は、日本では明治後期より内務官僚らが導入し、都市計画法などの制定と民間の住宅地開発の進行した大正期にかけて議論された都市計画概念であった²⁵⁴。もともとイギリスの都市計画家ハワード (Howard, E.) が『明日の田園都市』(1902年)で「Garden city」の語をもって提唱していたものである。Garden cityは土地公有制のもと、中心業務地区や広場を中心部として、その周囲に住民の居住地や庭園を配し、その外側を工業地帯に充てる24km²ほどの円形の都市としてデザインされ、その周囲には農地がひろがるという、工業都市と農村の機能性の統合を企図する大胆な構想であった。ハワードは、これらの都市を大都市周辺部に分配することで、無秩序な都市化を抑制することができる

と考えていた²⁵⁵）。しかしながら、日本の文脈では、ハウードの思想が完全に受容されたわけではなく、中心都市に対して周囲の環境の優れた居住地の「郊外」として関心が払われたにすぎなかった。

事実、都市部における市街地の外延的な拡大、市街地と周辺部を結ぶ鉄道（とりわけ私鉄）の発展を背景にして、1920年代から1930年代には、大都市と対をなす「田園」は、「郊外」という語をもって居住地として理想視されるようになった²⁵⁶）。その嚆矢は、箕面電気軌道（現・阪急電車）の設立者小林一三による大阪池田室町（1910年）の住宅地開発とされている²⁵⁷）。その後、小林は都市側の終点・梅田駅には百貨店、郊外側の終点・宝塚には温泉や劇場を配し、その中間地点に住宅地を位置づけることで住まう場所としてモダンなイメージを付与した。その結果、住空間としての「郊外」、労働空間としての「都市」という新しい空間構造があらわれた。このような「田園」あるいは「郊外」に関する議論が日本にもたらした帰結の一つとして、土地の有する経済的な価値にますます注目が集まった点が重要であると考えられる。このような意味において、時勢をふまえた野沢の談話は、とりわけ注目に値する。

関西に対して、関東で郊外住宅地の本格的な造成がはじまったのは、1923年の関東大震災以降のことである。震災後には後藤新平による帝都復興計画が進行するなかで、さまざまな計画的な郊外住宅地開発が、電鉄会社や土地会社、あるいは信用系会社によって行なわれた。野沢の考えは、このような動向にやや先んじるかたちで、東京と地理的に100km以上も離れた軽井沢を田園都市、すなわち「郊外的」な土地空間として投機対象に位置づけた点で注目に値する。歴史地理学の三木理史は、近代日本の「郊外」の誕生は、鉄道と

いう大量輸送機関の登場と、日常的な通勤行動によって条件づけられると述べている²⁵⁸⁾。

しかしながら、労働-余暇が時間-空間的に分離された近代において、たんに通勤行動のみに規定されない郊外的な空間のあり方を模索する動きが野沢の戦略にみてとれる。

私共は信州の軽井沢に百万坪ばかりの土地を持つて居るが此の軽井沢などは、今云ふ田園都市の候補地として誠に適合した所で、土地も高燥であり、空気もよく、値の如きも非常に^安く、普通五六十銭から一円内外二円までで、一坪の地が買へる、然し私が軽井沢を褒めるといふことは、自画自賛に類するから多くは云はない。只こゝには資本運用の手段方法として、土地購入が最も有利であり、確實であること主張するに止める。

土地投資の場所として軽井沢に注意を向かせることを企図したかのような記述である。談話では、別荘地開発の内容そのものについてはまったく言及されていないものの、同談話掲載前の1916年2月には細川護立、5月には徳川慶久が野沢から土地を購入し、同年秋頃には、あめりか屋の設計で豪華な別荘が完成しており、すでに別荘地開発がはじまっていた²⁵⁹⁾。軽井沢はすでに国際的な避暑地として知名度を高めていたことから、ことに政治家や有閑・富裕層を含む投資家に軽井沢の土地の購入が勧められていたと思われる。そのような意味では、野沢の談話は土地分譲の宣伝という意味をもつといえよう。

以上のように野沢は、軽井沢の開発を進めていくなかで、土地投資の関心の高まりという世情を利用しつつ、「田園都市」の候補地の範疇をたんに東京周辺部に限定するのではな

く、地理的に東京から100km以上も離れた軽井沢にまで拡張したのであった。半ば強引な敷衍であるものの、軽井沢を東京の「郊外」として見立てるという解釈を提示したのである。もっとも、この記事を掲載した雑誌『新日本』の社長は堤であり、まさに彼が千ヶ瀬の土地の売買交渉を粘り強く続けている時期でもあることから、同誌に野沢の談話を掲載したのは彼なりの戦略的な企てであったのかもしれない²⁶⁰。

ところで、野沢は軽井沢を「田園都市の候補地として誠に適合した所」と位置づけながらも「田園都市」の意味について言及していないが、野沢談話と併載された神田駿吉「軽井沢と田園都市問題」²⁶¹と題する記事をあわせてみていくことで、野沢の意図を探ってみたい。神田がいかなる人物かは定かでないものの、「吾人の家郷碓氷峠の西麓」と述べていることから、軽井沢にゆかりのある可能性が高い。

神田はまず、日本の変化について「今やその爛熟せんとする物質文明の反動として近時著しく心靈的に覚醒し来つた」と説く。やや具体性に欠けるが、記事の後半部分には、「夏季幾十日を静寂なる田園に幽居して静かに自然の風物を感じ、自然の美に冥合するの唯一の事業であり、人間としての天職である」とする。つまり、夏季休暇を利用して、自然環境のなかに身を置くことが浸透してきたということであろう。さらに、「吾人は亦四六時中を都会の熱塵裡にあつて単に器械の監視者たり工場の所有者たる人よりも、雲の美に憧憬、山の美を歌う詩人の境涯を羨望する〔。〕都会は大なる墳墓である。田園は生の摇篮である。少くとも今の中流以上の都人は、野に山に海浜に一種の港と安息所を準備せねばならぬ」と述べ、都市住民にとって軽井沢こそが、「理想的」な「安息所」たる「田園都市」と謳ったのである。

田園都市の候補地として軽井沢の他にも、富士山周辺・奈良・日光・塩原などが列挙されているが、開発に時間を要することや「土地狭隘きょうあいにして地価高く、地勢風土上に於ても別荘地たり園遊地たる」には不都合が多いと述べ、軽井沢こそがふさわしいと主張する。神田は軽井沢を推薦する理由を、おもに①気候や土壌、②交通、③地価、④設備の4つ観点から説いた。

上記①について、軽井沢は「日本に稀なる大陸的な景象」を有し、「其地海を抜くこと三千八百尺、盛夏と雖も昼間気温八十度〔26.7℃〕を昇らず、夜は七十度〔21.1℃〕」となるため、「空気の爽快清涼」と述べる。それだけでなく、「地面は常に乾燥して悪水を止めることがない」点は、公衆衛生の観点からも安全であるとする。このような「自然の換気法」の作用する気候や土壌は、軽井沢を「健康地」として特色づけており、「別荘地乃至遊園地として彼処は第一に健康地」であると主張した。さらに「脚気患者に対して此地が最上の療養地たることは万人周知の事実」と強調していることからわかるように、軽井沢が脚気などの諸疾病の転地療養地の適地であることが、健康地を説明するために引き合いに出されている。くわえて、「郷人の脚気、神経痛、心臓病に悩む者は温泉へ赴かずしてまづ此地に転地療養を試むるもの」とも述べており、療養地イメージが活用されているといえよう。

②交通については、「碓氷嶺の汽車が電力を用ひ始めてより隧道内の煤煙に苦しめられることはなくなった」と鉄道の電力化によって、移動時の快適さの向上したことを挙げる。さらに「僅々五時間にして都門に入り得べく、毫も辺陬の觀を抱かない」と、東京との近接性を説く。

③地価については、野沢も述べていたように、軽井沢の投機価値について喧伝しているように見受けられる。「軽井沢に在つては土地その物が遊んで」おり、「試みに比較を逗子鎌倉に取れば其地の価格は坪二三十円はする」一方、軽井沢では、「……最低勿驚十錢より二三十錢、最高とも雖も一二円以上には出ぬのである」（傍点は原文ママ）と述べ、容易に取得することができる土地を強調する。そのうえで、具体的に諸名士の名前を挙げて、「別墅を構ふるに至つた」ことにも話が及んでいく。

以上の説明において、「田園都市」の「田園」にあたるのが①～③にあたり、最後の④設備についてが、「都市」に対応すると考えられる。すなわち、軽井沢には「……道路も発達してゐる。食料その他生活上の設備も完全している」とし、「倶楽部、運動場、氷滑場の設備も出来た」と述べた。つまり、日常生活や娯楽の設備がすでに整備されていることを評価していると考えられる。ただし、神田は野沢の別荘地開発の計画に言及するなかで「……計画として此地を以て都人の別荘地、否完全なる田園都市となさんことは吾人の折心熱望する所」と述べていることから、まだ設備面では発展途上であったことがうかがわれる。後年、軽井沢通俗夏期大学、ゴルフ場などの諸種の設備がさらに充填されていくが（後述）、このときは、さらなる発展に期待を込めて、日本人向けの設備の拡充を課題として挙げたのであった。

他方で、避暑地の中心地たる旧軽井沢は、すでに都市的な様相を呈しつつあったことが書かれている。

……夏期は例の西洋人が食料品商その他を東京から伴つて来る。雑貨店、理髪店、洗

濯屋、美術商、其間を漫歩する明眸皓齒〔杜甫「哀江頭」より美人のたとえ〕の金髪美人、夏の夜の旧軽井沢は宛として山間の小都市である。

引用文の「山間の小都市」という形容は、かつて碓氷峠越えの人馬が行き交う宿場町であったものの、碓氷新道や信越線（直江津線）の開通により凋落した旧軽井沢が今や避暑客の織りなすにぎわい、そして避暑客向けの商業環境を含めて「都市的」な相貌に様変わりしたことを示しているといえよう。

以上をふまえ、野沢の「田園都市の候補地として誠に適合した所」の意味をあらためて考察するならば、「田園都市」とは、自然を享受できるような場所というだけでなく、来訪者たる都市住民の生活や娯楽活動を可能とする「都市的な設備」が存在する（正確さを期するとさらなる発展の余地がある）場所を意味していると考えられる。野沢は軽井沢を説明する際には、避暑地とも別荘地とも述べていないものの、彼の実際の行動から別荘地空間の拡大を企図していたと解釈することができる。

ここまで間接的ではあるが、野沢が軽井沢に着目した理由を文脈的に理解するべく、雑誌記事を素材として考察してきた。先にみてきたように、「都市」に対する「田園」、すなわち新鮮な空気と豊かな自然環境の享受を可能とする「健康地」と位置づけられながらも、「都市的な」性質をも具備しうる「田園都市」として、土地投機や別荘地開発の関心が向けられていたことが明らかとなった。その端的な事例は、以下で検討する野沢別荘地と千ヶ瀬遊園地の開発にみることができよう。これらの開発は、それまでの軽井沢の発展の軌跡とはまったく異なっていた。すなわち、明治末期までの軽井沢の別荘地は、あくまでも

個々人の別荘が集積したものであるのに対して、野沢や堤の開発の特徴は、個人ないし株式会社が広範囲の土地を所有し、そこを諸種の施設を充填し、土地を分譲するという方式によって生み出された空間的結果にはかならない。

(2) 野沢別荘地の概要

先述した岡村八寿子は、野沢組資料と別荘案内図のほかにも、雑誌『住宅』（1917年8月）の「軽井沢号」という特集記事を用いている。本項では岡村の議論を参考にしつつ、雑誌『住宅』の記述をいまいちど整理し、また新聞記事なども援用しつつ、あらためて野沢の別荘地開発の特徴について検討したい²⁶²。

野沢源次郎は、自身が所有した土地の面積を100万坪程度と述べているが、その総面積は200万坪や160万坪ともいわれている²⁶³。岡村は野沢組所蔵の「野沢源次郎所有地 軽井沢大字軽井沢地図2枚続き」（1941年）と「軽井沢 野澤所有地図 北・中・南」（作成年不明）をもとに、野沢の所有地を復原した²⁶⁴。その結果を、旧版地形図を基図としてGISデータ化すると、第5-2図のようになる。岡村は具体的な面積を計算していないが、GISで面積を算出すると、約161万坪となる。野沢の土地購入記録は現存していないため、個々の土地をいつ購入したのかは定かではないが、少なくとも1913年5月には土地を購入しはじめ、野沢組出張所の地籍は1915年8月、後にゴルフ場となる地籍は1918年といった具合に段階的に買い込んでいったとされている。

岡村は、野沢による土地の開発には先述の本多静六のほかにも、親交のあった後藤新平や野沢別荘地の別荘建設を手掛けた橋口信助らの助言を取り入れていると主張する。これ

らの諸提案をまとめた第5-2表をみると、本多と後藤に共通するのは、道路の敷設・整備である。これは、動線としての道路を重視する近代的な都市計画の基本理念にもとづくもので、第5-2図をみても、別荘地のなかには多くの道路が新設されている。着色していないものを含めると、年を追って道路の整備が進められたといえよう。また、本多の提言には、もともとの自然景観を活かそうとする発想が根底にあり、それを受けて野沢は雲場池周辺を充填的に整備したようである。他方で、橋口の提言は、野沢が実施したというよりは、別荘の設計や建設を請け負っていた橋口とあめりか屋の主導のもとで実現したと考えてよい²⁶⁵⁾。

(3) 雑誌『住宅』にみる別荘地開発の特徴

『住宅』は第4章において、八田裕二郎や新渡戸稲造の回想を検討した際に用いた雑誌である。あらためて同誌の特徴を確認するならば、橋口が洋風住宅の普及を目指すために設立した住宅改良会の会誌であり、日本初の住宅専門誌といわれている。住宅部門として建築・設計を担うあめりか屋の活動に多くの紙面がさかれたことから、同社の宣伝するためのメディアと位置づけることができよう²⁶⁶⁾。1917年8月の「軽井沢号」という特集号は、あめりか屋が軽井沢で別荘の建設事業に進出することを宣伝する意図もあつてか、別荘の写真のほか、設計図を多数収録されている。さらに尾崎行雄・安部磯雄・志賀重昂といった政財界の名士や学者による軽井沢の印象に関する寄稿文が掲載されるなど、誌面の充実度は高い（第5-3図）。

まず、橋口の述べる避暑の意義と軽井沢の特殊性を端的に整理する。すなわち、「人間の

体力精力には自ら限りあるものであり、「^{あつぱん}熱鬧騒擾の都市にありて実務を執るといふ事は遂には健康の破産者となることを免れない」²⁶⁷⁾。ゆえに、「殊に極寒極暑の候に際し小閑を利用して幽邃閑雅の地に寒暑を避け心身の英気を養ふ」²⁶⁸⁾必要があると説く。軽井沢は、気候が冷涼であるだけでなく、宣教師が開拓した場所であるから、「耳に淫らな弦歌の声を聴かず眼には悪俗なる広告絵看板の如きを見ず」、こうした点は「一般子女学生の避暑地としての理想的」ととらえられている²⁶⁹⁾。そのうえで、野沢組との協力体制下で進行中の別荘地開発について力を込めて説明していく。

野沢の拓いた土地は、もともと実業家の川田龍吉が牧場・酪農を試みた場所であった。そこを1915年に購入し、周辺の荒れ地同然の土地をも買い足した結果、所有地は約161万坪に及んだことになる。同誌の寄稿者の一人である地元有力者の土屋源一郎は、次のように述べている。「以前の軽井沢避暑地は旧中山道の右方の口に限られて川田男〔爵〕所有地たる左方一帯の地域は散歩さへ自由にできぬやうな有様であつた」。川田の所有地は、雲場川が湧き出る通称「^{おみずばた}御水端」周辺である（第5-4図）。1912年測図の旧版地形図をみると、野沢別荘地の中心にある雲場池の周辺は荒れ地で、別荘らしきものはほとんど見当たらない。さらに土屋は、「野沢氏が之等の広漠たる荒地を拓いて三間幅又は四間幅の道路を縦横に開通し到る所に井戸を掘り、ベンチを据えるなど今日では自動車馬車の如きさへ自由に疾駆し得る」までになったと賛辞を送っている²⁷⁰⁾。

開発の概要は、「理想的避暑地を造る為に」と題する無署名の記事からうかがうことができる²⁷¹⁾。それによると、道路の幅は最も広い場所で4間〔7.2m〕であり、景観整備も兼ねて道路の両側にはカラマツや白樺などを植えることで風除けと日除けとして利用し、降雨に

よる道路の泥濘をさけるために、砂利などのバラストを投じたという。

「遊園地」の詳細は不明であるが、雲場川を中心として森林地を開拓し、雲場池には水泳場やスケート場を設置する計画であった。また、活動写真・夏期講習会・学術講演会などを開催することのできる大公会堂、および寄宿舎を建設する計画が立てられていると述べる。

(4) 土地の提供と施設の拡充

ここでは、まず 1925 (大正 14) 年に地元住民によって発行された「軽井沢附近遊覧案内図」と題する鳥瞰図をみていく。この鳥瞰図は、1923 年に東長倉村が町制施行し、沓掛などを含めて「軽井沢町」になったあとに刊行された。別荘地の拡大とともに、「軽井沢」の空間的な拡大を表象している。この地図はあくまでもデフォルメされた絵地図であるから、個々の別荘の分布などは不正確であるが、新たに充填された施設などを把握するのに適している。第 5-5 図では、野沢別荘地周辺部分の抜粋したものを示した。

最初に雲場池の南側の「マーケット」に着目したい。これは野沢組が経営した商業施設である (第 5-6 図)。『*Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1920*』に掲載されたマーケットの広告によれば、東京の商店を誘致し、食料品や雑貨の販売、食堂のほかにも、洗濯、理髪などのサービスも供せられていたようだ。マーケットに隣接するように、東京赤坂のパン屋「アメリカンベーカリー」、赤坂の食堂「伊勢忠」、神田の菓子店「風月堂」なども出店するなど、マーケット周辺は別荘客向けにサービスを提供する野沢別荘地の中心地的な役割を担っていたと考えられる。

また、第 5-5 図の離山北側に注目すると、「ゴルフリンク」が記載されていることがわかる。これは野沢が神田雷蔵（実業家・銀行家）とともに取得していた土地を「軽井沢ゴルフ倶楽部」へ貸借し、造成したものであった。ゴルフ倶楽部の発起人には、徳川慶久ら各界の名士が名を連ねていたが、17 人の役員の半数以上は外国人であり、実際にゴルフ場を利用者したのも、3 対 1 の割合で外国人が多かったといわれている²⁷²⁾。同ゴルフ場は、スコットランドの名門セント・アンドリュースから技師を招いて設計され、1921 年に 6 ホール、翌年には全 9 ホールが完成した。東日本では東京駒沢、箱根仙石原につづく 3 ヲ所目の本格的なゴルフ場であった。1932 年、南ヶ丘に 18 ホールを備えた「軽井沢ゴルフ倶楽部」が開設されると、ここはパブリック・ゴルフコースとして経営された。軽井沢ゴルフ倶楽部は「新ゴルフ」とよばれたのに対して、野沢別荘地のゴルフ場は「旧ゴルフ」と称される。

このほかにも第 5-5 図の時期には完成していなかったが、1930 年頃には雲場池に隣接してプール、横浜のニューグランドホテル、30 棟ほどのロッジも建設されていることがわかる（第 5-7 図）。また、「大隈邸」の南には「野球グラウンド」、線路の南側にある「夏期大学」も野沢が土地を提供したことにより実現した施設である。この「夏期大学」とは、後藤新平や新渡戸稲造らが発起人となり、1918 年に開設された「軽井沢通俗夏季大学」を指す。これは夏季休暇を利用して学生や一般人に向けて、学者などが専門的知識の講義を提供することを目的したもので、開催場所は変わったものの現在でも毎年開校されている。

以上のように、野沢別荘地では、たんに土地を分譲するだけでなく、滞在者の生活に供するべくさまざまな施設が「計画的」に拡充されていったのである。

(5) 土地・別荘所有者

最後に別荘所有者についてみていく。岡村は野沢組所蔵の「土地売上明細帳」を分析しているものの、現在の土地・別荘所有者に配慮して、売買価格や規模や所有者名は一切明らかにしていない。しかし、開発当初の土地売買については小字を基準としておおよその地点が復原されている。それによると、1916年から1919年までに82区画が売買された。この82区画は、300坪から2万坪まで多様な面積である。さらに、1916年から1919年までには貸別荘が20軒ほど建設されていたものとみられている²⁷³⁾。試みに1921年頃の「軽井沢別荘図」における野沢別荘地の別荘数を算出してみる。すでに建築されていた別荘と貸別荘を除くと²⁷⁴⁾、1921年頃には、32軒の別荘が野沢別荘地につくられていたと推定される。

それでは、野沢別荘地はどの程度別荘地として発展したのでしょうか。ここでは、軽井沢避暑団発行の『*Karuizawa Summer Residents' Association Handbook 1943*』に掲載された所有者と別荘番号情報、付属の別荘地図から、具体的な土地・別荘所有者を明らかにする。これをみることで、戦前期における野沢別荘地の発展の結果を明らかにすることができる。

1943年時点における野沢別荘地の別荘分布は、第5-8図のようになる。ハウナンバーが付された家屋は合計184軒を数える。内訳は、個人所有の別荘が148軒、貸別荘と推定されるものが16軒²⁷⁵⁾、野沢組のマーケットが2軒、大学の所有となっているものが7軒、所有者の記載のない家屋は11軒立地している。同図をみると、離山北東の「旧ゴルフ」の東側に別荘が集積している。ここはやや奥まった場所で、開発の初期に徳川と細川があめりか屋設計による豪華な別荘を建設した場所である（第5-9図）。また、離山の南麓では、

1917年に大隈の別荘が完成した（第5-10図）。大隈邸には常に来訪者が絶えず、1923年に摂政宮（のちの昭和天皇）が軽井沢に来訪した際に、宿泊した場所である。また、大隈邸より西側には、政治家の鈴木喜三郎が1933年に「政友村」という別荘集落を提案して別荘を構えた。

その他、軽井沢駅から旧軽井沢へ向かう途中の東方にも別荘が集積している。ここには五島慶太（実業家・東京急行電鉄創業者）などの別荘がある。そのさらに東部の三度山とよばれる一帯には、「御水端」付近に別荘をもっていた新渡戸稲造が1917年に新たに3階建ての別荘を建てた。このように、別荘はたん点在していたわけではなく、最初期に細川・徳川・大隈・五島・新渡戸などの別荘を中心に次第にその数を増やし、別荘の集積するエリアが形成されていったと考えられる。他方で、信越線の南側にも新しく別荘が集積している。

以上の所有者の社会属性をみると、爵位を有する人物、あるいはその人物の親族が別荘を所有していることが特徴的である。岡村は、野沢別荘地を政・財・学界のトップレベルの人物の交友の場にする意図が野沢にあったのではないかと推察しているものの、野沢にそのような構想があったか否かは定かではない。しかし結果的に、あめりか屋による豪華な別荘建築に特色づけられ、主として、有閑階級や政財界の有力者の集う別荘地が誕生した。野沢の別荘地開発以前にも、日本人としては有閑・富裕層が次々と軽井沢に来訪し、別荘を所有しはじめていたが、この段階では、まだ別荘分譲地を購入するという動きは軽井沢において一般的ではなかった²⁷⁶⁾。一方、野沢別荘地では、新たに土地を拓き、本多の「遊園地計画」や、後藤の都市計画の理念、橋口の新たな別荘建築様式を取り入れた計画

的な別荘地開発が行なわれたのである。このような別荘地開発をめぐる高付加価値化の戦略は、大都市地域における郊外住宅地の開発手法と類似しており、別荘地としての存在意義を高めるものであった。つまり、野沢は新しい別荘地の開発手法を軽井沢に導入し、実践したのである。この帰結として軽井沢は空間的にも意味的にも新たな段階へと移行し、軽井沢の別荘地は、従来の外国人別荘が集積する旧宿場町から西方に向かってその範囲を空間的に拡大した。とくに野沢別荘地は、「高級」イメージを惹起させる別荘地として、独特の質を帯びその地位を確立していく。

別荘地の空間的な拡大は、野沢の開発とほぼ平行するように、もともとの「軽井沢」から地理的に離れた沓掛地区の千ヶ瀧せんがたきにも及ぶようになった。千ヶ瀧における開発を指揮した堤康次郎の率いる箱根土地株式会社は、野沢よりもさらに商業主義的な手法をもって、東京に住まう中間層の欲求に訴えかけるような計画的な別荘地開発を実演してみせた。

第3節 堤康次郎による計画的な千ヶ瀧遊園地開発

(1) 土地買収の経緯

以上では、従来の別荘地形成とは異なる計画的な別荘地開発の導入について野沢別荘地の事例を論じた。この開発に数年遅れるものの、当時新鋭の実業家であり、戦後の西武グループの礎を築いた堤康次郎は、まったく別の観点から別荘地開発の理念と計画を掲げ、さらに旧軽井沢や野沢別荘地と距離を置いた千ヶ瀧の地で開発を企図したのである。

「千ヶ瀧せんがたき」という場所は、もともと東長倉村大字沓掛くつかけ（現・中軽井沢）の共有採草地であった。江戸時代の沓掛は、軽井沢宿と追分宿に挟まれた宿場町で、草津街道の始点でも

あった。当時名もなき「千ヶ瀧」一帯は、草津街道の途中に位置している。沓掛村は、1889（明治22）年に隣村の軽井沢村と合併して東長倉村となった。その後、1923（大正12）年8月の摂政官の来訪決定を契機として町制施行の機運が高まり、「軽井沢」の知名度がひろまっていたこと、沓掛を含めて町を避暑地として発展させるべく、東長倉村は「軽井沢町」という町名となった²⁷⁷⁾。旧軽井沢と沓掛はいずれも宿場町の歴史をもつが、近代期になると、前者は先んじて避暑地として注目される一方、後者は零細な農業・養蚕業に依存していた。そのような沓掛の社会経済的な立ち遅れを克服するための発展策が模索されるなか²⁷⁸⁾、土地の下見にやってきたのが堤であった。

滋賀県出身の堤は、1913年に早稲田大学政治経済学科を卒業した。在学中から政治や実業に強い関心を抱いていた堤は、株式投資や会社経営のみならず、選挙活動にも積極的に関わった²⁷⁹⁾。とりわけ立憲同志会結成会への参加は、彼に桂太郎や大隈重信とのつながりをもたらし、永井柳太郎（政治家）、後藤新平（政治家）や藤田謙一（実業家）など、政界・経済界の重要人物と広い人脈を形成する重要な画期とみなすことができる。堤が沓掛の土地の存在を知ったきっかけは、親交の深かった永井柳太郎から「軽井沢にいい土地がある」と教示されたことによるという²⁸⁰⁾。

第1節で明らかにしたように、本多の「軽井澤遊園地」構想が提案され、ついで野沢による「野沢別荘地」開発が進展しており、軽井沢はまさに土地投資や別荘地開発の対象となっていた。そのなかで、堤が1915（大正4）年6月に永井の紹介状をもって沓掛を訪れると、星野温泉の隣地5万坪の土地を紹介されたという。土地の規模に不満を抱いた堤が目をつけた土地は、台帳面積60万坪にもおよぶ沓掛の共有地であった²⁸¹⁾。この場所の取得が進め

られたものの、これほど大規模な土地の一括売買の前例はなく、手続上時間を要した。そのうえ共有地売買の申し入れに対して、財産である土地を売り渡すことへの不安感などから反対者は多数を占めた²⁸²⁾。しかしながら、堤は別荘地開発による沓掛の発展を住民に粘り強く説いたこともあり、紆余曲折ののち、堤に対していくつかの付帯条件が課され、1917（大正6）年12月に共有地（字坂下・字獅子岩）は、3万円で売却されることとなった（第5-11図）²⁸³⁾。堤は買い入れた土地を「千ヶ瀧」と名づけ、翌年から自らの指揮のもとで開発に取り掛かった（第5-3表）。

千ヶ瀧の開発・経営は当初、堤と関連する複数の土地会社によって行なわれた。詳細は不明であるが、まず土地売買決定の直前に設立された沓掛遊園地株式会社が、1919（大正8）年2月の千ヶ瀧遊園地株式会社の設立をみるまで、資金の準備や開発を担っていたと推察される。ついで同年11月設立のグリーンホテル株式会社は、貸別荘や旅館の経営を担当し、最終的に1920（大正9）年3月に設立された箱根土地（堤は専務取締役）が千ヶ瀧の経営権を引継ぎ、それ以後の開発・維持にあたることになった²⁸⁴⁾。

これらの土地会社の特徴は、堤の人脈のなかでも、藤田謙一や若尾璋八など、多くの会社で重役を兼任する、いわゆる「企業家」²⁸⁵⁾とよばれる人物が取締役に就任した点にある。このような経営陣は、堤の計画を実現するための強力な後ろ盾であったと思われる。

(2) 開発の理念

現在ではテーマパークを連想させる遊園地の「遊園」とは、parkの訳語「公園」「公苑」「逍遙園」「遊苑」のひとつとされる。とくに近代において遊覧に適した庭園、あるいはホ

テルや講堂、温泉、運動場をも備える都市郊外の行楽地など、おもに屋外散策を提供する限定的な娯楽空間に「遊園地」という名称がみられる²⁸⁶。堤が「私はあの荒廢地を開発して国民休養の場所にしようとしているんです」²⁸⁷と開発の理想を振り返っているように、遊園地という語句を別荘地にも流用することで都市住民向けの新しい空間の創出を構想していたと考えられる²⁸⁸。

たとえば、箱根土地の営業報告書のなかには以下のような開発理念がみいだされる。すなわち、「避暑ノ経済的実用化」を図り、「知識階級中流階級及ヒ多数ノ学生ノ為、簡易ニ利用セシムル」²⁸⁹と、経済的な側面から避暑を見直し、知識階級・中流階級に属する人々や学生に対して、利用しやすい環境を目指していることがわかる。それ以後の広告・パンフレットでは「独楽より共楽へ…豪華より簡素へ…」²⁹⁰、「軽井沢の天恵を一部少数の人々の独占から解放して、真に都会に奮闘努力される、多数中産階級の方々の保健、休養のための必需品としてこの天恵を享受せらるること」²⁹¹と謳う。つまり、千ヶ瀬遊園地は、それまで別荘を独占的に所有してきた有閑・富裕層ではなく、知識階級や中間階級の「保健・休養」のためにひろく利用されるべき場所として、従来の別荘地を批判する立場から計画されたと解釈することができる。

ここで対象とされた知識・中間階級とは、大正・昭和戦前期に台頭してきた、比較的高学歴で健康や衛生に関する知識を有し、またスポーツや旅行などのレジャー活動に積極的であった社会階層を指す²⁹²。その母数は限られていたとはいえ、文化消費の近代化を牽引する存在とみなされる²⁹³。詳細は後述するが、別荘の所有者は、必然的に土地・建物を購入せねばならず、結果的に知識・中間階級だけでなく、多数の実業家などの経済的富裕層

が占めることになる。しかしながら、別荘地開発の文脈において、新たな社会階層を別荘の購入者層として対象に取り込もうとしたことには、堤とその関係者の先見性が垣間みられ、また開発理念や対象者が設定されること自体、従来とは異なる別荘地を生み出すことにつながっていく。

ところで、堤が千ヶ瀧の造成に着手した1918年には、旧軽井沢周辺で383戸の別荘が立地しており、上述したように野沢源次郎も離山東部に新しい別荘地を開発していた。それでは、千ヶ瀧遊園地はどのような点で既存の別荘地と差異化されたのであろうか。別荘地造成中にあたる1918年8月号の雑誌『新日本』には、「軽井沢を凌ぐ千ヶ瀧遊園地」という副題の記事が掲載された²⁹⁴。この記事では、新聞報道にさきがけて「千ヶ瀧遊園地」という名称が用いられており、後年に実現される具体的な開発計画への言及もなされている。このことから、記述内容は堤とその関係者の開発方針に沿うものであり、千ヶ瀧の価値づけを企図する言説とみなすことができる。以下ではこの記事をもとに千ヶ瀧の環境について検討する。

まず、海拔三千三百尺（約1,000m）の高原である旧軽井沢は、避暑地に最も適した気候条件をもち、さらにラジウムやオゾンの含有量が豊富で医学的な好条件も備えていることから「無比の衛生地」とであると説明される。しかしながら、高原たる旧軽井沢の、「青い色をみるのは眼と脳との薬だといふのに、見渡す限り小草ばかり、立樹といたら殆ど無いのは全くの非衛生且つ無風流」というだけでなく、水不足であるのに豪雨になると泥水の氾濫することや、温泉のないことを批判する。

それに対して千ヶ瀧は、「旧軽井沢にない所を残らず持合せて居る」という。たとえば、

「赤松、落葉松、其他の見事な老木がすくつと競ひ立ち、其清い蔭を縫つて水晶の様な水が滾々と流れて尽き」ないばかりか、「眼界遠く開けて大高原を低く瞰下し、浅間、碓氷の諸勝は輪廓鮮やかに窓前に現れゐる」と論じる。さらに続けて、新たに発見された温泉も重要な避暑地の資源とみなしている。

このように、医学的見地から避暑地としてふさわしい環境の同質性を論じる一方で、樹木の多様性、豊富な水、標高の高さと眺望の良さ、温泉の存在を、旧軽井沢と比較して千ヶ瀧のまさった点として強調する。これまで無名であった千ヶ瀧とすでに避暑地・別荘地としての価値が確立していた旧軽井沢を比較することは、千ヶ瀧の場所のアイデンティティを確立するために必要だったと考えられる。後年のパンフレットには「千ヶ瀧の大観」という、眺望を活写した写真が掲げられ、キャプションには「こゝは海拔三千六百尺、千ヶ瀧の平和郷。浅間のスロープが紺碧の大空に、クツキリ雄渾なラインをひいて、樹海あり、瀧あり、溪流あり、溪谷あり、白樺落葉松の樹林あり、高山植物の群落ある中にエキゾチックな高原都市を展げて居ます」²⁹⁵と、千ヶ瀧の長所と別荘地としての発展を表現する自然環境の描写へとつながっていく。

他方で、「軽井沢を凌ぐ千ヶ瀧遊園地」に示された計画は、以下のとおり要約することができる。すなわち「其中心に一大温泉浴場と、旅館並に公園を新設すると共に、周囲約五十五萬坪多くの別荘を設け普く廉価を以て希望者に提供する」と、温泉を核にして公園内には娯楽を提供する倶楽部ハウス、医師の運営する医局、剣道・弓道の道場、テニスコート、野球場、遊泳場とそれを取り囲む馬場、さらには冬期にスケート場を設ける構想となっていた。

以上より、たんに滞在用の別荘を建てるだけでなく、先に示した「遊園地」という名称にあらわされているように、温泉浴場や旅館を配置し、公園内の散策、スポーツなどの娯楽的活動の機会も提供する場所として、開発が目指されていたのである。

(3) 別荘地の形態と設備・施設

既述したように別荘地開発の方針は、新聞や雑誌によって報じられていた。第5-4表は、それらを手掛かりに、計画・構想の実現の有無をまとめたものである。「○」はほぼ完全に実現した計画、「△」は一部実現した計画、「×」は実現しなかった計画、「？」は実現したか否か明らかでない計画を示しているが、大掛かりな移動・輸送用設備を除いて、多くの計画が実現されたことがわかる。

計画的な開発として基礎的な要素である道路（No.1）、別荘用家屋（No.2）の建設は、1918年5月頃から堤の指揮のもとではじまり、温泉浴場（No.3）の開湯式が行なわれた1919年8月末頃に竣工した。幹線道路は7間幅（約12.7m）、別荘家屋は42戸であった²⁹⁶。千ヶ瀧遊園地は1920年7月に開園するが²⁹⁷、年を追って野球場やテニスコート、遊泳場などの娯楽設備（No.2～10）が付設され、医局や発電施設（No.12, 13）も整備されたようである。馬場（競馬場）（No.11）は、1930（昭和5）年頃に南軽井沢に誘致されたが、千ヶ瀧には実現をみなかった。そして、1923年7月のグリーンホテル（No.14）開業の頃には、水道設備や街燈などを含めて基本的なハード面の整備はほぼ終えていた。

しかし、沓掛駅と千ヶ瀧を結ぶ鉄道、グリーンホテルと温泉浴場を結ぶケーブルカーの敷設（No.15, 16）は、結局実現されることはなかった。その要因として、1923（大正12）

年の関東大震災以後、箱根土地が東京郊外の住宅地開発に資本投下を集中させたことによって資金繰りの悪化したことが挙げられる。

以上をふまえて、1923年発行と推定される「千ヶ瀧遊園地区画図」²⁹⁸⁾をもとに、別荘地の空間構成に焦点を当てながら、形態や施設・設備の特徴をみてみたい(第5-12図)。ただし、この区画図は、「実際に開発された区画」と「計画段階の区画」が混在していると考えられる。後年の開発状況を復原した第5-13図の道路形態等と比較すると、前者はほぼ園内を南東方向に流れる溪流(以下、溪流と略)の以西、後者は以東に該当する。第5-13図は、土地・別荘の所有を検討する際にあらためて取り上げるが、区画図の特殊性をふまえて、ここでは2つの図をあわせてみていくことにしたい。

まず千ヶ瀧遊園地までのアクセスは、信越線沓掛駅からの経路が想定されており、7間幅の幹線道路を北上することで、千ヶ瀧南西部のエントランスにいたる。この7間道路は、従来の草津街道を部分的に拡幅したもので、堤が重視したインフラ計画のひとつである。徒歩や人力車が主流だった当時、道路は2間幅程度で十分であった。堤が回顧しているように²⁹⁹⁾、懇意であった元内務卿後藤新平との対話などから着想を得たもので、後に乗合自動車による来園者の送迎が行なわれたことから、新しい交通手段の利用を見据えた近代的な道路であったといえる。こうした時代の趨勢を見極め、積極的に取り入れていく堤の手腕は、千ヶ瀧開発において重要である。

つぎに園内の道路形態に注目すると、区画図から矩形の道路形態をみてとることができる。この形態は、大阪の池田室町・桜井など、初期郊外住宅の典型的な街区パターンと類似する。初期郊外住宅の幅員は狭く、自動車交通上の問題が表出したが³⁰⁰⁾、千ヶ瀧では高

規格の道路を敷設したことで、そうした点は問題にならなかったと思われる。しかしながら、後年の千ヶ瀧遊園地をみると（第5-13図）、矩形の道路形態は溪流以西のなだらかな地形の場所にほぼ限られている。つまり、標高1,000-1,200mに位置する起伏に富んだ傾斜地に位置する千ヶ瀧の地形的制約が、第5-12図で示した均質な矩形の道路網や街区開発計画を阻んだと考えられる。

別荘用家屋は、千ヶ瀧の傾斜地に点在するように建てられた。家屋には和風や和洋折衷など複数のタイプがみられ、間取は6～8畳と4.5～6畳の2部屋構成で、全体的に10坪程の簡素なつくりで、千ヶ瀧遊園地において特徴的な建築様式といえる。これらは当初、貸別荘として利用され、いわば住めるモデル別荘として機能した。

第5-12図の溪流以西において、『株式会社グリーンホテル千ヶ瀧遊園地写真帖』（1919年頃）掲載の貸別荘が42戸であることから、2～42までの番号が付された家屋は、貸別荘を示していると推察される³⁰¹。貸別荘は、一夏に1坪あたり10円で貸借され、「土地希望に試用の方は十坪から三十坪の炊事道具付貸別荘の用意があります」³⁰²と、別荘地購入前に千ヶ瀧の快適さを試しに経験する場となっていた。第5-12図で「☒」と示した「白樺の家」などの家屋は、とくに意匠を凝らしたモデル別荘で³⁰³、グリーンホテルの開業とあわせてホテルへ続く道路周辺の開発を企図として、医局と共に配置された。溪流以東であるこの周辺では1～103までの番号が付された区画が並ぶ。これは土地分譲を計画したものと思われるが、実際に分譲が進むのは1930年代である（第5-12図・第5-13図）。

貸別荘経営が行なわれる一方で、「すぐ住める簡易別荘」などと称され、小林一三が考案したとされる「建売式」で別荘が販売された³⁰⁴。この簡易別荘は、同時期の野沢別荘地に

において、住宅会社あめりか屋が富裕層向けに施工した豪華な家屋とはその意匠や建坪の規模も異なり（第5-14図）、知識・中間階級にとって利用しやすい避暑の場の提供を目指すという堤の理念が具現化されたものといえる。

つづいて、娯楽設備のレイアウトに着目すると、野球・運動場・テニスコート・遊泳場などのスポーツ活動の場は、エントランスを北上した幹線道路に面した街区に配置されている。比較的なだらかな地形の場所であることから、造成上の都合とも考えられるが、住空間としての別荘地のやや周辺部に配置されている。また、音楽堂（のちの講堂）も同様の区域に設けられており、娯楽活動から生じる「音」へ配慮したものと解することもできる。

スポーツや音楽を楽しむといったレジャー活動は、旧来の別荘地でも行なわれていたが、それらに興じたのは有閑・富裕層であった。しかし、大正・昭和戦前期にはそのような余暇の過ごし方は、次第に中間階級を中心とする都市住民にも親しまれるようになったことが知られている³⁰⁵。実際、大阪の近郊の鉄道沿線では、郊外住宅地開発が進むとともに「遊園地」も建設され、運動場・劇場・テニスコート・遊泳場、多目的に使用される展覧会場や講堂が配置された³⁰⁶。それらは、人々をレジャー活動へと誘うための舞台装置でもあり、従来の風光明媚な行楽地とは異なる娯楽空間を創造したのであった。つまり、同時代の都市近郊の近代的なレジャー空間でみられたこうした娯楽設備が、都市部と時間差もなく、むしろ先駆的に都市から離れた山間の別荘地に取り入れていたのであり、「山間の小都市」と見立てられるにふさわしい空間が千ヶ瀬にも出現したのである。

開発の核として位置づけられた温泉浴場（第5-15図）は、園内の中央に配置された。ス

レート葺の石造で、内部は「四方硝子に包つまれ、(略)産毛一本まで数えられて寧ろ恥ずかしさを感じず程」³⁰⁷⁾開放的でモダンな意匠が特徴であるという。近傍の「マーケット」とは、原価による商品の提供を謳う日用品販売店を指し、さらに「そこらには何々軒とか何々亭とかいふようなビヤホールや飲食店の建設地として標木が立ってゐる」³⁰⁸⁾と、都市的な飲食施設の立地も予定されていることから、このあたりが千ヶ瀧遊園地の中心部と推察できる。

宿泊施設としての旅館観翠楼とグリーンホテルは、眺望を重視して園内の奥まった高台に立地していることがわかる。このうち、1923年7月に開業したグリーンホテルは、最も高所に建設された「間口六十間ライト式三層の白亜館」³⁰⁹⁾であった(第5-16図)。「ライト式」とあるように、アメリカ人建築家ライト(Wright, F. L.)によって設計され1923年に開業した東京帝国ホテルの建築様式を流用していることがうかがわれる³¹⁰⁾。このように「白樺落葉松の森林を背景として緑の丘に一段と光彩を添え」³¹¹⁾る話題に富んだホテルが山上にあらわれることになった。

以上のように、千ヶ瀧の開発計画が実現していくなかで、郊外住宅地開発における街区設計思想や住宅販売手法、あるいは都市住民に広まりつつあるレジャー施設の併設など、同時代に提案された考え方・手法や、社会的趨勢を別荘地開発の文脈に取り入れていることは興味深い。ランドマークとなる温泉浴場やホテルにはモダンな意匠を取り入れるなど、都市住民の消費意欲を惹起する「近代性」の可視化が企図されていたのであった。一方で、豪華な形態の別荘家屋が野沢別荘地を中心に増加していたのに対して、それを都市中間層向けに簡素化し、商品化したことは特筆される。また自動車の普及を見据えた道路の敷設

は、後に千ヶ瀧と浅間山麓の六里ヶ原や万座温泉を結ぶ観光ルート策定にもつながり、たんに当該地域の別荘地開発に止まらない可能性を有していた。

小説家で旅行家としても知られる田山花袋は、避暑地に言及した1926（大正15）年の雑誌記事で、「都会の人達は兎角設備のあるのを好んで」おり、「いくら涼しくつても文化の至らないところ、食物のないところでは困るらしい」³¹²⁾と当時の風潮を端的に指摘している。宣伝広告において千ヶ瀧遊園地が、健康的な高原の自然環境と道路・水道・電気・日用品店・娯楽設備・医局など、快適な都市生活に不可欠な社会・文化的設備を整えた別荘地であることが常に強調され、「天然と人工が相俟った理想境」³¹³⁾と表現されたのである。このように、ディベロッパーたる堤と箱根土地は都市住民の嗜好を正確に読み取っていたと考えられる。

(4) 別荘地の拡大と土地・別荘所有者

ここでは、具体的な別荘地の拡大と別荘所有者の特徴を分析する。まず、「1923年」（第5-12図）、「1930年頃」、「1946（昭和21）年」（第5-13図）という3つの時点における土地・別荘の所有状況をみていく³¹⁴⁾。第5-12図の基図「千ヶ瀧遊園地区画図」には、個人の苗字が84区画に書き込まれており、それらの面積は約100坪から約3,600坪まで幅広く、合計約26,000坪が取得されている³¹⁵⁾。開園から1923年頃までに、新たに取得された区画は、幹線の7間道路沿いを避けるように、1ブロック西を南北に通る道路沿いに集中している。また、第5-13図の破線で示した部分は、1922（大正11）年に「千ヶ瀧文化別荘」として売り出された別荘の建ち並ぶ場所であるが³¹⁶⁾、和風や和洋折衷の建築を基調とする千ヶ瀧では珍しい

高価格帯の洋風建築であった。

1923年頃から1930年頃までに新たに所有された土地は、別荘生活を送るうえで利便性の高いマーケットなどが営業する中心部周辺のほか、観翠楼周辺や北部の奥まった閑静な場所で増加している。累計151区画（約65,000坪）が所有されており、貸別荘や建売別荘、あるいはモデル別荘と判断できるものは34軒ある³¹⁷⁾。さらに第5-12図では示されていないが、運動場の西側の土地も拓かれ、開発が進展していることがわかる³¹⁸⁾。1923年の関東大震災、1930年前後に発生した昭和恐慌影響で日本経済は低迷していたものの、千ヶ瀧では西方への別荘地の拡張が企図されるなど、所有された土地・別荘の分譲は着実に増加した。

つぎに1930年頃から1946年までの土地・別荘所有状況をみると、累計574区画（約250,000坪）が所有されている³¹⁹⁾。第5-12図における溪流以西の、区画に番号が付され「計画段階の区画」とみなした場所は、この時期になって分譲が進んだ。取得された土地は、計画段階で示された整然な形状とは明らか異なっており、前の時期と比べて、大きな面積の土地の取得も増加している。道路形態は、傾斜地に対応するためにカーブがおおく、計画段階と実態はかけ離れたものとなった³²⁰⁾。この時期には、グリーンホテルよりもさら高所において分譲地が増加している。とくに最北西から最北東の道路に沿って小規模な区画が点在あるいは集積している。これは箱根土地が1935～1937（昭和10～12）年に建設した100坪の土地付き簡易別荘と考えられる³²¹⁾。これらはサービス別荘と称して500～1,000円で販売された。またこの時期には、滞在者に対する催しの開催やその拡充が図られ、千ヶ瀧は賑わいを呈していた³²²⁾。

1939（昭和14）年発行の『千ヶ瀧山荘』から土地・別荘所有者の属性について検討をく

わえてみたい。『千ヶ瀧山荘』は箱根土地が発行した10頁構成の別荘地案内であり、諸設備・施設、娯楽を写真付きで紹介するほか、管見の限り、戦前期において土地・別荘所有者名が最も多く、かつ具体的に記載された資料である³²³⁾。合計436人の氏名が掲載されており、そのうち273人については身分・職業も示されている。同資料にくわえて、1939年の『日本紳士録 第43版』（交詢社）や『人事興信録 第12版』（人事興信所）を用いて28人を追加し、合計301人の身分・職業を示したのが第5-5表である³²⁴⁾。

株式会社の取締役や重役などの「会社役員」53人（17.6%）、社長や商工業主などの「会社経営者・事業主」36人（12.0%）、「その他の実業家」31人（10.3%）を加えた「実業家」が、土地・別荘所有者の39.9%を占めている。ついで「大学教員・学者」が52人（17.3%）と高い値を示す。そのあとには、医師・歯科医30人（10.0%）、会社員24人（8.0%）、官吏13人（4.3%）、著述家・画家13人（4.3%）と続く。土地・別荘所有者の特徴と前項でみた別荘地分譲の拡大状況とを関連付けるならば、日本経済が昭和恐慌から回復し、第二次世界大戦前で最も景気の安定した時期といわれる1930年代半ばを経て³²⁵⁾、千ヶ瀧の別荘需要を牽引し活況をつくりだしたのは、第一世界大戦後に財力をつけた実業家、大学教員、医者、会社員たちであった。なお、典型的な中間層とされる会社員は大手炭鉱・造船会社などに勤めており、また官吏には管理職につくものも多く、彼らの社会経済的な地位は高い。

つぎに土地・別荘所有者301人のうち、所得と居住地が判明した190人についてみていく。

『日本紳士録 第43版』、『人事興信録第12版』に記載された個人の所得税納税額を、身分・職業ごとに中央値で集計し、さらに推定年間所得額を算出したのが第5-6表である³²⁶⁾。戦前期の生活史を論じた岩瀬彰は、月収100円、すなわち年間所得1,200円を昭和戦前期におけ

る中間階級の「中」の水準であったとみている³²⁷⁾。

これらの基準をふまえると、千ヶ瀬の土地・別荘所有者は、経済的に裕福なエリート層とみなすことができる。堤の理念において対象とされた「知識階級や中流階級」は、広範囲な社会階層を念頭に置いたものと思われるが、現実に別荘生活を実現できた人々は、より上位層に占められていたことがわかる。しかしながら、別荘を所有できる階層は、確実に拡大したといえる。なお、人名録を用いても身分・職業の特定できない人々が135人いるため、土地・別荘を所有する社会階層の下限はさらに広い範囲に及ぶかもしれない。

つづいて、上述した190人の居住地を町丁レベルの精度で地図化したのが第5-17図である。190人のうち177人は東京市に在住し、郡部の2人を加えると、9割以上が東京府に居住していることになる³²⁸⁾。同表は、人数の少ない子爵・男爵(2人)、代議士(3人)、教育家(2人)は「その他」として示す。

実業家のうち、商工業の経営者は、東京の商業地の京橋区や下町の本所区に集中し、他は小石川区・本郷区一帯の山の手台地、芝区白金今里町周辺を居住地としていたことがわかる。郊外にあたる目黒蒲田電鉄、京王電鉄、小田原急行電鉄の沿線部の居住者も多い。職業別にみると、大学教員は、実業家と同様に小石川区・本郷区一帯の邸宅街のほか、山手線沿線の滝野川区田端、中央線沿線の杉並区阿佐ヶ谷や目黒蒲田電鉄沿線の荏原区中延町などの居住者である。会社員の場合、麻布区や郊外の鉄道沿線周辺を常住地としており、官吏は、会社員より郊外志向的であるのか、旧東京市に近接する目黒区や渋谷区、豊島区に住居を構えているようだ。また、弁護士・医師は旧東京市内、軍人は中野区・杉並区・大森区など、おおむね郊外を志向している。著述家・画家は、旧市内と郊外に半数ずつ、

その他は旧市内や旧市内の境界付近、郊外では世田谷区の西部や蒲田区など比較的離れた場所を居住地にしていた。

全体をみると、72人（41%）が旧東京市内の居住者であるに対して、郊外に居住するものは105人（59%）と、比較的郊外に居住するものが多い。旧市内の居住者は、かつて大名屋敷地であった、いわゆる「山の手」、あるいは白金などの台地上に、郊外では鉄道沿線に開発された郊外住宅地に居住する傾向がみられ、いずれも住環境として良質な場所である。つまり、これらの人々は、快適な居住環境を求めており、一般的な知識・中間階級より経済的に余裕があることから、スポーツ活動や避暑、旅行といった余暇活動に対してより積極的であったと考えられる。

すなわち、経済的余裕があり、一定期間休暇のとれる社会階層が、夏季休暇に快適な別荘生活を楽しむために、「天然と人工が相俟った理想境」と宣伝されるような千ヶ瀧遊園地に集ったといえる。また、職業上旧市内の建物や住居の密集した商業地や下町に住まわざるを得なかった実業家は、そうした場所から一時的に逃れ、高燥で冷涼な別荘地での滞在を志向したと考えられる。結局のところ、都市居住者としての志向性と、ほとんど未開であった土地を拓き、魅力的な遊園地たる別荘地に仕立てあげた堤と箱根土地による実践とが千ヶ瀧遊園地を成立せしめたといえよう。

第4節 日本人の台頭と欧米人の離脱

本章では、野沢源次郎とあめりか屋、そして堤康次郎と箱根土地株式会社によってつくりだされた計画にもとづく別荘地開発について、それらの開発理念や別荘地の物理的な形

態や諸設備、そして別荘所有者の社会経済的特徴について検討をくわえてきた。

野沢は、株式に代わる投資先として、土地に注目し、旧軽井沢の西側の原野を整備することを通じて別荘地開発に乗り出した。とくに、道路を敷設しながら、あめりか屋による豪華な別荘建築をつくった。それだけでなく、マーケットには東京に本店をもつ飲食店や雑貨店、横浜のホテルを誘致した。さらに土地を提供することでゴルフ場、通俗夏期大学をも別荘地に出現させた。一方、堤と箱根土地は、従来の避暑地や別荘地のあり方を批判し、別荘を独占的に所有してきた有閑・富裕層ではなく、知識階級や中間階級にこそ広く、簡易に利用されるべきであるという理念を掲げ、千ヶ瀧遊園地を計画した。すでに避暑地・別荘地として評判であった旧軽井沢と同様に医学的観点から避暑地としての条件を評価しつつ、樹木の多様性、豊富な水、標高の高さと眺望の良さ、温泉の存在という点で千ヶ瀧の方がまさっていると、位置づけていたことがわかった。

別荘地開発は、都市住民を対象に宅地の分譲、諸設備の充填をなすような方向性で行なわれた。このような計画的な別荘地開発の手法は野沢がまず導入したのであるが、千ヶ瀧ではよりいっそうこの方針が明確になった。千ヶ瀧遊園地は、たんに別荘を建てるだけの別荘地ではなく、温泉浴場や旅館・ホテルを配置し、スポーツなどの活動的な機会も提供する場所として開発が目指された。開発には、街区設計思想、住宅の販売手法、モダン建築など、都市住民に浸透しつつあったのスポーツ設備など、同時代に提案された考え方・手法、社会的趨勢を、別荘地開発の文脈に取り入れていたことがうかがわれる。野沢別荘地に出現した豪華な別荘家屋に対して、千ヶ瀧では100坪の土地付き簡易別荘が商品化されるなど、簡素さを基調としている点も特徴的である。

これらの点は、軽井沢における第Ⅰ・Ⅱ期の別荘地形成とは異なり、人々を千ヶ瀧に惹きつけるための意図的な販売戦略であり、新しい別荘地形成をうながす要因として注目される。このことは、有閑・富裕層の受容した避暑と別荘の所有という社会的・文化的実践が、日本人都市中間層を対象とした土地会社による別荘地開発戦略に取り込まれたことを物語っており、先行研究では看過された第Ⅲ期の軽井沢における別荘地開発の際立った特徴として指摘できよう。

しかしながら、千ヶ瀧に土地・別荘を購入した人々は、堤らの掲げた理念とは裏腹に、都市中間層よりも所得水準の高い実業家や大学教授、医師、会社員、官吏などの都市エリート層であることが明らかになった。この理念と現実とのズレは、開発構想だけでなく所有者の社会経済的特徴にまで踏み込んだ分析から得られた知見である。千ヶ瀧においても一般大衆には手が届かなかったとはいえ、別荘を所有できる階層は着実に拡大したといえよう。土地・別荘所有者の多くは、旧東京市西部の台地、鉄道沿線の郊外という良質な環境に居住している。このことから、より快適な生活環境を希求し、経済的な余裕からスポーツ活動や避暑、旅行といった余暇活動にも積極的な人々の志向性と、そうした人々を惹きつける堤と箱根土地の実践とが千ヶ瀧遊園地をつくりだしたといえよう。東京郊外や山の手のような都市の居住地と別荘地千ヶ瀧は、静謐で良質な自然環境のもと快適に住むことを実現するという点において、共通した場所の特質を有していたのである。

建築史の藤谷陽悦によれば、計画にもとづく別荘地の萌芽と位置づけられるのが、1912（明治45）年より開発の始まった箱根強羅別荘地である。同所は三井物産の益田孝を中心に三井・三菱系の財界人による茶の湯を媒介にした、やや閉鎖的な文化的なサロンの場と

いう特色をもつ³²⁹。他方で、野沢別荘地は、爵位をもつような貴族的な別荘地となったのであった。あめりか屋の供給する豪華な別荘、会員制のゴルフ倶楽部の開設などが象徴的である。とくに後者について歴史地理学の佐藤大祐・斎藤功が指摘しているように、軽井沢の過度な「高級化」を加速させた³³⁰。これらの「高級」志向の別荘地が誕生する一方で、千ヶ瀧遊園地は、このような旧来の別荘地に対する批判から構想された新しい別荘地と位置づけられる。

この点について、千ヶ瀧遊園地を「質」という視点から言及するならば、戦前の沓掛で商店を営んだ土屋治平によると、千ヶ瀧の別荘生活は「質素」であったという³³¹。また、千ヶ瀧に別荘を所有した医師吉岡彌生は、「ただ徒に安逸を貪る贅沢な別荘生活」をするような「貴族富豪の所謂軽井沢人種でな」い人々が多いことを千ヶ瀧の特徴として挙げている³³²。このような語りから千ヶ瀧遊園地は、簡素な家屋に象徴されるような別荘地の理念と、エリート層であるものの、過度に贅沢な別荘生活に迎合的でない人々が別荘所有者であったため、野沢別荘地や旧軽井沢とは質の異なる別荘地となった、と解することができる。

箱根強羅別荘地や野沢別荘地において、計画的に整理された土地区画などがみられるものの、千ヶ瀧はよりいっそう同時代に提案されたさまざまな考え方や社会的趨勢を、意識的に別荘地開発の文脈に取り込み、より大きな空間的なスケールにおいて実現したことも大きな特徴といえるだろう。第Ⅲ期の計画にもとづく別荘地のなかでも、野沢別荘地はそのまさに先駆けであり、千ヶ瀧遊園地によってこの時期の別荘地開発手法は確立されたといってもよいだろう。

以上のような大正・昭和戦前期の軽井沢に形成されることとなった2つの計画的な別荘地は、日本人富裕層や新興エリート層を軽井沢に呼び寄せることになった。密接に関係するのは、第一次世界大戦後の好景気であろう。「即ち戦争の結果として内地人の間にも所謂俄富豪（成金）を生ずるに至り、此等の人々は競ふて軽井沢に土地を求め、又別荘を建築せんとし、之が為に内地人の避暑客急増の情勢を醸り」と、軽井沢に「贅沢化」の進行したことに對して批判的な声があがった³³³。地価は「最初外人の手に入るゝ当りては、一坪僅かに三四錢乃至十一二錢位にて得たる土地も、今は十円を以て普通相場とし、便利衛生風景等の好みにより、位置を選ぶに於ては、三十円五十円の売買を見るに至れり」³³⁴と、その高騰の様子が同時代の記述からも明らかである。

とくに旧軽井沢方面では、貸別荘の賃貸料が高騰していた。1922年6月6日の『信濃毎日新聞』には「軽井沢の貸別荘モウ全部契約済家賃は素敵に高い」と見出しが踊り、「……もう別荘の貸借は大体済んだそうであつて今年の家賃は驚く程高く、六畳二間と二階付で月三百五十円と云ふ高値、又六畳一間と土間玄関付きで驚く勿れ七十五円の屋賃」と報じられた³³⁵。野沢別荘地には希望者が続出し、39軒の別荘が新たに建設されたというから、野沢別荘地はこの時期における避暑客の受け皿となっていたと考えられる³³⁶。

こうした結果、一部の外国人たちは軽井沢から離れ、野尻湖などに避暑する動きをみせる。『東京朝日新聞』では、「目下軽井沢避暑しつゝある外国人は二千九百二十七名の多きに達し居れるが是等多くの人達は軽井沢が漸く俗化すると共に旅舎其他の物価非常に高く是が為に軽井沢を免れて他の幽邃なる地点を求むるものが漸く多くなり信州野尻湖畔の如きは明年夏期までには六十戸の外人村が建設される計画が出来た」³³⁷と「軽井沢の俗化」

と形容して、外国人たちの動向を報じた。このような外国人離れが生じた背景として、地元住民の対応も変化したことも指摘されている。

土地の人々は、之が為に土地に金銭の落つること多き結果を見るが故に、自然此等の人々を歓迎し、外国人宣教師にして、地味に避暑を目的として来り、安価に生活をなし、その間に読書研究をなさんとし、都会の生活を、此の地に移したるまでに過ぎざるが如き程の生活をなさんとするものを、歓迎するの度は、次第に薄らぎ行くの傾向を生じ来れるに至れり³³⁸⁾。

以上の軽井沢で生じた一連の動向は、地元住民の行動の変化とも関係していることから、旧軽井沢周辺から野沢別荘地において生じたと考えられる。これに対して、地理的にもやや距離のある千ヶ瀧遊園地は、殊更に質素な別荘地として位置づけられよう。野沢別荘地と千ヶ瀧遊園地は、日本人が主体となる避暑地として別荘地空間を拡大させた一方で、軽井沢の質的な変容を孕むこととなったのである。とりわけ、土地価格や別荘貸借料の高騰や「高級化」に対して、拒絶反応を示した一部の外国人は、新天地を求めて野尻湖畔などに別荘地をつくりだした。軽井沢において新たに形成された別荘地は、ほとんど日本人によって占められており、内外の勢力関係は空間的にも反映されているのである。

第6章 別荘地の地理的再編と近代〈軽井沢〉の成立

軽井沢に対する感想と云ふても今となつては軽井沢と云ふ名が可なり広い地方を含めた事になつたから感想も区々で一概には述べられない³³⁹⁾。

(東京帝国大学教授 高橋禎造 (1936)「感想」)

本研究では、現代の日本において避暑地や別荘地、さらに観光地というさまざまな貌をもつ軽井沢の成立と発展の契機を近代化期に求めた。そして、近代化期の軽井沢において特徴的に見いだされる「療養地」「避暑地」「別荘地」という局面が、いかに軽井沢と結びつけられたのかを陸軍脚気転地療養の利用、避暑地の発見における外国人と日本人富裕層の環境認識と場所の経験、都市大型資本の計画的な別荘地開発の事例から検討してきた。本章ではこれまでの議論をふまえて、軽井沢で生じた諸変化を地理的編成過程として構造的にとらえなおし、空間的過程の総体としての近代〈軽井沢〉の成立について考察する。そのためにもまず、「療養地」「避暑地」「別荘地」の関係を時空間的に整理したい。

第1節 軽井沢の時空間的な変化

(1) 療養地と避暑地の成立

江戸時代において軽井沢は、碓氷峠越えの人馬でにぎわう中山道の宿場町として発展した一方で、高地に位置し冷涼な気候であったことから農作物がほとんど生育しない荒原のひろがる寒村と認識されていた。

このような軽井沢のネガティブな場所イメージの変容は、外国人避暑地に先駆けて陸軍の脚気転地療養地となったことではじまった。このことには近代西洋医学に基づく疾病観や環境観の変化が密接に関わっていたのである。陸軍の脚気転地療養は、1870年代半ばまで温泉地における入浴療養が特徴的であったものの、1870年代後半以降はそれにくわえて温泉のない海浜、平野、とりわけ山間が転地療養地として選定された。こうした変化は夏季の暑気、不潔な空気、黴菌を脚気の原因とみるミアズマ説などの西洋医学的見解が有力視されたこと、脚気の治療に良質な空気を不可欠とする見解が気候療法とともに受容されたことで生じた。

この社会的な文脈のなかで、冷涼な気候を有する軽井沢が評価され、東京鎮台に所属する陸軍兵士の脚気転地療養地となったのである。つまり、近代化期の軽井沢と東京の関係は、療養を媒介として結びつれ、夏季から晩秋にかけて行なわれた転地療養は、軽井沢における長期滞在の最初の契機となったといえよう。療養地としての評価は、軽井沢の気候が脚気以外の疾病に対しても効果であるという言説によりさらに高まっていく。ここでいう療養地の中心となった「軽井沢」とは、宿場町の休泊機能が残存した「旧軽井沢」を指していた。

陸軍を主体に軽井沢が療養地として構築されはじめた1880年代には、外国人というまったく別の主体が旧軽井沢に滞在しはじめ、「避暑地」の価値を見いだしていった。彼らはたんに夏季の暑気や湿度を避けるだけではなく、伝染病などに対する忌避意識から軽井沢を訪れていたのである。つまり、伝染病のリスクを低減させる冷涼で清澄な気候のもと安全な場所感覚のなかで、療養というよりはレクリエーション活動を通じて軽井沢という場

所を経験したのである。

他方で、外国人たちに続いて軽井沢を訪れた日本人有閑・富裕層は、当初は療養に重きを置いて滞在しており、脚気に端を発する療養地的側面を利用していたといえる。また、軽井沢での温泉入浴を介さない避暑のあり方に疑義を呈しながらも、次第に冷涼で清澄な空気のもとで過ごすことを受容した。療養と避暑は完全に線引きできない部分もあるが、確かなのは、外国人と日本人にとって軽井沢は、健康の回復・維持・増進に好影響を与える場所であり、環境認識の変化と軽井沢の直接経験によって社会的文化的につくられたといえよう。療養地という局面は、療養を主たる目的としない来訪者が増加し、スポーツなどの集団的なアクティビティを中心とする避暑の側面に圧倒されたことで、次第に後景へと退く。ただしここで強調しておきたいのは、療養地としての側面は軽井沢を価値づける重要な要素として、別荘地開発の宣伝などにあらわれることである。

外国人と少数の日本人有閑・富裕層を中心に、夏季の滞在拠点として別荘が集積したことは、避暑地を物理的・空間的に拡大させた。季節的に限定されるとはいえ、ある種の定住的側面をうながしたのである。この変化にともなうように、夏季に生活するための生活必需品を販売する地元商店、あるいは洋服や靴や骨董品などを販売する外国人向けの店舗が東京や横浜などから旧軽井沢のメインストリートに出店してきた。その結果、明治末期には旧軽井沢を取り巻くように、別荘に特色づけられる居住空間としての外国人避暑地が整えられたのである。

大正期以降になると、台頭する日本人避暑客を受け入れるため、避暑地軽井沢にはさらに多くの別荘が集積することとなり、東京の郊外的な空間としてますます拡大していく。

(2) 別荘地の拡大による避暑地の空間的拡張

第5章で論じた野沢別荘地と千ヶ瀧遊園地の開発をいまいちど位置づけるのならば、療養地として評価され、ついで外国人の避暑の拠点として別荘の集積した「旧軽井沢」で醸成された諸要素を計画的な別荘地開発という形で敷衍させたものである。つまり、旧軽井沢に発端をなす「療養地」「避暑地」「別荘地」という局面を物質的かつ空間的に拡大させたことになる。その点において、旧軽井沢に隣接した野沢別荘地、沓掛にあらわれた千ヶ瀧遊園地は、「軽井沢」という範囲を拡大させた象徴的な事例といっても過言ではない。しかしながら、軽井沢の空間的な拡大に寄与するのは、野沢別荘地と千ヶ瀧遊園地の開発にとどまらず、このほかにも避暑客の受け皿となる別荘地の造成や施設の拡充が進行していたのである。野沢別荘地と千ヶ瀧遊園地と同時期の大正・昭和戦前期に進行した諸種の開発は前二者と比較すれば小規模であるものの、近代〈軽井沢〉の成立を担う局面をあらわしている。ここではまず、それらの開発の特徴を概観する。

第6-1図は、大正・昭和戦前期以降に開発された別荘地の分布状況を示したものである。地図中には、開発年代の古いものから順に①から⑦まで番号を付した。まず、開発の先鞭をつけたのは、北佐久郡岩村田町で製材業を営んでいた星野嘉助であった。彼が目をつけたのは、草津温泉の湯治でただれた皮膚を治すために親しまれていた低温の温泉が湧く赤岩鉱泉であった³⁴⁰。そこを改良し、1913（大正2）年から星野温泉と称して温泉旅館の経営をはじめ、貸別荘業も営んだ（第6-2図）。星野温泉には「からまつ」の詩を発表した北原白秋や与謝野鉄幹・晶子、山本鼎などの詩人や画家が集まるようになり、知名度は高まっていく（①）³⁴¹。このあとに野沢別荘地（②）と千ヶ瀧（③）の開発がつづいた経緯につ

いては、先に詳述したとおりである。

1920年代以降、「南軽井沢」とよばれる軽井沢駅の南側も開発されていった。第6-3図は1912年頃、第6-4図は1937年頃の土地景観を示したものである。両図の中央には「雨宮新田」という雨宮敬次郎による開墾地がある以外、一帯は荒地や湿地であった。他方、「南原^{みなみはら}」と「南ヶ丘」の形成される場所には針葉樹林の記号がみられる。これは雨宮が植林したカラマツであろう。さらに南に位置する馬越集落はほとんど湿地となっている。このあたりが堤らの拓いた南軽井沢別荘地である。行政上は「軽井沢町」ではなく「西長倉村」であるものの、隣村を含めて軽井沢化の進む様子がうかがわれる。

まず、④の堤らの開発をみていく。ここは堤が後藤新平からの助言を受けて20間道路〔約36m〕を敷設した後に、造成された別荘地である。1924（大正13）年9月には、翌年3月までに別荘を建てることを条件として土地を無償で譲渡する旨が発表された³⁴²⁾。1925年の広告では、「南軽井沢は軽井沢より坦々たる廿間道路を南へ約廿丁雄大な甲信の大連峰を一眸に収むる清澄な高原」であると謳い、1坪を6円60銭で販売している³⁴³⁾。もともと湿地帯という土地条件の悪さが影響してか、1939（昭和14年）時点で千ヶ瀧には426人の土地・別荘所有者がいたのに対して、こちらはわずかに21人に過ぎなかったものの、実業家・大学教員・官僚などが名を連ねた³⁴⁴⁾。別荘地分譲だけでなく、押立山の山頂には「南軽井沢ホテル」、周辺には「南軽井沢アパート」が建造されたが、あまり発展しなかったようだ。しかし、「牧歌的な南軽井沢高原」というキャッチフレーズで紹介されているように、一面に原野の広がる景観は、軽井沢のなかでも高原らしさを感じさせる場所である（第6-5図）。

⑤の南ヶ丘は、第5章で言及したように、「軽井沢ゴルフ倶楽部」（新ゴルフ）の開発とと

もに分譲された別荘地である。1930年になると、細川護立・近衛文麿・三井弁蔵らを中心として、9ホールにとどまっていた野沢別荘地のゴルフ場を拡張することが提案された。そこで、ひろい土地が探された結果、南軽井沢の雨宮家の所有土地と隣接地とを合わせた約57万坪が購入予定場所となった。同地の約22万坪を別荘分譲地として販売し、その売上で、土地購入代金用の借入金と利子が賄われたのである。宮原安春によれば、1932年の「分譲地引受人名簿」には、120名の名前が掲載されており、外国人はわずかに2名だったという³⁴⁵⁾。このことから、ゴルフ場開発はほぼ日本人富裕層によって実現をみたといえる。同年、財団法人南ヶ丘会が発足され、造成したゴルフ場を同会に寄付する形であらためて「軽井沢ゴルフ倶楽部」が営業を開始したのである³⁴⁶⁾。

南ヶ丘の東部に位置する南原みなみはらには、「友達の村」(⑥)がつくられた。この周辺は雨宮敬次郎の妻信子筋の義弟にあたる軽井沢出身の市村今朝蔵の所有地であった³⁴⁷⁾。市村は日本女子大学や早稲田大学の教授をつとめた人物である。市村の妻きよじによれば、1932年の春、彼は50歳になったときに故郷の軽井沢へ戻りたいと話し、自分一人ではつまらないから友達を呼び寄せたいと話していた³⁴⁸⁾。これが「友達の村」をつくるきっかけである。市村が最初に声をかけたのは、第一高等学校と東京帝国大学の同窓生で旧知の仲の我妻栄・蠟山政道・松本重治であった。この地に別荘を希望する人々は、彼らの交友関係のネットワークのなかで増加し、きよじの回想では1934年の時点で前田多門(政治家)、吾妻光俊(民法学者)、出光佐三(実業家)など10人以上の名前が挙がっている。友達の村は大型資本によって開発されたものではなく、個人による計画とその交友関係のなかで形成されたサロン空間としての性格をもち、これまでにはみられない新しいタイプの別荘地である。

南原の友達の村と同時期の1933年には、「前田郷」(7)も姿をあらわした。ここは愛知県出身の実業家で、鉄道関連の土木建築業を営んでいた前田栄次郎が建設業者の親睦のために造った会員制の貸別荘である³⁴⁹⁾。『*Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1943*』の別荘案内図を確認すると、二十数件の家屋が描かれている。友達の村と前田郷のほか、野沢別荘地のなかにも政治家の鈴木喜三郎が「政友村」をつくったことも同様の動きとみてよかろう。

以上のように、1910年代から1920年代に星野温泉、野沢別荘地、千ヶ瀧遊園地、南軽井沢の開発が進行し、1930年代には南ヶ丘、南原、前田郷が開発されたことになる。つまり、旧軽井沢から西部へ、ついで南部や北部へと別荘地が空間的に拡大したといえよう。明治期末までの別荘は、おもに旧宿場町を取り巻くように立地するのみであったが、大正期以降、個々の計画的な別荘地が面的に造成されていくことで空間的な総体としての近代〈軽井沢〉が形づくられていったのである。

第2節 中心-周辺構造からみる近代〈軽井沢〉

(1) 都市形成における中心-周辺構造

近代〈軽井沢〉を形づくる別荘地開発は、東京の都市型資本が進出したことで計画的になされるようになり、その実現に際して都市で醸成された知識や技術が用いられた。さらに自然環境を都市居住者の嗜好に合わせて演出し、避暑生活を豊かにする設備や施設も整えられていく。そして、さまざまな主体による開発の結果、誕生した別荘地の社会地理的な特性は異なるものとしてあらわれたのである。このような各別荘地の特性は、第 6-1 表

のようにまとめられよう。これらは、いわば総体としての〈軽井沢〉を構成する空間的な断片であり、それらの地理的位置や別荘所有者の属性などにより差異化され、別荘地空間として構造化されていったと考えられる。

このような軽井沢で生じた空間再編を理解するために、散在する空間的な断片としての別荘地群を「中心-周辺」という構造としてとらえ、それぞれの別荘地の質的な位相について比較検討を試みたい。ここでの「中心-周辺」構造とは、近代都市の発達過程において析出できるものである。すなわち既存市街地を「中心」とした都市化が外延的・空間的に進行し、その過程で外延部には「郊外」とも称される「周边的」な空間が出現した。これらの都市構造は、地理学では一般に中心地からの距離によって規定される。

上述した構造は、軽井沢に夏季居住者を送りだした母都市としての帝都・東京都市周辺部にも看取することができる。すなわち、旧東京市の居住地と商業地などの混在する地域が「中心部」である。一方、「周辺部」として位置づけられるのは、とりわけ、1923年に発生した関東大震災以降、郊外住宅地の理想的な住環境と目された中野区・杉並区・世田谷区・荏原区など、旧東京市の西方の、いわゆる「郊外」である。

本研究の最終的な目的は、都市機能の「保養」的側面の空間的な拡大とも措定された別荘地において、都市との関係性はどのような秩序としてあらわれるのかを問うことであった。つまり、以上で指摘したような都市的な構造が都市との関係性の表徴として、近代〈軽井沢〉に特徴的に見て取れるのではないかと考えられる。

第6-1図と第6-1表で示した別荘地を、あらためて「中心-周辺」という構造的な観点からとらえてみよう。まず地理的な「中心部」として位置付けられるのは、最初期には療養地

と目され、ついで避暑地としての強度を増し、さらに滞在拠点として別荘が集積した「旧軽井沢」である。ここは〈軽井沢〉発展の契機となった場所であり、外国人を中心に発展し、日本人も次第に増加した避暑地の中心部といえる。メインストリートには商店街が形成され、この一帯はさまざまな活動や交流、あるいは遊歩の場としても中心性を有する。

つぎに「周辺部」に位置づけられるのは、最初の計画的な別荘地「② 野沢別荘地」である。野沢源次郎は、軽井沢そのものを土地投機の対象地として、東京の「田園的」、あるいは郊外的な空間と見立てた。それだけでなく旧軽井沢に対して、郊外的な側面を有しているととらえることができよう。

さらに「周辺部」として、「③ 千ヶ瀧」を位置づけることができる。ここは旧軽井沢や野沢別荘地とは異なり、都市中間層向けに開発された場所で、野沢別荘地よりも一層明確に都市部周辺における郊外住宅地の開発が取り入れられた。前二者に対して地理的に距離があるだけでなく、「遊園地」として完結しうる別荘地となっており、いわば別荘地の「郊外」ともいうべき特性を帯びた場所とみなすことができる。その他には、軽井沢で唯一の本格的な温泉旅館「① 星野温泉」がある³⁵⁰⁾。ここは詩人や芸術家がよく訪れる場所となり、軽井沢のなかでも雰囲気異なる。「④ 南軽井沢」は、千ヶ瀧開発ほどには発展しなかったものの、「郊外」の別荘地に位置づけられる。「⑤ 南ヶ丘」は、野沢別荘地の北部のゴルフ場が手狭になったために移転してきたと考えると、離心的作用として「郊外化」と位置づけられよう。そして、「⑥ 友達の村」と「⑦ 前田郷」は、別荘地の郊外化が進む文脈のなかで、親しい間柄の人々あるいは同業者で交流することを主眼として誕生したメンバーシップ性の強い別荘地である。

以下では、これらの「中心部」と「周辺部」における別荘地の地理的編成を文学作品、避暑客や別荘所有者の語りから浮き彫りにしていく。

(2) 周辺部の「高級化」

通例、都市の中心-周辺関係の論述は、中心から周辺へと視点を移動させていくが、〈軽井沢〉の場合、たんに中心部の外延的な拡大によって周辺部が生産されるというよりは、旧軽井沢に隣接するか、そこから距離のある場所が、避暑客を受け入れる別荘地へ変容していくにしたがい、結果的に旧軽井沢がいつそう中心性を強めることになる。そこでまず、軽井沢に新たな変化をもたらした「周辺部」の野沢別荘地から考察していくこととしたい。

近代文学史の笹尾佳代は、作家の菊池寛が1924年に発表した軽井沢を舞台とする長編小説『陸の人魚』の設定に、「資本の力に支配された軽井沢の姿」を見いだした³⁵¹⁾。このことが明確にあらわれている場所こそ、作品の舞台となった野沢別荘地 (㊟) であり、ここには別荘所有者の資本力や社会的な身分が空間化されているという。

『陸の人魚』の中心的な登場人物は、従姉妹の関係にある藤島家の令嬢麗子と敏子である。麗子の父は、失脚し影響力をほとんど失った政治家である一方、敏子の父は、三井系の実業家として、「成り上がった」成功者として描かれている。彼女たちの出自をみると、当時の軽井沢に別荘をもつことのできるような富裕層の家系に属しているのであるが、「一方の家がおとろへ、一方の家が栄える」状態である。そのようななかで麗子が物語の冒頭で、気の乗らないまま妹とともに向かうのは、彼女の叔父、つまり敏子の父が所有する軽井沢の別荘である。この別荘は、「去年まで毎夏葉山へばかりいつていゐたが、海にも飽い

た」ため、新築されたという設定をもつ。麗子と敏子は幼い時分より確執があり、それを一層険悪にしたのは、両家のおかれている境遇なのであった。麗子の本心は「誰が軽井沢まで出かけて、敏子さん達の栄華に傲^{おご}っている姿を見せつけられてたまるものか」³⁵²⁾というものであった。

麗子たちが軽井沢駅に到着したときの車夫との会話では、目的地である藤島の別荘は、「ゴルフリンク下」の「今年初めから、立派な洋館をお建てになつた家」と語られている³⁵³⁾。そして別荘に向かう道中には車夫は、麗子たちに「壮麗な建物を指しては何某侯爵の別荘だとか、何某子爵の別荘だとか、うるさいほどに教へ」るのであった³⁵⁴⁾。到着した藤島邸の外観は「大きい洋館」で、「黒い独逸塗りの壁に、白亜塗りの窓枠がけざやかに見える二階建ての立派な建物」であるというから、道中に目に入った「壮麗な建物」に引けを取らないほどの別荘建築であることがうかがわれる。

野沢別荘地の「ゴルフリンク下」とは、「御水端」の周辺であろう。ここには旧加賀藩前田家、戸田伯爵家、やや北部には細川家、徳川家の別荘が立地する場所である。この場所に別荘を有していることは、敏子の父の社会的な地位を端的に示している。『陸の人魚』では、貴族や有力政治家などの特権的階級でなくとも、新興の富裕層でも資産を有しているのであれば、別荘を所有することができる場所として、野沢別荘地が描かれているといえよう。

野沢が荒地であった場所を経済的・投機的価値を孕んだ空間につくりかえるなかで、参照しているのはやはり中心部・旧軽井沢である。もともと旧軽井沢に集積した外国人別荘は、簡素な木造家屋で、そこで営まれる生活自体も贅を尽くすようなものではなかった

が、野沢は道路や景観整備をしつつ、同時に避暑という行為の拠点となり、外形的特質としての別荘を、大型化かつ高級化した。その象徴的なものがあめりか屋製の豪華な別荘である。こうした舞台装置の演者として利用されたのが爵位をもつ貴族であり、主たるターゲットとなったのは第一次世界大戦の軍需景気で生じた「成金」たちであった。以上のよう中心部の旧軽井沢をより高次の商品化とするために、野沢別荘地は「高級さ」で彩られる別荘地として計画的に生み出されたと考えられる。後述するが、創出された「高級」なるものは、〈軽井沢〉の変化の突端となり、「中心部」を浸食していく。

明治末期から軽井沢に訪れていた小説家の正宗白鳥は、軽井沢ホテルを定宿にしていたが、1920年代になると野沢別荘地の一角に滞在するようになった³⁵⁵。彼は6年ぶりに訪れたという軽井沢について、「近年は日本の貴族富豪が相ついで別荘を建てるやうになつて、外人の方が却つて逃出すやうになつた」と指摘し、「贅沢な避暑の習慣」の流布を嘆く。さらに軽井沢の地価に関して、以下のように記している³⁵⁶。「以前は不毛な役に立たない土地だった軽井沢も、近年避暑地として利用されるやうになつたので、地価が生じた。大富豪小金持が自分の別荘建築用の地所を買込むばかりでなく、他日の地価の騰貴を見込んで買つてゐるのが少くないさうだ」³⁵⁷。正宗の観察は、前章で引用した資料の記述とも合致しており、野沢源次郎の思惑どおりの状況が軽井沢にもたらされていたのである。野沢別荘地は、〈軽井沢〉に対して、「贅沢な避暑地」という見方を定着させる象徴的場所としての役割を果たしたと断言できよう。

軽井沢が土地投機の対象となっている状況については、作家の近松秋江も批判している。彼は軽井沢の「……地価などは、無償も同然であり、従つて所有しようと思へば、いくら

でも安く買ひ占めることが出来たために、利に敏い実業家などが広漠たる地域を占領して、地価をせり上げるために軽井沢の好適地たることを宣伝これ努めた」と看破する。さらに、「……それらの資本家連の商略の図に巧く乗せられて、山の避暑は軽井澤でならなければならぬものゝ如く雷同」する群衆心理が組み合わされることで〈軽井沢〉が構築されるとみなし、好ましくないと論難しているのである。近松の批判の論点は、「商略」と「群衆心理」とがつくりだす、いわば虚像としての〈軽井沢〉ともいえる。これは鄙びた軽井沢が都市住民に向けて商業的につくりだされ、消費される場所としての側面を加速していった状況を示していると理解されよう。

(3) 「銀座化」する中心部

「周辺部」の野沢別荘地は、都市における新興富裕層と土地投資、さらに別荘の所有を結びつけることに成功した結果誕生した。こうしたなかで、「中心部」たる旧軽井沢はどのような場所となっていたのであろうか。第2章で概観したように、旧軽井沢では旧宿場町を取り巻くように外国人別荘が分布したが、旧軽井沢愛宕山下における別荘地所有者は、1920年頃になると外国人から三井系などの日本人実業家へと変化していく³⁵⁸。それだけでなく、野沢別荘地に出現したあめりか屋建築の意匠は、地元大工の後藤工務店が施工した別荘にも取り入れられたことで、旧軽井沢に派生していった³⁵⁹。こうしたことから、野沢別荘地は〈軽井沢〉の変化の突端として影響力をもつ場所であったことがわかる。

ここではまず、〈軽井沢〉における避暑客数と別荘軒数が、中心-周辺の構造にどのようなあらわれているのかをみていく。明治期末の1911年から昭和初期の1933年の数値は、旧

軽井沢で商店を営む稲垣虎次郎の著作で知ることができる³⁶⁰。それによると、避暑客数は、1911年で日本人1,080人に対して、外国人888人であったものが、1930年には日本人5,769人、外国人1,565人、つまり日本人は約6倍、外国人は約2倍となり、日本人の増加が著しい。外国人数は1918年以降、おおよそ1,300～1,400人で安定化傾向を示す。他方、別荘軒数は1911年では175軒であったものが、1930年には819軒となっている。

つぎに1936年の「軽井沢発展座談会」において³⁶¹、地域別の別荘軒数が報告されている。それによると、別荘は全体で1,303軒、旧軽井沢に731軒（56%）、千ヶ瀧367軒（28%）、沓掛101軒（7.8%）、新ゴルフとその他104軒（7.9%）という内訳になるという。旧軽井沢の数字は、野沢別荘地も含む値であろう。野沢別荘地の別荘軒数は1943年時点で184軒、明治末の旧軽井沢のそれは175軒であるから、350軒以上も増加している計算になる。つまり、旧軽井沢は〈軽井沢〉が空間的に拡張するなかでも「中心部」として別荘軒数を集積させていたということである。こうした活況を反映してか、旧軽井沢のメインストリートは「軽ブラの夕」という記事で以下のように表現されている。

オクシヨンのドラが町を越へて原の方まで響いて行く夕。セーラパンツのモボが軽羅の裾をビラ／＼とはねて歩くモガ。ハツピコート、自転車、自動車、車、人力車、犬、懐中電燈ブラ／＼提灯、靴、下駄、草履オールバツク、断髪、眉墨、のフラツシユバツク。誠に軽ブラの夕は華やかだ、東都の銀ブラにも見られない図が展開されて思はず往来に見とれて立つ事もある。日本の娘の洋装もやつと板に着いて来て見苦しくない処か、大変美しい姿をみせてゐる〔。〕 本年は雨が多かつたので軽ブラも賑や

かではなかつた³⁶²⁾

旧軽井沢は、『かるみざわ』で描かれていたように（第2章）、明治期から「軽井沢の心臓とも云うべき大通り」で、京浜阪神などから夏季のみの出張店が営業していた。メインストリートには大正・昭和初期の西洋文化に影響されて生まれたモダンガール、モダンボーイだけではなく、日本人・外国人避暑客、女中、別荘番、人夫、植木屋、大工、店員、学生など多様な属性を有する人々が行き交い、タクシー、人力車、そして犬までも通りすぎていく雑多であるけれども、思わず見入ってしまうよう光景が「銀ブラ」ならぬ「軽ブラ」と称されているのである。作家の室生犀星も「軽井沢の町は銀座のはずれをうつしたような出張商店街」と記している³⁶³⁾。先に取り上げた『陸の人魚』の景観描写では「別荘にきている内外人は銘々の散歩に出る。愛宕山のすぐ下に在る旧軽井沢の街には美しい人波が流れる三、四町しかない町を人は南から北に、北から南に往き還る。両側は横浜や神戸あたりの外国商人が一ぱいに仮店を開いている」と描かれた。軽井沢では、日中はテニスかゴルフ、乗馬やハイキングをする楽しみがあったが、外国人キリスト教宣教師の影響もあってか、夜の娯楽は少なかったゆえ、夕食のあとに家族連れで商店街をぶらぶらと歩いている人が相当にあったと、戦前期の軽井沢を知る東京大学教授の山本達郎をはじめ多くの人々が回顧している³⁶⁴⁾。

旧軽井沢のメインストリートには、生鮮食料品、日用雑貨、洋服店などが軒を連ね、各店舗は英字看板を掲げていたことは既述のとおりだが、具体的にはどのような業種の店舗があったのであろうか。1927年の『軽井沢町報』9月号の「軽井沢に於ける夏季営業者調」

(第6-2表)によれば、店舗182戸のうち東京と横浜からの出店が圧倒的に多いことがわかる。地元の店舗は30戸に過ぎず、県外からの出張店に圧倒されている。このことは、大都市の店舗が夏季の軽井沢に進出していたことを示し、銀座的な景観を担う存在であったことの証左といえよう。これらの出張店は、通りに面した家屋を夏季だけ借りて、その店先で営業していた。

つぎに営業種別に着目してみると、洋服などの衣服系、食料品の割合が多い。衣服のなかでは洋服・レース・婦人子供服、そして外国人向けの扱う店舗が目にとまる。第2章で言及したように、宣教師たちはこうした店舗で衣服を仕立て直していたのであろう。そして、別荘生活をするためにかかせない食料品店では、果実・鮮魚・肉類など生鮮食料品に対する需要が高かったとみられる。漆器・陶器などの什器や調度品などを販売する店舗も出店している。サービス業に分類したものとしては、運動具店が4軒確認できる。理容系の店舗の掲載もあるが、集会堂や教会では音楽会、礼拝、あるいはダンスパーティなどもよく行なわれたというから、別荘所有者からの需要が一定程度あったものと思われる。また旧軽井沢周辺では、自転車の利用が目立っていたといわれ³⁶⁵、それを反映するように自転車関係の店舗は4軒も営業していた。5軒の書店のうち1軒は教文館というキリスト教系の書店である。英字新聞販売店が2軒あることも外国人避暑地としての特色であろう。また、寿司・料理・喫茶はまとめて掲載されているが、西洋・支那料理とあわせると14軒もある。このなかには、東京赤坂の菊屋という喫茶、横浜の不二家などが含まれている。

以上のように、旧軽井沢には、東京や横浜などから軽井沢に避暑し別荘に滞在する都市住民をターゲットに、夏季出張店としてさまざまな部類の店舗が出店していた。景観について

例えば、メインストリートの両側に軒を連ねる店舗とそこを行き交う人々などが、都市的で銀座的な貌をつくりだしていたといえる。別荘は夏季の一時的な仮寓とはいえ、まぎれもなく住まいである。第二次世界大戦以前からの別荘所有者は、旧軽井沢のメインストリートに出現する商店街を「旧軽井沢の町」あるいは、たんに「町」とよんでいたようであるが³⁶⁶、このようなまなざしが投げかけられた旧軽井沢は、まさに高原に出現した都市的な場所とみなすことができよう。

(4) 周辺部における「郊外化」の進展

千ヶ瀧遊園地 (㊸) の開発によって、別荘地はさらに「周辺部」へとひろがった。既述のように堤康次郎は、「貴族富豪」向けの別荘地開発のあり方を批判して「中流」向けの別荘地を目指した。このような開発理念を具現化する際、重要な役割を担ったのが、ほとんど手つかずのひろい土地空間と、「中心部」との地理的な距離であったと考えられる。

まず前者についていえば、堤は広大な土地空間を余すことなく活用して温泉浴場・マーケット・音楽堂・運動場・ホテル、そして別荘地を配置し、立体的で奥行のある「遊園地」を創出したのである。ここに設えられた個別の設備や施設は、作家の田山花袋が述べるように、文化的な設備のある場所に好んで避暑に向かう都市住民の嗜好をふまえたものと推察される。これらの開発の手法や技術には、都市部周辺のレジャー施設や郊外住宅地開発において活用されたいわば都市的な「知」が活用されている。千ヶ瀧遊園地に特徴的にあらわれているように、物的な形態や諸種の設備や施設は、都市住民を意識しているゆえに、都市的な想像力と無関係ではない。むしろそれらを積極的に取り入れられ、「遊園地」たる

「別荘地」が〈軽井沢〉に具現されたと解することができる。

結果的に千ヶ瀧には都市中間層よりも上位層が別荘を所有したが、同地における別荘生活は、旧軽井沢やそこと連担する野沢別荘地と比較すれば、「質素」であったという地元民の証言は先に見た通りである。このような「質素」という雰囲気は、周辺部のなかでも明らかに高級化された野沢別荘地や中心部とは異なる様相を呈している。そのことを「地理的な距離」に焦点を当てて以下で説明する。

東京帝国大学教授をつとめた法学者の横田喜三郎は、1934（昭和9）年に千ヶ瀧に別荘を建てた。その場所は、千ヶ瀧中央のマーケット前の道路を東に進み、湯川の支流が流れる谷を越えて道路がU字にカーブする場所の北側であった。横田は、すでに旧軽井沢に別荘をもっている同大法学部の教授として立作太郎・小野塚喜平治・杉山直次郎を挙げつつ、別荘を建てる前年にはじめて軽井沢へ避暑に訪れたと記している³⁶⁷⁾。その契機は、「友達の村」のメンバーで同窓の我妻栄から別荘を建てるように勧められていたからであるという。彼もまた涼しい軽井沢で過ごすことは自身と家族の健康や研究活動に理想的と考えており、別荘の所有も検討していた。しかし結局「旧軽井沢」でも「友達の村」ではなく、千ヶ瀧の貸別荘に一週間ほど滞在し、別荘を建てたのである。

別荘を建てる場所は、千ヶ瀧を選んだ。我妻君は、自分の別荘のあるところにと勧めたが、そこは平地で、東京の郊外と変わらないような感じであった。千ヶ瀧は、浅間山のゆるい山すそにある。谷があり、山があり、樹木がうっそうと繁っている。うぐいすが鳴き、リスが走る。すっかり都会を離れた感じで、気分が一新する³⁶⁸⁾

横田によると、「友達の村」がある南原一帯の平地は、「東京の郊外と変わらないような感じ」が気に入らなかったという。たしかに南原と比較すると、千ヶ瀧は標高が高く、起伏に富む山地である。他方で、彼も言及しているように、職場の同僚たちの別荘がある旧軽井沢周辺も選択できたはずである。この点に関しては、「都会を離れた感じ」を志向していたことから、「都会的な」雰囲気のある中心部を避けたのではないかと解することができるよう³⁶⁹⁾。

このように、「地理的な距離」は、心理的な距離となって意思決定に影響を及ぼすことになった。同様に旧軽井沢から距離を取るのには、東京帝国大学教授で農学者の高橋禎造である。「私は軽井沢と云ふても其本場から遠く隔つた四、五百尺も高い山の中に居るのであるから、本場の空気に全く触れないのである」と述べていることから、距離感をうかがうことができる。彼は三笠ホテルを開業した山本直良と親交があり、同ホテルに滞在したこともある。そのうえで千ヶ瀧に別荘を構えたのであった。「……軽井沢と云えば地名〔著名?〕の外国人並に邦人でも富豪階級の華美の生活を思わせるが此れは軽井沢の今日迄発達した経路上止むを得ぬ事である」としつつも、質素な避暑生活を主張している。このように、旧軽井沢から物理的にも心理的にも距離を取りたい人物を惹きつけるような別荘地になっていたことがうかがわれる。

1930年頃には千ヶ瀧村会という自治組織が活動していた³⁷⁰⁾。その第二代村長をつとめた医師の吉岡彌生は、自治組織は「別荘人相互の親睦と便宜を計り又会社に種々助言して、千ヶ瀧を住み心地のいい村にするため随分村会は役立ちました」³⁷¹⁾と振り返っている。さ

らに、千ヶ瀧の醸成した雰囲気を以下のように記したのであった。

千ヶ瀧が健全に発展したと申しますのも、ここに別荘を建てた人達が、貴族富豪の所謂軽井沢人種でなく、インテリの多い中流階級揃いで、従ってその生活気分もただ徒に安逸を貪る贅沢な別荘生活ではなく、本当に休養の意義を持つ真面目なものであったのが、大きな理由でありました。実際にインテリ揃いというのは、千ヶ瀧の誇るべき特色だったのであります³⁷²⁾。

吉岡の述べるように、旧軽井沢の雰囲気と心理的な距離を取ることを望むようなエリート層が集まるような受け皿となっていたことがわかる。もともと荒れ地がひろがる土地柄であったとはいえ、起伏に富み、山がちな地形も彼らにとっては山間地ならではの非日常的な景観と映ったに違いない。それだけでなく、「距離」が介在したことも明確に差異化を生み出す重要な役割を演じた。すなわち、喧噪だった中心地旧軽井沢から地理的に離れ、静かで野趣に富んだ千ヶ瀧は、まさに「別荘地の郊外化」をもたらしたのである。

物理学者・作家の寺田寅彦は晩年、千ヶ瀧の近傍の星野温泉 (❶) を好んで滞在し、中心部から距離を置くひとりであった。星野温泉や千ヶ瀧周辺で、起伏に富む山道を散策しながら植物採取に明け暮れ、野鳥の声に耳を傾けるなど自然との関わりを強調する。一方で、旧軽井沢周辺をそぞろ歩いた際、彼は町並みに居留地の雑多さを感じ、また「銀座」を幻視した。さらに観察対象は自然ではなく、町並みやそこを行き交う富裕層・商人である³⁷³⁾。このような寺田の描写からも「郊外」の千ヶ瀧と「中心」の旧軽井沢という構造が、

それらの差異としてあらわれている。

では、ひるがえって旧軽井沢周辺に別荘を所有する人々にとって千ヶ瀧のような場所は、どのようなものであったのであろうか。第二次世界大戦以前からの別荘所有者の回顧談を収録した朝吹登水子編著『37人が語る わが心の軽井沢』をみると、千ヶ瀧方面は、ドライブの目的地となっている。とくにグリーンホテルやさらに標高の高い場所へ「浅間ベリー」を摘みにいったという。石田アヤの回顧によれば、1930年を過ぎた頃から、中古のフォードを乗り回す友人がおり、一台に8人ほどで乗り込み出かけたことがあった³⁷⁴⁾。千ヶ瀧のグリーンホテルや浅間山麓は、気軽にお茶を飲んだり、散策やドライブにでかけたりするところでもあったのだ。堀辰雄の描いた『ルウベンスの偽画』においても、登場人物が旧軽井沢から自動車でグリーンホテルに行く場面が描かれており、自動車で足を運ぶようなまさに郊外的な空間といえよう³⁷⁵⁾。

また、「友達の村」(⑥)や「前田郷」(⑦)はメンバーシップ性の強いことを指摘した。このような動きは、郊外や田園で快適に過ごすことを目指す都市の文化的なイギオロジーの影響下にあり、旧軽井沢で発展してきた社会関係の影響を受けにくい場所において、「郊外的な別荘地」として展開されたものと位置づけることができるだろう。

第3節 空間再編の位相

「療養地」「避暑地」「別荘地」という局面をへて成立した近代〈軽井沢〉の地理的編成をあらためて整理すると、野沢源次郎が開発に際して、軽井沢を「田園都市」として東京の「郊外」に見立てたように、近代〈軽井沢〉は、東京の外延的拡大の結果、東京居住者

の保養機能を備えた「郊外的な空間」として発展したと位置づけることができる(第6-6図)。さらに、「郊外的な空間」としての近代〈軽井沢〉はあたかも母都市としての東京を中心とするかのような「中心」「周辺」という都市構造の類似性を見て取ることができる。このような構造は、都市との関係のなかで発展した〈軽井沢〉に象徴的に現前したものと考えられ、これらは別荘地の物質的・空間的な拡大によって完成した。そして、〈軽井沢〉を構成する個々の別荘地には質的な差異が存在していたのである。

「中心部」の旧軽井沢で醸成された「療養地」「避暑地」「別荘地」としての性質は、まず野沢別荘地へと敷衍され、そこは土地投機を目指した方策のなかで、諸種の都市的な開発手法のもと「高級さ」ともなっていて発展し、「周辺部」の野沢別荘地としてあらわれた。ここは、〈軽井沢〉の変化の突端となり、とくに旧軽井沢へと「高級さ」は派生していく。この動向を批判的に継承したのが千ヶ瀬遊園地であり、中心部からの地理的な距離も相まって「質素」な別荘地となった。これらの地理的再編の特徴は、旧軽井沢から脱中心化を志向するものの、根底には旧軽井沢を意識しているのであり、結果的にそれらの空間的断片は、総体としての〈軽井沢〉を拡大させ、またその中心たる旧軽井沢の中心性を高めた。そのことは、メインストリートには「銀ブラ」のような「軽ブラ」が上演される空間となったことからもうかがい知ることができる。

〈軽井沢〉が発展するなかでその中心の旧軽井沢には、都市の盛り場的な要素が流入し、「いかがわしい」店舗も出現してきたという。山本達郎の回顧によれば、1920年～30年代には、女性が酒類をサービスする店を放任してよいかなどの風紀問題が盛んに議論されていた³⁷⁶⁾。つまり、料理店のなかにはカフェーなどが出店していたものと思われる。このこ

とに対して、軽井沢避暑団や軽井沢集会堂などの別荘所有者による自治組織は、どこの家庭の子どもが自由に出歩いても心配ない環境をつくるという方針で活動していたということから³⁷⁷⁾、都市部から出店してくる店舗のうち、〈軽井沢〉にふさわしくないとされる業種は排除されたと思われる。都市的なものの流入をすべて許容するわけでないことは、避暑地としての環境の「質」を担保するための態度であろう。

以上のように〈軽井沢〉はたんなる避暑地として成立し、別荘地として拡大しただけではなく、質の異なる別荘地の総体として成立し、都市的な構造を有しながら「山間の小都市」として発展したのである。

第7章「季節的な都市」の誕生

……軽井澤は外人滞在客によつて開拓された高原の一都会であることは周知の事実であります、その附近一帯の高原は浅間山を背景として風光雄大且つ銷夏療養の好適地として内外人の等しく推賞する処であります³⁷⁸⁾
(ジャパン・ツーリスト・ビューロー専務理事 高久甚之助 (1936)「序」)

第1節 季節的な都市

近代〈軽井沢〉の歴史は、まず陸軍脚気転地療養地としてはじまった。ミアズマ説のような西洋医学的見解が日本に浸透していくなかで、特定の自然環境の価値が医学的なまなざしを介して変化した帰結である。そしてほぼ時間差なく、夏季に外国人が滞在するようになったことで避暑地ともなった。脚気転地療養地の側面は歴史の表舞台からはほぼ消えてしまったもの、それに代わって結核と軽井沢が結びつけられていく。さらに、避暑地の利用が盛んになるにつれて滞在拠点用の別荘が増加し、大正・昭和戦前期になると都市型資本の計画的な別荘地開発により、旧軽井沢に限局していた別荘地は物質的・空間的に拡大した。この別荘地の拡大は、旧軽井沢において療養地・避暑地・別荘地の諸局面として展開されるなかで、醸成・生成された軽井沢固有の空間性の拡張ともいえる。

近代〈軽井沢〉は、たんに療養地をへて避暑地や別荘地として発展したのではなかった。夏季に限られるとはいえ、東京を母都市とする都市居住者の来訪によって住まわれることで、地方の高地でありながら都市的な景観が出現していく。たとえば、旧軽井沢の別荘地

帯は都市居住者の季節的な居住空間と見立てることができ、夏季の日常生活を支える商業地も形成された。また「軽ブラ」と称されるような内外からの人々が蝟集する都市的な景觀が現前したのである。都市的な影響は計画的な開発による別荘地の生産の過程においてもみられ、そこには郊外住宅地や都市近郊レジャーを創造した開発理念・技術・建築意匠といった近代的・都市的な「知」が活用されていた。

別荘地の拡大は、軽井沢全体を総合するマスタープランにもとづくものではない。それぞれの別荘地は時代を追って次第にひろがりを見せ、開発主体や目的も多様であった。そのような意味において、これらはいわば〈軽井沢〉の空間的な断片であると考えられる。それらを俯瞰的にみると、別荘地の拡大の空間的結果として「中心部」「周辺部」という異質な社会地理を帯びた都市的な空間構造が浮き彫りとなる。このような構造をもつにいたったことは、都市との関係性のなかで発展してきたことをあらわすもっとも明確な表徴であると考えられる。第1章で指摘したように地理学者クラウトは、別荘地を都市の保養的機能の拡張と位置づけているが、たんにそのような機能的な側面だけでなく、別荘地自体の内部も都市の影響を多分に受けながら、母都市である東京都市周辺部と類似する空間構造を有していたのだ。

ここでは、「都市」という語を用いたものの、あくまでも〈軽井沢〉は、都市住民に対する保養的機能に特化して発展したという点に留意することが必要であろう。すなわち、労働の意味を含む都市という意味を相対的に過小評価してしまうことになる（労働という点に関して、別荘家屋の修繕や夏季出張店の出店を目的に大工や商人が夏季に流入していた）。

以上の点を総合すると、都市住民の理想的な避暑地として成立した近代〈軽井沢〉は、

夏季のみにあらわれる都市的様相を呈していたといえる。さらに、たんに夏季というシーズン的な現象にとどまるのではなく、都市的な構造をもつ避暑地であるのだ。こうした2面性から近代〈軽井沢〉は「季節的な都市」といえよう。こうしてみると、近代〈軽井沢〉は、東南アジアに形成したヒルステーション（＝高原保養都市）のまさに日本的な展開ともいえるかもしれない。

「季節的な都市」の成立を最もよくあらわしているのが、1936年に発行された吉田初三郎の『軽井沢町鳥瞰図』と思われる（第7-1図）。これをみると、関東平野と碓氷峠の標高差は、非常に強調されて描かれていることがわかる。鳥瞰図の封入袋には、「涼爽天下第一之境軽井沢鳥瞰図」と記されており、冷涼な気候をもたらす標高を強調する表現であろう。碓氷峠の西方にひろがる〈軽井沢〉は、デフォルメされているものの、まさに「山間の小都市」として表象されているのである。

最後に、晩夏の軽井沢を記した室生犀星の随筆をみておこう。軽井沢の秋の訪れは早く、9月にもなると避暑客は帰京していく。喧噪の消え去った軽井沢は、静けさにつつまれるのである。室生犀星は避暑シーズンが終わった旧軽井沢の情景を以下のように描き出した。

軽井沢に行きつけた人は九月から十月のこの土地の気候を愛するが、秋晴はもう八月終わりから初まるのである。避暑の人々はかえってしまい静かさと透明無比の空気が大きな眼鏡を僕らにかけてくれる。草は枯れるが日光の具合が何ともいえないほど爽然として来る。東京から行くと、ゆるい硝子戸のなかに住んでいて、急に外へ出たほど感じの透明さがちがう。それに人間が沢山いたところに急にいなくなった静かさは、

何か都会的な静かさでもあるのだ。単なる山村の静かさでないところに、複雑な近代明色があるといっているののである³⁷⁹⁾。

夏季が過ぎた〈軽井沢〉は、殊更に静けさにつつまれる。このような落差は〈軽井沢〉が「季節的な都市」であることを際立たせるといえよう。

第2節 総括と展望

本研究の目的は、「療養地」「避暑地」「別荘地」という近代以降の軽井沢にあらわれる局面に着目しつつ、避暑や療養のような「健康」をめぐる諸関係、時代ごとに異なる避暑客の軽井沢の経験、別荘地開発の拡大による変化を検討することを通じて、近代〈軽井沢〉の成立をあとづけることであった。そして、帝都・東京という母都市との関係性を地理的な空間再編として把握し、その構造のダイナミズムを考察した。本研究のオリジナリティとして、強調しておきたいのは以下の諸点である。

従来の軽井沢研究では、外国人によって避暑地として発見されたことのみを、別荘地形成の端緒として説明してきた。それに対して本研究は、陸軍脚気転地療養地と外国人避暑地が同時期に展開し、療養地と避暑地の局面はそれぞれ陸軍と外国人という異なる主体により意味づけられていたことを明らかにした。また、外国人の避暑を後押しした要因には、高温多湿を逃れることだけでなく、伝染病予防としての側面もあったのである。当初軽井沢を訪れた日本人富裕層は、当初療養を志向しており、次第に冷涼な空気のもとで避暑を受容していった。このように〈軽井沢〉の避暑地の側面は、たんに外国人のみの影響だけ

ではなく、この避暑と療養という二つの側面に関わる環境認識や場所経験を通じて社会的文化的に構築されたといえる。

これまでの別荘地研究は、別荘地の発展を空間的にとらえる視点をあまり重視してこなかった。そこで本研究は、軽井沢の別荘地開発をその前史から歴史地理学的にあとづけ、さらに都市との関係性に着目する視点から、総体としての〈軽井沢〉はいかなる特質をもつのかを検討した。その結果、別荘地の空間的な拡大の帰結として、〈軽井沢〉は都市的な構造を有することが明らかとなった。このような〈軽井沢〉の構造は、近代日本の避暑地の成立や別荘地の形成がまさに都市と強く関係性を有して編成されることを示唆する。

また、〈軽井沢〉はたんに季節的に避暑が行なわれる場所というだけではなく、都市的な構造をもつ「季節的な都市」であった。都市を避けて冷涼で清涼な避暑地の自然を経験する場所として表象されながら、都市的な文化や都市を創造する知の影響が色濃く反映されているのである。

本研究は近代〈軽井沢〉の成立をとらえるのみにとどまったものの、日本の近代化期に誕生した避暑地の成立には、療養をめぐる社会的な文脈が関わっていたこと、別荘地の空間的な拡大は異質な社会地理をもたらしたこと、そして都市との関係性は都市と類似する地理的な構造としてあらわれたことを明らかにすることができた。さらに、東京の「郊外化」という空間的な現象は都市内部にとどまらず、都市外部の保養地の成立に関係していることを提示することができた。

戦前期には日本人富裕層の避暑地として特色づけられていたが、戦後の軽井沢は、若者の流入などで大衆化を強めていく。たとえば、1930年代に「銀座」とも称された旧軽井沢

には、1970年代から1980年代に「原宿」「渋谷」のような景観が出現した。ここには社会学の吉見俊哉が東京の盛り場の変遷を解明するなかで指摘した1920～30年代の「銀座的なるもの」から1970年代の「渋谷的なるもの」への移行が戦後軽井沢にも如実に反映されている³⁸⁰。軽井沢を語るうえで、来訪者の母都市・東京との関係性の変化をも加味した検討は重要であろう。

また、1979年に創刊した軽井沢のローカルなタウン情報誌『軽井沢ヴィネット』の記事の変遷を一瞥するならば、1980年代には軽井沢の「別荘文化」を強調する一方で、1990年代になると別荘所有者や移住希望者向けの夏季に「住まうこと」に重きを置く実用的な記事が増加する³⁸¹。1993年の信越自動車道、1997年の長野新幹線という高速交通環境の相次ぐ整備によって、軽井沢は「郊外的」な場所から、完全に東京の「郊外」あるいは「通勤圏」に組み込まれた。このような変化のなかで、軽井沢はあらためて東京との結びつきを強め、避暑地から定住地の側面をもつようになっている³⁸²。近代化期に誕生した別荘地は、戦後も拡大しつづけており隣接する御代田町には「西軽井沢」、群馬県には「北軽井沢」や「東軽井沢」が通称地名として出現し、別荘地分譲の宣伝に活用されている。内田順文が1989年に指摘したように「軽井沢」地名は、ますます拡大傾向を強めている³⁸³。本研究で明らかにした近代化期にみられた出来事が再帰的に生じているのだ。

ところで、現在においても2020年から続く新型コロナウイルスの世界的な流行は終息がまったく見通せない。こうしたなかで、2020年4月1日の『信濃毎日新聞』は、東京居住者が新型コロナウイルスの感染予防のために軽井沢の別荘や貸別荘に退避していることを報じ、この行動を「疎開」と形容した³⁸⁴。戦前期の脚気やコレラの流行時とは時代や社会状況は

まったく違うものの、「例外状態」下であって、軽井沢が東京居住者の避難先として選択されたことは、場所に対するまなざしと認知・行動の点から興味深い³⁸⁵⁾。現代の軽井沢を考察する際には、本研究で明らかにした「療養地」、「避暑地」、「別荘地」の局面が軽井沢にもたらしたものがどのように変化したのか、戦前期と戦後期の連続性や不連続性を考究していく必要もあるだろう。

最後に残された課題に触れる。今後は軽井沢だけではなく、「海の銀座」と称されるような鎌倉などの複数の避暑地や別荘地についても分析し、包括的に比較検討を進めていかなければならない。本研究は、軽井沢という一地域の事例ではあるものの、近代化期に発展した避暑地や別荘地の成立背景や過程、内部の空間構造の類似性や差異を比較検討していくうえで、有意な地理・歴史的な立脚点となるだろう。

注

- 1) 和田博文 (1999) 『テキストのモダン都市』、風媒社。
- 2) 戸所 隆 (2013) 「都市機能」、『人文地理学事典』、丸善、334-335 頁。
- 3) 赤井正二 (2016) 『旅行のモダニズム—大正昭和前期の社会文化変動—』、ナカニシヤ出版。
- 4) 小口千明 (1985) 「日本における海水浴場の受容と明治期の海水浴」、人文地理、37(3)、215-229。
- 5) 荒山正彦 (1989) 「明治期における風景の受容—『日本風景論』と山岳会—」、人文地理、41(6)、63-76。
- 6) 佐藤大祐 (2003) 「明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤」、地理学評論、76(8)、599-615。
- 7) 福田真人 (1991) 「肺病・サナトリウム・転地療養—結核の比較文化史—」、言語文化論集、13(1)、1-53。
- 8) ①シーモア, S. (2005) 「風景の歴史地理」、グレアム, B.・ナッシュ, C. 著 (米家泰作・山村亜希・上杉和央訳) 『モダニティの歴史地理 下巻』、古今書院、227-256 頁。②山根 拓・中西僚太郎編 (2007) 『近代日本の地域形成—歴史地理学からのアプローチ』、海青社。
- 9) 十代田 朗 (1995) 「近代日本における「避暑」思想の受容と普及に関する研究」、ランドスケープ研究、59(5)、105-108。
- 10) 斎藤 功 (1991) 「外国人によるブナ帯風土の発見—軽井沢以前の避暑地の「コマー」」、市川健夫編『日本の風土と文化』、古今書院、164-179。
- 11) 斎藤 功 (1990) 「かけがえのない地球との共存」、斎藤 功・野上道男・三上岳彦編『環境と生態』、古今書院、215-254 頁。
- 12) 内田順文 (1989) 「軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について」、地理学評論、62A(7)、495-512。
- 13) ①前掲 10)、②斎藤 功 (1994) 「わが国初の高原避暑地宮ノ下と箱根—明治期を中心に—」、人文地理学研究、18、133-161。
- 14) 安島博幸・十代田 朗 (1991) 『日本別荘史ノート』、住まいの図書館出版局、44-85 頁。
- 15) 熱海、伊東や鎌倉・葉山・大磯、および勝浦・一宮の海浜別荘地、軽井沢・日光・箱根・那須・妙高・蓼科・富士見・木崎湖・富士五湖、野尻湖・御殿場、そして六甲山の高原別荘地である。
- 16) ①十代田朗・渡辺貴介・安島博幸 (1985) 「明治・大正期における湘南および房総地域の臨海部別荘地の成立過程」、日本都市計画学会学術研究論文集、20、331-336。②西村 真・渡辺貴介・安島博幸 (1988) 「わが国近代高原リゾートの成立と展開」、昭和 62 年度第 22 回日本都市計画学会学術研究論文集、61-66。③西澤倫太郎・安島博幸・遠藤 聡・水野雅男 (1989) 「野尻湖における外国人別荘地「神山国際村」の成立と展開」、観光研究、3 (1・2)、1-8。④勝又宏幸、安島博幸 (1990) 「戦前の御殿場における高原リゾートの成立と展開」、日本都市計画学会学術研究論集、25、319-324。⑤上垣智弘・安島博幸 (1990) 「六甲山における外国人別荘地の成立と展開」、日本都市計画学会学術研究論集、25、313-318。
- 17) 本研究では、欧米のセカンドホーム研究を牽引しているホールとミュラー (Hall, M. and Müller, D.) の定義にしたがい、「別荘」を常住の一次的住宅に対する二次的住宅で、所有か賃借かにかかわらず、夏季や冬季などに一定期間住まわれるものと定義する。欧米諸国におい

- て別荘は海浜・湖畔・山地・高原などに分布し、別荘地を形成している (Hall, M. and Müller, D. (2004) Introduction: Second homes, Curse or Blessing? Revisited, in Hall, M. and Müller, D. eds. *Tourism, Mobility and Second Homes: Between Elite Landscape and Common Ground*. Channel view publication, pp.1-14)
- 18) 前掲 9)、107 頁。
- 19) 他には、藤谷陽悦 (2000) 「関東」、片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』、鹿島出版会、86-88 頁。
- 20) もともと、東京工業大学渡辺貴介研究室と金沢工業大学建築学科安島研究室の共同プロジェクト「わが国における戦前のリゾートに関する一連の研究」として取り組まれた研究をまとめた成果が『日本別荘地ノート』である (前掲 14))。
- 21) 前掲 10)、前掲 13)②、前掲 16)①～⑤。
- 22) たとえば、佐藤大祐・斎藤 功 (2004) 「明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷」、歴史地理学、46(3)、1-20。
- 23) 土地会社とは、たとえば住宅地・工場地・別荘地の造成・分譲といったディベロッパー業務に従事する会社をいう (八木澤壯一 (1988) 「目白文化村」に関する総合的研究 (1)、住宅建築研究所報、14、231-246)。
- 24) 越沢 明 (1986) 「戦前の神奈川県における民間宅地開発(2)―箱根の温泉荘―」、昭和 61 年度日本建築学会関東支部研究報告集、313-315。
- 25) ①藤谷陽悦 (2000) 「旭日丘別荘地／山中湖―アメリカからの影響、もうひとつの理想郷―」、片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』、鹿島出版会、85-104 頁。②藤谷陽悦 (1987) 「郊外住宅地の史的研究―強羅別荘地の開発について―」、日本大学生産工学部報告、20(2)、109-120。
- 26) 山村順次 (1994) 『観光地の形成過程と機能』、お茶の水書房。
- 27) 前掲 25)①。
- 28) 土屋和男 (1999) 「浜名湖・弁天島における別荘地の変遷と空間的遺産の現況」、日本建築学会計画系論文集、523、263-270。
- 29) 赤澤加奈子 (2017) 「戦前における中小資本による分譲地開発の実態に関する基礎的研究―静岡県熱海市における分譲別荘地開発を事例として―」、日本不動産学会誌、30(4)、79-86。
- 30) 赤松加寿江・片山伸哉・水沼淑子・奥山信治 (2011) 「昭和初期の別荘地開発と住宅地形成に関する研究」、住総研研究論文集、38、113-124。
- 31) ①関戸明子 (2007) 『近代ツーリズムと温泉 (叢書・地球発見 7)』、ナカニシヤ出版、23-32 頁。②神田孝治 (2001) 「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性―近代期における観光空間の生産についての省察―」、人文地理、53(5)、24-45。
- 32) ①Coppock, J. T. ed. (1977) *Second homes: Curse or blessing ?*. Pergamon. ②Hall, C. M. and Müller, D.K. (2004) Introduction. in Hall, C. M. and Müller, D. K. eds. *Tourism, Mobility & Second Homes: Between Elite Landscape and Common Ground*. Channel View Books, 3-14.
- 33) Clout, H. D. (1974) The growth of second-home ownership: An example of seasonal suburbanization. in Johnson, J. H. ed. *Suburban Growth*. John Wiley & sons, pp.101-127.
- 34) クラウト, H. D. (石原 潤訳) (1983) 『農村地理学』、大明堂、90 頁。
- 35) 太田省一 (2021) 「台湾のヒルステーション」、中川理・空想から計画へ編集委員会編『空想から計画へ―近代都市に埋もれた夢の発掘―』、思文閣、271-299 頁。
- 36) Inagaki, T. (2008) Hill Stations in Asia: A Discovery of Scenery and Environmental Change, *Global*

- Environmental Research*, 12, 93-99. また②の段階では、西洋人に新鮮な野菜を提供するための農業プランテーションが展開されることもある。たとえばインドのダージリン、マレーのキャメロンハイランドが挙げられる。この点については、斎藤功が北スマトラのカロ高原を事例として研究している（斎藤 功（1990）「北スマトラ、カロ高原における観光化と温帯野菜栽培の発展」、人文地理学研究、14、1-23）。
- 37) 前掲 11)、21 頁。
- 38) ①前掲 36)。②由井義通（2012）「ヒルステーション・シムラにおける都市発展」、都市地理学、7、73-82。
- 39) ①十代田朗・安島博幸・渡辺貴介（1992）「戦前の関東圏における別荘の立地とその類型に関する研究」、日本建築学会計画系論文報告集、436、80 頁。②前掲 11)、21 頁。
- 40) ギデンズ, A. (松尾精文・小幡正敏訳) (1999) 『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結—』、而立書房、35 頁。
- 41) ①内田青蔵・藤谷陽悦・山形政昭（2000）「戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究」、住宅総合研究財団研究年報、27、57-64。②前掲 22)。③梅干野成央・土本俊和・武智三奈（2010）「軽井沢における保養地景観の形成過程」、日本建築学会計画系論文集、75(647)、103-109。
- 42) ①花里俊廣（2012）「戦前期の軽井沢の別荘地における外国人所有・滞在と对人的環境の様態」、日本建築学会計画系論文集、77(672)、247-256。②花里俊廣（2012）「1930 年頃の避暑地軽井沢における外国人の社会活動」、日本建築学会計画系論文集、77(676)、1283-1292。
- 43) ①前掲 12)。②福田真人（2006）「軽井沢と結核」、水声通信、1、59-68。
- 44) ①小林 收（1974）『軽井沢開発物語』、信濃路。②小林 收（1999）『避暑地 軽井沢』、櫟。③宍戸 實（1987）『軽井沢別荘物語』、住まいの図書館出版局。④宮原安春（1991）『軽井沢物語』、講談社。
- 45) ①江川良武（2016）「別荘地・軽井沢の発展過程の研究 その 4—ショー師の真の業績—」、信濃、68(3)、209-228。②江川良武（2017）「昭和 12 年作成・軽井沢町航空測量写真図の「発見」と戦前の写真測量事情」、地図、55(1)、1-11。③江川良武（2017）「中山道鉄道開通を見こした明治中期の軽井沢における開発行為—軍馬育成牧場と避暑・別荘地—」、千曲、164、31-44。
- 46) 大城直樹・荒山正彦（1998）『空間から場所へ』、古今書院。
- 47) 健康地理学では、社会的につくられた健康と場所の意味を問う視点があり、医学言説の検討が有効である（①Gesler, W. (1993) *Therapeutic landscapes: Theory and case study of Epidaurus, Greece*, *Environment and Planning D*, 11, 1171-1189. ②Williams, A. ed. (1999) *Therapeutic landscapes: The dynamic between place and wellness*. University Press of America.
- 48) 関戸明子（2018）『草津温泉の社会史』、青弓社。
- 49) モリッシー, J.・ナリー, D.・ストロメイヤー, U.・ウィーラン, Y. (上杉和央監訳、阿部美香・網島 聖・春日あゆか・島本多敬) (2017) 『近現代の空間を読み解く』、古今書院、2 頁。
- 50) ジャクソン, P. (徳久球雄・吉富 亨訳) (1990) 『文化地理学の再構築—意味の地図を描く—』、玉川大学出版部。
- 51) Brown, T., Andrews, G. J, Cummins, S., Greenhough, B., Lewis, D. and Andrew, P. ed. (2017) *Health Geographies: A Critical Introduction*. Wiley-Blackwell, pp. 39-56.

- 52) 遠城明雄 (1998) 「「場所」をめぐる意味と力」、荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理的想像力の探究—』、古今書院、227 頁。
- 53) 原口剛 (2003) 「「寄せ場」の生産過程における場所の構築と制度的実践—大阪・「釜ヶ崎」を事例として—」、人文地理、55(2)、31 頁。
- 54) 前掲 49)、198-220 頁。
- 55) 佐藤孝一 (1987[1912]) 『かるみざわ』、国書刊行会、43 頁。
- 56) 佐藤孝一の実家は、宿場町時代の休泊茶屋つるやであり、近代以降は鶴屋旅館を営んだ。彼は 1889 (明治 22) 年生まれで、東京外国語大学卒業後は三井物産へ入社したことが国書刊行会より出版された復刻版『かるみざわ』の著者紹介に記載されている。『かるみざわ』の序文には、本書の刊行した経緯を「軽井沢は我国に於て稀に見る避暑及び療養の理想境と云はれてゐるが、其状況を説いたものは、後にも先にも唯“A Guide Book to Karuizawa”と題した英文の一小冊子であつた。幸いにも私は此地に生まれて、地理、歴史などに詳しく、現状に通じてゐる上に、兼ね／＼抱いてゐるた即ち此地を日本人向きの避暑地とて広く世に紹介し、かつ解放し度いと云ふ希望が手伝つて、かう云ふあまり例のない案内記を編むに至つた」と記している。詩歌にも通じており、「九阜亭^{きゅうこう}」と号す。
- 57) 軽井沢駅 100 年のあゆみ編纂委員会編 (1988) 『峠を越えて—軽井沢 100 年のあゆみ—』、銀河書房、62 頁。軽井沢宿と坂本宿とでは、約 600m の高低差を体感することになる。ゆえに、通行者は軽井沢宿、あるいは坂本宿で一晩を過ごすことが少なくなかった。
- 58) 児玉幸多編 (1999) 『日本史小百科 宿場』、東京堂出版、65 頁。
- 59) 春原平八郎 (1923) 『維新以後の軽井澤小観』、長野県、2-3 頁。
- 60) 秋里籬里 (1995[1802]) 『木曾路名所図会 (版本地誌体系 6)』、臨川書店、462-463 頁。
- 61) 貝原益軒 (1721) 『木曾路之記 上』、柳枝軒、9-11 頁。
- 62) 児玉幸多 (1965) 『近世宿駅制度の研究 増訂版』、吉川弘文館、397-398 頁。三宿はたびたび困窮し代官所を通じて幕府に援助を申し出ている。
- 63) 前掲 58)、128-129 頁。
- 64) 佐藤要人・花咲一男 (1994) 『江戸諸国遊里図会』、三樹書房、35-43 頁。
- 65) 島田大助 (2005) 「川柳・洒落本にみる近世の笑い—軽井沢ものを中心に—」、豊橋創造大学紀要、9、1-15。また、近江国堅田村年寄の錦織五兵衛義蔵が著した道中記『中仙道十四垣根』(1865 年)の軽井沢宿の項目では、「遊女多シ」と記されており、彼の宿泊した江戸屋(脇本陣)には数人の「遊女」がいたという(錦織五兵衛義蔵(木村至宏校注)(1977[1865])「中仙道十四垣根・東海紀行」、原田伴彦編『日本都市生活史料集成八 宿場篇』、学習研究社、593 頁)。
- 66) 『信濃毎日新聞』1936 年 8 月 6 日「軽井沢発展座談会 2」。
- 67) 前掲 59)、4 頁。
- 68) 升本喜就 (2017) 『新版 軽井沢の自由研究』、杉並けやき出版、97-99 頁。
- 69) ①前掲 57)、33-39 頁。②野田正穂・原田勝正・青木栄一・老川慶喜 (1986) 『日本の鉄道—成立と展開—』、日本経済評論社、44-46 頁。
- 70) 前掲 59)、5 頁。
- 71) 前掲 57)、66-68 頁。
- 72) 1873 (明治 6) 年の地祖改正の結果、多くの官有地が生じ、政府は殖産興業を進め、かつ財政収入を見込んで元士族、実業家、政府高官などへ積極的に官有地を払い下げていた。こうし

た動きは軽井沢にも及んでいたのである。このような農場経営を目的とした国有地の払い下げは、軽井沢と同様に高原避暑地として発展する那須において行なわれている。

- 73) ①前掲 44)①、23-26 頁。②『読売新聞』1893 年 9 月 22 日「雨宮敬次郎氏の開墾事業」。
- 74) 雨宮敬次郎 (1907)『過去六十年事蹟』、私家版、134-135 頁。先述のとおり、「中山道鉄道」は実現しなかったものの、結果的に信越線となった。
- 75) 軽井沢町誌刊行委員会 (1988)『軽井沢町誌 歴史編 (近・現代)』、軽井沢町誌刊行委員会、151-158 頁。
- 76) 前掲 44)④、32-33 頁。
- 77) 外国人遊歩区域は、横浜や神戸などの居留地から 10 里 (約 40km) の範囲であり、外国人の旅行目的は「学術研究、病氣療養」に限られていた。自国の公使を通じて日本政府から「外国人内地旅行免状」を取得しなければならなかったのである。しかし明治中期以降、緩和措置がとられ、各国公使の意向がそのまま通っていたと指摘されている (メアリー・フレーザー、ヒュー・コータツツィ編 (横山俊夫訳) (1988)『英国公使夫人の見た明治日本』、淡交社、327 頁)。
- 78) ショウとディクソンが初めて軽井沢に訪れた年には、1885 年説と 1886 年説とが存在している。宮原安春による資料の渉猟の結果から 1886 年説が有力と思われる (前掲 44)④、60 頁)。なお、第 4 章で資料として取り上げた軽井沢の気象観測に関する論文において、執筆者のノートはショウとディクソンの両名が軽井沢で避暑をはじめた年を 1886 年と述べている。この論文は 1891 年に刊行されたものであるため、同時代資料として 1886 年説が有力となる。
- 79) 『信濃毎日新聞』1936 年 8 月 8 日「軽井沢発展座談会 4」。
- 80) 鉄脚子 (1902)『奇談 貧乏旅行』、大学館、31-32 頁。
- 81) 前掲 55)、48 頁。
- 82) 前掲 55)、128-135 頁。
- 83) 1901 年の日本人別荘軒数については、東京浅草の精行舎石板部発行 (青山豊太郎作)「軽井沢之全景」(1901 年)を参照した。
- 84) 田中啓爾 (1934)「軽井沢に於ける内外人の生活」、地理學、2、322-330。
- 85) 『信濃毎日新聞』1909 年 8 月 6 日「霧深き軽井沢 (二)」。
- 86) Spencer, D.S. A. (1911) *Guide Book to Karuizawa*. methodist publishing house, p.31.
- 87) 前掲 22)。1899 年の条約改正までは、外国人は内地雑居することは許されておらず、土地の所有者は親しい日本人名義 (信徒や地元地主) であった。また、条約改正後も土地の所有権は認められなかったことから、外国人所有の土地には、999 年の地上権が設定され、実質的に所有された。
- 88) 前掲 42)①。
- 89) 1895 (明治 28) 年には英国聖公会の教会、1897 年には宣教師ノーマン (Norman, D.) らによって、超党派軽井沢合同基督教会 (ユニオンチャーチ) が設立された。ユニオンチャーチは、「オーディトリウム」ともよばれ、「サマーコミュニティ、また信仰者による会議のだけでなく、教育や地域や社会活動、音楽的集会の中心である」とある (Karuizawa Summer Residents' Association (1917) *Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1917*, Karuizawa Summer Residents' Association, p. 43.)
- 90) 鳴海正泰 (1980)『テニス明治誌』、中央公論。
- 91) たとえば、『かるみざわ』に掲載されている外国人を男女別にみると、女性は男性に比べて

- 1.5 倍ほど多い（前掲 55）、50 頁）。この点について、カンニングハムは、ビジネスの一線で働く外国人男性は、それほど長期間避暑をする余裕がないため、軽井沢に長く滞在できるのはその夫人と子どもであると説明している（前掲 44）④、145 頁）。
- 92) ①前掲 44)④、69-71 頁。②中安宏規（1996）『万平ホテル物語』、軽井沢町。
- 93) 前掲 55)、72 頁。
- 94) 前掲 55)、75 頁。
- 95) 『信濃毎日新聞』1909 年 8 月 7 日「霧深き軽井沢（三）」
- 96) 前掲 44)④、142 頁。
- 97) こうした商店街の形成は、とりわけ地元住民が外国人相手に柔軟に対応した結果でもあるだろう。戦前期から杓掛で商店を営んでいた土屋は、地元住民がお得意客争奪競争を繰り広げていたことや、キリスト教徒のように振る舞う「テンプラヤソ」（天ぶら耶蘇）になり、商品を買ってもらおうとしていたことなど、地元住民の強かな側面を振り返っている（土屋長平（1976）『郷の華 第 2 集』、私家版、90-94 頁）。
- 98) 前掲 55)、76 頁。
- 99) 軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、軽井沢町誌刊行委員会、179-185 頁。
- 100) 『読売新聞』1881 年 10 月 20 日。
- 101) 島菌順次郎（1927）『脚気』、克誠堂、35 頁。
- 102) 山下政三（1995）『脚気の歴史—ビタミンの発見—』、思文閣、436 頁。
- 103) 前掲 102)、1-149 頁。
- 104) 酒井シヅ（2008）『病が語る日本史』、講談社、166-167 頁。
- 105) 板倉宣聖（1988）『模倣の時代』、仮説社、548 頁。
- 106) 山下政三（1988）『明治期における脚気の歴史』、東京大学出版会、333-427 頁。
- 107) 前掲 106)、93-141 頁。
- 108) ①前掲 102)。②106)。
- 109) 『陸軍省第二年報』（1876 年 7 月 1 日～1877 年 6 月 30 日）、148 頁。『陸軍省年報』は、庶務・徴兵・工兵・医治などの事項を記した年次報告書で、第一年報～第十二年報（1875～1886 年）まで刊行された。第十二年報と後続誌『陸軍省統計年報』は統計表のみの記載となるため、脚気に関する動向を把握することは難しい。本書は刊行年が不明なため、各巻号を引用するときは、初出時に（ ）に報告対象年を明記することとする。また、『陸軍省日誌』は 1872～1882 年の主要な伺い・指令・通達・規則などをまとめた官庁日誌である。
- 110) 坂井建雄（2019）『図説 医学の歴史』、医学書院、349 頁。海軍軍医の高木兼寛は栄養バランスの不均衡が脚気の原因と考え、1883 年から兵食の改革を行ない、パンや肉を中心とした洋食、ついで 1885 年に米麦混食飯を給与したことで脚気の撲滅に成功した（海軍中央衛生会議編（1890）『海軍脚気予防事歴』、海軍中央衛生会議）。一方、陸軍では日清・日露戦争において多くの脚気患者が発生した。その理由は麦飯の効果に否定的だった陸軍首脳部の意向が、「戦時」体制下で顕在化し、麦が供給されなかったためである（前掲 106)、429-465 頁）。栄養障害説から脚気を撲滅した海軍と軍医高木兼寛は、医学史的に高く評価される一方で、栄養障害説を批判した陸軍は戦時の脚気対策に失敗したと語られている。
- 111) 田村俊次（1907）「陸軍に於ける脚気予防」、医海時報、684、829 頁。
- 112) 山田 明（2007）「明治期陸軍転地療養と湯河原・箱根・熱海」、日本福祉教育専門学校研

- 究紀要、15、122 頁。
- 113) 前掲 102)、184-185 頁。
- 114) 山下政三 (1983) 「脚気の歴史ービタミン発見以前ー」、東京大学出版会、270 頁。
- 115) 香月牛山 (1782) 『牛山活套 卷之上』、香月牛山、16 頁。
- 116) 富士川 游 (1981) 「脚気病の歴史」、富士川英朗編『富士川游著作集 4』、思文閣、67 頁。
- 117) 橘 南谿 (1805) 『雑病紀聞 卷之二』、著屋儀兵衛、26-28 頁。
- 118) 三澤素竹 (1919) 「玉造温泉めぐり」、大日本私立衛生会雑誌、435、400 頁。
- 119) ①関戸明子 (2018) 『草津温泉の社会史』、青弓社、38-39頁。②八隅蘆菴 (桜井正信訳) (2009) 『旅行用心集』、八坂書房、92-121頁。
- 120) 石黒忠恵 (1913) 「陸軍衛生部旧事談」、陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史』、陸軍軍医団、2 頁。
- 121) 堀内利国 (1889) 「脚気病予防ノ実験」、大日本私立衛生会雑誌、76、733-737。
- 122) 病院近傍の音羽仮病院 (東京)、長松寺 (高崎)、三澤仮病院 (仙台)、砂取町 (熊本) などの利用も転地療養として捉えられている。これは陸軍の病院だけでは収容しきれないほど、脚気患者が増加しているという事情があった。
- 123) 『陸軍省第三年報』(1877.7~1878.6)、148 頁。
- 124) 三浦守治 (1897) 『脚気治療法』、三春堂、72-73 頁。
- 125) 陸軍省『陸軍省第一年報』(1875 年 7 月 1 日~1876 年 6 月 30 日)、153 頁。
- 126) 前掲 123)、150 頁。
- 127) この説は、停滞した沼地・水たまり、排泄物、枯れた植物、地中からの蒸気など、腐敗した不衛生な空気が病気を引き起こすという見方である (Hannaway, C. (1993) *Environment and Miasmata*, in Bynum, W. F. and Porter, R. eds. *Companion encyclopedia of the history of medicine*. Routledge, p. 295)。さらに、細菌学説にもとづく伝染病説の普及する過渡期にあらわれたミアズマ説と伝染病説の折衷説としてのミアズマ性伝染病が陸軍での脚気に対する認識を枠づけていく。
- 128) 松本良順筆記 (ポンペ先生口述) 『原病各論』。本書は、ポンペが長崎で行なった講義 (1857~1862 年) を受講生の松本良順が邦訳したものである。松本良順は陸軍軍医総監などを務め、初期の陸軍軍医部を統括した。ポンペには順天堂病院の創設者佐藤尚中、初代内務省衛生局長長与専斎、佐々木東洋など明治初期の医学界を担った医師が師事した (前掲 110)、292 頁)。なお、「松本良順」と「松本順」は名前の表記が異なるものの同一人物である。
- 129) 越爾蔑噠斯 (高橋正純・三瀬諸淵訳) (1879) 『原病学各論 卷十五』、高橋正純、44-45 頁。
- 130) 豊住秀堅編 (1879) 『再版増補 安氏脚気病説』、豊住秀堅、44頁。
- 131) 前掲 130)、73 頁。
- 132) 前掲 109)、148 頁。
- 133) 鵬度英口授 (島田貞哉筆記) 『鵬氏脚気新論』、如心堂。本書は、ボードインが大坂医学校在任時 (1869-1870 年) に行なった講義であることが序文に記されている。
- 134) Anderson, W. (1878) Kak'ke, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 6, 151-178.
- 135) ベルトツ, E. (1882) 「脚気」、弘医月報、20、1頁。
- 136) 前掲 135)、4 頁。
- 137) バイナム, W. (鈴木晃仁・鈴木実佳訳) (2015) 『医学の歴史』、丸善出版、101 頁。
- 138) 三宅 秀 (1879) 「審査専任申報第四」、石黒忠恵編『脚気病院第一報告』、脚気病院 88 頁。

- 139) 榎村清徳・原田豊（1881）「審査委員申報第四 附病体解剖所見」、石黒忠憲編『脚気病院第二報告』、脚気病院、79 頁。
- 140) 「脚気患者帰郷療養制御設相成度儀に付申進の件」、『参大日記 編冊補遺』、JACAR: Ref. C07041073400（防衛研究所）。
- 141) 陸軍軍医団編（1913）『陸軍衛生制度史』、陸軍軍医団、831 頁。
- 142) 朝倉治彦編（1988）『陸軍省日誌 第 8 卷』、東京堂出版、339 頁。
- 143) 「陸軍入院患者転地療養規則を定度件」、『貳大日記明治 22 年 3 月』（防衛研究所）、JACAR: Ref. C06080790500。
- 144) 『陸軍省第五年報』（1879 年 7 月 1 日～1880 年 6 月 30 日）、20 頁。
- 145) 『日本鉱泉論』は、温泉入浴の効能をほとんど論じておらず、温泉地の環境、とくに気候要素の重要性を明確に指摘し、『日本鉱泉誌』に影響を与えたとされる（高橋陽一（2010）「明治前期の温泉と政府一衛生問題・温泉論と旅先地域の動向一」、日本温泉研究会編『温泉学Ⅱ 湯治の文化誌』、岩田書院、143-190頁）。
- 146) ベルツ, E.（1880）『日本鉱泉論』、中央衛生会、12・53頁。
- 147) 内務省衛生局編（1886）『日本鉱泉誌 上巻』、報行社、43-44 頁。
- 148) ①神内由己編（1881）『医家袖宝』、神内由己、126-130頁。②三宅 秀（1884）『治療通論』、三宅 秀。
- 149) 前掲 148)②、109 頁。
- 150) 前掲 7)。
- 151) 毛利隆尚（1891）「脚気ノ原因病理ヲ説テ麦飯ノ効用ニ及フ」、陸軍軍医学会雑誌、48、63-78頁。
- 152) ①前掲 4)。②前掲 7)。
- 153) 前掲 55)、61 頁。
- 154) 前掲 75)、105 頁。
- 155) 1884 年 5 月になると、組織編制の改組により歩兵第 15 連隊第 1 大隊、翌月には第二大隊が置かれた。
- 156) 高崎陸軍病院（2001）「高崎陸軍病院歴史」、高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 補遺資料編』、高崎市、279-318 頁。
- 157) 長野県（1936）『長野県町村誌 東信編』、長野懸町村誌刊行会、2133-2141 頁。
- 158) 山田 明（2007）「明治期陸軍転地療養と湯河原・箱根・熱海」、日本福祉教育専門学校研究紀要、15、116頁。
- 159) 宿場町であった旧軽井沢、軽井沢町民俗資料館、軽井沢町役場、軽井沢町立図書館における資料調査の結果、現在脚気転地療養に関する資料は入手できていない。継続的な資料調査が必要である。
- 160) 『新編高崎市史 補遺資料編』所収の「高崎陸軍病院歴史」は、編集の都合のためか 1889 年～1939 年の記述が省略されている。
- 161) 軽井沢への転地の前後には、長松寺や龍光寺などの兵営周辺の寺院が仮病室として利用されている。このことは兵舎内の病室不足と環境の悪化によるためと説明されているが、1887 年には「亜硫酸薫法」という除菌が行なわれており、脚気の原因となる「病毒」を排除する企図があったと考えられる。
- 162) 高崎市編（1927）『高崎市史 下』、高崎市、114 頁。

- 163) 『新編高崎市史 補遺資料編』において割愛されていた「高崎陸軍病院歴史」は、高崎市役所市史編さん室に原本の複製版が保存されている。それをみると、1889（明治22）年以降、脚気転地療養に関する記述はみられないものの、快復期の呼吸器病患者の転地療養が磯部温泉（1891年）や伊香保温泉（1901）で行なわれているのを確認することができた。
- 164) 『読売新聞』1884年6月26日「脚気病」。
- 165) 報道では「仮病院を新築」とあるが、陸軍省や軽井沢にも病室が新たにつくられたことを示す資料は管見の限り発見できていない。先に述べたように「旅館借上げ方式」という制度に則った転地療養が行なわれたと考えられる。
- 166) 『読売新聞』1885年6月26日「出発」。
- 167) 陸軍省『陸軍省第十一年報』（1885年1月1日～12月31日）、93頁。
- 168) 前掲167)、94頁。
- 169) 『読売新聞』1885年11月12日「軽井沢病院」。
- 170) 『信濃毎日新聞』1886年9月2日「軽井沢人の困却」。
- 171) 「訓令案（明治十九年六月十四日 普二七九五ノ二）」、『海軍省公文備考』、JACAR: Ref. C06090797800（防衛省防衛研究所）。
- 172) 「帛列拉病蔓延ノ際軍人被病シ地方へ転移之件ニ付上申（明治十九年七月十日 普三三三六）」、『海軍省公文備考』、JACAR: Ref. C10123923100（防衛省防衛研究所）。
- 173) 延人員数は、1894年6月6日～翌年12月31日までの値である。
- 174) 陸軍衛生事蹟編纂委員会編（1907）「第六編 脚気」、陸軍衛生事蹟編纂委員会編『明治二十七八年役陸軍衛生事蹟 第3巻 伝染病及脚気（下）』、陸軍省医務局、1-2頁。脚気の死亡率は約11%であり、腸チフス（約28%）やコレラ（約59%）と比較すれば値は低いものの、患者数が膨大になった点が注目される（前掲106）、442-444頁）。
- 175) 北澤安太郎『東京陸軍予備病院衛生業務報告 後編』、北澤安太郎、1898、815-831頁。
- 176) 前掲106)、451-453頁。
- 177) 『信濃毎日新聞』1904年9月7日「軽井沢転地療養所訪問記（第一信）」
- 178) ベルツ、E.（トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳）（1979）『ベルツの日記（下）』、岩波書店、173-175頁。
- 179) 前掲12)。
- 180) 小西信八（1895）「夏の軽井沢」、東京茗溪会雑誌、165、50-51頁。
- 181) 前掲79)。山崎は1880年生まれで、1915年に東大工学部を卒業していることから、脚気にかかったのは、明治末から大正初期頃と推察される。また当時、萬松軒だけでなく、旧軽井沢の旅館には多くの脚気患者が滞在していたと考えられる。
- 182) ①『信濃毎日新聞』1897年4月8日「軽井沢に病院起こる」。②『信濃毎日新聞』1897年4月20日「軽井沢病院開院式」。この病院は、西洋医学を修めた岩村田村の医師菊池音之助が開業した。
- 183) 『東京朝日新聞』1897年5月28日
- 184) 一記者（1903）「軽井沢通信」、『旅』、報知社、48頁。
- 185) 東北大学史料館所蔵「高等官の部 其ノ一 旧職員履歴書 第二高等学校」の「ジョン・ニコルソン・シイモール履歴書」によれば、ダブリン大学卒業後に海軍軍医などをつとめた（斎藤サラベス（2013）「外国人教師が宮城県の英語教育に果たした役割について—明治期の公・私立学校を中心に—」東北大学修士論文（https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main

&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=66478&item_no=1&page_id=33&block_id=38 2021年7月5日閲覧)。

186) 前掲 180)、55-56 頁。

187) 前掲 43)②。

188) 『信濃毎日新聞』1890年8月27日「寄書 軽井澤伝道の必要を論じ信州の僧侶諸士に望む (在軽井澤 大口利三郎)」。

189) Sato, E. M. and Hawes, A. G. S. (1881) *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*. Kerry.

190) 荒山正彦 (1991) 「明治期における英文日本旅行案内書の刊行」、大阪大学日本学報、10、123-139。

191) チャンバレンは1873年に来日し、東京帝国大学で教授を務めた。日本アジア協会と関わり、日本文化や日本語の研究に従事した。一方のメイソンは、1875年に工部省のお雇い技師として来日し、おもに電信技術の向上に貢献した。

192) Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1891) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry, pp. 142-144.

193) 第1版(1881年)と第2版(1884年)では、軽井沢に蚊がいないことも避暑地として推薦される理由のひとつとして挙げられていたが、第3版(1891年)から訂正されている。代わりに、吸血するブユ科 (*Simuliidae*) の昆虫に対する注意が促されている。

194) 前掲 44)④、122-125 頁。

195) Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1899) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry, p. 177.

196) Knott, C. G. (1891) Notes on the summer climate of Karuizawa, *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, 19, 565-577.

197) 日本アジア協会は、王立アジア協会(1823年)の設立にみるように、アジア各地への関心の高まるなかで、1872(明治4)年に横浜で設立された。主要な会員として知られているのは、チェンバレン(教師)、サトウ(外交官)、ヘボン(医師)、ミルン(工部省)、アトキンソン(化学教師)などアメリカやイギリス出身の宣教師・教師・医師などであった(楠家重敏(1997)『日本アジア協会の研究—ジャパノロジーことはじめ』、日本図書刊行会)。また、荒山正彦によれば、『*Transaction of the Asiatic Society of Japan*』には、文学・言語(方言)・歴史・自然・地理、あるいは旅行記などさまざまなトピックについての論文やエッセイが掲載され、ここには日本への博物学的な関心の高まりが背景にあるという(前掲 190))。

日本アジア協会の会合は、定期的に行なわれ、投稿された論文は、定例会議において筆者への質疑応答を経て掲載される。日本アジア協会の活動は、英字新聞『*The Japan Weekly Mail*』紙で報じられ、掲載の決定された論文は、同紙に全文が掲載された。つまり、日本アジア協会の発信する情報は、会員だけでなく、当時日本に居留していた外国人たちも目にすることができたと考えられる。ノット論文も1891年6月13日付の『*The Japan Weekly Mail*』紙に掲載されている。

198) ノットは、軽井沢に関する論文のほかにも、そろばんの歴史 (*The Abacus: Historic and Scientific Aspect*: 1886年14号)、伊能忠敬の測量 (*Ino Chukei: Japanese Surveyor and cartographer*: 1889年16号)、月琴の音階 (*Remarks on Japanese Musical Scales*: 1891年19号)に関する論稿を同誌に掲載しており、多彩な関心をもっていたことがうかがわれる(日本アジア協会(1965)『*Asiatic Society of Japan Transaction Index to 1872-1922*』、Asiatic Society of Japan)。彼

- は、軽井沢の気候調査の論文を発表した 1891 年に帰国した。
- 199) この記述は、ショウとディクソンの来訪と避暑地軽井沢の発見が 1886 年という説に有力な根拠をあたえるものである。
- 200) 前掲 196)、574 頁。
- 201) 前掲 196)、574 頁。
- 202) 前掲 196)、574 頁。
- 203) Shaw, R. M. D. (1976) *To the Mayor of Karuizawa*, 佐藤不二男『軽井沢物語』、軽井沢書房、70-71 頁。これは 1956 年 7 月 26 日付でロナウドから当時の軽井沢町町長であった佐藤不二男へ送られた手紙である。
- 204) 福沢諭吉と宣教師との関係を論じた白井は、1873 (明治 6 年) に派遣された宣教師ショウが 1902 (明治 35) 年に死亡するまで、約 29 年間にわたって派遣元の英国国教会 SPG に膨大な書簡を送っていることを指摘しているが、管見の限り軽井沢についての記述はまったく見いだせないと述べている (白井堯子 (1999) 『福沢諭吉と宣教師たち—知られざる明治期の日英関係—』、未来社、68 頁)。
- 205) Shaw, R. M. D. (1959) *Karuizawa and Archdeacon Shaw, Japan Missions: An Anglican Missionary Quarterly*, 9(3), p.10.
- 206) 前掲 205)、p. 11.
- 207) エイキン (白坂 蕃訳) (2014) 『インペリアル・ベルヴェデーレーマラヤのヒル＝ステーション』、立教大学観光学部ヒルステーション研究プロジェクト、29 頁。
- 208) Emberson, R. (1904) *Japan, The Missionary Outlook*, November 1904, p. 245.
- 209) Shaw, N.R. (Grandy, A. ed.) (1991) *The Diaries of Norman Rymer Shaw Volume 1: Early Years to 1913*. A. Grandy, pp. 8-9. なお、日本語訳については、軽井沢新聞社 (2010) 『Grand Vignette』、軽井沢新聞社、10 頁を参考にして適宜変更した。
- 210) 前掲 77)、203 頁。
- 211) 前掲 77)、93-94 頁。
- 212) 前掲 55)131-134 頁。
- 213) Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1907) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry, Preface.
- 214) Lloyd, A. (1909) *Every-Day Japan: written after twenty-five years' residence and work in the country*. Cassell and Company, p. 205.
- 215) 前掲 66)。
- 216) 『信濃毎日新聞』1936 年 8 月 11 日「軽井沢発展座談会 7」。
- 217) 「外国人ニシテ日本人ノ名義ヲ以テ土地家屋ヲ所有シ並ニ会社ヲ設ケ商業ヲ営ムモノ調査一件」、『戦前外務省記録 3 門 9 類 4 項 47』 (外務省外交史料館所蔵)。
- 218) 戦前の生活史を論じた岩瀬彰を参考にし、「有閑・富裕層」とは、皇族・貴族・政治家・財閥当主、高級官吏のほか、明治期には少数であった大学教員・学者 (新渡戸稲造等) など経済的・社会的身分の高い者を指す (岩瀬彰 (2017) 『「月給 100 円のサラリーマン」の時代—戦前日本の〈普通〉の生活—』、筑摩書房)。
- 219) 鹿島岩蔵 (鹿島組当主) と樋川専次郎 (素封家?) は複数の家屋を所有しており、早くから貸別荘として家屋を貸し出していた。
- 220) 前掲 44)④、18-24 頁。
- 221) 雑誌『住宅』を発刊していたのは、住宅改良会という組織で、主たる編者を務めたのは橋

口信助であった。彼はアメリカ留学を経験し、洋風住宅を日本にも普及させるべき、住宅会社「あめりか屋」を設立した。『住宅』は、日本における洋風住宅の導入を推進するとともに、あめりか屋の設計し、建設した住宅や別荘を紹介する役割を果たしていた。彼は1915年頃から、野沢源次郎と協働し、軽井沢の別荘地開発に進出した。そのため、1917年8月の『住宅』「軽井沢号」は、軽井沢という場所とあめりか屋住宅の宣伝的な意味をもつため、記述の扱いには注意が必要である。寄稿者は軽井沢での避暑を経験した著名人、別荘を所有した政治家、軍人、学者などであった。ただし記事内容は、軽井沢をたんに評価するだけでなく、改善すべき点や諸種の提案なども掲載されている。また、軽井沢を好ましく思っていない意見も掲載している点で単純に宣伝目的とはいきれない点で、資料として取り上げる価値がある。

- 222) 八田裕次郎 (1917)「草分けの別荘持として」、内田青蔵編 (2001)『雑誌『住宅』第1巻』〔復刻版〕、柏書房、350頁。
- 223) 八田裕次郎 (1917)「ボーデングハウスを設けよ」、内田青蔵編 (2001)『雑誌『住宅』第1巻』〔復刻版〕、柏書房、356頁。
- 224) 尾崎行雄 (1925)「軽井沢が好きなわけ」、軽井沢町報、1、1頁。
- 225) 尾崎はショウからキリスト教の洗礼を受けている。
- 226) 『信濃佐久新聞』1911年9月1日「軽井沢の名星」。
- 227) 記者が取材した日には、家族や外国人の友人たちと入山峠の散策を楽しんでいる。
- 228) 鶴崎熊吉編 (1930)『青山胤通』、青山内科同窓会、231頁。
- 229) 原嘉道 (1930)「青山先生の思ひ出」、鶴崎熊吉編『青山胤通』、青山内科同窓会、325頁。
- 230) ちなみに青山は、一貫して脚気伝染病説を唱え続けた人物である。
- 231) 橋本綱常 (1878)「脚気新説」、医事新聞、1、1-13頁。
- 232) 足立鐵之助 (1930)「軽井沢の昔話」、ローンテニス、6、12頁。
- 233) ホワイトは、1871年に来日したアメリカン・バプテスト自由伝道協会の宣教師である。新渡戸が1875年に入学した東京外国語学校(旧外語)の教師をつとめていた(キリスト教歴史大事典編集委員会 (1988)『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1296頁)。
- 234) 新渡戸稲造 (1917)「軽井沢の思ひ出」、内田青蔵編 (2001)『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻』、柏書房、349頁。
- 235) 一記者 (1909)「軽井沢に於ける新渡戸博士」、実業之日本、12(12)、1369頁。
- 236) 佐藤信 (2020)『近代日本の統治と空間—私邸・別荘・庁舎—』、東京大学出版会。
- 237) 『信濃毎日新聞』1905年7月13日「夏の軽井沢」。
- 238) 前掲85)。
- 239) 前掲95)。
- 240) 前掲232)、13頁。
- 241) 内田青蔵編 (2001)『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻』、柏書房、349-360頁。
- 242) 奥川夢郎 (1923)『軽井澤を中心として』、北信毎日新聞株式会社、53頁。
- 243) 『東京朝日新聞』1913年8月9日「軽井沢より」
- 244) 『讀賣新聞』1915年7月20日「日帰り一晚泊避暑旅行案内 外国のような軽井澤」。
- 245) 『讀賣新聞』1915年8月26日「信濃路より (三) 軽井澤の一瞥」。
- 246) 前掲243)。
- 247) 『東京朝日新聞』1912年9月11日「軽井澤発展策」。
- 248) 本多静六 (1911)『軽井澤遊園地設計方針』(国立国会図書館所蔵)。

- 249) 前掲 247)。
- 250) 前掲 248)、3-4 頁。
- 251) 岡村八寿子(中島松樹・大久保保監修)(2018)『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史—源次郎と3人の男たち—』、牧歌舎。
- 252) 『新日本』は、大隈重信の政治的な思想を広めるため1911年～1918年に発行された雑誌で、堤は1916(大正5)年秋頃より、発行部数の減少していた同誌の再建を託され、新設の出版元である新日本社の社長に就任した(奈良岡聰智(2014)『新日本(復刻版)解説』、柏書房、1-31頁)。
- 253) 野澤源次郎(1916)「株より土地熱へ—最も確実にして有利なる投資法—」、新日本、6(12)、122-123頁。
- 254) ①ハワード, E. (山形浩生訳)(2016)『[新訳]明日の田園都市』、鹿島出版会、77-88頁。
②片木 篤(2000)「近代日本の郊外住宅」、片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』、鹿島出版、35頁。
- 255) 前掲 254)②、36頁。
- 256) 片木 篤編(2017)『私鉄郊外の誕生』、柏書房。
- 257) 小林一三に先駆けて、阪神電気鉄道が1908年に鳴尾村などで住宅を分譲したが、本格的な住宅地開発は、1928年武庫川の改修により生じた埋めたて地に誕生した「甲子園」を待たねばならない。
- 258) 三木理史(2007)「「通い」の再生産構造—大阪近郊住宅地・池田町室町の事例から—」、山根 拓・中西僚太郎編『近代日本の地域形成—歴史地理学からのアプローチ—』、海青社、149頁。
- 259) 前掲 251)、94-95頁。
- 260) この点に関して、経営史の内海孝は、堤の手掛けた土地開発の方針には、野澤源次郎の影響がある可能性を指摘している(内海 孝(2006)「堤康次郎の青年期と転機の回路(下)—出版業から土地開発業への転回をひもとく—」、東京外国語大学論集、72、132-133頁)。
- 261) 神田駿吉(1916)「軽井沢と田園都市問題」新日本、6(12)、124-125頁。
- 262) なお、野澤源次郎による計画的な開発が及んだ範囲を「野沢別荘地」と表記する。雲場池の周辺は現在、「野沢原」とよばれている。岡村によれば、野沢の取得した土地の小字名は合併されて、「字野沢」、「字野沢原」「野沢山」などとなっているという(前掲 251)、133-136頁)。
- 263) ①前掲 44)①、222頁。②前掲 44)④、162頁。
- 264) 前掲 251)、64、167頁。
- 265) 内田青蔵(1987)『あめりか屋商品住宅』、住まいの図書出版局、115-125頁。
- 266) 前掲 265)。
- 267) 橋口信助(1917)「避暑の新意義を説きて軽井沢の天地を推挙す」、内田青蔵編(2001)『雑誌『住宅』第1巻』[復刻版]、柏書房、341-342頁。
- 268) 前掲 267)、342頁。
- 269) 前掲 267)、343頁。
- 270) 土屋源一郎(1917)「軽井沢の新施設」、内田青蔵編(2001)『雑誌『住宅』第1巻』[復刻版]、柏書房、361-362頁。
- 271) 無署名「理想的避暑地を造る為に」、内田青蔵編(2001)『雑誌『住宅』第1巻』[復刻版]、柏書房、363-364頁。

- 272) 前掲 44)④、268-271 頁。
- 273) 前掲 251)、123 頁。
- 274) 軽井沢の別荘分布を示した最も古いものは、1911 (明治 44) 年頃のものとしてされており、ここではそこに掲載されている別荘 12 軒を除いた。
- 275) 貸別荘で「△」で示したものは、1943 年の段階で家屋の表記はあるものの、所有者の記載がない。ただし、1940 年時点では「野沢組」の所有物であったため、「貸別荘 (推定)」とした。「貸別荘」と示した家屋の所有者は野沢源次郎である。
- 276) 佐藤大祐と斎藤功によれば、第一次世界大戦期以降、とくに旧軽井沢愛宕山の外国人所有の土地・別荘は、日本人へ売却され、所有者の転換が進んだ (前掲 22))。
- 277) ①『信濃佐久新聞』1923 年 8 月 1 日「軽井澤 町政促進陳情」、②前掲 75)、276-278 頁。
- 278) 猪瀬直樹 (1986) 『ミカドの肖像』小学館、132-134 頁。
- 279) 由井常彦編 (1996) 『堤康次郎』、ピーエイチエス、35-49 頁。
- 280) 堤康次郎 (1964) 『叱る』、有紀書房、84 頁。永井は、堤が社長を務めた雑誌『新日本』の主筆でもあった。
- 281) 前掲 280)、84 頁。
- 282) 前掲 278)、134 頁。
- 283) ①沓掛区「感謝状」(早稲田大学大学史料センター所蔵)。②前掲 44)④、76-77 頁。③「土地売買予約證書正本」、軽井沢町資料館・追分宿郷土館 (1992) 『軽井沢を育てた森林の源流をさぐる—軽井沢植林史—』、軽井沢町資料館・追分宿郷土館、47 頁。
- 284) これらの関連会社について、沓掛遊園地株式会社は「官報」1918 年 1 月 16 日 (1634 号)、258 頁。千ヶ瀧遊園地株式会社は「官報」1919 年 4 月 15 日 (2007 号付録)、1 頁。株式会社グリーンホテルは『株式会社グリーンホテル第貳回報告書 大正九年下半期』、1-3 頁。その他『箱根土地株式会社 第貳回報告書 大正九年下半期』、3 頁を参照した。
- 285) 酒井雅子 (2018) 「箱根土地株式会社と佐野善作」、一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター、4、56 頁。
- 286) ①橋爪紳也 (2000) 『日本の遊園地』、講談社、34-44 頁。②安野 彰・篠野 志郎 (1998) 「「遊園地取締規則」にみる明治・大正期の東京近郊の遊園地の概念—都市娯楽施設の史的研 究—」、日本建築学会計画系論文集、63(506)、161 頁。たとえば、大阪の霞遊園・天下茶屋遊園・小林遊園地などがある。
- 287) 前掲 280)、85 頁。
- 288) 「千ヶ瀧別荘地案内」(1920 年代)、「軽井澤千ヶ瀧遊園地案内」(1920 年代) などの資料の記述から、千ヶ瀧遊園地の「遊園地」は名称であり、実態は別荘地であると判断できるため、遊園地を別荘地とみなすこととする。
- 289) 『箱根土地株式会社第四回報告書 大正十年下半期』、4-5 頁。
- 290) 『讀賣新聞』1922 年 7 月 7 日「軽井澤千ヶ瀧の文化村」。
- 291) 『千ヶ瀧のプロフェール』(1937 年版) (筆者所蔵)。この資料は、千ヶ瀧の自然環境、諸設備・施設や別荘家屋などが写真とともに掲載され、エッセイ風の文体で千ヶ瀧を紹介する別荘地案内リーフレットである。管見の限り 1935 (昭和 10) ~1937 年版を確認している。
- 292) 中澤高志 (2018) 『住まいと仕事の地理学』、旬報社、74-80 頁。中間階級の具体的な身分・職業としては、会社員、官吏、軍人、大学教員・学者などが挙げられる (佐藤裕紀子 (2004) 「大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動—雑誌『主婦之友』を手掛かりとし

- て一」、日本家政学雑誌、55(6)、479-492)。
- 293) 南博社会心理研究所編 (1987)『大正文化』、勁草書房。
- 294) 無署名 (1918)「避暑地としての軽井澤—軽井澤を凌ぐ千ヶ瀧遊園地—」、新日本、8(8)、69-70 頁。
- 295) 前掲 291)。
- 296) 『信濃佐久新聞』1919 年 8 月 19 日「浅間高原より」。
- 297) 「開園^{そらもろ}匆々「グリーンホテル [この時は観翠楼を指す]」ハ満員トナリト尋テ別荘モ同様ノ好況ヲ呈シ予期ノ成績ヲ挙グルコトヲ得タリ」と報告されている (『箱根土地株式会社 第貳回報告書 大正九年下半年』、2-3 頁)。
- 298) 発行年次については、町制施行前の東長倉村と示されていること、グリーンホテルの完成を報じた新聞記事と地図内容が合致することから判断した。
- 299) 前掲280)、87頁。
- 300) 角野幸博 (2000)『郊外の 20 世紀—テーマを追い求めた住宅地—』、学芸出版、48-53 頁。
- 301) 家屋番号が飛んでいるのは、すでに個人に所有になった結果と解釈することができる。
- 302) 「軽井沢千ヶ瀧案内」(1920 年代) (プリンスホテル所蔵)
- 303) 『讀賣新聞』1923 年 7 月 20 日「軽井澤千ヶ瀧グリーンホテル」。
- 304) 「価格」は、時期によって幅があるが 500~2,000 円で販売されている (「軽井澤千ヶ瀧の文化村」(1920 年代)、「信州軽井澤千ヶ瀧遊園地」(1920 年代)、「新築の別荘特価」(プリンスホテル所蔵)、「千ヶ瀧のプロフェキル」(1935~1937 年版: 1935 と 1936 年版はプリンスホテル所蔵))。
- 305) 前掲 293)。
- 306) 片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編 (2000)『近代日本の郊外住宅地』、鹿島出版。
- 307) 『信濃佐久新聞』1919 年 9 月 30 日「千ヶ瀧の涼風を浴ぶ (二)」。
- 308) 須藤鐘一 (1921)『探勝行脚 写真機を携えて』、三徳社、103 頁。
- 309) 前掲 303)。
- 310) 内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦編 (2008)『図説・近代日本住宅史』、鹿島出版会、88-91 頁。
- 311) 前掲 303)。
- 312) 田山花袋 (1926)「涼しいところ」、婦女界、34(2)、81-83 頁。
- 313) ①「千ヶ瀧別荘地案内」(1920 年代)。②「軽井澤千ヶ瀧の文化村」(1920 年代)。③前掲 291)。
- 314) 「千ヶ瀧遊園地区画図」(1923 年頃)、「千ヶ瀧経営地実測図」(1930 年頃)において、区画に氏名の表記はあるが、家屋の表記がない。つまりその時点では土地のみ所有している者もいるため「土地・別荘所有者」と表記する。別荘のみ所有している者は、地図資料からは確認できない。なお「千ヶ瀧経営地実測図」(1946 年)には家屋の表記はみられない。
- 315) 各地図資料において個人名の書込みがある区画を所有されているものとみなした。第 5-12 図の家屋番号 15、16、19 の示された 3 区画には番号と苗字が書き込まれているため、「所有の有無が曖昧な区画」とした。総坪数にこの 3 区画は含めていない。土地は 1 坪あたり 10 円程度で販売され、月賦制度も利用可能であった (「千ヶ瀧遊園地別荘案内」(1920 年代) (プリンスホテル所蔵))。『日本紳士録 第 27 版』(1922 年)、『日本紳士録 第 28 版』(1924 年)を参照した結果、「千ヶ瀧遊園地区画図」に記載のある土地・別荘所有者の身分・職業が判明するのは 32 人で、実業家 17 人、医師・歯科医 5 人、著述家 3 人、資産家 2 人、大学教授 2

- 人、教育者・弁護士・子爵各 1 人。台形型の土地所有者は住友寛一（資産家）である。
- 316) 「遊園地内面積 100 坪ノ地上ニ建坪約拾貳坪ノ瀟洒タル洋式別荘壹棟ヲ配セル千ヶ瀧文化別荘ヲ考案シ金貳千円也」(①『箱根土地株式会社 第五回報告書 大正十一年上半期』、4-5 頁。②前掲 290)。
- 317) 「千ヶ瀧経営地実測図」(1930 年頃)において、氏名の書込みのない区画に建物が示されているもの、建物のみが示されているものを貸別荘、建売別荘あるいはモデル別荘とみなした。プリンスホテルには、この実測図と同様の範囲で、かつ地番付きの実測図も所蔵されている。この「千ヶ瀧経営地実測図」の作成年は、土地台帳を用いて地番付実測図との差異を比較した結果、1930 年頃と推定される。
- 318) 1928 (昭和 3) 年に朝香宮家が千ヶ瀧遊園地の南西部に別荘を建てると (第 5-3 表)、千ヶ瀧遊園地西部の土地も取得され、貸別荘を中心とした開発が開始された。しかし本格的に分譲されるのは戦後であるため、本稿では取り上げていない。
- 319) グリーンホテルは終戦後米軍に接收されるものの、1946 年より営業を再開しているから、「千ヶ瀧経営地実測図」(1946 年)は、別荘地分譲の再開を意図し 1946 年段階で土地・別荘の所有状況が調査されたものと思われる。第 5-13 図の斜線部は新規分譲予定地であることがうかがわれる。
- 320) なお、第 5-12 図と第 5-13 図のグリーンホテルやその南側の台形上の土地は、向きや形状が異なる。こうしたズレは、1930 年頃と 1946 年の「千ヶ瀧経営地実測図」が測量等にもとづく実測図であるのに対して「千ヶ瀧遊園地区画図」は実測図ではないためと推察される。
- 321) 「千ヶ瀧のプロフキル」(1935～1937 年版)。
- 322) たとえば、ピアノ・水彩画・舞踊・将棋教室、納涼トーキー、テニス大会、住宅展の開催。自治組織「千ヶ瀧村会」が結成され避暑客懇親会も開かれた(「千ヶ瀧のプロフキル」(1935～1937 年版)。また「千ヶ瀧学園」(滞在者の子弟用夏季学校)の開校、学生が低廉に利用できた「高原アパート」もある(第 5-13 図)。
- 323) 箱根土地株式会社 (1939)『千ヶ瀧山荘』、箱根土地株式会社、1-10 (大久保保氏所蔵)。
- 324) 身分・職業に統一された分類はないが、郊外住宅地研究で用いられた分類を参考にした(前掲 306)。
- 325) 中村隆英編 (1993)『家計簿からみた近代日本生活史』、東京大学出版会、10 頁。
- 326) 所得税納税額から年間推定所得額への変換は、『日本紳士録第 43 版』(1939)の巻頭に掲載された「所得税率摘要」(臨時租税増徴法 改正法 (1938 年 3 月 31 日 法律第 42 号)を参照して算出した。
- 327) 前掲 218)、59-61 頁。また、岩瀬は谷崎潤一郎『細雪』に登場する女性主人公たちが、見合い相手の外資系サラリーマンの収入を品評する場面から、中間階級のなかで「裕福な」年間所得を 5,000 円としている。また 1939 年の納税者の平均所得税は 235 円 (大蔵省昭和財政史編集室 (1957)『昭和財政史 V 租税』、東洋経済新報社、12 頁)、つまり年間所得は、約 4,200 円である。
- 328) 他府県に住む 11 人の内訳は、群馬 4 人、京都 3 人、大阪 1 人、その他 3 人。
- 329) 前掲 25)②。
- 330) 前掲 22)。
- 331) 土屋治平 (1979)「千ヶ瀧秘話」、土屋長平『郷の華 第 4 集』、私家版、218-222 頁。
- 332) 吉岡彌生 (1952)『この十年間』学風書院、128 頁。

- 333) 前掲 59)、37 頁。
- 334) 前掲 59)、38 頁。
- 335) 1922 年 6 月 6 日の『信濃毎日新聞』「軽井沢の貸別荘モウ全部契約済 家賃は素敵に高い」。
- 336) 前掲 59)、41 頁。
- 337) 『東京朝日新聞』1921 年 8 月 16 日「俗化した軽井沢外人に嫌はる」。
- 338) 前掲 59)、38 頁。
- 339) 高橋禎造 (1936)「感想」、泉 寅夫編『軽井沢町誌』、泉 寅夫、288 頁。
- 340) 前掲 75)、247 頁。
- 341) 星野嘉助 (1972)『やまぼうし—星野温泉のあゆみ—』、私家版、3-14 頁。
- 342) 『讀賣新聞』1924 年 9 月 21 日「南軽井沢土地無償譲渡」。
- 343) 『讀賣新聞』1925 年 7 月 17 日「南軽井沢簡易避暑地」。
- 344) 前掲 323)、9 頁。
- 345) 前掲 44)④、264-269 頁。
- 346) 現在も軽井沢ゴルフ倶楽部は、会員であることが「社会的ステータス」となるほどに入会審査が厳しいことで知られている。慶應義塾大学医学部出身の医師で、戦前期の軽井沢で夏期診療所を開設した北沢英雄によれば、会員の欠員補充は不定期で、かつ会員資格の第一条件は軽井沢に別荘を所有していることである。その他にも理事会における「知名度」の審査があるという。つまり、きわめてクローズドな会員制のコミュニティといえる。(北沢英雄 (1976)『新軽井沢物語』、有紀書房、190 頁)。
- 347) 七戸克彦 (2014)「法学者の軽井沢」、法政研究、81(3)、233-282。
- 348) 市村きよじ (1980)『軽井沢—大切な人々—』、日経事業出版社。
- 349) 前掲 44)④、296 頁。
- 350) 規模は定かではないものの、三笠ホテルが温泉を営業していたからである。
- 351) 笹尾佳代 (2015)「軽井沢モダンの諸相—菊池寛「陸の人魚」・阿部知二「山のホテルで」を中心に—」、研究と教育、38、34-46 頁。
- 352) 菊池寛 (1994[1924])「陸の人魚」、菊池寛『菊池寛全集 第 6 巻』、高松市菊池寛記念館、264 頁。
- 353) 前掲 352)、269 頁。
- 354) 前掲 352)、270 頁。
- 355) 1927 年に旧軽井沢の本通りで、正宗白鳥と出会った室生犀星は、正宗の滞在先について「野沢組の別荘のある方まで可成り道のりがある」と記している(室生犀星 (室生朝子編) (1990)『詩文集 犀星 軽井沢』、徳間書店、63 頁)。
- 356) 正宗白鳥 (1927)『文壇観測』、人文会出版部、80 頁。
- 357) 前掲 356)、84 頁。
- 358) 前掲 22)。
- 359) 前掲 44)③、163-167 頁。あめりか屋建築の特徴は、急こう配の切妻屋根で、これが洋風建築の尖った屋根のイメージを具現化している。そして、外壁の下半分がサイディング張りで、上半分は粗面漆喰壁仕上げとなっている。さらに、窓ガラスの上部 3 分の 1 ほどが正方形の格子状となるデザインもあめりか屋建築を特徴づける(同 156-158 頁)。
- 360) 稲垣虎次郎 (1934)『大軽井沢の誇り 草津温泉の誉れ』、稲垣虎次郎、23-26 頁。

- 361) 『信濃毎日新聞』1936年8月9日「軽井沢発展座談会 9」
- 362) 『軽井沢町報』1928年8月号「軽ブラの夕」
- 363) 前掲 355)、136 頁。
- 364) ①山本達郎 (1986) 「一九二〇年代・三〇年代の軽井沢」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、17 頁。②小坂旦子 (1986) 「軽井沢雑感」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、120 頁。
- 365) 前掲 355)、199 頁。
- 366) ①廣橋眞光 (1986) 「思い出あれこれ」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、40 頁。②原田敬作 (1986) 「追懐」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、89 頁。③実吉利恵子 (1986) 「思い出すまま」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、92 頁。
- 367) 横田喜三郎 (1976) 『私の一生』、東京新聞出版局、162-163 頁。
- 368) 前掲 367)。
- 369) 別荘ができると、彼は7月中旬から9月初旬の夏季休暇中に滞在した。午前は研究をし、午後は千ヶ瀧遊園地内にあるテニスコートで汗を流した。彼はけっして社交嫌いというわけではなく、テニスを通じて親交を深めた友人たちとピクニックに出かけたりもしている。
- 370) 前掲 331)、218-222 頁。
- 371) 前掲 332)、126 頁。
- 372) 前掲 332)、128 頁。
- 373) ①寺田寅彦 (1933) 「軽井沢」(初出『経済往来』9月号)。②寺田寅彦 (1933) 「浅間山麓より」(初出『週刊朝日』1933年10月)。③寺田寅彦 (1933) 「杳掛より」(初出『中央公論』1933年10月)。④寺田寅彦 (1935) 「高原」(初出『家庭』1935年9月)、以上はすべて「青空文庫」を参照した (<https://www.aozora.gr.jp/> : 2021年9月12日)。
- 374) 石田アヤ(1986)「軽井沢の風物詩」、朝吹登水子『37人が語る わが心の軽井沢 1911-1945』、軽井沢を語る会、61 頁。
- 375) 堀 辰雄 (1947) 「ルウベンスの偽画」(初出『山繭』1927年2月、改稿『創作月刊』1929年1月)、青空文庫参照 (<https://www.aozora.gr.jp/cards/001030/card4815.html> : 2021年9月12日)
- 376) 前掲 364)①、20 頁。
- 377) 前掲 364)①、20 頁。
- 378) 高久甚之助 (1936) 「序」、稲垣虎次郎 (1934) 『大軽井沢の誇り草津温泉の誉れ』、稲垣虎次郎。
- 379) 前掲 355)、89 頁 (初出『サンデー毎日』1931年7月19日「紅毛人牛鍋をつつくの図」)。
- 380) 吉見俊哉 (2008) 『都市のドラマトゥルギー』、河出書房新社。
- 381) たとえば、軽井沢新聞社 (1988) 『軽井沢ヴィネット No.30』、軽井沢新聞社、14 頁。軽井沢新聞社 (1997) 『軽井沢ヴィネット No.67』、軽井沢新聞社、10 頁。
- 382) 軽井沢新聞社 (1999) 『軽井沢ヴィネット No.73』、軽井沢新聞社、42-49 頁。
- 383) 前掲 12)。
- 384) 『信濃毎日新聞』2020年4月1日「軽井沢町 新型コロナ防止で求める」。
- 385) ①Zožal, V., Domènech, A. and Emekli, G. (2020). Stay at (which) home: Second homes during and after the COVID-19 pandemic, *Journal of Tourism Futures* (<https://doi.org/10.1108/JTF-06-2020-0090>) (ahead-of-print). 2021年10月29日閲覧。②Pitkänen, K., Lehtimäki, J. and Puhakka, R. (2020). How do Rural Second Homes Affect Human Health and Well-being? Review of Potential Impacts,

International Journal of Environmental Research and Public Health, 17, 6748
(doi.org/10.3390/ijerph17186748). 2021 年 10 月 29 日閱覽。

博士論文

近代〈軽井沢〉の成立に関する歴史地理学的研究
—別荘地の拡大による「季節的な都市」の誕生—

(A Historical Geography of “Karuizawa” in the
Modernization Period of Japan: The Growth of “Seasonal
City” with Expansion of Second Home Area)

【図表編】

2022年3月

立命館大学大学院文学研究科

行動文化情報学専攻博士課程後期課程

前田 一馬

目次
(掲載順)

第1章

- 第1-1表 『日本別荘地ノート』における別荘地の類型
- 第1-2表 明治末期以降の郊外住宅地開発と別荘地開発
- 第1-1図 現在の軽井沢の地域概観
- 第1-2図 場所・意味・表象を軸とした解釈の枠組み

第2章

- 第2-1図 浅間根越しの三宿
- 第2-2図 浮世絵に描かれた杓掛宿と軽井沢周辺
- 第2-3図 碓氷新道と中山道の経路
- 第2-4図 日下部金兵衛「Asamayama (Fire Mountain) from Karuisawa, at Nakasendo」
- 第2-1表 軽井沢の土地開拓前史
- 第2-2表 軽井沢の略史
- 第2-3表 軽井沢における外国人避暑客数：1888～1890年
- 第2-5図 おもな外国人別荘
- 第2-6図 明治末期の旧軽井沢を中心とした別荘地
- 第2-4表 新軽井沢・旧軽井沢周辺の宿泊施設（明治末期）
- 第2-7図 旧軽井沢周辺のおもな西洋ホテル
- 第2-5表 明治期の旧軽井沢のおもな商店
- 第2-8図 旧軽井沢本通りの景観

第3章

- 第3-1表 陸軍における脚気患者数
- 第3-2表 江戸時代のおもな脚気の原因説
- 第3-1図 おもな陸軍の脚気転地療養地
- 第3-3表 鎮台・兵営の年次別転地療養地
- 第3-4表 入浴療養の実施に関する資料
- 第3-5表 軽井沢脚気転地療養に関する東京鎮台による陸軍省宛の「伺い」
- 第3-6表 高崎兵営の脚気転地療養地と転地した患者数
- 第3-2図 高崎兵営と各転地療養地の位置関係
- 第3-7表 軽井沢における陸軍の飲水検査と旅舎内有機物検査の結果
- 第3-8表 日清戦争における東京陸軍予備病院の転地療養地
- 第3-3図 日清戦争時の療養兵
- 第3-9表 日露戦争における陸軍の転地療養地
- 図3-4図 萬松軒の外観（明治末期～大正中期頃）
- 第3-5図 軽井沢病院の外観と新聞広告
- 第3-6図 マンロー病院の結核患者

第4章

- 第4-1表 『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』第2版（1884）の記述
- 第4-2表 1889年8月における東京と軽井沢の気候条件の比較
- 第4-1図 軽井沢周辺における外国人の散策・小旅行の行先
- 第4-2図 散策ポイントの絵葉書

第 4-3 表 おもな別荘所有者（明治期）

第 5 章

- 第 5-1 図 旧軽井沢周辺の畑
- 第 5-1 表 本多静六の軽井沢遊園地構想
- 第 5-2 図 野沢によるおもな道路開発
- 第 5-2 表 野沢別荘地開発において実現された提言
- 第 5-3 図 「軽井沢号」表紙と軽井沢出張所
- 第 5-4 図 開発前の野沢別荘地周辺
- 第 5-5 図 野沢別荘地の諸施設
- 第 5-6 図 マーケットの概観と広告
- 第 5-7 図 雲場池周辺の開発
- 第 5-8 図 1943 年時点における野沢別荘地の別荘分布
- 第 5-9 図 あめりか屋の設計による細川護立と徳川慶久の別荘
- 第 5-10 図 あめりか屋の設計による大隈重信の別荘
- 第 5-11 図 堤の取得した土地
- 第 5-3 表 千ヶ瀧遊園地の開発年表
- 第 5-4 表 メディアに報じられた開発計画
- 第 5-12 図 1923 年頃における千ヶ瀧遊園地の土地区画計画と開発状況
- 第 5-13 図 1923 年頃～1946 年の土地・別荘所有の状況
- 第 5-14 図 千ヶ瀧と野沢別荘地の別荘家屋の比較
- 第 5-15 図 温泉浴場の外観
- 第 5-16 図 グリーンホテルの遠景
- 第 5-5 表 土地・別荘所有者の身分と職業
- 第 5-6 表 土地・別荘所有者の所得額
- 第 5-17 図 土地・別荘所有者の居住分布

第 6 章

- 第 6-1 図 大正・昭和戦前期におけるおもな開発
- 第 6-2 図 星野温泉の風景
- 第 6-3 図 1912 年頃の「南軽井沢」
- 第 6-4 図 1937 年頃の「南軽井沢」
- 第 6-5 図 箱根土地による南軽井沢別荘地の宣伝
- 第 6-1 表 〈軽井沢〉の別荘地分布の中心-周辺構造
- 第 6-2 表 1927 年における夏季出張店
- 第 6-6 図 〈軽井沢〉の空間構造

第 7 章

- 第 7-1 図 吉田初三郎筆「軽井沢鳥瞰図」

第 1-1 表 『日本別荘地ノート』における別荘地の類型

別荘タイプ	代表例			立地	所有者			建物			用途			滞在		
	I	II	III		I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
近郊賓客接待型	(岩崎別邸)	(三井別邸)	(山県別邸)	河川周辺 高台	政財界 有力者 皇族			和洋併設			接客 園遊会 風流生活			週1回程度		
高原避暑型	-	(シヨウウ別荘)	法政大学村 (群馬) (徳川別荘) (軽井沢)	眺望のよい開放的空間 (外国人) 木に囲まれた閉鎖的 空間 (日本人)	-	西洋 志向 人	日本人 富裕 層 学者	-	バン ガ ロー	洋館	-	避暑	洋 式 生 活 ・ 学 習	-	夏季の 長期滞在	
温泉保養型	-	(御用邸)	東伏見別荘 (箱根)	温泉地近傍 高原・海浜に準ずる	-	皇族 政財界人		-	和風 中心		-	温泉 避暑 (避寒)	-	夏冬季の 長期滞在		
海浜保養型	-	(伊藤別荘)	西園寺別荘 (興津)	浜辺近傍 (外国 人)、山を背景 (日 本人)	-	政財 界人	皇族 文人 実業家	-	和館 洋館		-	海水浴 避暑 会合 風流生活	-	長期 冬季 滞在	週末 利用 居	
農場経営 拠点型	-	青木農場 (那須) 乃木別荘 (那須)		農場 田園	-	皇族 政財界人		-	洋館 和館	-	欧州の 荘園 日本の 農耕	-	月1回 程度			
近郊保養型	-		(石橋別荘)	眺望のよい斜面 (ハ ケ)	-	日本人 富裕 層 文化人		-	和館 中心		-	保養	-	週1回 程度		

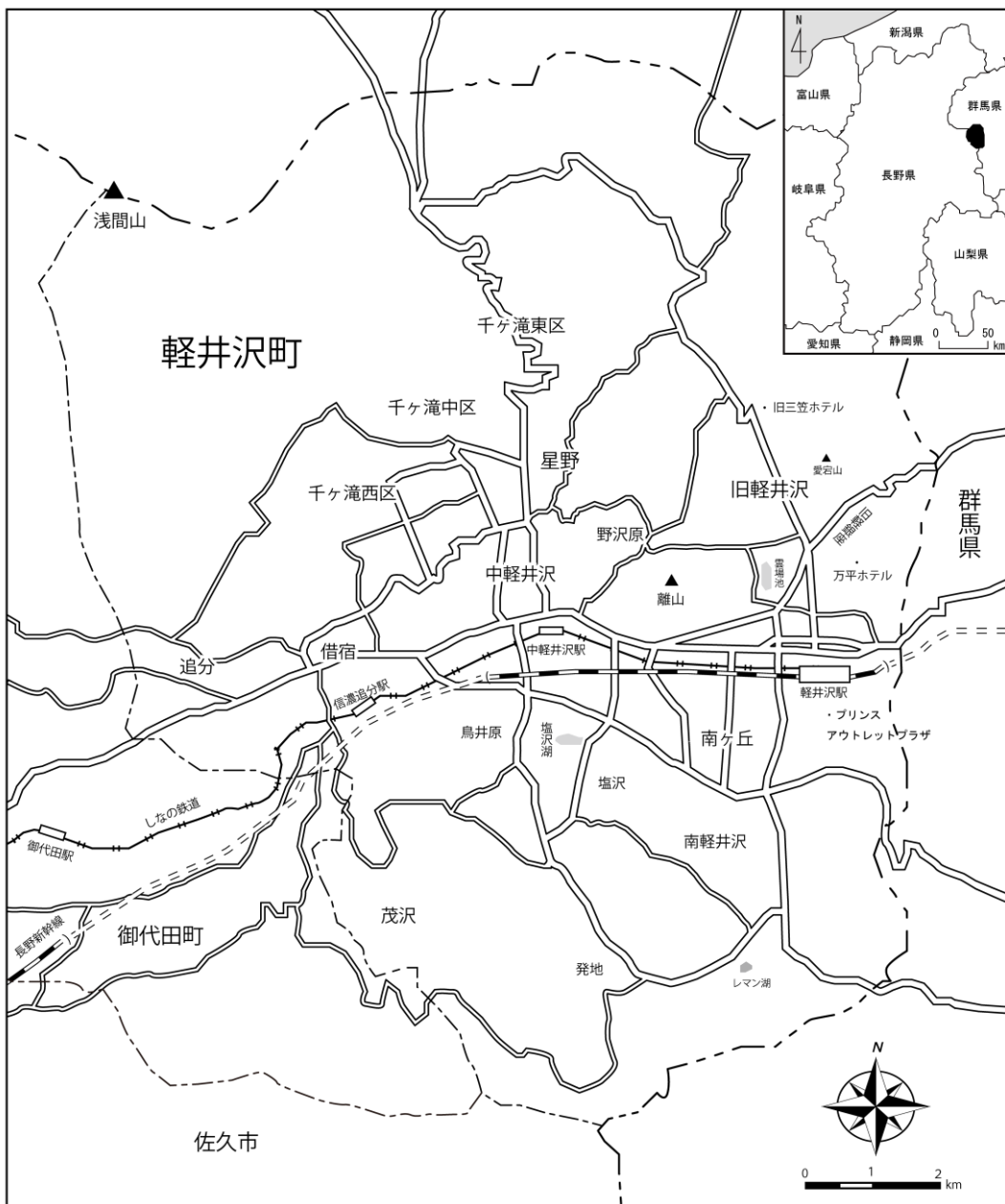
資料：安島博幸・十代田 朗 (1991) 『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局、284 頁をもと作成。

第 1-2 表 明治末期以降の郊外住宅地開発と別荘地開発

年	関東	関西
1907		香櫨園
1910		池田室町
1911	桜新町	桜井、御影
1912	箱根強羅別荘地	
1915	野沢別荘地	
1916	渡辺町	雲雀丘
1917		花屋敷
1918	千ヶ瀬遊園地 †	夙川香櫨園、甲陽園
〃	二の岡万国村*	
1919	御殿場対山荘	箕面住宅地
1921	神山国際村*、強羅 †	千里山田園都市
1922	目白 †、洗足、大和郷	桜ヶ丘住宅、千里山
1923	多摩川台、別荘樂園+	甲東園
1924	南軽井沢 †	
〃	小平・大泉 †	芦屋文化村
1925	同潤会、国立学園 †	
1926	山中湖旭日丘	北白川小倉、香里園
1927	法政大学村	瓢箪山、藤井寺
1928	御殿場温泉 †	甲子園住宅地
〃	箱根温泉荘	松風山荘
1929	阿佐ヶ谷、玉川学園	六麓荘、昭和園
〃	鎌倉山、片瀬西別荘地	浜甲子園、あやめ池
1930	西巢鴨	甲風園、額田山荘
1931	麻布桜田町	大美野田園都市
1932	弁天島別荘地	
1933		
1934		生駒山別荘、塚口
1935	等々力	
1936	洗足南、常盤台	ちぬの浦、園田

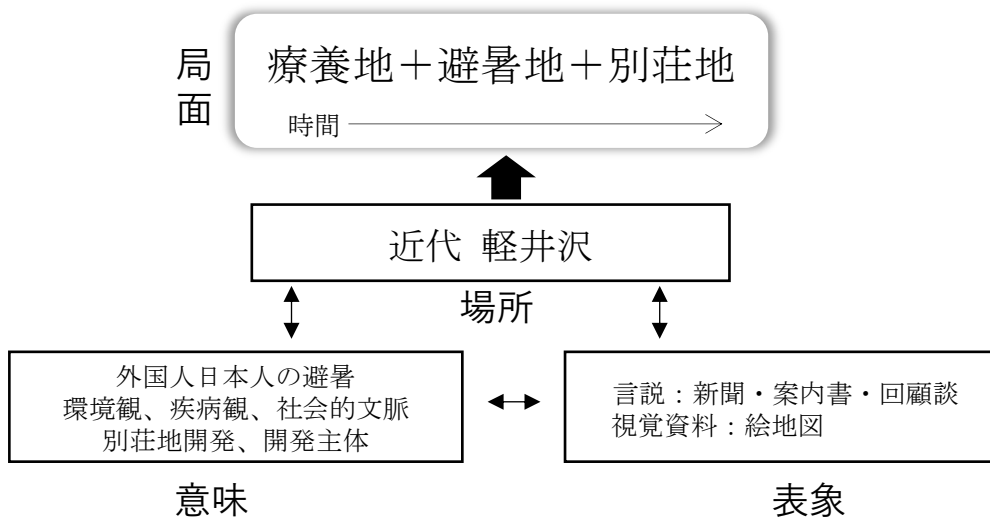
資料：「郊外住宅地年表」「郊外住宅地データベース」、
片木 篤・藤谷陽悦・角野幸博編（2000）『近代日
本の郊外住宅地』鹿島出版会、i～xxxii 頁。

注：太字は別荘地、「†」は箱根土地による開発、「*」
は欧米人中心の別荘地、「+」の別荘樂園は計画の
み。

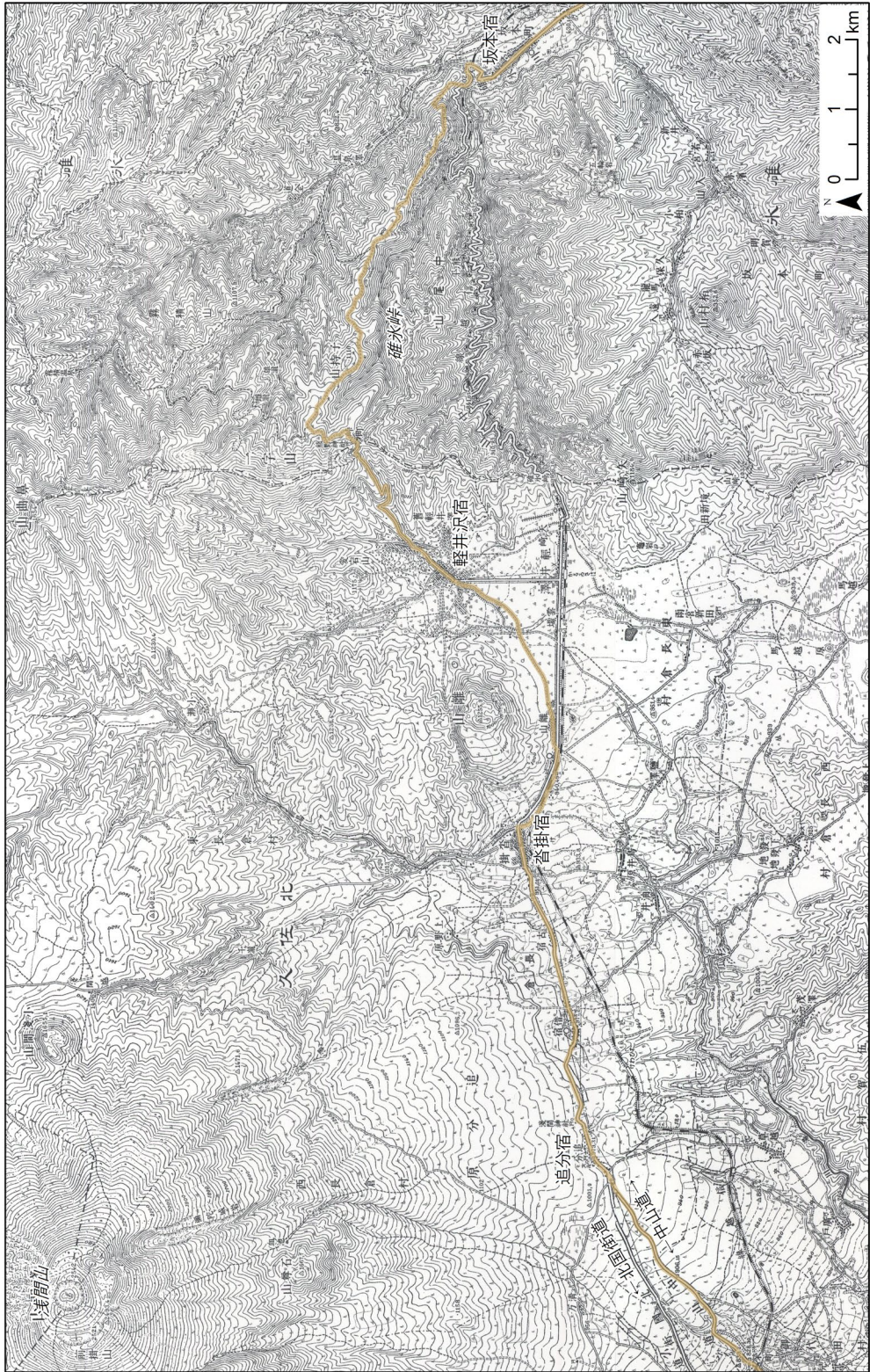


第 1-1 図 現在の軽井沢の地域概観

資料：地理院地図を用いて作成。



第1-2図 場所・意味・表象を軸とした解釈の枠組み



第 2-1 図 浅間根越しの三宿

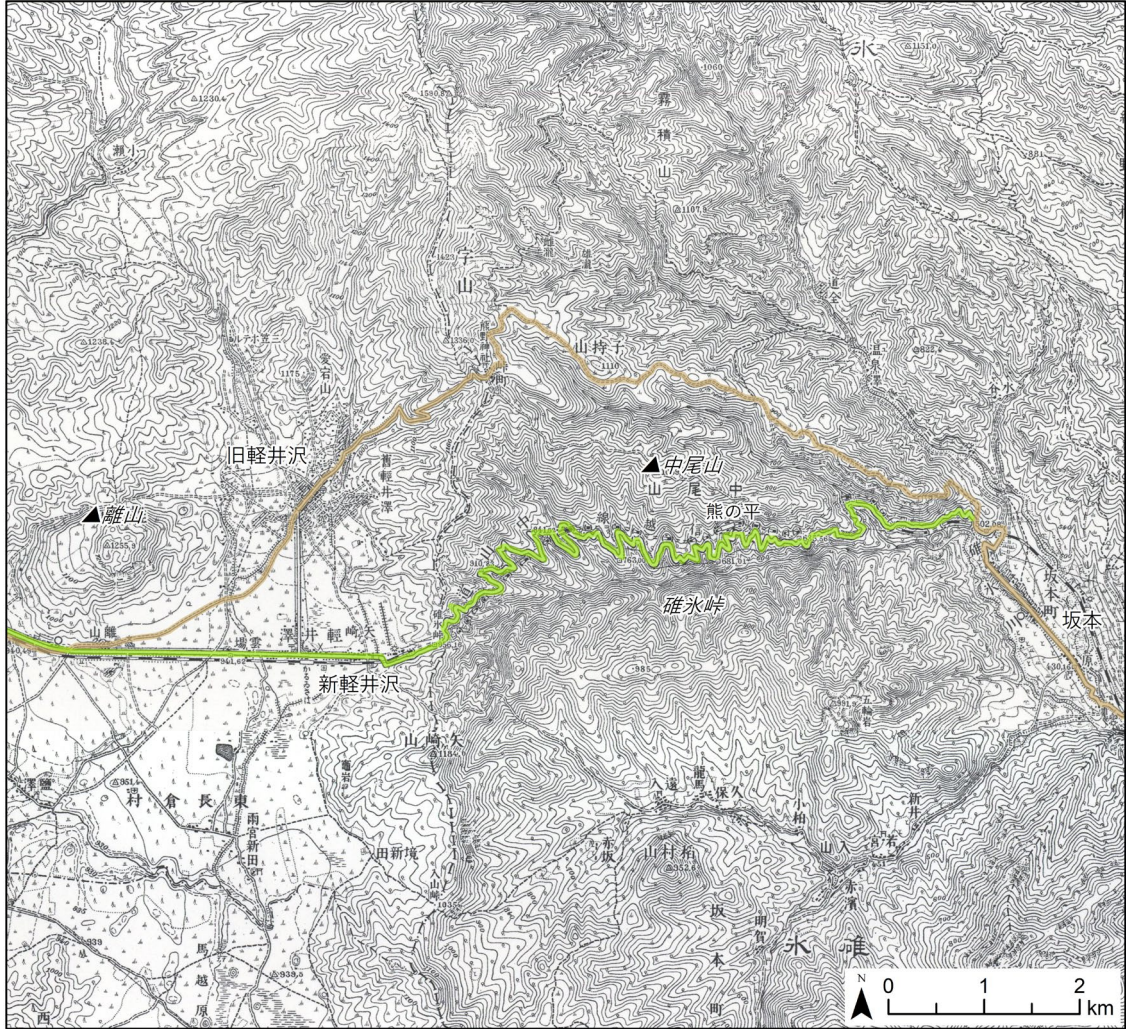
基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図 1912 年）



第 2-2 図 浮世絵に描かれた沓掛宿と軽井沢宿周辺

資料：歌川広重・溪斎英泉『木曾海道六拾九次』（1836 年頃）（国立国会図書館デジタルコレクション）

注：上図が沓掛宿周辺、下図が軽井沢周辺



第 2-3 図 碓氷新道と中山道の経路

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図 1912 年）



第 2-4 図 日下部金兵衛「Asamayama (Fire Mountain) from Karuisawa, at Nakasendo」

資料 : The Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Prints and Photographs: Photography Collection, The New York Public Library. "Asamayama (Fire Mountain) from Karuisawa, at Nakasendo" New York Public Library Digital Collections. Accessed May 14, 2021.

(<https://digitalcollections.nypl.org/items/510d47d9-c947-a3d9-e040-e00a18064a99>)

第 2-1 表 軽井沢の土地開拓前史

年次	開拓者	内容
1875 (明治 8) 年	鳥居義処	国有地100町の払下げを受けたほか、民有地の買収を行ない、牧場を経営する。防風林としてカラマツの植樹を行う。
1882 (明治15) 年	稲垣正直	長尾原に牧場設置。1884年から酪農経営。
1883 (明治16) 年	雨宮敬次郎	上野原、離山南方の土地を買収。豚・山羊・馬などの牧畜や新田開発、畑を開墾。からまつの植林を実施。
”	川上操六	矢ヶ崎山にて牧場経営を企画。
1897 (明治30) 年	川田龍吉	離山下 (雲場原) にて牧場・酪農を営むものの失敗。

資料：春原平八郎（1923）『維新以後の軽井沢小観』、信濃毎日新聞社、47 頁。島崎 清（1978）『軽井沢百年の歩み』、軽井沢印刷、143 頁。軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌歴史編（近・現代）』、軽井沢町誌刊行委員会、604-630 頁より作成。

第 2-2 表 軽井沢の略史

年	主な出来事	年	主な出来事
1875	鳥居義処の開発と牧場	1915	草津軽便鉄道 新軽井沢小瀬間営業開始
1881	陸軍脚気患者50名療養	〃	野沢源次郎の別荘開発
1883	雨宮敬次郎の開墾と植林	1916	大隈重信が別荘築
1884	アーネスト・サトウの訪問	1916	キャンベル宣教師殺人事件
1884	碓氷新道開通	1918	堤康次郎、千ヶ滝・南軽井沢の開発着手
1886	A. C. ショー来軽	〃	軽井沢通俗夏季大学開校
1888	A. C. ショー別荘建設	1920	室生犀星来軽
1893	碓氷峠線、横川―軽井沢間（アプト式鉄道）開通	1921	野沢原にゴルフ場完成
〃	八田裕二郎、日本人別荘第1号建設	1922	日本人有志「軽井沢集会堂」建設
1895	亀屋旅館、万平ホテルへ改称	〃	避暑団による夏季診療所開設
1897	軽井沢合同基督教会創立	1923	摂政宮殿下（後の昭和天皇）が避暑
1899	軽井沢ホテル開業	〃	堀辰雄来軽
1906	三笠ホテル開業	〃	千ヶ滝グリーンホテル建築
1908	軽井沢体育協会発足	1924	芥川龍之介来軽
〃	主義方針「娯楽を人に求めずして自然に求めよ」	1927	南軽井沢に20間道路完成
1910	杓掛・旧軽井沢の洪水被害大	1928	軽井沢上水道完成
〃	西園寺公望来軽	〃	軽ブラなる様相呈する
〃	桂太郎別荘を建築	1931	軽井沢競馬場開設
1911	洪水を受けて愛宕山の別荘地拡大	1933	新ゴルフ場完成
1913	軽井沢避暑団結成	1934	町観光課の新設
1914	星野温泉・旅館開設	1936	軽井沢開発五十年祭
〃	軽井沢に電燈がともる	1941	避暑団と集会堂が合併し軽井沢会となる
〃	尾崎行雄「莫哀荘」建築	1945	終戦 米軍にホテルが接収

資料：軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌歴史編（近・現代）』、軽井沢町誌刊行委員会、「年表」より作成。

第 2-3 表 軽井沢における外国人避暑客数：1888～1890 年

国名	1888年	1889年	1890年
イギリス	84	107	126
アメリカ	51	42	71
フランス	12	9	9
ドイツ	8	7	14
スペイン	2	2	3
オーストリア	1	1	0
オランダ	0	0	9
ベルギー	0	0	3
中国	0	1	0
その他	0	4	4
滞在日数	1888年	1889年	1890年
1日滞在	71	105	133
2日以上90日以内の滞在	87	68	106
合計	158	173	239

資料：『信濃毎日新聞』1891年2月20日より作成。
 注：資料には「2日以上90日以下滞在の者は其日数多くは15日以上に渉るものにして2日3日の如きは実に少し」とある。



愛宕山の別荘（大正期）



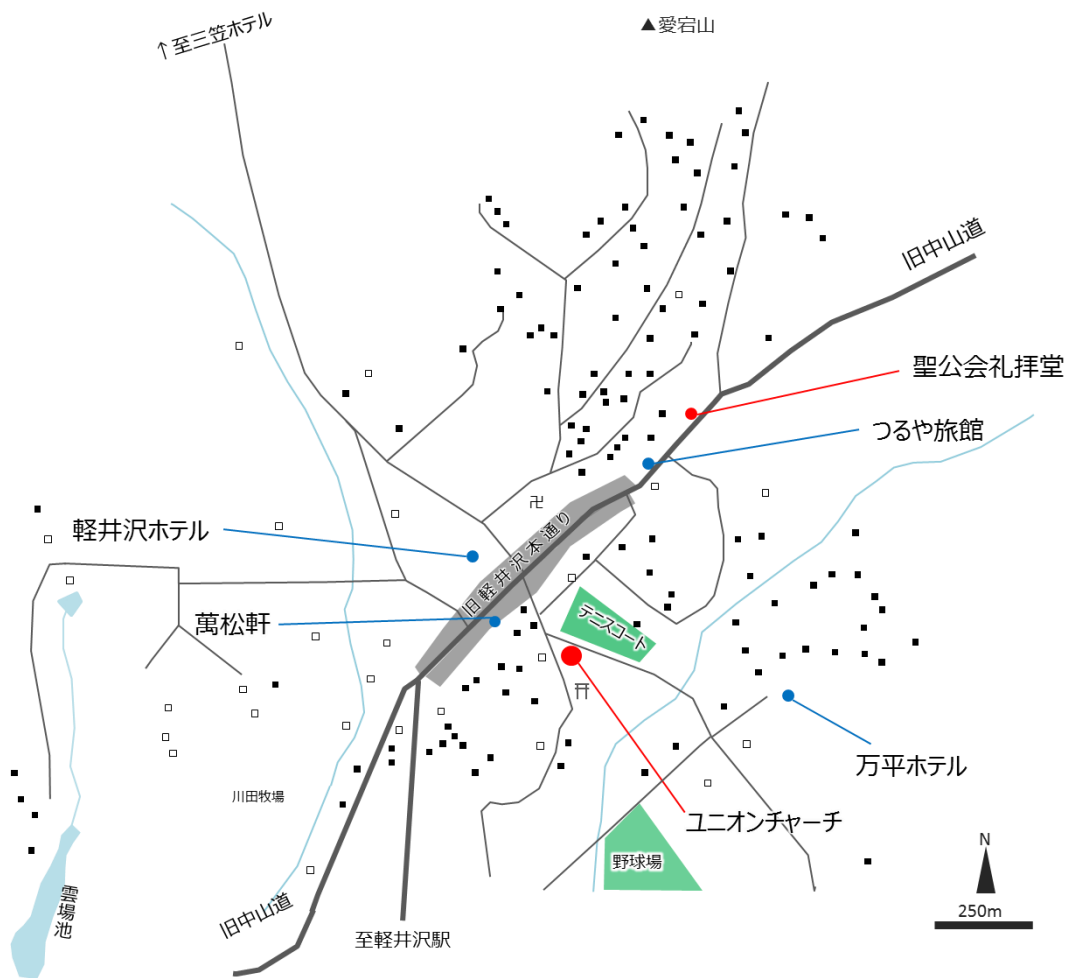
シヨウが建築した最初の別荘（明治期）



愛宕山下の三軒別荘（明治期）

第2-5図 おもな外国人別荘

資料：上図は前島写真館「軽井澤名所繪はがき」（筆者所蔵）、
中図は宍戸 實（1987）『軽井澤別荘物語』、住まいの図
書館出版局、58 頁、下図は軽井澤町誌刊行委員会（1988）
『軽井澤町誌歴史編（近・現代）』、軽井澤町誌刊行委員
会、115 頁。



第 2-6 図 明治末期の旧軽井沢を中心とした別荘地

資料：「軽井沢別荘分布図」（1911）をもとに作成（軽井沢町立図書館デジタルアーカイブ（<http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/preview.html?mid=244>）。

注：■は外国人別荘、□は日本人別荘を示す。

第 2-4 表 新軽井沢・旧軽井沢周辺の宿泊施設（明治末期）

名称	説明	宿泊料 (2等)	定員
軽井沢ホテル	1899年開業、最初の洋風ホテル。洋風2階建。	5円	70
万平ホテル	1895年亀屋旅館より改名、1902年洋風建築へ建て替え移転。	6円	60
三笠ホテル	1906年開業。洋風2階建。	8円	40
オースティンホテル	外国人経営の下宿。	-	-
つるや旅館	江戸時代初期創業。和風2階建。	1.5円	80
萬松軒	和風2階建。	1円	40
富士屋	万事家族的にして学生商人に適す。	80銭	-
油屋旅館	軽井沢駅前。客室15室。	1円	-
つるや	旧軽井沢に通ずる道路東側。客室12室。	50銭	-
廣聲館	軽井沢駅前より半丁。	-	-
市田屋	軽井沢駅前より半丁。	-	-
蓬莱館	小瀬温泉	1銭	-

資料：佐藤孝一（1987[1912]）『かるみざわ』、国書刊行会、108-113頁。



万平ホテル（明治末期～大正中期）



輕井沢ホテル（明治末期～大正中期）



三笠ホテル（大正～昭和戦前期）

第 2-7 図 旧輕井沢周辺のおもな西洋ホテル
資料：「輕井澤三笠ホテル御案内」、絵葉書（筆者所蔵）

第2-5表 明治期の旧軽井沢のおもな商店

種類	店名	宣伝内容など
雑貨	田丸屋	白米・雑穀・味噌・醤油、金物類・日用品
〃	丸屋	薪炭・雑貨 商品は優良 価格は低廉 配達は迅速
〃	常盤屋	米穀 酒類 売菓 雑貨
〃	市川屋	米穀 清酒 煙草 雑貨
〃	今道屋	魚類観物、青物罐詰、雑貨
〃	青木商店	米穀雑貨 薪炭卸商
青物	三澤屋	内外蔬菜果物
肉	江戸屋	牛肉・豚肉・羊肉・鶏肉 新鮮且つ美味
鮮魚	川村屋	魚類乾物 和洋酒小 雑貨新聞 間物罐詰
〃	高見屋	海産物 乾物類 青物洋 酒罐詰
〃	越後屋	酒類 乾物 鮮魚 青物
パン	山屋	BAKERY 軽井沢に滞在せる三千餘の外人に供給する麵 麴は何店で製造し販売するか？
牛乳	土屋牧場	この山野とこの空気に放牧せられたる牝牛より搾取せし牛乳の如何に美味にしてまた滋養に富むか？
〃	佐藤牧場	佐藤牧場の牛乳の聲價は高きこと噴煙万丈浅岳の如し
料理	しまだや	西洋料理、アイスクリーム、鰻蒲焼、仕出し
天然水	泉 喜太郎	特に夏季中は避暑客の便宜を計り多少によらず迅速に配達仕候
おみやげ	三笠商店	あけびつる細工 三笠焼陶器、傘、下駄、玩具雑貨
家具	権現商会	美術彫刻 家具製造
美術彫刻	〃	彫刻家具製造販売
〃	清水兼吉	婦人洋服地類同付属品一式 夏季出張店
洋服	大河内婦人洋服店	SHOE-MAKER 靴類 製造修繕
靴	佐藤後三郎	LAUNDRY 西洋洗濯 迅速丁寧
クリーニング	佐藤孝三	出張日は偶数日 診療時間 午後2時～午後5時
医者	水澤 源	貨物取扱 鉄道枕木 薪炭材木
運送	土源運送	別荘建築土木一切請負、牛乳販売
建築	後藤仙八	別荘地売買 土地別荘管理
別荘管理	佐藤元次郎	避暑療養 碓氷紅葉 浅間登山
旅館	つるや	避暑 療養 浅間登山 遊猟茸狩 御賄優良
〃	萬松軒	避暑療養 碓氷紅葉 浅間登山
〃	油屋	待遇懇切 賄料低廉
〃	廣聲館	MAMPEI HOTEL
ホテル	万平ホテル	KARUIZAWA HOTEL
〃	軽井沢ホテル	全国名所案内員 前島邦峰
写真	前島写真館	焼増 現像 出張撮影 風景写真 名所絵はがき
〃	土屋写真館	

資料：佐藤孝一『かるみざわ』（1987[1912]）、国書刊行会、巻末広告より作成。



THE STREET KARUIZAWA

輕井澤本通り



第2-8図 旧軽井沢本通りの景観

資料：上図は前島写真館「軽井澤名所繪はがき」（筆者所蔵）、
 下図は中島松樹（1997）『軽井沢避暑地100年』、国書刊
 行会、20-21頁。

第3-1表 陸軍における脚気患者数

年次	新規患者数 (人)	兵員に占める割合(%)	治癒数 (人)	死亡数 (人)	疾病死に占める割合(%)
1876	3,909	—	—	—	—
1877	2,687	—	—	—	—
1878	13,371	37.0	12,365	410	61.0
1879	9,980	25.5	9,830	247	44.4
1880	6,423	17.1	6,027	129	39.1
1881	6,063	16.1	5,707	157	34.7
1882	7,590	19.6	7,113	201	34.8
1883	9,573	24.2	8,919	224	50.6
1884	9,793	27.0	9,311	209	51.2
1885	6,232	14.4	5,852	63	20.5
1886	1,563	3.5	1,386	44	12.6
1887	2,403	4.9	1,935	77	27.1
1888	1,807	3.7	1,517	65	22.3
1889	789	1.5	657	39	16.1
1890	500	1.0	385	29	9.5
1891	265	0.5	221	6	2.3
1892	64	0.1	36	—	—
1893	113	0.2	92	2	1.0

資料：1876～77年は『陸軍省第七年報』、78年以降は長谷川春朗編（1896）『累年比較 陸軍医事小統計』、大阪陸軍々医学会により作成。

注1：「—」は、「データなし」を示す。

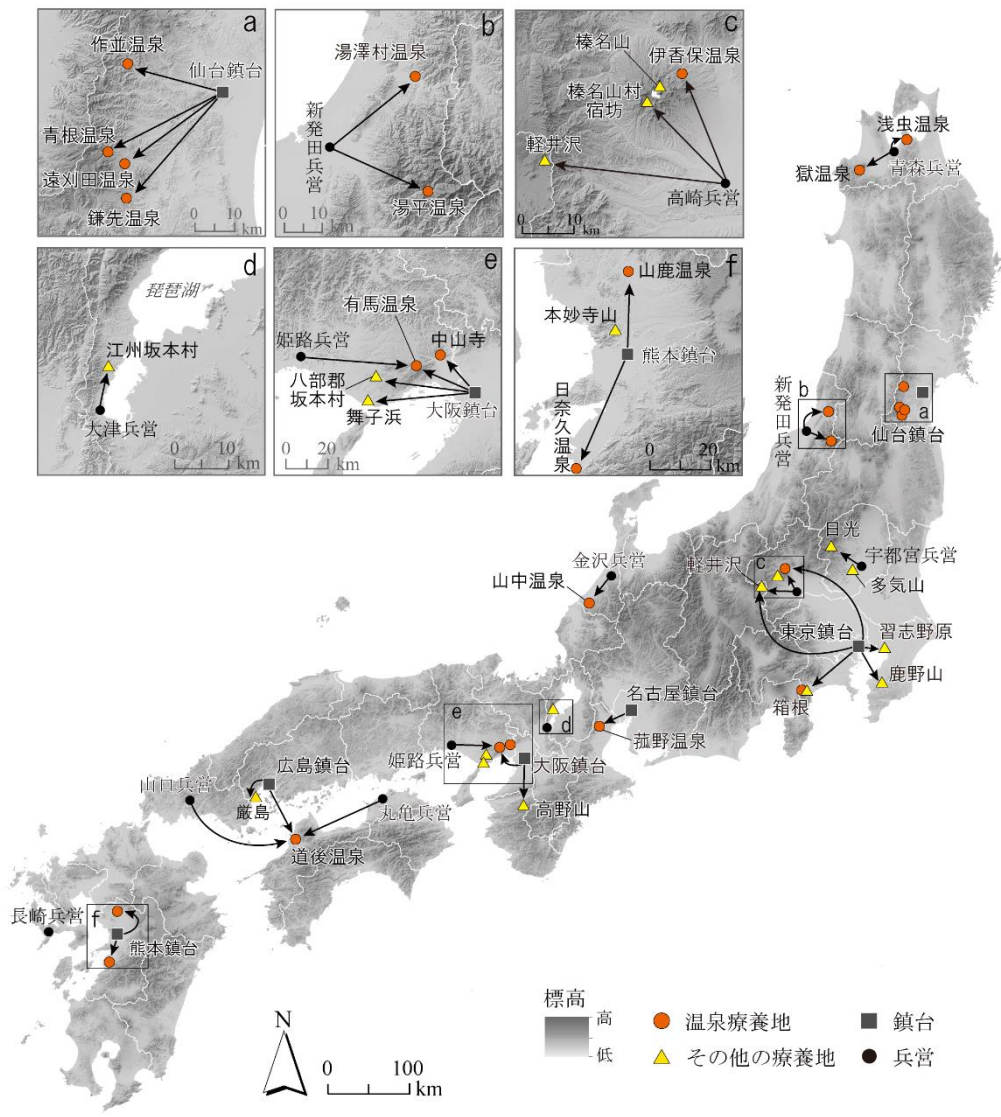
注2：「治癒数」と「死亡数」には旧患が含まれている。

注3：治癒数と死亡数のほかには、引き続き治療を受けたり、徐役される患者がいると推察される。

第3-2表 江戸時代のおもな脚気の原因説

原因説	説 明
1 風毒説	風暑寒湿によって地中で醸成された邪気にあたる
2 瘴気説	特定の土地で、地中から蒸発する邪気にあたる
3 中湿説・外湿説	水湿の気が体内、あるいは体外から作用する
4 瘟疫説	傷寒(腸チフス)などのように毒が伝染する
5 飲気下流説	過飲過食などで飲食物の水気が下肢に流れる
6 腎虚説	房事過度による精力欠乏

資料：山下政三（1995）『脚気の歴史—ビタミンの発見—』、思文閣、184-185頁、富士川 游（1981）「脚気病の歴史」、富士川英朗編『富士川游著作集4』、思文閣、34-35頁より作成）。



第3-1図 おもな陸軍の脚気転地療養地

資料：朝倉治彦編 1988. 『陸軍省日誌』(1～9巻) 東京堂出版. 『陸軍省第一年報』～『陸軍省第十一年報』(1875～1885)、高崎陸軍病院編 2001. 高崎陸軍病院歴史. 高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 補遺資料編』279-318. 高崎市. 脚気病患者転地療養の件. 『参大日記 明治 19 年 9 月』JACAR: Ref.C07041123400 (防衛研究所). 転地療養経路中車馬料実費支給の件. 『肆大日記 明治 24 年 8 月』JACAR: Ref.C07070601400 (防衛研究所) より作成.

第3-3表 鎮台・兵營の年次別転地療養地

年	青森	仙台	東京	高崎	宇都宮	新発田	名古屋	金沢
1874		鎌先温泉	伊香保温泉 箱根宮ノ下	伊香保温泉		湯平温泉		
1875		鎌先温泉 三澤仮病院	伊香保温泉 音羽仮病院	伊香保温泉			菰野温泉	
1876			音羽仮病院	伊香保温泉				
1877	獄温泉	遠刈田温泉					菰野温泉	山中温泉
1878	獄温泉	青根温泉					菰野温泉	山中温泉
1879		青根温泉	旧箱根宿 小日向副病院	伊香保温泉 長松寺	日光		菰野温泉	山中温泉
1880			旧箱根宿	榛名山村・宿坊				
1881		植松村	戸山学校	軽井沢	多気山 日光	湯澤村温泉		
1882			旧箱根宿 戸山学校	軽井沢		湯澤村温泉	菰野温泉	
1883		作並温泉	旧箱根宿	軽井沢			菰野温泉	
1884	浅虫温泉	青根温泉	旧箱根宿 伊香保温泉 榛名山 習志野原	軽井沢				
1885		青根温泉	軽井沢 習志野原	習志野原				
1886			鹿野山*					
1887				軽井沢				
1888				軽井沢				
1891			軽井沢					
年	大津	大阪	姫路	広島	丸亀	山口	熊本	長崎
1871		有馬温泉						
1874				道後温泉			山鹿温泉 日奈久温泉	
1875		有馬温泉		道後温泉	道後温泉	道後温泉	砂取町	
1876		有馬温泉		道後温泉	道後温泉	道後温泉		
1877		有馬温泉						
1878	江州坂本村	中山寺 有馬温泉		高宮郡可部村				(海水浴)
1879				厳島				
1880								
1881	江州坂本村	有馬温泉 舞子浜 高野山						
1882	江州坂本村		有馬温泉					
1883	江州坂本村	八部郡坂本村						
1884	江州坂本村	八部郡坂本村					本妙寺山	
1885								

資料：第3-1図と同様。

注1：転地療養患者数が判明し、100人を超える場合は太字で示した。

注2：※は東京陸軍教導団による。

注3：長崎兵營では、1878年に転地療養が実施されているものの、場所は不明である。ここでは転地療養の有無を明示する意図で、場所の代わりに具体的な行為である海水浴をカッコで示した。

第3-4表 入浴療養の実施に関する資料

資料	掲載年月日	記述
a	1874年6月5日 (46号)	熊谷懸へ達書写 東京鎮台高崎營所屯在ノ兵隊追々暑氣ニ向ヒ脚氣病重症ニ罹リ候者ハ伊香保温泉へ僻養生所ヲ設ケ療養為致候条此旨為心得相達候事
b	1874年6月5日 (47号)	白川県へ達書写 熊本鎮台屯在之兵隊追々暑氣ニ向ヒ脚氣病重症ニ罹リ候者其県管下山鹿並ニ日南久ノ両温泉へ仮養生所ヲ設ケ療養為致候条此旨為心得相達候事
c	1874年6月8日	広島鎮台並ニ高松營所屯在ノ兵隊脚氣病重症ニ罹リ候者一時療養トシテ其県管下伊予国道後温泉へ仮療養所ヲ設ケ引移リ候都合ニ候此旨為心得相達候事
d	1874年6月30日	宮城県へ達書写 其県管下岩城国荊田郡蕨本村字鎌先山温泉へ仙台鎮台兵之内脚氣症ノ者入浴治療為致度旨同台ヨリ伺出之趣聞届候条為心得此旨相達候事 (52号)
e	1875年7月18日 (53号)	本病院伺 脚氣病者ノ昨七年箱根宮ノ下温泉へ差遣候処上野国伊香保温泉場ハ風土並泉質トモ却テ宮ノ下ヨリ相勝候様被考候間当年ハ右伊香保温泉へ差遣度此段相伺候也七月五日
f	1879年3月14日 (12号)	名古屋鎮台伺 台下金澤營所屯在歩兵第七聯隊ハ不幸ニシテ年々脚氣症許多ナルノミナラズ伝染病熱病モ年トシテ多少發セサル……今此景状ヲ推察スルニ亦何時モ客歲ノ如キ残状ニ可立至モ難計今ヨリ大ニ其予防ノ方法ヲ施行致度ヨリ該隊長ハ勿論当台病院長ノ申出モ有之ニ付右患者ハ入浴概則ニ照シ例年ノ如ク石川県下江沼郡山中村ニ於テ入浴療養許可致シ置候得……自今當下市街天徳院ヲ借受ケ転地療養為致度見込ニ候間前以テ御許可被下度此段相伺候也 (三月十四日) 指令 伺之通 但寺院借受ノ儀工兵第三方面本署へ相達候事

資料：a、b、dは朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 第2巻』、東京堂出版、201-201、232頁。eは朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 第3巻』、東京堂出版、292頁。fは朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 第6巻』、東京堂出版、295-296頁。gは朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 第8巻』、東京堂出版、390頁。

第 3-5 表 軽井沢脚気転地療養に関する東京鎮台による陸軍省宛の「伺い」

資料	掲載年月日等	記述
A	1881年8月29日	<p>東京鎮台伺 鎮下高崎屯在歩兵第三聯隊第一大隊ノ儀ハ年々脚気患者多数ニ及候ニ付転地ノ上療養為致候処其効驗モ不少依テ本年ノ儀モ精々予防ノ方法等相施シ若シ該患者多数ニ及候時ハ転地可為致見込ニ候処頃日以来遂日増加シ現今既ニ百餘名ニ至リ此上猶延蔓ノ景況モ有之就テハ長野縣下信州国北佐久郡輕井澤驛ノ儀ハ幽僻且清涼ニシテ最モ適當ノ旨医官ヨリ申立モ有之候就テハ患者ハ同地ニ移シ療養為此段相伺候也</p> <p>遂テ本文転地療養為致候ニ付テハ旅籠料ハ本月六日肆第二五七二号御指令ニ依リ其他ハ病兵温泉入浴概則ニ準拠可致候間此段申添候也 (八月十二日) 指令 書面追書共同之通</p>
B	1882年6月29日	<p>東京鎮台伺 台下宇都宮高崎屯在兵隊ノ儀ハ夏季ニ際スレハ年々脚気病多ク頗ル惨毒ヲ極メ候ニ付昨年ハ同済ノ上宇都宮ハ日光へ高崎ハ長野県下北佐久郡輕井澤驛へ転地療養為致候処大ニ効驗ヲ奏シ候就テハ本年モ該病蔓延ノ兆候有之候節ハ前同地へ転地療養為致度尤本年ノ儀ハ目今未タ該病蔓延ノ兆候モ不相頭候得共其兆候ヲ見候後伺出テハ其間若干ノ日子ヲ費シ遂ニ重患ニ至ラシメシ大ニ不幸ヲ醸候様相成候ニ付予メ御許可相成度此段相伺候也 (六月七日)</p> <p>指令 伺之通 [明治十五年六月二十九日]</p>
C	1882年6月22日	<p>別紙第1780号東京鎮台ヨリ伺出ノ趣ニ付各効績取調候処日光輕井沢共善良ニ有之即チ在營ノ施療患者ニ比較スルニ經過緩慢ニシテ之且死者ノ比例モ七分ノ六ヲ減少致候条該台伺出ノ通御許可相成度此段意見申出候也</p> <p>明治十五年六月二十二日 軍医本部次長陸軍々医監石黒忠憲 陸軍歩兵大佐 児島益謙殿</p>
D	1884年6月18日	<p>高崎屯在脚気脚気患者転地療養之儀ニ付伺 台高崎屯在隊ノ儀ハ夏季ニ際スレバ毎年脚気患者頗ル多ク依テ先年来同済ノ上長野縣ハ北佐久郡輕井澤驛へ転地療養為致候処大ニ功驗ヲ奏シ候就テハ本年モ該病ニ罹ル者同地ニ転地療養為致度右ハ続々発病ニ際シ伺出テハ時期ヲ失フノ恐モ有之候間予メ御許可相成度此段相伺候也</p> <p>別紙本文御許可ノ上ハ総テ病兵温泉入浴概則ニ準シ最モ同地方ハ僻地ニシテ良医無之ニ付隊附医官看護長看護卒各一名凡一ヶ月ヲ以テ宿代出張為致患者ノ治療ハ勿論不撰養無之様取締為致且ツ賄料等支払ノ為毎月末下士一名派遣為度致此段添テ相伺候也</p> <p>明治十七年六月十八日 東京鎮台司令 三好重信 陸軍卿 川上純義殿</p> <p>伺之通 七月九日</p>

資料：A は朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 第 8 卷』、東京堂出版、380 頁。B は朝倉治彦（1988）『陸軍省日誌 9』、東京堂出版、16 頁。C は「明治 15 年中 軍医本部 東京陸軍病院 病馬厩」、JACAR: Ref. C10072725700（防衛省防衛研究所）。D は「明治 17 年 大日記 鎮台 7 月木乾 陸軍省総務局」、JACAR: Ref. C04031397700（防衛省防衛研究所）より作成。

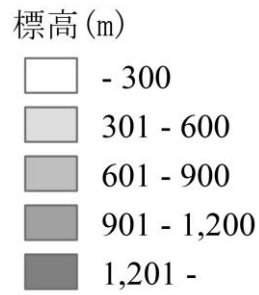
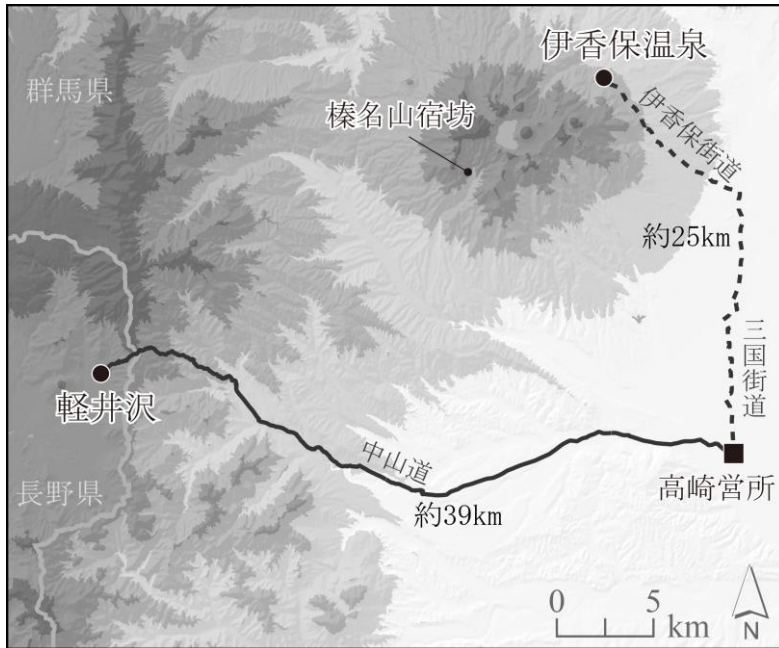
第3-6表 高崎兵營の脚気転地療養地と転地した患者数

年次	転地療養期間	場所	転地人数	脚気患者数	備考
1874年 明7	8月- ?	伊香保温泉	数十人		
1875年 明8	8月- ?	伊香保温泉			
1876年 明9	8月- ?	伊香保温泉			松本軍医総監ニ具申 軍病院ノ脚気患者ト本隊脚気患者トヲ 合シ転地セシメ大ニ奏功ヲ得タリ
1879年 明12	8月- ?	新築病室 倉庫・看病人室 長松寺 (9/30閉鎖)	100人余		病室狭隘のため倉庫・看病人・寺院に 病室設置。転地の記載なし
1880年 明13	8/17-10/16	榛名山般若坊・山ノ坊			5/10 土地点検ノ為当管内妙義山・榛 名山両地へ飲食及飲水ノ景状検査
1881年 明14	7/25-8/20 8/13-10/27 10/27-1/19	竜広寺 軽井沢 竜広寺	130人	815人 58.6%	
1882年 明15	7/10-10/15	軽井沢	125人	420人 42.4%	
1883年 明16	6/6-7/16 7/16-11/28 10/1- ? 11/17-2/18	竜広寺 軽井沢転地病室 竜広寺仮病室 大信寺仮病室	132人	543人 38.0%	病室狭隘につき仮病室設置 竜広寺仮病室狭隘につき仮病室設置
1884年 明17	8/9-11/5	軽井沢転地病室	57人	260人 48.3%	9月27日までに通計57名
1885年 明18	8/17-10/10	習志野原	59人	169人 20.5%	10/11 患者31名帰營
1886年 明19	-	-	-	8人 0.7%	-
1887年 明20	9/5-9/7	室田村(第一大隊) 榛名山(第二大隊) 多胡郡吉井町(第三大隊)	134人	151人 8.6%	二泊三日の行軍 (此間舎内一般亜硫酸薫法ヲ施行)
	9/12-9/26	吾妻郡中ノ条町 軽井沢 利根郡沼田町			二週間の脚気予防行軍 (此間兵舎内窓戸ヲ開放シ昼夜新鮮空 氣ノ流通ヲ計リ寢台寝具等ヲ日々日光 ニ曝シ舎内一般ヲ清潔ニ掃除セリ)
1888年 明21	8/3-9/26	軽井沢	25人	109人 0.7%	軽井沢で野外演習・戦闘射撃演習, 脚 気患者の療養は重病患者のみ

資料：高崎陸軍病院 (2001) 279-318、脚気患者数は、患者数の記載のある『陸軍省第七年報』(1881年)から『陸軍省年十二年報』(1886年)、後続誌『陸軍省第一統計年報』『陸軍省第二統計年報』(1887・1888年度)

注1：脚気患者数の()内は総兵員に占める罹患率。患者数の治癒率は1881年89.3%、1882年80.9%、1883年94.1%、1884年93.1%、1885年83.6%、1886年87.5%、1887年87.4%、1888年は、93.6%。患者の死亡率は1881年2.8%、1882年2.9%、1883年1.0%、1884年1.7%、1885年0.6%、1886年1.25%、1887年12.6%、1888年6.4%

注2：1889年には脚気患者数は0人となり(『陸軍省第三統計年報』)、それ以降はごく少数の発病に止まるようになったことから、高崎營所においても麦飯が完全に普及したと考えられる。



第3-2図 高崎兵營と各転地療養地との位置関係

資料：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「高崎」、「前橋」、(測図 1907 年)、「榛名山」、(測図 1907 年)、「富岡」、(測図 1907 年)、「軽井沢」、「御代田」(測図 1912 年)

注：基図と標高は、ESRI ジャパン「ArcGISGeoSuite 地形」を使用した。

第3-7表 軽井沢における陸軍の飲水検査と旅舎内有機物検査の結果

所在	理学的検査			化学的検査						
	清濁及び色	味	臭	顕微鏡的所見	尋常硬度	不変硬度	有機物	塩素	アンモニア	亜硫酸
上流・人家と隔てた場所	無色透明	-	-	粘土・藻科植物、植物碎片、インフゾリア一種	0.3	0.2	0.64	1.06	-	-
下流・人家に接する場所	無色透明	-	-	同上	0.3	0.2	0.695	1.06	-	-

仮病室	月日	晴雨	気圧	寒暖			午前の検査				午前の検査			
				最高	最低	平均	容積	人員	炭酸	湿度	容積	人員	炭酸	湿度
佐藤耕平宅	6月14日	晴	681	23.33	17.22	20.27	185.17	3.00	0.261	74.0	106.43	1.00	0.324	77.0
同	6月15日	半晴	682	21.11	15.83	18.47	185.17	3.00	0.164	80.0	106.43	1.00	0.155	82.0
同	6月16日	雨	680	18.33	17.78	18.05	185.17	2.00	0.153	86.0	106.43	2.00	0.345	90.0
平均			681	20.92	16.74	18.93	185.17	2.67	0.193	80.0	106.43	1.33	0.275	83.0

資料：陸軍省『陸軍省第十一年報』（1885年1月1日～12月31日）93-94頁。

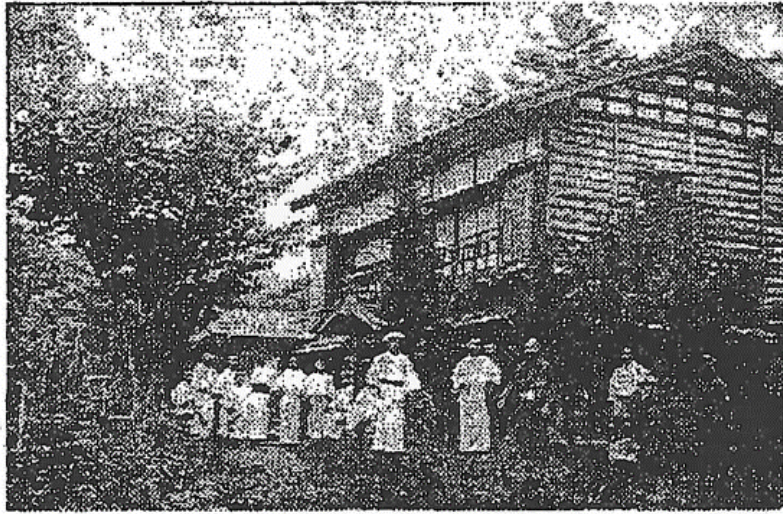
注：インフゾリアはバクテリア

第3-8表 日清戦争における東京陸軍予備病院の転地療養地

場所	期間	患者数	特徴	治療の方針
鵜沼	1895年2月8日～同年7月5日	333	外科的疾患治癒後の機能障害 内科病の回復期にあるもの	運動・海水浴 按摩・気候療法
湯河原	1895年6月20日～1896年3月20日	1,206	外科的疾患の快復期の者 内科病の快復期の者	温泉療法（鉱泉浴療） 散歩・按摩
箱根	1895年7月27日～1895年11月30日	2,336	脚気患者	気候療法・運動 散歩
軽井沢	1895年9月25日～1895年11月27日	489	脚気患者	気候療法・運動・散歩
大磯	1895年11月8日～1896年3月18日	1,517	脚気患者・麻拉利亞 外科・内科的疾患患者	気候療法・海水温浴療法

資料：北澤安太郎（1898）『東京陸軍予備病院衛生業務報告 後編』、北澤安太郎、815-831 頁。

注：入院患者総数 20,575 人中、脚気患者 5,819 人（約 28%）



第 3-3 図 日清戦争時の療養兵

資料：『信濃毎日新聞』1936年8月8日「軽井沢発展座談会」
注：陸軍転地療養所の写真として掲載されたが、翌日の同紙で小坂順造の別荘の前で撮影されたものと訂正された。

第3-9表 日露戦争における陸軍の転地療養地

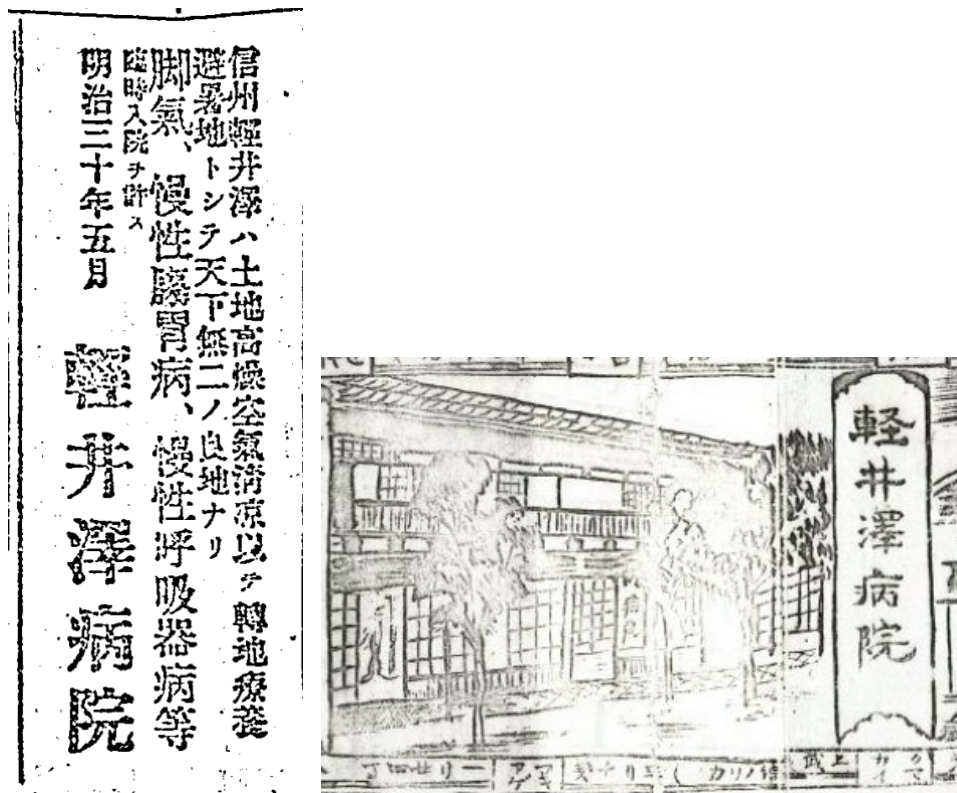
区分	名称	1904年		1905年		1906年	
		開設月日	閉設月日	開設月日	閉設月日	開設月日	閉設月日
東京	湯ヶ原	6. 1					8. 20
	軽井沢	9. 5	11. 17				
	沓掛	9. 10	10. 19				
	追分	8. 17	10. 25				
	箱根	8. 17	11. 19				
	塔ノ沢	9. 5	11. 19				
	熱海	9. 10			11. 17		
	伊豆山	10. 10			10. 25		
仙台	遠刈田	6. 20		5. 13	2. 18		
	鎌先	10. 11			9. 19		
	青根	6. 21	8. 24	1. 16	7. 7		
	飯坂及湯野			7. 31	2. 17		
				1. 24	11. 3		
	温泉村			11. 1	7. 3		4. 30
出湯	8. 3	9. 23	4. 7	9. 18			
名古屋	香良洲	7. 13	9. 14				
	山田病院	7. 17	9. 30				
	大野町	7. 25	9. 14				
	修善寺	9. 11			4. 2		
	東二見			4. 2	9. 30		
	贅崎			4. 28	12. 23		
蒲郡			12. 23			4. 5	
大阪	有馬	6. 24	11. 24	3. 15	10. 29		
	和歌浦	11. 10			3. 26		
	吉野村			3. 29	7. 10		
	中山寺	8. 28					4. 1
広島	湯野	7. 24			9. 14		
	鞆	8. 20	11. 4				
	有福	8. 22	9. 14		3. 24		
		12. 26					
	美又	9. 14	11. 18	3. 24	8. 11		5. 15
	室積	9. 22					
	二十日市	11. 6			5. 27		
五日市			3. 10	8. 6			
別府					3. 7	8. 31	
熊本	三角	7. 21					5. 15
	船小屋	9. 15			10. 15		
	日奈久	9. 28			10. 15		
旭川	登別	12. 11			10. 31		
弘前	碓ヶ関	8. 1		8. 8	5. 31		6. 25
	浅虫			1. 20	12. 2		
金沢	山中村	8. 16		8. 22	1. 31		4. 30
	和倉	12. 6			10. 25		
姫路	城ノ崎	8. 12			10. 31		
	高砂	11. 2					4. 30
	岩井村	12. 1	12. 22				
善通寺	郡中町	7. 5	12. 27	8. 22	11. 30		2. 2
	津田町			7. 15			2. 26
	琴平	9. 1					
	上東村	9. 11	10. 5				
	安原						
	道後	10. 8			4. 26		
川上村	8. 22	9. 24					
小倉	別府	6. 5			12. 7		
	千石	7. 27	10. 25				
	古湯	8. 18	10. 29				
		9. 25	10. 22				
	西戸崎	12. 7					3. 15
嬉野					3. 15	6. 20	

資料：陸軍省編（1983）『明治卅七八年戦役陸軍政史 第七巻』（覆刻版）、湖南堂書店、附表第八其一。



第3-4 図 萬松軒の外観（明治末期～大正中期頃）

資料：絵葉書（筆者所蔵）



第3-5 図 輕井澤病院の外観と新聞広告

資料：(左)『朝日新聞』1897年5月28日、(右)「輕井澤繁榮双六」〔明治末〕(輕井澤町立図書館蔵)



第 3-6 図 マンロー病院の結核患者

資料：大久保保氏より提供。

注：左上には、「GARDEN IN EARLY SUMMER (with a platform and wind-screen for sun baths)」とあり、結核の外気治療および日光治療の様子を写したものと考えられる。

第4-1表 『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』第2版（1884）の記述

ルート	ポイント	おもな記述
20 東京から 中山道（碓氷峠から 追分―浅間山）	坂本から碓氷峠	坂本を出ると碓氷峠の登りがはじまる。 軽井沢まで3里あるが、新道が建設されたことにより、馬車で容易にこなせる。 頂上へ上昇していくと、壮大な眺めが得られる。すなわち江戸平野、筑波山、榛名、赤城。
	軽井沢	頂上よりわずか780フィート低い軽井沢への降下は誠に簡単であり距離にして大体22町ほどだ。 この途中甲州白根山と駒ヶ岳そして八ヶ岳と蓼科山が左手にあらわれ、浅間山がよく見える。 軽井沢へは碓氷峠を越える新道が完成した今、江戸からわずか2日の旅となった。全行程を通して馬車などが使えるのだ。海拔3,270フィートという高地に位置している <u>ので夏期は大変涼しく、さらに蚊がいないことも平野部の不健康な暑熱を避ける場所として推薦できるもう一つの理由だ。</u> 村には立派な家々が数多くあって良好な宿が得られる。また当地では多様な散策と山登りを楽しむことができる。 7月、8月ともなれば <u>未墾の原野には野花が一面を覆いつくし南の方角に向かって何マイルも続く。</u> 東は草深い山並みで尽きる。 軽井沢から一里の山上に「かまどいわ」と言われている奇妙な石がある。 もう一つ注目されるのは愛宕山という孤立した山で、麓から半ばまで登ると小さな御堂と垂直にそびえる岩がある。 その近傍に離山という簡単に登ることのできる山があり、その先に浅間山の活火山が位置している。
	旅館	*三度屋、土屋、亀屋

資料：サトウ・アーネスト編（庄田元男訳）（1996）『明治日本旅行案内（中巻）ルート編1』、平凡社、377-379頁を参考にまとめた。

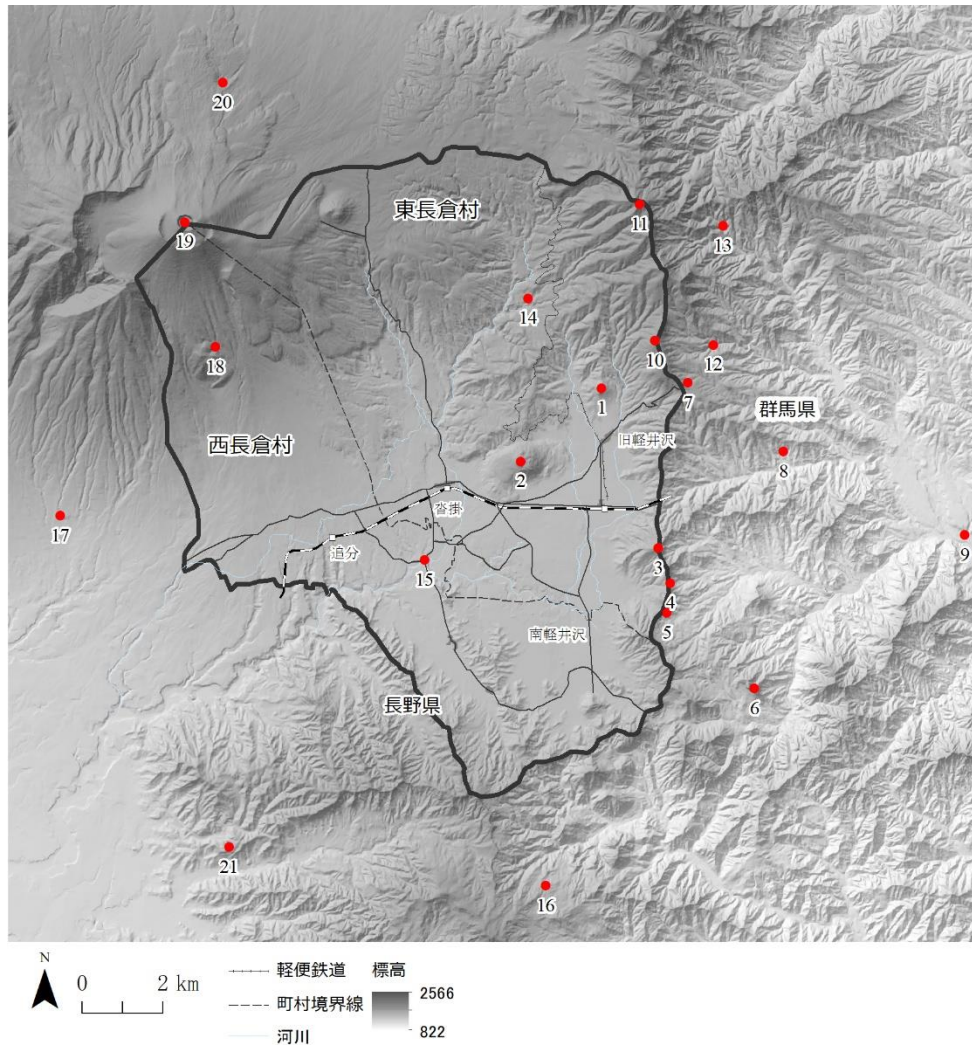
注1：原書は Sato, E. M. and Hawes, A. G. S. (1884) *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*. Jonh Murry, pp. 228-230 に対応している。

注2：「不快な暑熱」となっている部分は、原文では「unhealthy heat」とあるので、「不健康な暑熱」とした。「まだ鋤の入っていない平野」と訳されている箇所は、原文では「uncultivated moor」となっているの
で、「未墾の原野」とした。旅館の「*」は原書では、優れた旅館を示している。

第 4-2 表 1889 年 8 月における東京と軽井沢の気候条件の比較

指標	場所	2時	6時	10時	14時	18時	22時	平均
気圧 (mmHg)	東京	756.5	753	757	755.9	755.8	756.9	756.5
	軽井沢	-	679.5	679.2	678.7	678.8	679.5	679.1
温度 (°C)	東京	23.4	23.1	27.7	29.1	26.5	24.6	25.7
	軽井沢	-	18.3	23.3	24.5	21.2	19.2	21.3
蒸気圧 (mmHg)	東京	20.1	19.9	20.3	20.3	20.5	20.2	20.2
	軽井沢	-	14.8	16.1	17.0	16.4	15.8	16.0
湿度 (%)	東京	93.0	94.0	74.0	68.0	79.0	87.0	83.0
	軽井沢	-	94.0	77.0	77.0	88.0	94.0	86.0
雨量 (mm)	東京	47.2		13.6	9.1	11.2	15.1	96.2
	軽井沢	51.7		24.8	25.9	66.4	43.2	212.0

資料 : Knott, C. G. (1891) Notes on the summer climate of Karuizawa, *Transaction of the Asiatic Society of Japan* 19, p. 571.

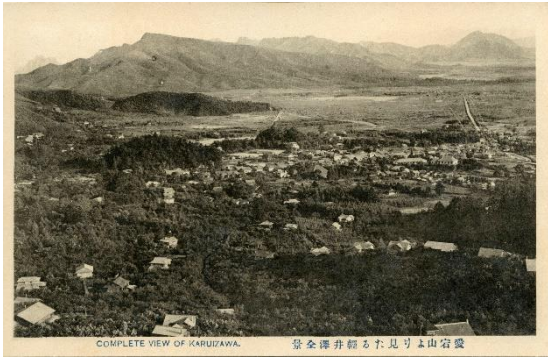


No.	場所名	絵葉書	No.	場所名	絵葉書
1	愛宕山	1	12	雄滝・雌滝	-
2	離山	2	13	霧積	-
3	矢ヶ崎山	3	14	小瀬	6
4	竈岩	4	15	釜ノ橋	7
5	入山峠	-	16	神津牧場	-
6	ローソク岩	-	17	真楽寺	-
7	碓氷峠	5	18	血ノ池	8
8	熊ノ平	-	19	浅間山	9
9	横川	-	20	鬼押し出し	-
10	富士見山 (一ノ字山)	-	21	閻伽流山	-
11	留布山・鼻曲山	-			

第4-1図 軽井沢周辺における外国人の散策・小旅行の行先

資料：Karuizawa summer Residents' Association (1920). Karuizawa summer Residents' Association Handbook1920. KYO-BUN-KWAN

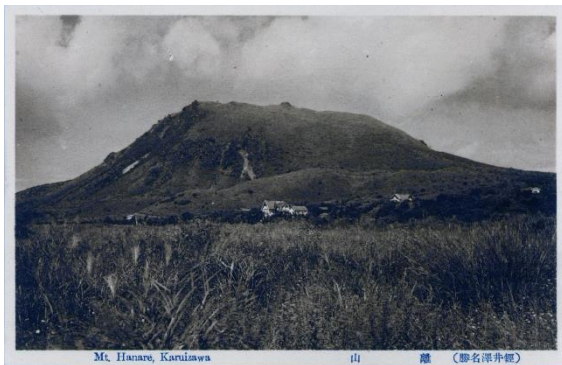
注：基図と標高は、ESRI ジャパン「ArcGISGeoSuite 地形」を使用した。また、道路・鉄道・行政界などは、陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」(測図 1912 年)を参照した。



絵葉書 1 愛宕山より見たる軽井沢之全景
(大正中期-昭和初期)



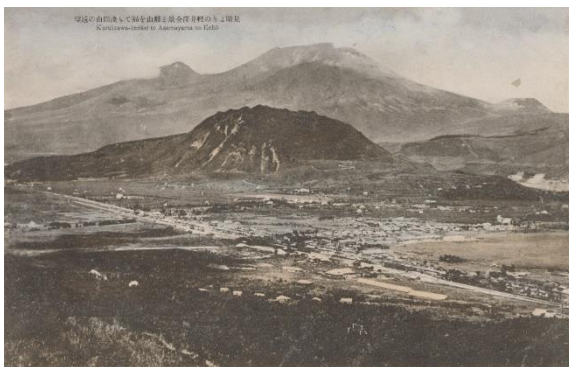
絵葉書 1 愛宕山別荘地
(大正中期-昭和初期)



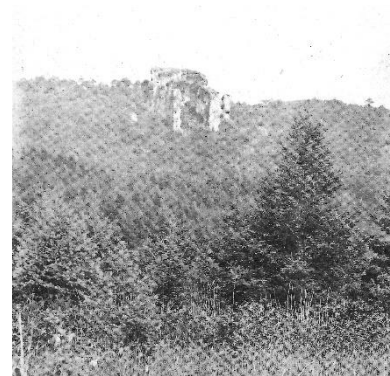
絵葉書 2 離山
(大正中期-昭和初期)



絵葉書 2 離山登山道
(大正中期-昭和初期)



絵葉書 3 矢ヶ崎山より見たる軽井沢
(大正中期-昭和初期)



繪葉書 4 竈岩
資料：中島松樹 (1997) 『軽井沢避暑地 100 年』、国書刊行会、20-21 頁

第 4-2 図 散策ポイントの絵葉書 (続く)

注：資料の表記のないものは、筆者所蔵絵葉書。



絵葉書 5 碓氷峠より軽井沢を望む
(明治末期-大正中期)



絵葉書 6 小瀬

資料：中島松樹（2000）『軽井沢避暑地 100 年新装版』、国書刊行会、90 頁。



絵葉書 7 釜ノ橋ノ清流
(大正中期-昭和初期)



絵葉書 8 浅間山血ノ滝
(大正中期-昭和初期)



絵葉書 9 浅間噴煙
(明治末期-大正中期)



絵葉書 9 浅間山上より富士山を望む
出典：中島松樹（2000）『軽井沢避暑地 100 年新装版』、国書刊行会、130 頁。

第 4-2 図 散策ポイントの絵葉書（続き）

第 4-3 表 おもな別荘所有者（明治期）

名前	別荘所有年
八田裕二郎 (海軍大佐)	1893年
末松謙澄 (子爵)	1898年
鹿島岩蔵 (実業家)	1898年
三井三郎助 (実業家)	1899年
新渡戸稲造	1900以前
江木 衷 (法博)	1902年
青山胤通 (東大教授・医博)	1904年
佐々木政吉 (医博)	1904年
尾崎行雄 (政治家)	1916年 (1906年から滞在)
桂 太郎 (政治家)	1910年

軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌歴史編（近・現代）』、軽井沢町誌刊行委員会、604-639 頁より作成。



第 5-1 図 旧軽井沢周辺の畑

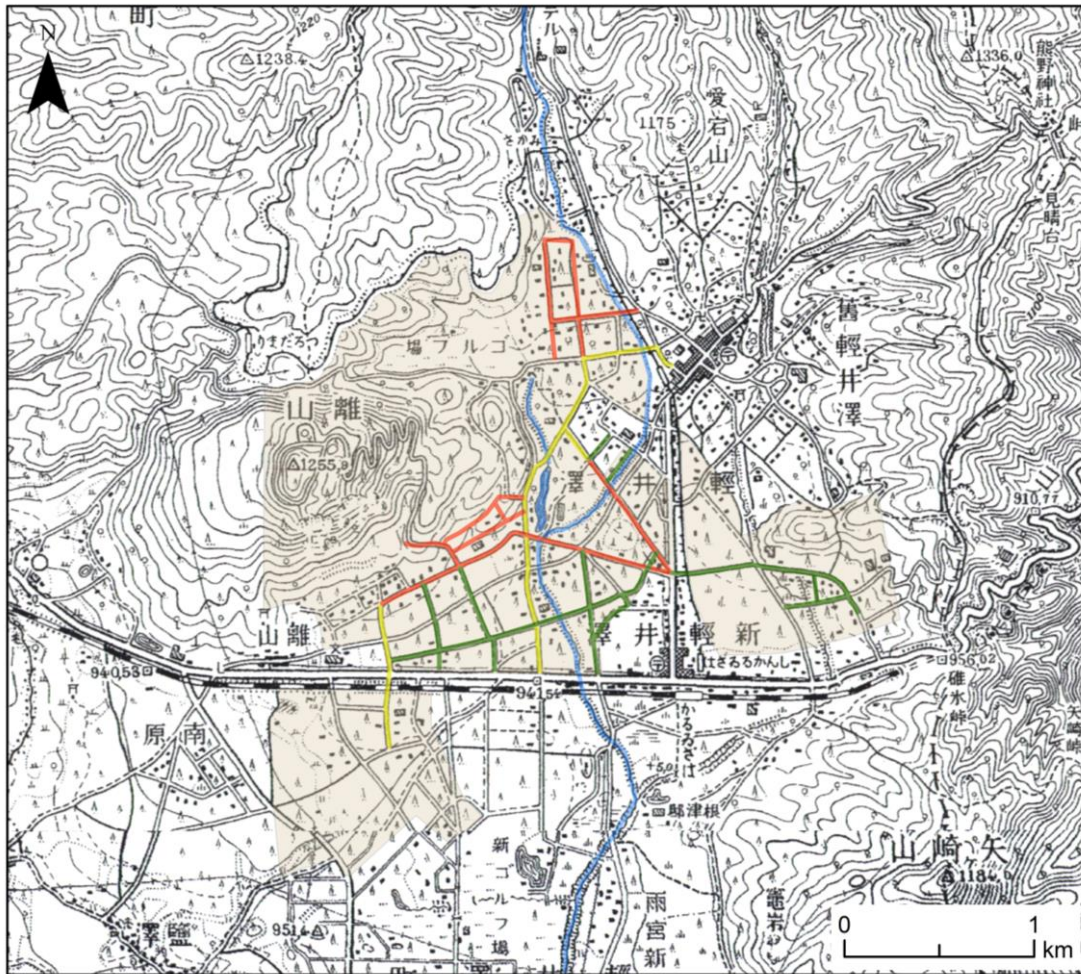
資料：『読売新聞』1915年8月26日「信濃路より（三）軽井澤の一瞥」

注：外国人のすすめにより、軽井沢ではキャベツなどの蔬菜が栽培されるようになった。

第 5-1 表 本多静六の軽井沢遊園地構想

No.	概 要
1	軽井沢は道路の不完全 利用者が好みで選べるように遊覧道を大中小の三つのレベルでつくる
2	水を活かす 雲場川や雲場池を養魚池とする。周囲にはツツジ、モミジ、ハンノキなどを植える
3	矢ヶ崎地区に「大湖水」をつくる 夏季にはボート、冬季にはスケートができるようにする。周辺には音楽堂を併設した料理屋などを置く
4	樹木が単調 モミ、カヘデ、カシハ、ナラ、ニシキギなどを植え色彩を添える
5	原野の美を発揮させる 原野はきちんと管理し、草刈、火入れなどをする。草花の種を撒き育成するのよ
6	自生する樹木は大切に保護する。木陰にはベンチなどを置く
7	大遊戯場を設置し、樹木を植えて観覧席には木陰をつくる
8	カエデ類を国道の両側に植えると、春に彩りがくわわる
9	スケート場の設置
10	水飲場・手洗場を設置。
11	子ども用の遊技場をつくり、ブランコ、木馬などの設置
12	樹林の各所に休憩所をつくる。あえて粗製の木造にすると風景に調和する
13	離山などに展望台を設け、茶店を営業させる
14	動物園のような施設をつくり、鹿や牛などを飼育する。「ミルクホール」を設けてパン、コーヒーなどを提供する
15	天然樹木の名称をわかるようにして、植物園とする
16	見本林的森林として、軽井沢周囲に自生する樹木を配置する
17	果樹園及び夏季の花戸を経営させる
18	人目につかない場所に便所を設置する
19	日本語と英語の案内標識を設置する
20	遊園地の案内書を作成し配布する。鉄道駅や日光、箱根などでも留め置きするとよい
21	遊園地内の国有地は可能ならば、譲渡してもらるか無料貸借する
22	既存の道路両側の約二十間の樹木は伐採できないようにする
23	遊園地内の森林はすべて風致保安林に編入し、遊園地委員会などが管理する
24	遊園地の取締、改良、維持する機関として軽井沢遊園地委員会を設立する
25	同委員会では、県や地元有力者を委員に充て、土地の寄付、予算管理などに関する協議機関とする
26	遊園地の造成にあたり、専門技師を常駐させる

資料：本多静六（1911）『軽井沢遊園地設計方針』（国会図書館所蔵）



- | | |
|--|--|
| — 1915-1917年新設道路 (推定) | — 河川 |
| — 1918-1918年新設道路 (推定) | 雲場池 |
| — 既存道路の修復・拡張 (推定) | 野澤所有土地 (~1941年) |

第5-2図 野沢によるおもな道路開発

資料：岡村八寿子（中島松樹・大久保保監修）（2018）『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史—源次郎と3人の男たち—』、牧歌舎、120頁。

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図1937年）。

第 5-2 表 野沢別荘地開発において実現された提言

提言の内容	野沢による開発
<p>本多静六 道路の敷設 砂塵防止、泥沼化防止 防風・日除け・美観 軽井沢を年間を通して人の集まる場所とする。 氷滑り・雪滑り、雲場川の水の利用 自然林の整備</p>	<p>道路網の開さく、2～4間幅の自動車・馬車道 路上をバラスト〔碎石〕で覆う 4間道路の両側に街路樹の植林 造成中 雲場川の流域に水泳場、スケート場 雲場川左岸一帯の森林地帯を遊園地とする</p>
<p>後藤新平 建物を建て以前に、都市全体の道路網を完備すること。幅員の広い道路の敷設 飲料水、生活水の確保 道路網の完成後に建物を建設すること 通俗夏季大学の設置</p>	<p>道路網の開さく、2～4間幅の自動車・馬車道 井戸の開削 道路の敷設後に別荘地分譲開始 設置のための土地の提供</p>
<p>橋口信助 別荘所有者の生活の便宜 浅間高原の自然と調和した別荘の建設（洋風アメリカンバンガロー様式）かつ、和洋折衷</p>	<p>注文別荘・貸別荘の建築 洋風マーケットの設置</p>

資料：岡村八寿子（中島松樹・大久保保監修）（2018）『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史―源次郎と3人の男たち―』、牧歌舎、41頁をもとに作成。

注：野沢による開発は、『住宅』（1917年8月「軽井沢号」、内田青蔵編（2001）『雑誌『住宅』第1巻』〔復刻版〕、柏書房も参照している。

誌雜究研宅住一唯印宅

大正六年八月一日發行
（毎月一週一、日發行）

宅

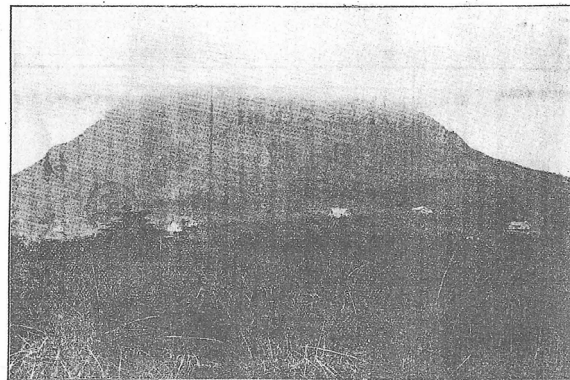
卷 貳 第
號 月 八
號 四 十 第「宅 住」

住

大正五年九月八日
大正六年七月廿五日印刷

號 澤 井 輕 壹 第 刊 創 週

朝霧や浅間が嶽の山裾のその高原の白き別荘



海拔三千三百尺の涼風

附録
輕井澤全案（精巧寫真版）
輕井澤全圖（詳細案内附）

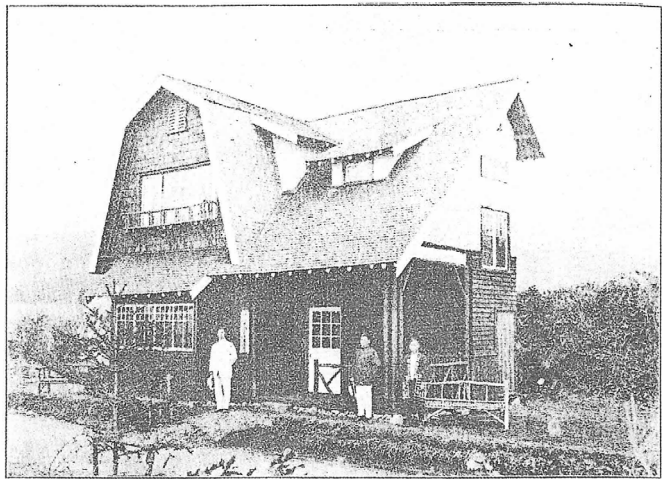
大隈後別荘（會所及手廻り）
細川後別荘同
徳川公別荘同
小池氏別荘同
末松子別荘同
尾花大將別荘同
尾花行雄別荘同
尾花行雄十郎別荘同
宮別荘（五月、六月、七月、八月）

内容目次

- 避暑の新意義を説きて輕井澤の天地を推挙す——會主 樋口 信助
- 世界的避暑地としての輕井澤——陸軍大將 福島 安正
- 山莊生活——前法相 尾崎 行雄
- 輕井澤の思ひ出——法政學博士 新渡戸 稲造
- 名士の輕井澤觀**——名流二十餘家
- 軍別荘の別荘地として——海軍大臣 八田 廣次郎
- 輕井澤發展論——山本 直真
- 輕井澤別荘論——帝國ホテル支店 人 愛作
- 避暑の法と輕井澤——下士 池田 義一
- 避暑の法と輕井澤——池田 義一
- 輕井澤の法と輕井澤——池田 義一
- 輕井澤の新發展——陸軍 豊田 清
- 島嶼したる輕井澤——藤子 芳子
- 園遊同登山の探——園遊 なる 園遊
- 輕井澤の温泉——園遊 なる 園遊
- 輕井澤の温泉——園遊 なる 園遊
- 理想的避暑地を造るの爲めに——園遊 なる 園遊

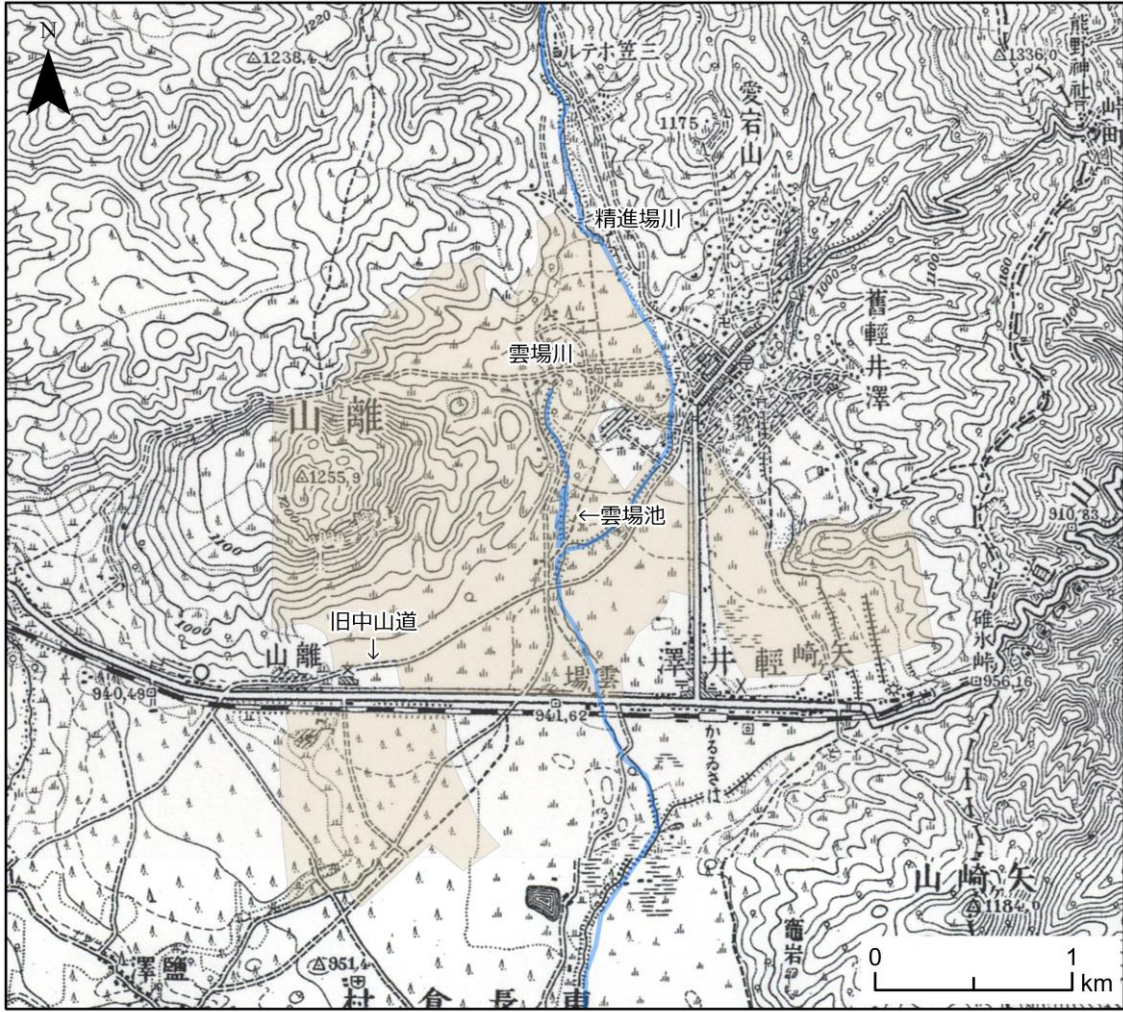
行發會長改宅住

誌 本 定 價 金 拾 鐘 五 五 〇 〇 〇 〇 〇



第 5-3 圖 「輕井澤號」表紙と輕井澤出張所

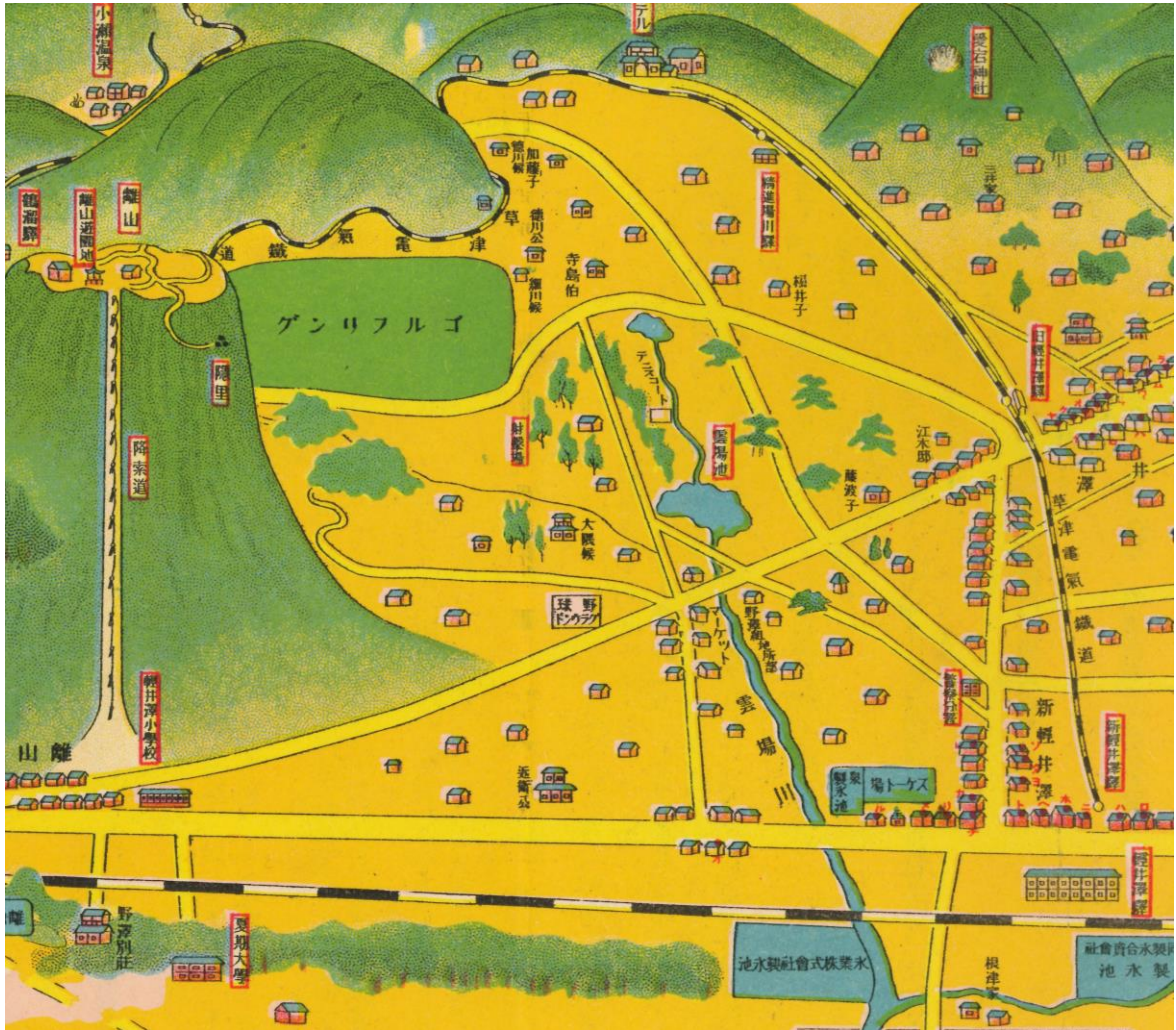
資料：内田青蔵編（2001）『雜誌『住宅』第1卷』〔復刻版〕、柏書房



- 河川
- 雲場池
- 野澤所有土地（～1941年）

第 5-4 図 開発前の野沢別荘地周辺

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「輕井澤」、「御代田」（測図 1912 年）



第 5-5 図 野沢別荘地の諸施設

資料：軽井沢附近遊覧案内図（1925 年）（筆者所蔵）



147

KARUISAWA Market KUMOBA

consisting of
 Branches of Practically All
 First-class Stores in Tokyo.

**PROVISIONS, SUNDRY-GOODS,
 ETC. ETC.
 DINING-ROOM, AMUSEMENT-
 HALLS, LAUNDRY, BARBER-
 SHOP, SHOE-MAKER, ETC.**

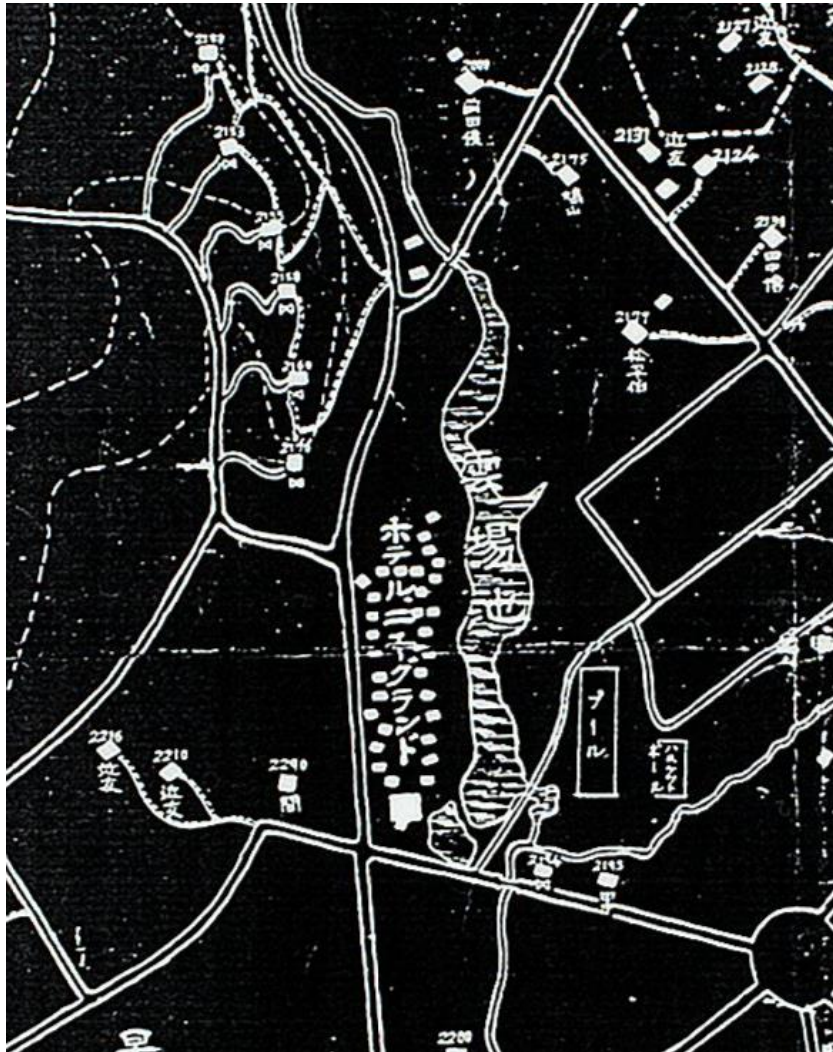
の店商流一第京東
 るす立成てに所張出

場雲 ト ッ ケ ァ マ 澤井輩

靴理洗遊食 雜食
 髮濯戯 料
 其他店店店場堂 其他貨品

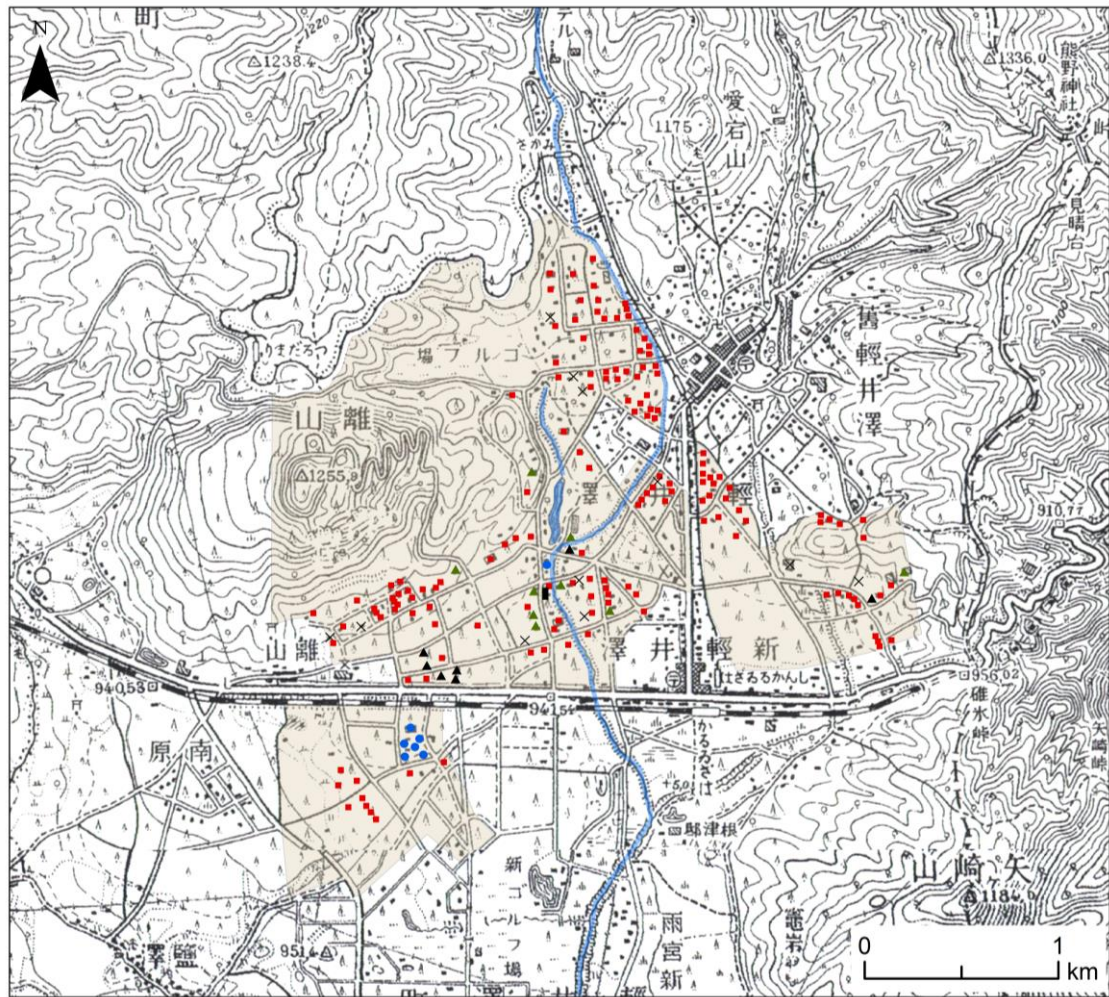
第 5-6 図 マーケットの概観と広告

資料： 軽井沢デジタルアーカイブス http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/preview.html?mid=244&view_page=1 (上図)、Karuizawa summer Residents' Association (1920) *Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1920*, Karuizawa summer Residents' Association, p.147. (下図)



第 5-7 図 雲場池周辺の開発

資料： 軽井沢デジタルアーカイブス「軽井沢別荘案内図（1936）」（野沢組地所部）http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/preview.html?mid=816&view_page=1



- | | | |
|------------|------------|-------------------|
| ■ 個人別荘 | ■ マーケット | — 河川 |
| ▲ 貸別荘 | ● 大学による所有 | ■ 雲場池 |
| ▲ 貸別荘 (推定) | × 所有者の記載なし | ■ 野澤所有土地 (～1941年) |

第5-8図 1943年時点における野沢別荘地の別荘分布

資料：Karuizawa summer Residents' Association (1943) *Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1943*. Karuizawa summer Residents' Association.

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井澤」、「御代田」(測図1937年)。



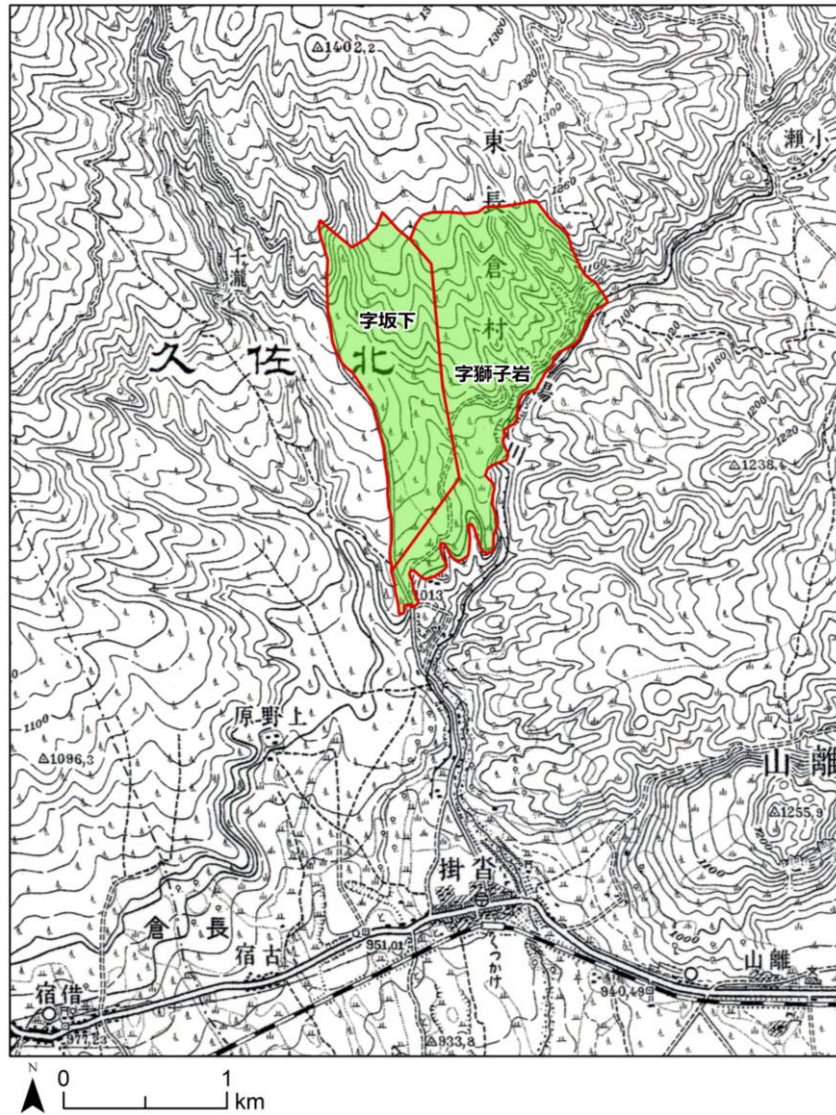
第 5-9 図 あめりか屋の設計による細川護立と徳川慶久の別荘

資料：筆者所蔵（上図）、宍戸 実（1987）『軽井沢別荘物語』、住まいの図書館出版局、157 頁（下図）。

注：上図：細川邸、下図：徳川邸



第 5-10 図 あめりか屋の設計による大隈重信の別荘
資料：中島松樹（1897）『軽井沢避暑地 100 年』、国書刊行会、33 頁。



第 5-11 図 堤の取得した土地

資料：「千ヶ瀧経営地実測図」（1930 年頃）（プリンスホテル所蔵）

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「輕井澤」（測図 1912 年）

第5-3表 千ヶ瀧遊園地の開発年表

年	おもな事項
1915	堤が沓掛に来訪・土地視察、土地売却交渉へ
1917	12月15日(株)沓掛遊園地設立(解散日不明)、12月23日 東長倉村村会で土地売却決定
1918	1月6日 堤、土地を登記、5月頃より開発に着手
1919	2月2日(株)千ヶ瀧遊園地設立(1920年5月解散)
〃	8月頃 幹線の七間道路竣工、貸別荘42戸完成
〃	8月24日 温泉浴場開式、11日27日(株)グリーンホテル設立
1920	3月25日(株)箱根土地設立、5月グリーンホテル、箱根土地と合併
〃	7月 千ヶ瀧遊園地開園、旅館観翠楼開業、日用品販売所完成
〃	9月 土地分割売買開始、テニスコート完成、11月浅間山麓六里ヶ原・孀恋の土地購入
1921(上)	12月 沓掛-千ヶ瀧間鉄道敷設許可(実現せず)
〃(下)	請負別荘11戸落成・電燈工事完了(300個)、一高・成蹊女学生等が滞在
〃	野球場・水泳場・弓場完成
1922(上)	「千ヶ瀧文化別荘」考案
〃(下)	家族浴場一棟完成、遊歩道の整備、道路等改修
1923(上)	新機軸の別荘考案(白樺の家等)
〃	医局・児童遊戯場完成、日用品店増設、変電所・水道濾過池・ポンプ室・飯場建設
1923(下)	7月20日 グリーンホテル(3階建)開業
〃	9月 乗合自動車営業許可 水道管延長・橋梁架設
1924	「すぐ住める簡易別荘」販売(2,000円)
1925(上)	グリーンホテル部屋数増築
1926	8月 千ヶ瀧日曜音楽大演奏会
1928	8月 朝香宮が千ヶ瀧近傍に別荘を建設 字上ノ原の買入
1931	字芹ヶ澤・横吹の買入・貸別荘建設 この頃、自治組織「千ヶ瀧村会」結成
1935	7月 「千ヶ瀧学園」開校、「山の住宅展」開催
1936	「500円サービス別荘」販売、高原アパート完成
1937	新グリーンホテル落成(4階建)、「1,000円サービス別荘」販売
1944	音楽堂・グリーンホテル、疎開先指定
1945	終戦後グリーンホテル、アメリカ軍に接収(翌年解除)

資料：『箱根土地株式会社営業報告書』各期(企業史料統合データベース)、『グリーンホテル株式会社報告書』各期(企業史料統合データベース)、『信濃佐久新聞』『中信毎日新聞』『信濃毎日新聞』『朝日新聞』『読売新聞』『株式会社グリーンホテル写真帖』、沓掛区「感謝状」(早稲田大学 大学史資料センター所蔵)『住宅』(1935年8月号)、「軽井澤千ヶ瀧別荘地分譲地割図(1938年5月)」(軽井沢町町立図書館所蔵)、吉岡彌生(1952)『この十年間』學風書院、軽井沢町誌刊行委員会(1988)『軽井沢町誌』軽井沢町。

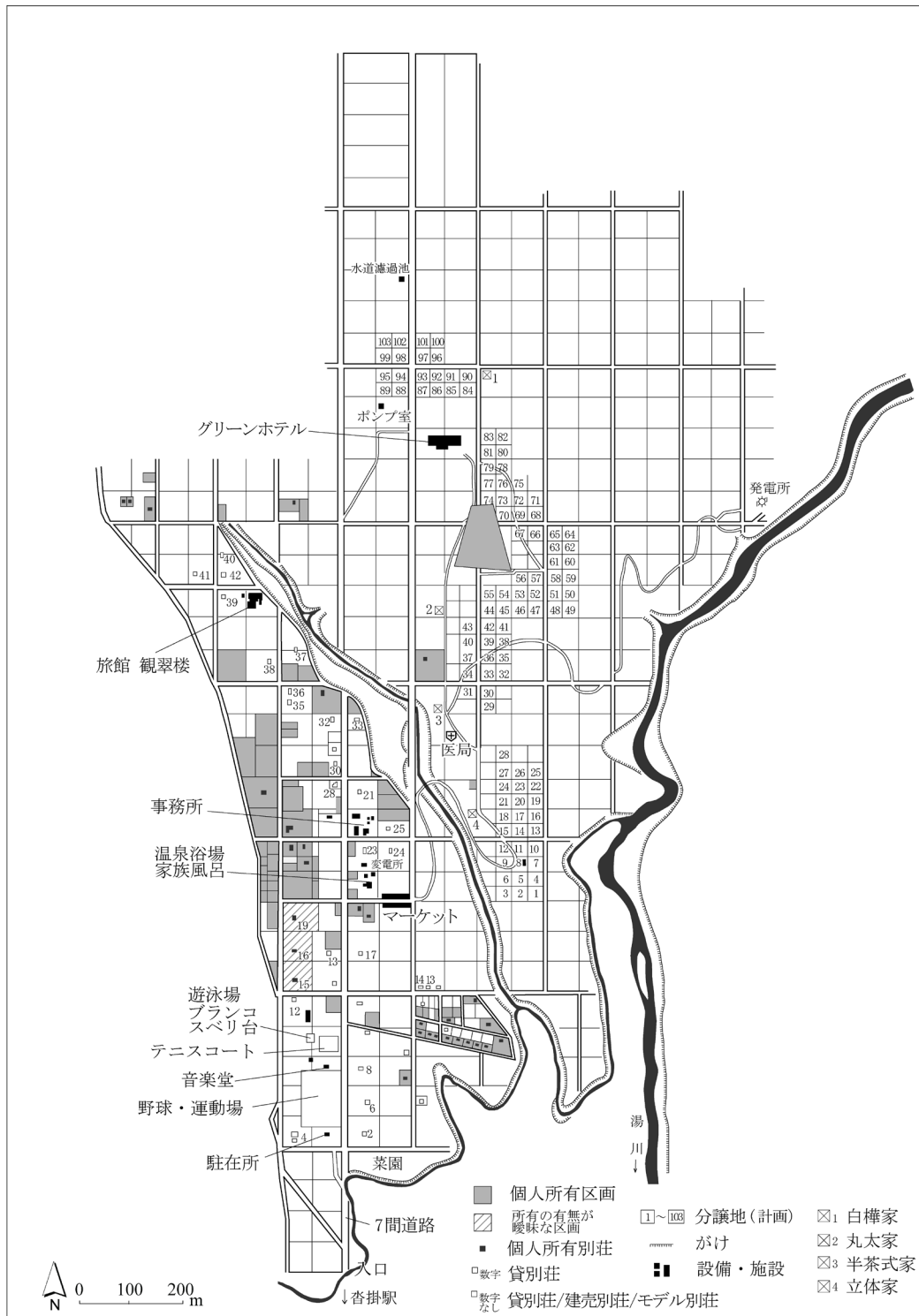
注：(上)は営業報告書の上半期=前年12月1日～当年5月31日、(下)は下半期=当年6月1日～当年11月31日。

第5-4表 メディアに報じられた開発計画

No	年月日	計画内容	出典	実現	実現年	備考
1	1917年 9月25日	杏掛停車場より幅七間の道路	佐	○	1919年8月	
2	1917年12月13日	来夏までに教士軒の別荘建築・貸与	佐	△	1919年8月	
3	1918年 5月 7日	計画中の骨子とすべき理想的浴場	佐	○	1919年8月	
	1918年 8月28日	一大温泉浴場	佐			
4	1917年 9月25日	一大遊泳場	佐		1921夏頃	小規模に留まる
	1918年 7月7日	池塘(昼は遊泳場)	佐	△	1921夏頃	遊泳場は実現
	1918年 8月	水練場	日			遊泳場は実現
	1918年 8月28日	大貯水池	佐		1930年代	釣堀池はあり
5	1918年 8月	旅館	日	○	1920年7月	倶楽部は旅館観
6	〃	倶楽部ハウス	日	○	1919年8月	翠楼として開設
7	〃	弓道・剣道などの道場	日	○	1920年6月頃	弓場は1921年
8	〃	テニスコート	日	○	1920年9月頃	
9	〃	ベースボールコート	日	○	1921夏頃	
10	〃	スケート場	日	△	1920年代	遊泳場を使用か
11	1918年 8月	馬場	日	×		競馬場は南軽井沢
	1918年 8月28日	貯水池の周囲に競馬場	佐			
12	1918年 8月	医局	日	○	1923夏頃	
13	1918年 7月28日	発電施設(夜間に池塘を落水)	佐	△	1920年頃	池塘を伴わず
14	1918年 7月28日	ホテル	佐	○	1923年7月	グリーンホテル
	1918年 8月28日	高丘の大ホテル	佐			
15	1918年 8月28日	杏掛停車場まで電気鉄道の敷設	佐	×		
16	〃	ホテル-浴場間のケーブルカー	佐	×		
17	〃	菜園(蔬菜の安価提供)	佐	?		図2に記載あり
18	〃	動物園的な養蚕場	佐	?		

資料:『箱根土地株式会社営業報告書』各期(企業史料統合データベース),『グリーンホテル株式会社報告書』各期(企業史料統合データベース),『信濃佐久新聞』『中信毎日新聞』『信濃毎日新聞』『朝日新聞』『読売新聞』『株式会社グリーンホテル写真帖』,『千ヶ滝のプロフィール』(1935~1937年版)。

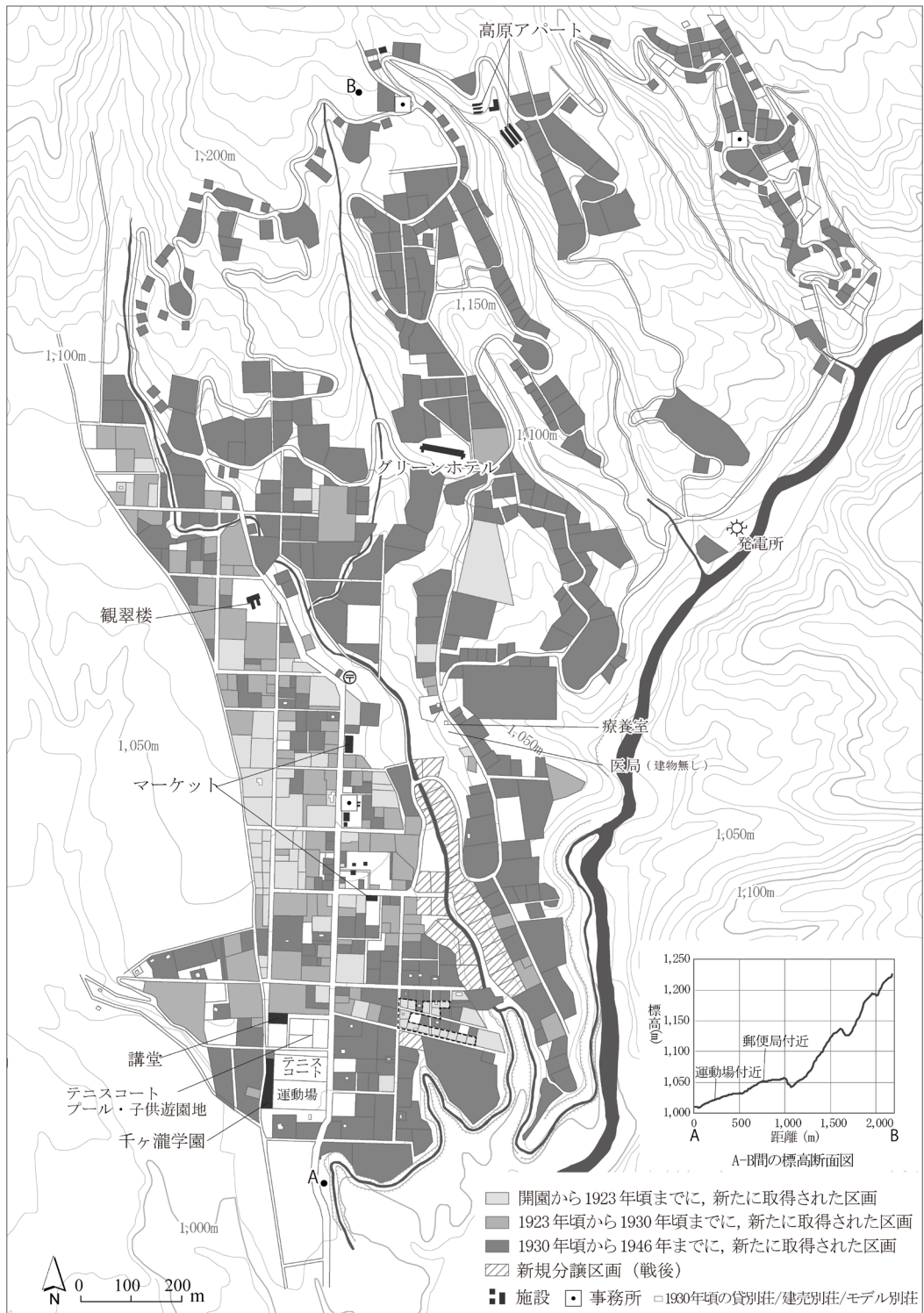
注:「出典」の「佐」は『信濃佐久新聞』,「日」は雑誌『新日本』を示す。また,「実現」の「○」はほぼ完全に実現した計画,「△」は一部実現した計画,「×」は実現しなかった計画,「?」は実現したか明らかでない計画を示す。



第5-12図 1923年頃における千ヶ瀧遊園地の土地区画計画と開発状況

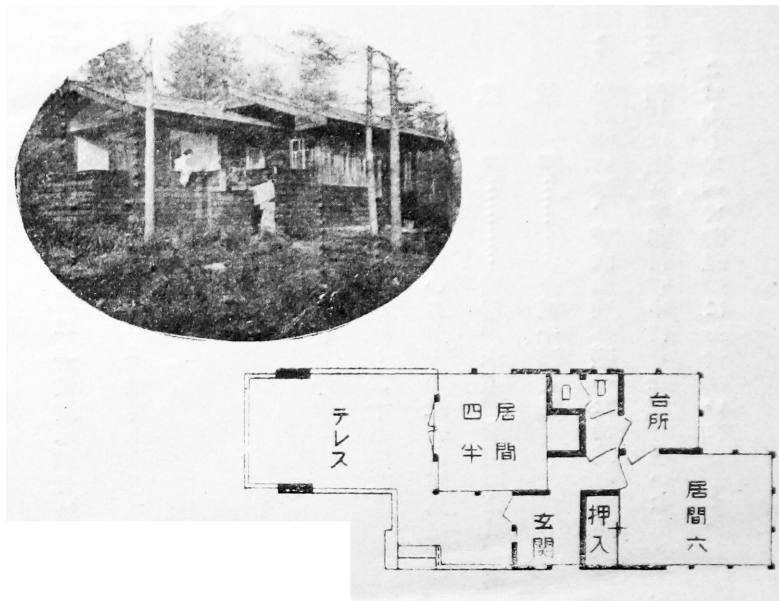
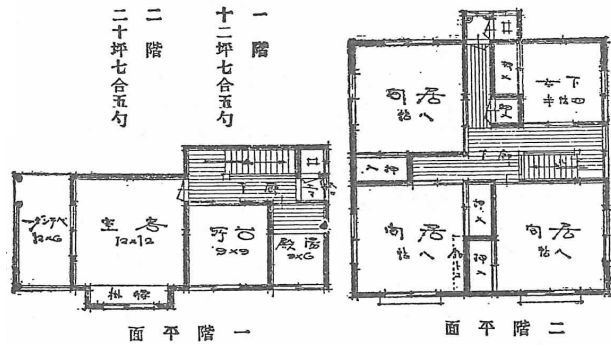
資料：「千ヶ瀧遊園地区画図」（1923年頃）（プリンスホテル所蔵）

注：貸別荘を示す「13」は資料においても重複している。



第 5-13 図 1923 年頃～1946 年の土地・別荘所有の状況

資料：「千ヶ瀧遊園地区画図」（1923 年頃）（プリンスホテル所蔵）、「千ヶ瀧経営地実測図」（1930 年頃）（プリンスホテル所蔵）、「千ヶ瀧経営地実測図」（1946 年）（早稲田大学大学史料センター）。



第 5-14 図 千ヶ瀧遊園地と野沢別荘地の別荘家屋の比較

資料：上図は「住宅」14号（1917年8月）、住宅改良会、22頁。下図は「輕井澤千ヶ瀧遊園地案内」（1920年代）。



第 5-15 図 温泉浴場の外観

資料：『株式会社グリーンホテル千ヶ瀧遊園地写真帖』（1919年頃）（プリンスホテル所蔵）



第 5-16 図 グリーンホテルの遠景

資料：絵はがき「軽井澤グリーンホテル全景」（箱根土地株式会社発行）（筆者所蔵）

注：はがきの通信面に「今回新築落成致しましたグリーンホテル」と記載があることから、開業年の 1923 年夏頃の発行と推測できる。

第 5-5 表 土地・別荘所有者の身分と職業

身分・職業	人数	構成比(%)
実業家	120	39.9
会社役員	(53)	(17.6)
会社経営者・事業主	(36)	(12.0)
その他の実業家	(31)	(10.3)
大学教員・学者	52	17.3
医師・歯科医	30	10.0
会社員	24	8.0
官吏	13	4.3
著述家・画家	13	4.3
軍人	10	3.3
教育家	8	2.7
弁護士	6	2.0
代議士・政治家	5	1.7
子爵・男爵	4	1.3
その他	16	5.3
合計	301	100.0

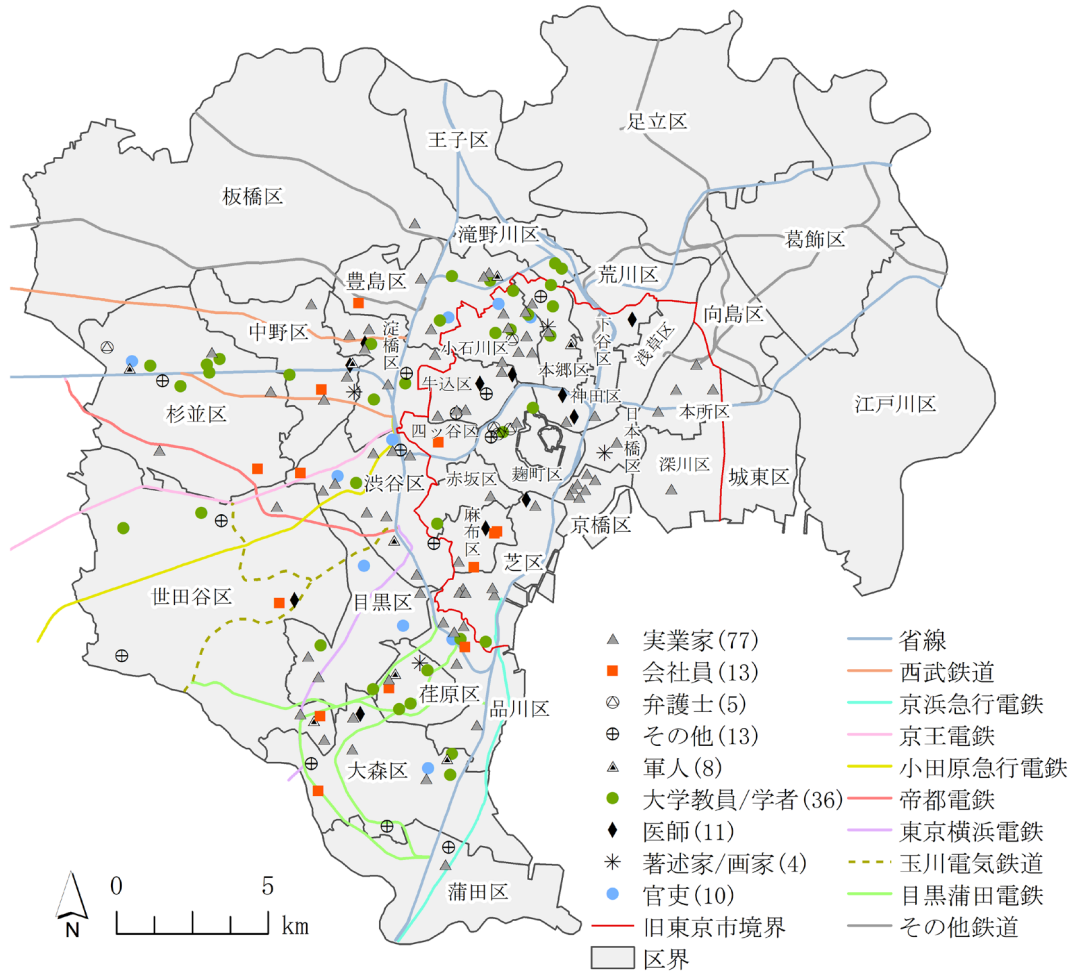
資料：『千ヶ瀧山荘』（1939年）、『日本紳士録第43版』（1939年）、『人事興信録第12版』（1939年）。

注：「会社役員」は～取締役、～重役、～監査など。「会社経営者・事業主」は～社長、～館主など、事業主は金物商、米穀商、帽子商など。「その他の実業家」は『千ヶ瀧山荘』で実業家と記載されており、『日本紳士録』等で詳細の不明なもの。「大学教員・学者」は～教授、～博士。「会社員」は、三井鉱山社員、株式外交員など。「教育家」は高等学校教諭など。「その他」は素封家、弁理士、棋士など。

第 5-6 表 土地・別荘所有者の所得額

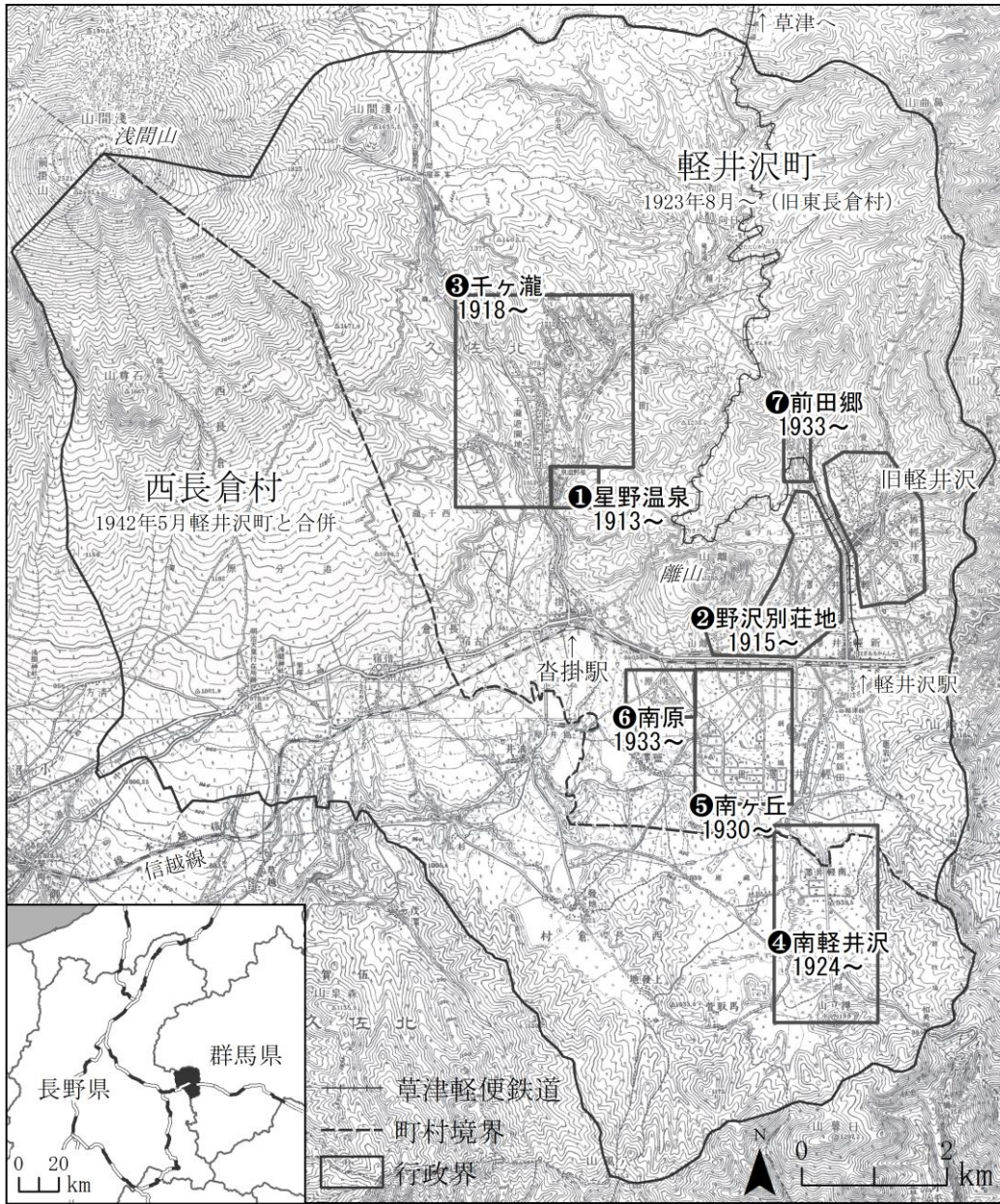
身分・職業	人数 (人)	推定年間 所得額 (円)
実業家	81	13,781
会社員	15	7,879
子爵・男爵	2	7,154
弁護士	5	6,954
その他	7	6,483
軍人	8	5,048
大学教員・学者	38	4,873
医師・歯科医	14	4,747
代議士・政治家	4	4,387
著述家・画家	4	4,199
官吏	10	4,119
教育家	2	2,809
合計	190	

資料：『日本紳士録 第 43 版』（1939 年）、『人事興信録 第 12 版』（1939 年）。



第5-17図 土地・別荘所有者の居住分布

基図：東京市監査局都市計画課編「東京都市計画地域図」（1936年10月）。
 資料：『日本紳士録 第43版』（1939年）、『人事興信録 第12版』（1939年）。



第 6-1 図 大正・昭和戦前期におけるおもな開発

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井澤」、「御代田」（測図 1937 年）



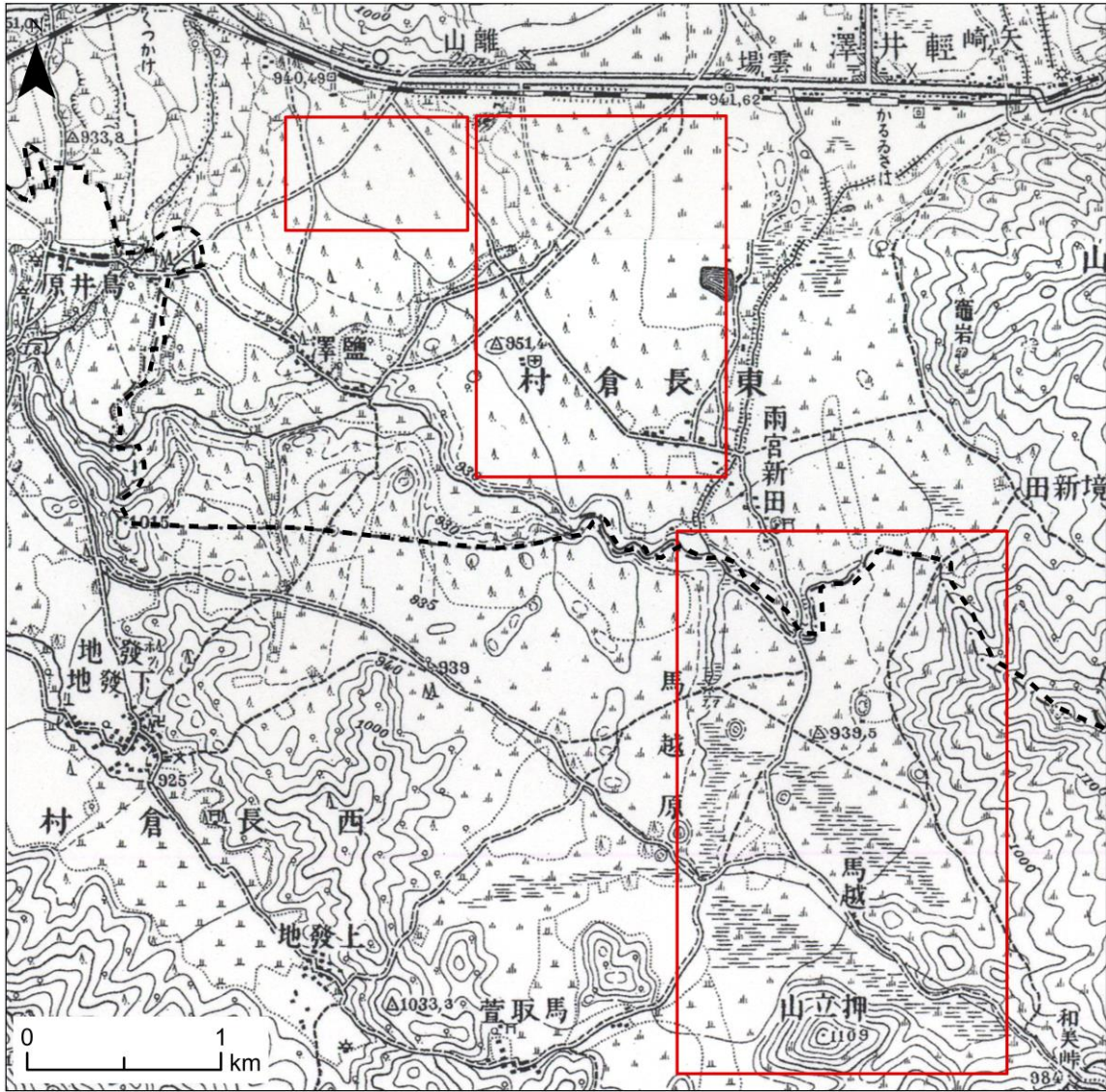
星野温泉 明星館（1925年）



星野温泉全景（1935年）

第 6-2 図 星野温泉の風景

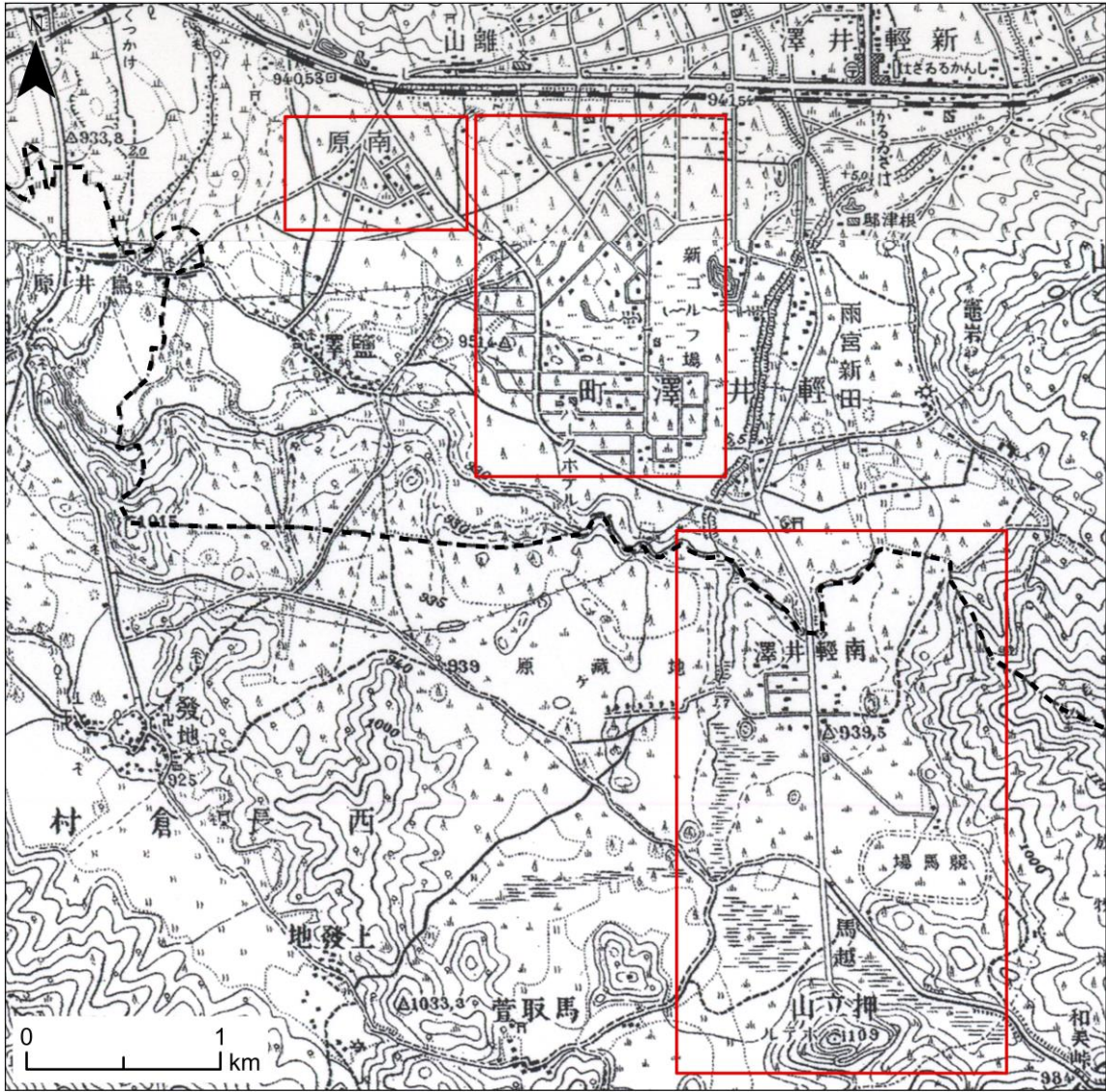
資料：星野嘉助（1972）『やまぼうし—星野温泉のあゆみ—』、星野温泉（口絵）。



----- 行政界

第 6-3 図 1912 年頃の「南軽井沢」

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図 1912 年）



----- 行政界

第 6-4 図 1937 年頃の「南軽井沢」

基図：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図 1937 年）

第 6-1 表 〈軽井沢〉の別荘地分布の中心-周辺構造

地理的位置	別荘地	年代	特性
中心部	旧軽井沢	1886年～	<p>〈中心性〉 避暑地としての中心地であり、周囲は別荘が分布 原初的「別荘地」 〈銀座化〉 メインストリート（商店街・遊歩・交流の場） 銀ブラの出現</p>
周辺部	② 野沢別荘地	1915年～	<p>〈高級化〉 野沢源次郎（野沢組）による開発 華族・政治家・実業家など富裕層の豪華な高級別 荘地</p>
	③ 千ヶ瀧	1918年～	<p>〈郊外化〉 堤康次郎（榊箱根土地）による開発 「質素な」別荘地：東京の新エリート層、中間層 向け</p>
	① 星野温泉	1913年～	温泉旅館を中心に貸別荘も立地
	④ 南軽井沢	1924年～	榊箱根土地による開発
	⑤ 南ヶ丘	1930年～	「軽井沢ゴルフ倶楽部」の新設にともなう別荘地
	⑥ 南原「友達の村」	1933年～	市村今朝蔵の交友関係で成立した別荘地
	⑦ 前田郷	1933年～	前田栄次郎による会員制貸別荘

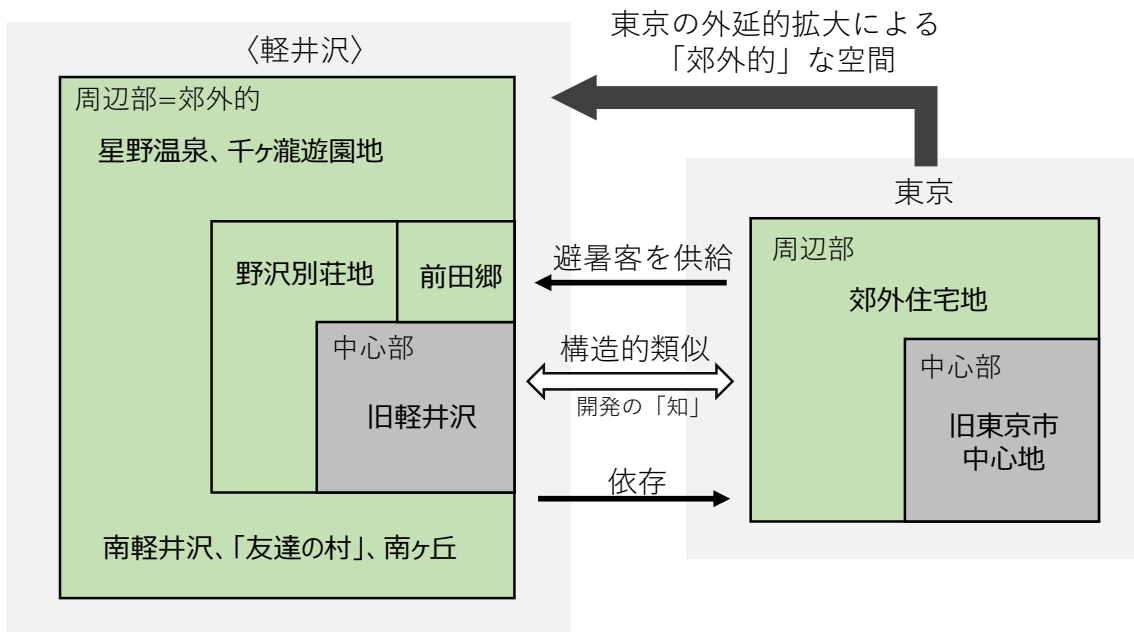
第6-2表 1927年における夏季出張店

分類	地域	戸数
県外	東京市	74
	横浜市	39
	東京府	14
	群馬県	7
	埼玉県	2
	神戸市	2
	名古屋市	1
	滋賀県	1
県内	佐久	5
	長野市	2
	大屋	2
	屋代	1
海外	朝鮮	1
町内	町内	30
合計		182

分類	営業種別	戸数
洋服等	洋服	14
	レース	11
	婦人子供服	9
	外国人向衣服	6
	洋品	5
	小間物婦人帽子	4
	靴屋	4
	呉服	3
	毛皮	1
	生活調度品	履物傘
陶器		3
漆器		2
羽根布団		1
料理屋等	文化敷物	1
	寿司料理	14
	喫茶	2
食品等	西洋料理	2
	支那料理	2
	和洋食料品	14
	果実	10
	鮮魚	4
	鶏肉卵	3
	牛豚肉	3
	氷	3
	木炭石炭	2
	牛乳	1
米穀	1	
書籍等	書籍	5
	英字新聞	2
サービス	理容美粧院	4
	運動具	4
	自動車	4
	自転車	3
	写真	3
	写真器	2
	電気器具	2
	医師	2
	薬局	1
	時計	1
表具師	1	
遊趣興味	骨董新古美術	17
	玉突	1
合計		178

資料：『軽井沢町報』1927年9月号

注：沓掛などは含まれていない。



第 6-6 図 〈軽井沢〉の空間構造



第 7-1 図 吉田初三郎筆「軽井沢鳥瞰図」

資料：吉田初三郎（1988[1936]）「軽井沢町鳥瞰図（復刻版）」、国書刊行会。